大地の歌を奏でる者たち

日高明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地の歌を奏でる者たち

【Nコード】

N0508M

【作者名】

日高明人

【あらすじ】

目が覚めたら高校生の山羽有人は異世界に召喚されていた。そんなどこにもでもあるようなお話に勇者と魔王はいない。代わりにあったのは、異世界各地に住んでいる大精霊と出会って歌を集めて欲しい、というお願い。歌と食べることが好きな道案内の巫女と、堅物だけど剣に優れて笛もたしなむ護衛の騎士、そんな二人との異世界旅行記。その旅のかたわら両目を包帯で隠す少女との交流や、旅路での出来事が、ただ旅行気分だった主人公の想いを大きく変えていく。

毎回更新したあと、活動報告にて各話のあとがきを掲載していき
ます。よろしければそちらもご覧ください。

第一話 召喚と出会い

歌声が……聞こえる……

なんだろう……なにかの音色……

笛だろうか……そんな音も聞こえる……

真っ白で……なにも見えない……

天井のない広々とした空間がある。

壁には白い石造りの柱が並び立ち、床は石畳が敷き詰められている。白い広間中央には円を描くように花が咲いており、円の中心には扉をかたどった物体が立つ。

そして、青年と思わしき背格好の黒髪の男が、扉の前に1人。服装は上は白く、下は黒。両手には何も持たずに立っている。

青年はたったいま、眠りから覚めたかの顔。

突如、右を見て、左を見て、正面を見て、

「え」

ひとつ吹き、ゆっくりと右手を上げていき、勢いよく頬をひねり引っ張った。

「……！ いたたたたたた！ って、夢じゃない？」

「異界へようこそ！ 奏者様！」

突然の声に、はじかれたように顔を上げた青年の前に、
橙色の髪を首から上あたりで切りそろえた少女が立っていた。
白くゆったりとした服装に身を包んだ少女の隣には、
横笛を口元にかまえて立っている若草色髪の鎧姿があつた。

口元から横笛をはなした鎧姿の人物は、

「セリア、いきなり過ぎるぞ。奏者殿が混乱しておられる。」

セリアと呼ばれた少女は、鎧姿の人物に向き直ると、

「人がせつかく寝ないで考えた台詞に駄目だししないぞー！」

「寝ないでって……緊張感があるのかないのか」

鎧姿は呆れた表情だったが、扉の前で呆然としている目線に気づいた。

「ああ、すまない奏者殿。我が名はエオリア・パール。

奏者殿の護衛を受け持つ神殿騎士であります。隣のは……」

「自己紹介ぐらいちゃんと自分でやるよー

ボクはセリア・オペラ！ この神殿の巫女をやっているよー！」

少女と鎧姿はそれぞれ名を名乗ったあと、
扉前に佇む青年に目を合わせた。

「あ、ありがとう。俺は……山羽有人」

青年は戸惑いが抜けない顔だったが、二人に習って名を告げた。

「ヤマハ・アルヒト……うん、アルトって呼ぶね奏者様！」

「勝手に人の名を縮めるなセリア！ 奏者殿に失礼だろうが！」

「いや、その、いいですよアルトで。前もそう呼ばれていたし」

「ほくらアルトでいいって言ってる」

「そんな得意そうな笑顔でこっちを見るな」

（すごいなあ。息びったりなやりとりだ）

アルトは二人を見て思いつつ、改めて周囲を見渡す。

白い石作りの柱が並び、足下は白い石。近くには花壇。

（少なくとも自分の部屋じゃない。それにさっき異界って……）

「あの……異界というのは」

「そのことについては僕が説明しましょう」

耳に聞こえたのは年老いた男性の声。

見れば目の前にいる少女と鎧姿の後ろから、

顔に皺を刻んだ白い装束姿が歩いてくる。

「この神殿の大神官を務めるブツファ・オペラと申します」

「あーお父さん！ 出てくるの早いよお」

「セリアに任せようと思いましたが、話が進まない気がしましてね」

「正しい判断かと思われませう大神官殿」

「エオリアまでひどい！」

鎧姿を咎める少女に苦笑いを浮かべた大神官は、

「さて、奏者であるアルト君よ、突然のことに驚いているかと思われ
れ
ます。」

まずは落ち着いて話を聞いて頂くために食事などいかがでしょう」

ブッフアは両手を広げて扉前の青年に問う。

青年は思案するかのように悩んだ顔をしたが、

「このまま立つてもどうしようもないですしね。」

奏者とか異界とか知りたいことばっかですから是非お願いします」

青年の丁寧な物言いに、大神官は感心した顔を浮かべる。

「ははは、そんな堅い口調でなくても良いですよ。」

それでは食事の間へと案内いたしましたしょう。あとセリアとエオリ
アもいい加減口喧嘩をやめなさい」

アルトが案内されたのは、白い石で作られたテーブルと、
横に何人も座れる長さをもった横長い石が置かれた室内であった。

大神官に促されるようにして座ったアルトは、

（まるで中世に建てられた神殿そのものだ。いや神殿って言った
からその通りか）

歩いて来た通路の造りや装飾を思い浮かべていた。

「アルヒト殿、となりに失礼する」

右を見れば若草色髪の鎧が石椅子に腰掛けていた。

テーブルを挟んだ向かい側には大神官と巫女。

「ああ、さっきの巫女さんが言っていたようにアルトでいいですよ。えーと」

「エオリア・バール。エオリアと呼んでもらってかまわないアルト殿」

「もう堅いんだってエオリアは。殿じゃなくてアルトって呼んだらいいじゃない」

「貴女は親しみすぎですよセリア。もう少し慎みなさい」

「はい。以後慎みまーす……ってなによエオリア」

「なにも言つてない。なにも言う気はない」

「その顔が言ってるの!」

「二人とも静かになさい。すまないねアルト君、騒がしくて」

「いやいいですよ。騒がしいの嫌いじゃないですから」

四人が会話をしているうちにテーブルの上には、

部屋の奥から歩いてくる年配の女性によって料理が並べられていく。

「ありがとうヒルダさん。さあ、では頂きましょうか」

ブッフアのかけ声で食事は始まった。

「ではアルト君、食べながらでいいから聞いてください」

「は、はい。」

「アルトーこっちの鶏肉美味しいよー」

「よせセリア、アルト殿はまだ野菜を食べてる」

「二人とも……食事ぐらいは静かに摂りなさい。とにかく話を始めますね」

顔の皺をゆるませるように息をついた老人は、落ち着いた声色で話し始めた。

「すでに分かっていると思いますが、この世界はアルト君のいた世界ではありません。」

異界、と称しているように異なる世界なのです」

「それは分かりますが……一体なんで俺はここにいるんですか？」

「ええ、アルト君はこの世界へ喚ばれたのです奏者として」

「さつきから言われてる奏者ってのは……」

「奏者とは、この星の大地を巡り、星の歌を奏でる者です。」

アルト君はその奏者として選ばれ、こちらへと喚ばれたのです」

「大地を巡る……旅に出るってことですか」

「理解がはやくて助かります」

老人は微笑みを浮かべながら、隣に座る少女と向かい側の鎧姿を見た。

「旅に当たってはセリアとエオリアが同行いたします。」

アルト君には大地を支える大精霊が住む場所へ行ってもらい、

星を讃える賛美歌を集めて頂きたいのです」

「はあ……あの……」

「どうしました？」

「俺、元の世界には帰れるんですか？」

青年はわずかにうつむき震えていた。

話は理解はできた、どうしてもこんな現状なのかも分かった。

だけでもどうしても不安だった。

自分は見知った顔がいる場所へと戻れるのかと。

「……申し訳有りませんアルト君。不安にさせてしまったようですね。」

大丈夫です、ちゃんと帰れます」

青年はまだ震えていた。

少女は心配そうに、鎧姿は口を開いては閉じていた。

「奏者が歌を集める旅、僕達は『賛美歌の道』と呼称しているのですが、

記録にある通りでは旅が終わった奏者は誰もが、無事帰っていません」

老人は落ち着かせるように、ゆっくりと穏やかに青年へと声をかけた。
はっとした顔で青年を顔を上げる。

「す、すみません。余計な気をつかわせちゃって」

「いえいえ、こちらこそ説明足らずで不安にさせてしまつて。

実は『賛美歌の旅』は3000年前から始まつたもので、

1000年ごとの決まつた月日に奏者、つまりアルト君のような人がこの神殿へと喚ばれるのです」

「なぜ喚ばれるのですか？」

「実のところよくわかつていないのです。

事の発端が3000年も昔であるため、起源がどうであつたかは記録がないのです」

「記録がない……」

「ええ、ないというより失われてしまつた、という方が正しいですね」

老人の言葉に青年は不思議そうな表情を浮かべる。

その表情へ答えるように少女が口を開く。

「ボクたちのご先祖様は『賛美歌の道』を毎回記録に残していたの

だけでも、

記録がのこしてあった図書館、うん、風の大精霊様の地にある図書館なんだけど」

「その図書館が2000年前に燃えてしまうことがあったんだ」

「ボクの説明を取らないでよエオリア」

「そう良いながらこつちに人参をよこすな、ちゃんと食べ。」

で、図書館は再建されたものの収められていた記録の大半はなくなり、

いまでは3000年前なにかあって『賛美歌の道』が始まり」

「どうしてアルトのような異界の人が喚ばれるのかもわからなかったの。」

エオリア、果物食べてあげるね」

「自分は好物は最後に食べる主義だと分かかってて言ってるだろセリア！」

「二人の言う通り、現在は2000年分の記録しか残っておりませんが、

少なくとも喚ばれた人は誰1人例外なく帰ったと記録には記されています」

二人の説明の最後を老人が締める。

一息つくように老人は右手にもつていた器を口元に運び、器にはいつていた茶色い液体を飲む。

青年も同じ形をした器を手にとり、同様の液体を飲む。

少し苦いが飲めなくはないなと思いつつ、

「じゃあ、1000年ごとの恒例となっている旅なんですね」

「そうです。それにちゃんと帰れますのでアルト君には楽しんでもらいたいです」

青年を思っただか、老人は帰れることを印象づけるよう言葉にはさむ。

「楽しむ……旅をですか」

「ええ、こちらの世界にはアルト君がいた世界とは違った様々なものがあります。」

見るもの聞くもの触るもの、全てが新鮮だと思えますよ」

「旅にはボクとエオリアが一緒だから観光気分ではないよ！」

「あのなセリア、巫女と騎士は観光のためにいるんじゃないぞ」

「そういえば二人は、セリアは巫女、エオリアは騎士と名乗ってましたが」

と言ってからアルトは呼び捨てにしていることに気づき慌てる。

「ううん呼び捨てでいいよ、その方が気楽だし。果物美味しい」

「自分も呼び捨てでかまわない。セリア人參食え」

「ありがとう二人とも、俺も呼び捨てで頼むよ。」

「ふふ、三人とも気が合いそうで安心しました。さて、先ほどの巫女と騎士についてですが」

「はい、説明お願いします」

先ほどまでであった震えはなくなり、

青年は話し出した当初よりも明るい声を伴って老人と向き直った。

（よかった、なんとか前向きになってくれたようですね）

ブツファは胸の裡で安堵を得たあと再び話した。

「巫女と騎士は旅の案内役としての役割がひとつ。」

巫女は大精霊へと案内をする役割が、騎士には奏者の護衛をする役割がそれぞれあります」

「巫女は仲介、騎士は護衛……」

アルトがセリアを見て、エオリアを見るとそれぞれがうなづく。

「そう、巫女のボクは各地の大精霊様に会えるよう案内をするの」
「自分は旅の最中においてアルトを危険から守る」
「大精霊と危険……想像つかない」
「あ、そっか。アルトの世界には精霊がないんだね」

青年の不可思議顔と言葉に巫女は驚きの表情を作る。
騎士はうんと頷くと、

「ならこちらの世界の危険が想像できないのは当然だ。
この世界では精霊の力で凶暴化した獣がいるんだ」
「街から外に出ると凶暴化した獣、ボク達は凶獣と呼んでるけど、
その凶獣が人を襲うことがあるの」
「とは言っても野外で人を襲うのは何も凶獣だけじゃないがな」

しかめっ面をした騎士の言葉に、青年がそれはと問う。

「アルトの世界にもいるかもしれないが野盗の類いだ。
ほかに人を襲うなどして迷惑をかける存在がいるだろうが、
そんな存在からアルトを守るのが自分の役割だ」
「ボクだって精霊術でアルトのこと守ってあげるから安心してね」
「うん、ありがとう二人とも」

巫女と騎士の言葉に、青年は笑顔を見せるが、
（人と争うことにもなるのか、嫌だな）
内心では今後のことをわずかに憂っていた。
その様子がちいさな沈黙を場に招く。
沈黙を破ったのは老人。

「さてさて、色々とお話しましたが、食事はまだありますので、こ

れらを頂いてしましましょう。

ほかにもこの世界のことを知るにあたって何か疑問あればお答え
しましょう。

「どうですアルト君」

時間は午後。

食事を終えた青年は、石造りの部屋に備えてある寝台へ腰掛けてい
た。

眉と眉の間に皺をよせた俯きがちな表情で床を見つめる。

やがて顔を振り上げ、皺を解放してベッドへと後ろから倒れこむ。

「いわゆる異世界召喚物語、だよなこれ」

誰に問うのでもなく、青年はつぶやく。

脳裏には食事にて質問して得た異界の知識。

四大精霊と精霊術、人と四つの種族、そして大地の歴史と文化。

左腕を顔の前にかざす。

手首には青、赤、緑、黄。四色の宝石がはめられた銀色の腕輪。

「賛美歌を収める腕輪、か」

食事のあと、大神官から渡されたものだ。

代々の奏者に受け継がれている腕輪であり、

大精霊から受け取る賛美歌を入れておくのだとアルトは聞いた。

そして、四つの賛美歌を集めてくるだけではないという話だったが、
それ以上にこの世界を楽しんでほしいと言われた。

「そりや世界を救えなんて言われるよりはいい。
あんなの喚ばれた側からしたら理不尽きまわりないからな。
それに比べたら道案内付き、護衛付き、楽しんでこいって言われ
たら、

断る理由なんて……でてこない」

広げた左手で顔を覆う。

(なにより、あんな人の良さそうなブツファさんの頼みを断れない)
はあと語尾を伸ばしたため息が漏れる。

「なんで喚ばれたかは分からないけれど、

セリアの言ったとおり異世界観光気分で気楽にいこう」

疑問はあつた、どうして自分がこの世界へ喚ばれたか。

賛美歌を集めるのがなぜ奏者でないといけないのか。

しかし、答えとなる記録は失われている。

考えても仕方がないと青年は思考をやめた。

気分を変えるつもりでベッド脇に飾られている花瓶を見る。

白い花瓶には腕輪と同じ四色四本の花が飾られていた。

それぞれが別々の花ではあるが、互いが目立ちすぎず、

かといって違和感があるのでなく自然な姿を映していた。

「あつちの世界では見た事無いけれど、四本とも綺麗な花だ」

そう思ったとき、木製の扉をノックする音が聞こえる。

「エオリアだ。アルト入ってもいいだろうか」

扉向こうから聞こえる声にアルトは快く返事をする。

開かれる扉からは若草色髪の男性が入ってくる。

「休んでいるところすまないアルト」

「いや気にしないで。あれ、エオリア鎧は？」

「ああ、先ほどまでは儀式ということもあつて鎧を付けていたのだが、

もう儀式も終わったし外している。付けっぱなしでは身体が持たないよ」

「そりゃそうだ。てつきり騎士というからずっとそうだと思つてた」

「ははは、その言葉だとアルトの世界には騎士はいないのか？」

「俺の世界にはいないな、いや昔はいたのだけど見た事はないや」

「そうなのか、騎士をやつてる自分としては少し残念だな。」

「ところで、良ければ神殿付近を案内しようと思つて来たのだが」

「本当か？ それはありがたいや。出歩くにも迷子は勘弁だし」

「よし、では行こうかー」

「あーっ！ ちょっとなに抜け駆けしてるのエオリア！」

響いた声の方に目をやると橙色の髪が怒つた顔でいた。

「しまったもう来たか。セリアが来る前に行こうと思つたのに」

「ひどーい！ ボクだつてアルトの案内したいのに！」

高い音を立てる足音ともにエオリアに近寄るセリア。

「え、ちょっとエオリア、なんでセリアの前に？」

「いやなアルト。セリアはこう見えて不真面目だ。」

巫女という職に就いてはいるが仕事をさぼるわ好き嫌いはするわ」

「なーにーをー言つているのかなエーオーリーアー」

「自分の言いたい事がわからんのか。さっさと仕事に戻れ」

「アルトの案内だつて立派な仕事ですう筋肉馬鹿」

「だれが筋肉馬鹿だ！ この不真面目巫女！」
「おーい……」

アルトをよそに口喧嘩が始まる。
どうしようかと思っていた矢先、再び扉をノックする音が聞こえた。
室内にいた三人は音に振り向く。

「リラじゃない、ひさしぶり〜」

開いた扉近くに佇む少女の近くへと足を運ぶセリア。

「セリアさん、お久しぶりです」

リラと呼ばれた少女は藍色の長髪を伴ったお辞儀をする。
お辞儀から上がった顔には包帯。

少女の目は包帯にかくされていた。

藍色の少女は手元に花束を抱えていた。

その花束を見てアルトは少女に尋ねる。

「その花……もしかして花瓶の？」

「はい。大神官様に言われてお花の交換に参りました」

「交換って言っても、花瓶の花は……あ」

まだ交換するほどでは、と思い花瓶を見たアルトだったが、
花瓶に生けられた花々は近くで見ると痛みが表面化していた。

「以前に交換してからもう一ヶ月は経っていますから、そろそろだ
と思っ」

目を包帯で覆った少女は、まっすぐに花瓶へと向かい手前で歩みを

止める。

あつと気づいた顔でアルトへと向き直ると、

「自己紹介が遅れてごめんなさい。私、リラヴェル・カマックって
います」

「あーいいいいいよ。俺はヤマハ・アルヒト。」

「リラーこつちのアルトが噂の奏者だよー」

「こつちと呼ぶんじゃない、アルトに失礼だろ」

「いってエオリア。気にしないから」

苦笑で呼びかけるアルトだったが、

疑問を思い口を開いた。

「えーと、リラヴェルさん」

「リラと呼んでもらっていいですよ」

「ありがとう、じゃ俺はアルトと呼んでくれ」

「はいアルトさん、それで何でしょうか」

あまりに自然な会話、そしてリラが見えない視線をはっきりアルト
の顔に合わせる。

その姿に聞こうかどうか数瞬悩んだアルトだが、

「あの花瓶の花は君が生けたの？」

本来の疑問は口にしなかった。

「はい、私のお店で販売しているものを神殿に飾らせてもらって
るんです」

「そうなんだ、とても綺麗な花だから気になったんだ」

「そう言ってもらえて嬉しいです」

言葉とともに笑顔を浮かべる少女に青年は照れた顔を見せる。

「ねえリラ、まだお仕事ある？」

「いいえ、もうこれで最後ですの。」

「じゃあじゃあさ、ヒルダさんとこ行って果物食べようよ！」

「セリアさん、相変わらずですね」

ふふつと笑ったりリラを見てセリアも笑い、

いつのまにかアルトとエオリアも笑っていた。

「じゃあ自分たちは神殿見学に行こうか」

「そうだな頼むよエオリア」

石造りの通路を黒髪と若草色髪の男が歩いている。

若草色髪の男は身振り手振りをしながら、黒髪の男に説明していた。

「さっきアルトがいた部屋付近は、自分などの神殿に務める人が住まうところで、

『大地の間』を挟んだ反対側には食事をした食堂がある」

「『大地の間』って？」

「そういえば大神官様も説明していなかったな。」

アルトが最初にいた広間がその『大地の間』だ」

「ああ、最初にいた広間のことが」

『大地の間』そう呼ばれた広間のことをアルトは思い浮かべた。

(そういえば立ってた場所の後ろに、なにかドアみたいなのがあったな)

「エオリア、広間にあつたドアみたいなものはなんだ？」

「ドア？ ああ、扉のことをそう言うのか」

「そうそう、その扉なんだが、あれは一体」

「あの扉は異界に通じていると言われていて、

奏者はその扉を通じてこちらへと喚ばれてくるという話だ」

「え、じゃあ扉を開ければ帰れるのか？」

「残念ながら開かない。昔自分も興味本位で扉を開けようとしたが開かなかつた」

「そうなのか……でも奏者なら開けるんじゃないか」

「同じことを過去の奏者も考えたらしいが、誰ひとり開けられなかつたらしい」

「やっぱり……」

少し肩を落として歩くアルトに対して、
慰めるような口調でエオリアが言葉をかける。

「そんなに気を落とすな。どういう理屈かは分からないが、

過去旅を終えて歌を集めた奏者が扉の前に立つと、扉が開いたと記録にはあるから」

「奏者の意思では開かないのか、一体誰の意思で開いてるんだろうな」

「記録が失われてしまった今となつては誰にもわからんな」

「研究してる人とかはいないのか？」

「かつてはいたそうだが、結局何もわからず匙を投げたそうだ」

「そーなのかー」

「おっと、そろそろ神殿の出口だ」

エオリアの言葉に前を見れば、外から光の射し込む壁が見える。

光が当たる壁の反対に目をやると空と大地がアルトの視界へと映る。

「これが、この世界の空と大地か」

青空は変わらない、髪をなでる風が心地いい。
大地も変わらない、草と土の匂いもする。

ここが異界だという実感はあまり、なかった。

第二話 祭りの始まり

神殿の外はにわか騒がしくなっていた。

「奏者様が来られたぞー！」

「あれが今代の方……言い伝えと同じ黒髪なんだねえ」

「あんまりワシらと変わらないのお」

様々な声が聞こえてくる。

その声に戸惑い足を止める黒髪の青年。

先に神殿出口の階段上を歩く若草色髪が、苦笑顔で青年に振り向く。

「皆いまかいまかと待ち望んでいたからな」

「それにしてもこんなに人がいるなんて……」

アルトの眼前には大勢の人々が集まっていた。

いや、なかには人の容姿ではない者も混じっている。

その人々より向こうには舞台が建てられている。

人々に向かってエオリアが叫ぶ。

「皆の者、集まっているところ申し訳ないが、いま奏者殿に神殿案内をしている！」

「だから、案内が終わったあとで祭りの話をしてくれないだろうか！」

（祭り？なにかあるのか？）

エオリアの叫びにひとつの疑問をアルトが抱いている間、

神殿前にいた人々はそれぞれが思案顔をしながら散り散りとなっていく。

「エオリア、祭りってー」

「悪いが、それについては秘密だ。楽しみにしとくといい」

エオリアは小さな笑みを浮かべて答える。

その笑みにアルトは戸惑いと疑問を顔に浮かべるしかなかった。

神殿の食堂では二人の少女がいた。

ひとりは橙色の短髪を揺らしながら緑の果実をほおばっている。

橙色の短髪に向かい合うよう座っている藍色の長髪は、
右手に持ったフォークで赤い果実をつまんでいる。

「ねえリラ。いつまで神殿にいられるの？」

長髪が果物にかからないよう気をつけている包帯の少女は、

「お母さんの話では4〜5日ぐらいいはいると思います。

お花の交換と献花はもう終わっていますから、あとはお祭りをゆ
つくり楽しめばいいと言われましたし」

「よかった〜リラがいないとボクしなびちゃう〜」

「そんなセリアさん、おおげさですよ。大神官様とエオリアさんだ
つているじゃないですか」

「お父さんはお父さんで仕事があるからねーあんまりお祭りに顔だ
せないと思う。」

エオリアの馬鹿にはそもそも期待してないっ
「馬鹿って言わなくても……」

困ったような表情で答えるリラは、

「ちゃんと約束守って、努力している人に失礼ですよ？」
「うっ……そうだけどーそうなんだけどーいつもいっつも小さいこと気にしてるし口うるさいし」
「もう、本当にお二人相変わらずなんですわね」

果実を皿に戻してふてくされた顔でそっぽを向くセリア。
その顔を見えない目で楽しそうに見るリラ。

「それよりそれよりもさ！ アルトだよアルト！」
「アルトさんがどうかしましたか？」
「……リラの包帯のこと、聞かなかったね」
「……私も意外でした、聞かれたのは花のことでしたし」
「たぶんだぶんだけど、けっこう優しいのかもね」

自分のことを言うように笑顔で話すセリアに、
何を言わんとしているかが掴めずリラは疑問顔で聞き返す。

「だってだって初めて会ったら誰でも聞きそうなことを、
あえて聞かないでいるなんて余程の無関心か相手を思ってるかの
どちらだよ？」

アルトは……無関心とは違うと思うんだ
「私には……アルトさんは、どんな顔をしていました？」
「アルトは、どう聞こうかためらってた。でも聞いたのは花のこと
だった」

その言葉でもうわかったのか、リラはフォークを皿に置いて静かに
下を向く。
目を弓なりに細めながらセリアは言葉を紡ぐ。

「ボク、リラには優しい人がそばに来てくれたらいいなっと思って思ってる」

「セリアさん……でもそれは」

「ううんううん、リラ。リラのお母さんだって言ってるでしょ。」

”リラは遠慮しすぎだ。もっと自分勝手になれ”って「

「でも……私は……」

苦しそうに声を出す包帯の少女に、手をのばして頭をなでる橙色の少女。

「で、この状況は一体……」

「ははは、アルト君すみませんね突然」

「いやちゃんと説明をしてくださいよブツファさん」

神殿案内が終わり、エオリアと別れたアルトは、

住居へと続く通路の途中で大神官に声をかけられ今にいたる。

場所はふたたび神殿の外。

しかし、青年と大神官を囲むように人々が集っており、

静かではあるが何かを期待するかのように青年を見守っている。

「さて皆さん、僕の隣にいるのが今代の奏者であるヤマハ・アルヒト君です」

大神官の声に応えるように人々が歓声を上げる。

「なんだヤマハが名なのか？ 変わってるな」

「ばっか、異界では逆に言うって言い伝えにあるだろうが」

「アルヒトって面白い響きだねーそれに服装も変わってる」

アルトの名を聞いての感想が漏れてくる。

(恥ずかしいな。あんまり注目されるのに慣れてないのになー)
人々へは視線を合わせず、俯くように目のやり場を下へと移動する
と、

隣にいる大神官が再び声を発した。

「じゃあアルト君、あとよろしく」

「へ？」

間抜けな声が出た。

(いや説明とかなんも聞いてないのに、なにあとよろしくって!?)
内心の思いを得たと同時に大神官を見ると、

「奏者様！ 祭りでは是非わたしどもの阿鼻叫喚がちむち演目を！」

「いやいやいやわっしらの驚天動地総菜とつくりの味見を！」

「ひっこんでる人族！ 高い空と一緒に急降下玉玉きゅん体験を！」

「ウロコまみれこそひっこんでる！ あちきどものまつする蒸し風
呂だいえつとを！」

人々がアルトへと爆発的に殺到した。

「ひ、ひどいめにあつた……つかれた」

勧誘とともに服の端々までもみくちやにされた黒髪の青年は、
自身にあてがわれた部屋の寝台に、両手をひろげて倒れ込んだ。
時刻は太陽が沈みかけ、うっすらと空を闇がおおう頃。

日差しの香りが漂う枕に顔をうずめながら、昼間の出来事に思いを傾ける。

（まさか奏者を歓迎する祭りがあるなんて、最初に言っておいてくれたら良かったのに）

だが、自分を歓迎してくれる人々の気持ちは嬉しかった。

ズボンのポケットを探ると人々から渡された招待券や無料券が出て来た。

「できれば全部行きたいけれど、さすがにきつついだろうな」

もみくちやにされつつも聞いた話では、

（明日から三日間『歓迎祭』が行われるって話だっけ）

神殿周辺にて出店が立ち並び、神殿正面に建てられた舞台にて演目があるという。

「しかし、本当に人以外の存在がいるんだな。

言っちゃ悪いけど光沢のある肌や岩でゴツゴツした肌なんて冗談にしか見えない」

記憶に浮かんでくるのは自分に殺到してきた人々のなかにいた異形。人よりも背が高く細身で、全身がウロコに包まれ、背中には翼を携えた龍翼人。

反対に背は小さいが、横に大きく岩肌の持ち主、岩石人。

正直おどろきよりも恐怖で声がでなかったが、人と同じ言葉を話し感情を浮かべる彼らを見て、

知らず知らずのうちに恐怖よりも興味が大きくなっていた。

聞いた話ではほかに二種族がいるみたいだが今日は見なかった。

「旅に出れば人魚族と木霊族。そいつらにも会えるのかな、見てみ

たいな」

仰向けになり天井を見上げる。

腹部より空腹を知らせる音がゆるやかに鳴り響く。

このまま眠ろうかと悩んだ末、アルトはベッド脇に立ち上がる。

「こっちにコンビニがあるわけじゃないし、食堂に人がいるとき食べとかないと」

つぶやいて扉に向かおうとして足を止める。

視線を扉から移動させると、ベッド脇には新しい四色の花が生けられた花瓶。

(そついえば包帯のこと、聞けなかったな)
目に包帯を巻いた少女のことが脳裏にうかぶ。

「花がよく似合う雰囲気の子だったな」

歳は自分と同じくらいだったろうか。

なんだか妙に気にかかる感覚を得ながらも、

空腹を知らせる二度目の音に思考を止めて、アルトは食堂へ足を向けた。

食堂に続く通路を歩いていると、食堂から声が聞こえてくる。

片方はブツファの声だが、もうひとつの女性と思わしき声にアルトは思い当たらなかった。

誰の声かの疑念をもちつつも足は食堂へとたどり着く。

「おお、アルト君も夕食ですか？一緒にどうですか」

「やああんたが奏者だね。そんな身体でちゃんと食べてるのかい」
食堂入口に立ったアルトへと大神官と女性の声が同時にかけられる。
どう答えたらいいかと思っていると、女性が手招きする様子で言った。

「突っ立ってないでこっち座りなよ。あたしはエラール・カマツクだよ」

女性の名乗りを聞きながら、ブツファの隣へと腰をおろしたアルトは、

「カマツク……もしかしてリラの?」

「その様子だともうリラとは会ったようだね。そうさ、あたしはあの子の母親さ」

「エラールさんは、この神殿近くにある花屋を営んでいて、神殿へ献花してもらっているのです」

エラールの答えとブツファの説明を頷いて聞くアルト。

食卓にはアルトの食事が黙々と年配の女性によって用意されていく。

「あ、ありがとうございます。ヒルダさん」

アルトのお礼にヒルダは微笑みを浮かべて奥へと去って行く。

「そうだ、ブツファさん酷いじゃないですか。説明なくいきなりあとよろしくって」

「ははは、いやあ申し訳ない。集まった皆さんに急かされてしまっていますね。」

早く奏者様に会わせろ、でないと神殿の壁に前衛芸術的な落書き

をほどこすと言われまして」

まるで困ったふうでなく笑顔を見せる老人に、青年はため息をつく。

「なにため息ついてんでるんだい坊や。若いのが情けない」

「あの……坊やっつてのは勘弁してもらえないですか」

「なーに言ってるんだい、あんたぐらいのは皆坊やだろ」

女性は右手の杯をあおると、言葉が続けた。

「それにしても今代の奏者がこんな坊やだとは思わなかったよ」

「？ 昔に喚ばれた奏者は違ったんですか」

「ああ、言い伝えでは前代はがっちりとした体格で、あご髭のある立派な男だったらしいよ」

エラールの言葉にアルトは前代の奏者を思いつつ食事を進める。

(アメフトとかの選手かなんかだったのかな)

スプーンでスープをすくおうとすると、ブツファが言葉をはなつ。

「そうそう、旅のことなんですがアルト君。熱いですよそれ」

「あ、あちち。先に言ってくださいよ。それで話は」

「ええ、アルト君には旅にでもらうとは話しましたが、なにもすぐというわけではないのです」

「と言いますと」

「明日からの歓迎祭を楽しんでもらってからは、一ヶ月ほど旅への準備にはいります。」

準備ではこの世界の地理などを学んでもらい、身を守る訓練を工オリアから、

精霊術に関する知識をセリアから学んでもらいます」

「つまり勉強……ですか」

「なーに嫌そうな顔してるんだい坊や。男ならちゃんと逃げないで受けな」

訓練や学ぶといった単語に苦い顔を浮かべる青年。

その苦い顔に杯を突き出し赤みがかつた顔で言葉を告げる女性。

「エラールさん……その酔ってますか？」

「ばか。これくらいじゃあ酔ったとはいわないよ」

「彼女は酒豪ですからねえ。呑むときは樽ひとつくらい軽いですから」

「大神官様やめてくださいよ。これでも控えてるんだから。明日は本気だすよ」

「明日はこれ以上呑むって……まじですか」

鼻の奥にただよってくるお酒の匂いにアルトは顔をゆがめる。

その顔におかまいなしに杯をあおっては硝子瓶から酒を足していくエラール。

「坊やの世界がどうだったかは知らないが、こっちじゃあガキの頃から酒は呑んでるのさ」

「まあエラールさんは置いといて、アルト君お酒は？」

「まったく呑めないってわけじゃあ……」

アルトの隣に素早く移動してきたエラールは、腕を青年の頭へと回す。

「よし呑め！ いますぐ呑め！ ことわつたらもつと呑ます！」

「ちよつと！ 勘弁してくださいよお！ ブツファさん助けて!？」

思わぬ力で押さえ込まれたアルトは隣にいるはずの大神官を見る。

すると大神官は素知らぬ顔で杯を傾けている。

「え……ブツファさん？」

「ぶはあゝいやあ仕事終わったあとの一杯が美味しくて美味しくて」「こつちも酔っぱらいだー！」

朝を過ぎた翌日。

食堂の地面にひとりの青年が大の字になっている。

石のテーブルには、硝子瓶が数本転がったなか寝息をたてながら突っ伏している女性。

食堂入口には二人分の足音が聞こえてくる。

「もゝお父さんあんな顔で祭りの挨拶始めたと思ったら、いきなり叫ぶなんて！」

「あの、その、でも。も、盛り上がってましたから良かったと思いますけれど……」

「りゝらゝそれは娘じゃないから思えるだけ。ボク恥ずかしいよ……」

「そ、そんなに落ち込まないでセリアさんっ」

「だってだって、いきなり『みんなは幸せかーっ！？ばかあしあわせだああああ！』って！」

二人分の足音が、食堂入口で止まる。

「うわあ……父さんの様子からまさかとは思ってたけど……」

「お母さん……と、床に倒れているのは……アルトさん！？」

包帯の少女は急ぎ足で青年に駆け寄る。

後ろからは橙色髪の少女がテーブルの女性と青年を交互に見やる。

「あゝあ、アルトもエラおばさんに吞まされたみたいだね」

「もう無茶呑みしないでっついても言ってるのにお母さんったら。

アルトさんアルトさん、大丈夫ですか？ 気持ち悪くないですか？」

包帯の少女が青年の身体に手をかけ揺ると、僅かにうめき声もれる。

「あ、え、ああ。がつ！ いたたたた頭が」

「二日酔いみたいだねーアルト。おはよー水もってきてあげる」

「その声は……セリア？ なんだかすごく頭んながぐらぐらがんがんです」

「あんまり動かないほうがいいですよ。いま、お水もってきてもらってますからじっとしててください」

思ってもいない近距離の声にびくっと身体を振るわせ青年は振り向く。

「リ、リラ!？」

「はい、アルトさん。おはようございます」

「あ、うん。お、おはよう」

青年はどこか気まずそうに声を発し、包帯の少女は不思議そうに声をかける。

「アルトさん、どうかしたんですか？」

「い、いや。ちょっと驚いただけ」

はははと苦笑した顔をして服のよごれをはたいて青年は立ち上がる。その近くに橙色した髪少女が杯を二つ手にやってくる。

「どーぞアルト。目覚めの一杯だよ」

「ありがとうセリア」

杯を受け取って一度に中身を飲みほす。

アルトが顔を前に戻して一息つくくと、

セリアはもうひとつの杯を持ってエラールの方へと近寄る。

「エラおばさーん起きてるー？ もう祭り始まってるよー？」

「うへうへへへ、まーだまだ呑むうー呑めるうううう」

「だーめだこりゃ、起きるまでほっとくしかないや」

「もうお母さんったら！ まだヒルダさん来られてないから、酔い覚めの薬もらえないしどうしよう……」

二人の少女がエラールをどうするか考えてる間、

アルトは昨晚呑み散らかした食器や杯を片付けていた。

ただ、手を動かし片付けてはいたものの、考えは目の前になかった。

(記憶があいまいだけど、なんかいろんなことを聞いたような)

テーブルの上を片付けつつ、目線だけを母親を起こそうとしている包帯の少女に向ける。

「ー見えてはいないが、見えている眼。」

リラの眼は自分達と同じ世界を映しはしない、それゆえに違う世界が見えていると。

そうエラールからは聞かされた、むりやり呑まされつつだったが。

付け加えるようにブツファは、それが精霊の守護によるものだと教えてくれた。

(ただ盲目ってわけじゃないんだ……それで見えてるように動けるわけか)
昨日得た、包帯で眼を覆っているにも関わらず、まっすぐこちらの顔を見た疑問。

続けて思ったのはブツファが酔いの戯れに見せた精霊術。
掌から拳ひとつほどの炎を何個も生み出し、踊るように周囲を回らせた。

アルトの歓声に調子をのらせたブツファに、文字通り冷や水を精霊術で掛けたエラール。

この世界では誰もが精霊術を扱い、誰もが生を受けた瞬間に四大精霊いずれかの守護を受けると聞いた。

「……やっぱり違う世界の違う人間なんだよなあ……」

誰に言うのでもなく、ぼつりと黒髪の青年はつぶやく。

場所は神殿の住居へと続く通路。

「ごめんなさいアルトさん。ほんとうにごめんなさい」

「いいんだってリラ。あのまま放っておくわけにはいかないし」

通路を歩く包帯の少女と黒髪の青年だが、青年の背には眠っている女性の姿。

「それよりもブツファさんの方は大丈夫なんだろうか」

「セリアさんが様子を見に行っていますし、エオリアさんも付いてますから大丈夫ですよ」

「仮にも大神官って立場の人が朝まで呑むなよな……」

「あはは……そうですね」

呆れた顔で歩くアルトにリラを苦笑顔を見せる。

「そういえば祭りには行くの？」

「祭りには……お母さんと一緒に回るつもりでしたけれど」

そついつて青年の背を黙って見る少女。

「こんな状態じゃあ一緒には行けないだろうね」

「はい……それに私一人だと、その、不審がられてしまうので……」

セリアさんも何かと忙しいでしょうから……」

「そつか……」

小さく肩を落とすだけでなく声の調子も落としていく少女。

横目に少女を見つつどう答えたものか思案する青年。

（彼女、自分がどう見られてるのか分かってるんだ。違っつてことも……）

そして気づく、少女が自由に振る舞っていられるのは事情を知る人間がいる神殿内ぐらいだと。

「アルトさん……？」

自分がいた世界にも盲目の人はいた

関わりはなかったが他者が彼らにどのような目を向けるかは、青年は知識から知っていた。

出来るなら力になってあげたい、青年は思った。

いや、助けたい、そう思い直した。

「……リラ、俺が一緒なら、平気かな」

「え？」

「お祭り。エラールさんの代わりに俺でも平気？」

「え、えええと。そんな、アルトさんにそんな」

少女は青年の申し出を拒むかのように、両手を身体の前で弱々しく振る。

通路を歩きながら青年は顔を左右に振って少女に答える。

「いいんだって、それにエラールさんがこうなったのも俺のせいだし」

「それはー」

「あとさ、一人で回るよりも二人で回りたいたいんだ俺が」

「アルトさん……」

振っていた手を胸の前で握る包帯の少女。

青年の背では女性が目をつむりながらも小さく微笑んでいた。

第三話 思いふれあう

日差しが強く照っている神殿の外は昨日以上の人々にあふれかえっていた。

外から来た客用の部屋にある寝台へエラールを寝かせたアルトは、外出用の服装に着替えたリラを伴って神殿出入口に立っていた。

「うわああ、すごい人出でにぎわってるなあ」

喧噪でたくさんを外を見渡しほうけたように声を出すアルト。

そんなアルトの影に隠れるように立つリラは、

「……………」

人波から視線を隠すようにして俯いている。

頭部から肩までを覆うように灰色の布を目深にかぶる姿。

何も言わずに後ろにいるリラへと目をやったアルトは、

（もしかしたら人ごみ苦手なんだろうか、無理に誘わない方が良かったかな）

内心に小さな後悔を抱く。

だが、包帯の少女は、

「アルトさん、大丈夫です、平気、ですから」

「うん……分かった。じゃあ行こうか」

小さいながらも意を決した雰囲気の声で青年を促した。

祭りの挨拶を終えて舞台袖に退場したブツファは限界を迎えた。

「大神官殿おー！ 自分は嘔吐物入れではありませんーん！」

「お父さーーん、やあめえてええええええ！」

神殿前にある舞台袖からセリアとエオリアの沈痛な声が響きわたる。突如響き渡った声に一瞬人々は静まりかえるが、

「まいどまいど大神官さんもこりないもんだねえ」

「いやあれがないと祭りが始まったって気がしないよ、がははは」

「うおーい呑め呑め！ おれらも負けずに呑むぞお！」

すぐに騒がしさを取り戻して、それぞれの動きへともどつていく。その舞台から離れた広場では調教師による動物の演目が行われていた。

広場の人だからから少し離れた場所には、演目を眺めるように黒と灰色の二色が立っていた。

「いま、ひびいた声って……？」

「あはは……あのお二人の声ですね」

右手には奏者であるということでもらった焼いたイカに串を通したものを、

左手には黄色く鼻を軽く刺激する液体の入った杯を持つアルト。

アルトの疑問に答えるように苦笑顔をするリラは、手に持った杯を傾ける。

「やっぱりか……それにしても意外、だったなあ」

「？なにが、ですか？」

「ああ、えと。どう言ったらいいのかな」

頭をかこうとして両手が塞がっていることに気づいた青年は、かくのを諦めて左手の飲み物を一口飲んでから言葉を発した。

「実は、俺のいた世界では違う世界に喚ばれるって話がけっこうあるんだ」

「そうなのですか？」

「うん、例えば魔王に滅ぼされかけている世界へ勇者として喚ばれるなんて話がさ」

「私も驚きです、ならアルトさんの世界では召喚されるのは日常的なんですね」

「いやそれは違うんだ。単に話というか読み物としてあるってこと。ああごめん分かりづらかったな。そういった物語の本が多くあるのだけでも」

どう表現したらいいか悩みながら言葉を発していく青年。

「大抵がさあ、なにか困難があるから、それを解決してくれって感じなんだ」

「そうですか……でもそれが？」

「それが……歌を集めて世界を楽しんでくれなんて聞いたことがなかったし、

わざわざ喚ばれた人間を歓迎して祭りまで開いてくれるなんて初めてだよ」

灰色の少女はどう言葉を返したらいいかと思い、

「危険な目にあわせられるよりは良いかと思えますけれども……」

「そりゃそうだよね、しかも旅では護衛までつくのだし」

青年の意図するところがよく分からず少女は口をつむむ。

(なんだろう……アルトさん、不安なんでしょうか)

包帯で覆われた目を青年の横顔に合わせると、

なにかを誤摩化すかのように青年はイカを豪快に噛みちぎる。

「もうひとつ意外だったのは俺がいた世界と似た食べ物があることだなあ」

「それは私も不思議です。もしかしたら親が一緒の兄弟の世界かもしれませんね」

「親が一緒の世界か、面白いなそれ」

青年がははと笑い、話が変わったことに軽く安堵を覚える少女。

せつかくの祭りなのだから楽しめるようにしたいな、と思い続けて喋ろうとして、

「おおお、これは奏者様ではないですか。楽しんでおられますかな」

「あ、ああどうも。楽しんでますけど」

横手から口髭を伸ばした男がアルトに声を掛けて来た。

そのまま何かを言おうとしたが、灰色の少女を見て眉をひそめる。

少女は口髭の目から隠れるようにアルトの背へと移動する。

「奏者様、失礼ですがこちらの方は……」

「彼女は……えと、ああ祭りの案内をしてもらってるんだ」

「ふうむ……いえ邪推して申し訳なかったですな。」

おっとそれよりも自己紹介が遅れてしまいましたな。ワシはノン・トロッポ」

「ノンさんですか。あ、もしかして昨日の」
「おお、よかったよかった覚えておいででしたか！」

アルトは昨日の爆発的な勧誘にて、招待券を手に握らせてきた相手を思い浮かべ、

それが目の前にいる口髭の男だと気づいた。

「そういえばもらった招待券って」

「そう、その招待券のことなのですが。専用の招待席を用意してありますので是非とも」

「いや、なんの招待券か分からないのだけど」

「おお、おおうつかりしておりますな。」

祭り最後の日にこちらからも見えている舞台にて演奏会を開始するものです」

ノンが指差す方を青年と少女がみやれば、何かの演劇をおこなっている舞台が目にはいる。

「今しがた行われているのは『愛されてドロシー目指せ逆玉』ですか」

「なんだか妙になまなましい題目の演劇ですね……」

「ははっここ最近は成り上がり物語が受けておりますな」

声高に笑い声を上げるノンにどうしたもんやらと悩み顔をするアルトは、

ふと背後からの感触に気づいて目を向ける。

そこには僅かに自分の服の端を掴むリラの姿があった。

（ん、どうしたんだろ。なにか伝えたいのかな）

「リラ？ どうかー」

「なんでもない、です。平気で、です」

アルトにしか聞こえない小さな声だったが、語尾は荒く、異常を感じる。

「どうかされましたかな」

「ええと、どうも彼女が気分が悪いようなのでちょっと向こう行き
ますね」

「おっと、それは失礼しましたな。では奏者様、また公演にて」

少女の異常を感じ取ったのか、ノンは余計な詮索をせず、
片手を振って二人の近くから離れていった。

ノンが人ごみに紛れて見えなくなった辺りで、アルトはリラに振り
向き言葉をかける。

「リラ、さっきの人ならもういったよ」

「……」

「？ リラ？」

返事がない、そのことに緊張と焦りを覚える。
少女の両肩に手をのせ少し揺らす。

「……ん、あ」

「リラ、リラ!？」

「ごめん、なさい」

なにを謝っているんだ、と思った瞬間。

リラがアルトへと身を倒してきた。

曖昧で混濁するかのよう暗かった意識から覚醒する少女。
ゆっくりと左右を見ると場所は神殿の客間。

(私どうして……ああ、そっか気をうしなっただっけ)

リラは今自分がどこにいるかを確認したのち、ゆっくりと背を起
した。

そしてベッドに寝かされていることに気づく。

「誰が……ここに」

「アル坊が運んだんだよ、リラ。気分は平気かい」

「！ お母さん……私……」

寝台の左脇には椅子に座っているエラール。

「なんも言わなくていいさ。それよりお腹へってないかい」

「ううん、大丈夫。それよりもアルトさんは？」

「あいつならアンタが目覚ますまで傍にいてるってうるさいからた
たき出したよ」

「たたき出したってそんな……」

「いいんだよ。祭りはアル坊のために開いてるのに、部屋にいたら
意味ないだろ」

「それはそのとおりだけれども……」

母親の言葉に少女は声を落とす。

「いいから静かに寝ておきな。ほら」

「うん……お礼ぐらい言いたかったな」

「そんなの後でいくらでも言えるさ。」

それ以上にアンタが元気になるのが、あいつとって一番のお礼になるんだから」

少女は母親におでこを押されて、ゆっくりベッドへ背を倒す。

(アルトさん……心配してるだろうな……)

室内にはいない青年を思い、再び暗闇へと感覚を落としていった。

「ああああ心配だ心配だ心配だああああああ」

「気持ちは分かるが少しは落ち着けアルト、ほれ」

舞台近くの休憩所では、祭りの喧噪が耳に入らないのかうめくよう声をあげる黒髪の青年、

隣には服装のあちこちが汚れている若草色髪の男がおり、手に持っている杯を渡す。

「ああ、ありがとうエオリア……って酒じゃないかこれ！」

「エラおばさんから聞いたぞ、けっこう呑める口だと」

「あれは呑んだんじゃなくて、呑まされたの間違いだ！」

「せっかくの祭りなのに呑まなくてどうする」

当然のような顔で聞いてくるエオリアに、

「リラが倒れてるっていうのに呑めないよ、倒れたの俺のせいだし」

「そのことなんだけどなアルト」

エオリアは自分の杯をぐいっと呑む。

「リラが倒れたのは、たぶんお前のせいではない」

「？ たぶんってどういうことなんだ？」

言葉に振り向くアルト。

「リラは……人見知りで知らない人間が多いところでは極度に緊張するほうでな、

とくに人ごみのなかには最悪らしい」

「なっ……そうだったのか」

視線を空に向けながら話す若草色の男に、青年は視線を地面へと落とした。

「知っててやったわけじゃないんだ、そう気に病むな」

視線はそのままに青年の肩へと手を置くエオリア。

小さく礼をいうアルトだったが、ふと疑問顔になる。

「そういえば、俺とは初対面でも普通に話していたような」

「ああ、そうだったな。なんでだろうな？」

「俺に聞き返されても困るよ」

「まあ、あのときは自分とセリアもいたからな。それで安心して話せたのではないだろうか」

「そっか……」

「それよりもどうしてリラと一緒にだったんだ？」

「エラーさんが酔いつぶれちゃっててな、一緒に回れそうにないって言ってたから」

「ほーう……」

「なんだよ、細い横目でこっちを見るなよ」

「ははは、悪かった悪かった。あんなに臆病だったリラがなあ」

エオリアは独り言をつぶやくようににやけ顔で杯をあおる。

「臆病だった？」

「……あんまり自分が話すことではないが、ひとつだけ」

声のトーンもひとつ落としてエオリアは言う。

「気づいたかもしれないが、あいつは外を怖がっている。

自由に振る舞えるのは、良くて神殿か自宅近辺ぐらいなもんだ」

「それは今日の様子を見てわかったよ」

「だろうな。原因はあの見えないのに見えてる眼だ。

生まれついたときからリラは自分達とは違うものが見えている」

再び聞くりラの眼にまつわる話。

アルトはどこか気まずさを思い、誤摩化すかのように杯に口づける。

「そのせいで当時近くにいた同じ歳の子にひどく虐められていたら
しい」

「もしかして」

「考えてる通りで合ってる。あの服装はあいつなりの防御手段みた
いなもんだ」

答える言葉を失う。

「ただな……だから驚いてるんだ。

エラおばさんや自分達以外の人間と一緒に外へ出てるなんてこと
に。

それも昨日出会ったばかりのアルト、おまえとだ」

「エオリア……」

「自分やセリアとはいままでこそ当たり前のように話せているが、

それでも初めて会った頃はまともに言葉なんて聞いた事がなかった」

杯を強く握りしめ、若草色の男は無表情に言葉を吐いていく。

(後悔、だろうか言葉から感じられるのは)

男は堪えられなくなったのか杯の中身を一気に呑み下す。

「お、おいエオリアさっきから呑み過ぎじゃないのか」

「すまん、いまだけは呑まないとやってられない。なあアルト」

「なんだ？」

「できるなら、リラのそばにいてやってくれ……」

「それはいいのだけど、意味がよくわからないんだが……」

すがるような声を出すエオリアに困惑するしかないアルト。

そこに近づいてくる足音がひとつ。

誰だろうと足音の方へ顔を向ける二人。

「あ、ブツアさんもうー」

「!!!! 逃げるアルト!!!!」

「え、どうしたんだエオリー」

名前を最後まで言うまえに老人は、笑顔で盛大に嘔吐した。

「も〜お父さんの馬鹿！ せっかく祭り用に着飾ったのに！」

白くゆったりとした普段着に着替えたセリアはひとり神殿内を歩いてた。

左手には男性用の衣服を抱え、右手には色とりどりの果物が入った

か」。

「エオリアの馬鹿もなーんで一緒によごれちゃうかなあ」

あーあとため息を頭上へと投げる。

「あ。そうだそうだエラおばさん起きたかな」

神殿出口に向かっていた足を止め、住居方面にむけて歩き出す。

通路には普段はいない人々が多くいる。

歓迎祭のために遠出してきた人のために、神殿を寝床として提供しているからだ。

じつくりと神殿の装飾を眺める者、神官と話をしている者とさまざま。

歩いているセリアに気づいて、会釈をおくる者もいる。

(岩石人のこどもかな〜かわいい〜)

自分の腰ほどの身長をもった岩石人の子にセリアは手をふりかえす。途中、聞き覚えのある悲鳴らしきものが神殿外から聞こえた気がしたが、

祭りだからきつとはしゃいでるのよね、とひとり納得。

そして足はエラールが寝ている客間で止まる。

「エラおばさーん起きたー？ セリアだよー」

かけ声とともに扉を開けてみゃれば、寝台に寝ているのはリラ。

「え？ あれ、なんでリラが寝てるの？」

「やあセリア、どうしたんだい？」

寝台脇の椅子に座っていたエラーールが声をかけてくる。

「あれれ、エラおばさん起きてる。なんでー？」

「なにをいってるとんだか、とつくに起きてたよあたしは」

「てつきりまだ寝てると思って様子見に来たんだけどなあ」

「そうだったのかい。ああ果物ひとつくれないかい」

「どうぞどうぞー取れ立てをヒルダさんにもらってきました」

「ありがとうございます。それならリラが起きたときようにもうひとつもらつておこうか」

「好きなだけもらっちゃってくださいよ。それよりリラ何かあったんですか？」

持っていた衣服を近くの丸机へのせ、右手のかごから果物をいくつか取り出すセリア。

それを受け取り、そのうちのひとつをエラーールは果物ナイフで皮を剥いていく。

寝ているリラの顔をのぞくように寝台近くへ移動したセリアは、室内にあった椅子に座る。

「アル坊と一緒に祭りへ行ったんだけど、途中で気を失ったってさ」

「ええええ!？」

「なにをそんなに驚いてるんだい？」

「だってだってリラが、あんな恐がりだったリラがですよ」

「会ったばかりのアルトと外へ行ったなんて、ボク嬉しいな」

「気を失ったことについては何も言わないのかいあんたは」

驚き半分笑顔半分の顔で話す少女。

こちらは呆れ顔になっている女性。

「リラ……きつと分かっていたんじゃないかな」

「気を失うことがかい？」

「いえ、たぶんアルトと一緒になら大丈夫なんだろうと」

「昨日会ったばかりなのにえらい信用されてるねアル坊は」

「あはは、ちよつとした助言をしちゃったからかな」

すこし困り顔で笑っている少女に、ふうんと答える女性。

少女は静かに寝ている顔の頭に手を置き、眼を覚ませないようゆっくりなでる。

「ボク、自分勝手かもしれないけどリラには幸せになってほしいと思つてて」

「そいつはあたしだって同じさ。だけどこの子がそう思わないと意味がないさ」

「うん……リラ、もっと自分勝手になつて、いいんだよ？」

「はは、まるであなたがお母さんみたいじゃないか」

「お母さんか〜お姉さんつて言われるほうがボクいいなあ〜」

エラールは皮を剥き終え、分割した果物を皿にのせてセリアへと差し出した。

少女は礼を言つて分割されたうちのひとつを手で掴み、大きく口をあけて含んだ。

「あなた、相変わらずの食べっぷりだねえ」

「食べれるときにちゃんと食べる！ がボクの信念だから！」

「片手を握りしめて意気込んで言う事かい、まったく」

苦笑しつつ女性も果物を掴み口にいれる。

「そついや、あんた他によるところあるんじゃないのか」

そついつてエラーは丸机にのせてある衣服を目で指す。

「ああ、寝ているリラのことですっかり忘れた。二人の服もってか
なきや」

「なにかあったのかい？」

「えーとね、吐いた」

簡潔な言葉を俯きつつ出す少女。

その言葉で合点がいったらしく、

「ほんと、ここには相変わらずな人たちばかりだねえ」

「あは、あはは」

笑って誤摩化した少女は椅子から立ち上がり、ふたたび衣服を手
取った。

「な・ん・で増えてるの〜！」

目の前には服装の端々が汚れたアルトとエオリア、そして横には笑
顔で仰向けになっているブツア。

三人を前にセリアは目の端をつり上げて言い放つ。

「エオリア！　なんでこうなってるの〜！」

「セ、セリア。エオリアは悪く〜」

「アルトは黙って！　もーうお父さんの馬鹿！　エオリアのもっと馬
鹿！」

なにを言っても駄目だろうと諦めきった顔をしたエオリアは、ひたすら自分にむけられる言葉を黙って聞き流す。そんな態度をとっているエオリアに呆れたアルトは右手を頭に当てて困り顔。

「ああもう、お父さんよりも先に二人はこれで着替えて来て！」

左手を突き出すセリアを見れば、白の上下服があった。

二人分の服を受け取ったアルトは、

「俺たちは着替えるからいいけど、ブツファさんは？」

「自分らが着替えたら神殿まで運べばいい」

「分かっているならさっさと動く！」

三人の会話をよそにブツファは、これ以上ない笑顔に涎をたらしながら眠っていた。

移り変わって時間は空が赤く染まる夕方過ぎ。

祭りで騒いでる人々は活気に溢れており、時間が経っても衰える様子はない。

ブツファを運び終えたアルトはひとり神殿外の階段に腰掛けて物思いにふける。

頭のなかには倒れたりラの心配や、笑顔で吐いて来たブツファへの出来事などを思い浮かべていた。

手にもっている杯はすでにからっぽ、ときどき口元に運ぶが飲んではいなかった。

何度か目の前をすぎていく人々が声をかけてくるが、アルトは呆然と喧噪を眺めていた。

大人は屋台の長机で酒を酌み交わし、子供は走り回ってはしゃいでいる。

どこか懐かしさを覚えているうちに、脳裏には家族の姿が思い出される。

家族の姿が浮かんだ瞬間、我知らずアルトは涙を流していた。

はっと涙に気づき、慌てて顔を腕で覆う。

（あ、ね。どうして涙が、涙が）
止まらない涙に理由もなく焦る。

「駄目だ、泣いちゃ駄目なんだって」

自らに言い訳するように言葉を放ち、鼻をすすり目をこする。

ひとりになった反動か、アルトは無意識に寂しさを胸にためていた。あつちの世界にいるはずの家族、友人、知り合いたちの顔が変わるがわる浮かんでいく。

顔を俯かせ声を押し殺したアルトは周囲の人々に気取られないよう、静かに泣いた。

遠くの舞台からは愛憎劇を盛り上げる悲しく深い音色が響いてくる。

階段で俯き泣いているアルトの後方、神殿出入口近くには若草色の男と橙の少女が立っていた。

「やっぱり不安で仕方ないんだな」

「当たり前でしょーボクが同じ立場だったら湖ができちゃっつよー」
「大げさすぎるぞ。昨日は帰れると分かってからは平気そつだった
が」

「ねえエオリア」

「なんだ」

「どうしたらいいかな」

少女はまぶたを薄く閉じて、考え込むように視線をさげている。

「自分たちがすぐどうこうできるわけじゃない。」

だが、なんにも力になれない、というわけでもない」

舞台の女優が男優へと勢いあまつた飛び蹴りをかますのを見ながら
男は、

突き放したかのように言ったと思えば、少女を気遣うように穏やかな
口調で声を発した。

声を受けて少女は、頭を男の胸に預けてうんと頷く。

祭りの熱気は覚めるどころかますます活気づいていくなか、祭りの
一日目は終了した。

第四話 心かよわせて

翌日の祭り二日目。

時刻は南天に太陽が輝く昼過ぎ。

神殿外の階段には黒髪の青年が座っている。

傍らには湯気をあげる焼きそばが置かれているが、口にした様子はない。

手に持っている杯も中身はあれど減ってはいない。

(リラがどうしてるか気になるけど、動く気になれないや)

猛獣役が矢で四方八方から射抜かれている遠くの舞台を眺める青年。歓声がわき上がる舞台席をひどく遠い場所を感じながら考えを重ねる。

(いくら帰れるといっても今すぐじゃない、大丈夫だろうか俺)

昨夜の自分を思い浮かべる。

眼を真つ赤にしたアルトを見てエオリアは何も言わなかったが、セリアには心配と励ましを混ぜた言葉をいろいろとかけられた。

大丈夫、とだけ二人には答えてすぐさま自室で眠ったが、気分は上がらずにいる。

「あ、そうしやさまだーこんにちはあー」

こどもたちが声と一緒に手をふり通り過ぎる。

力ない笑みとともに手をふりかえし、すぐさま表情をなくす。

背後からゆっくりとした足音が聞こえてくる。

誰だろうか、と振り返りもせずには青年は思う。

「どうしましたアルト君、せつかくの焼きそばが冷めてしまいましたよ」

「……ブッフアさん」

背後から歩いて来た老人はそのまま青年の横に腰をおとし、石の地面に置いてあった焼きそばを手に取り鼻を近づける。青年は、何の用だろうかと力ない表情で老人の様子を見る。

「うん、美味しそうなおいですね。もったいないですよ」

「いまは……食べる気が起きないんです」

「じゃあ僕が食べてしましましょう」

え、と驚いた顔で横の老人を見ると、老人は焼きそばを食べ始めた。ひと掻きごとに麵は眼に見えてへっぺいき、すぐさまなくなるのが分かる。

「え、あの、ちょっとちよつと!」

「なんですかアルト君、いま焼きそばで忙しいのです」

「それは俺がもらった焼きそばですよ!」

「それもそうですね。ではお返しします」

そう言っつて老人は食べていた焼きそばを青年に渡した。手元へと渡されたものの今度は戸惑い顔になるアルト。

「いや、そのー返されても」

「この焼きそば、麵がすこし固めで味が濃いですが後味がさっぱりしていますよ」

柔らかな顔をしてブツファはアルトを見る。

老人の手はさっさと食べてみると催促している。

どうしようかと思い、すこし悩んだ末アルトは焼きそばを口に入れた。

「……………」

口内にひろがった辛味にむせ返る青年。

思わず吹き出しそうになったが、堪えて杯の水を含み焼きそばを飲み込む。

「かかつかかからああああ！ ブツファさんなんすかこれ！」

「はっはっは！」

老人は横で笑っている、手には赤い粉が入った小さな硝子瓶がある。その瓶に気づき、辛さが通り過ぎたところで睨むような顔つきをする青年。

ひとしきり笑ったあと、老人は、

「いやなに、アルト君が元気がないのを心配してる人がいますね。なんとかできないかと言われましたからちよっと手助けを」

そう言って前を見たまま、ブツファは後ろを小さく指差す。

疑問顔となって指を見、そのまま後ろに振り返ったアルトの視界に人が三人映る。

「セリアにエオリア……………リラ？」

「……………リラ君は朝からずっと、君がここで座っているのを気にしてましたよ」

舞台の方を見ながらぼそつとつぶやく老人。
再び顔を前にもどして青年は驚き顔になる。
老人はふうと息を吸い込み、淡々として言葉を吐き出し始める。
先ほどまでのふざけた声ではなく、静かに諭すような口調が青年の
耳へと響く。

「アルト君、貴方が抱いている不安。きっと消せるものではないで
しょう。」

ですが不安というものは誰しもが持っているものです。

僕だって不安なく毎日を生きていくわけではありません。

いま目の前を歩いている大人や子供、男性も女性も誰もが抱いて
いるでしょう」

老人の言葉を黙って青年は聞いている。

「不安がない、不安を捨てたと言う人もいます。しかし、それは違
うと僕は思っています。」

自身の不安と自ら向き合っていないだけなのだと、ただ逃げてい
るだけなのだと」

両手を堅く握りしめて、老人は言葉を紡いでいく。

青年は膝を握りしめて、自身の不安を胸につめる。

不安とともに思い出されるのは、喚ばれたときのこと、昨日の思っ
た家族の顔。

「だけどアルト君。僕たちは不安だけが心にあるわけではありません
ん。

明日への見えない不安と、明日への希望も夢も楽しみも一緒に持
っているのです。」

ときに笑って、ときに泣いて、それでも生き抜いていくのです」

老人は前を向きながら左手を隣の青年の背に当てる。
あたたかな手のひらの感触に、かつての家族のぬくもりを思い出す。
背から感じるあたたかさに心が不安定になっていくのが分かる。

「だからいまは思いっきり泣きなさい」

その言葉がきつかけとなって青年は表情を保てなくなり、嗚咽を混じらせながら顔を伏せた。

柔らかな微笑みを浮かべ青年を見守る老人。

「泣いて泣いて泣き尽くしたら、今度は笑いましょう。」

笑って不安と生きて、泣いて希望を抱く、それが人間なのです」

はいと泣きじやくりながらもアルトは返事を返す。

嗚咽で言葉に詰まりながらも意思を述べようとす。

「俺、恐いです、帰れるのか不安で。それに、寂しい、です。」

でも、でも逃げたくない、逃げたくないんです」

「うんうん、ゆっくりと一步一步、不安と向き合えばいいのです」

後ろから静かに三つの足音が近づいてくる。

老人は足音にふりむき、そのうちのひとりへ向かってひとつ頷いてみせる。

包帯の少女が一步、両手を胸前で握りしめたまま青年へと近づき腰を落とす。

「……アルトさん」

「リラ、昨日はごめん、それに心配かけてごめん」

少女は頭を左右に振っていいえ、と答える。

「アルトさんが謝る必要なんてありません」

「でも、でもさりら、俺、俺は」

不安の代わりに胸には後悔がつのってくる。

背を向けている青年へと向かって少女は言葉を作る。

「昨日……アルトさんが誘ってくれたの、怖かったけれど嬉しかったです。」

一人よりも二人で回りたいたんだ、と私を、必要としてくれたことが。

ですからもう、謝らないでください」

「リラ……ありがとう」

「ふふ、お礼を言うのはこちらの方ですアルトさん」

いまだ俯いてはいるが泣き止んだ様子の背中へと、少女は微笑みをおくる。

黒と藍色を後ろに、若草色と橙は前に並んで人ごみのなかへと混ざっていった。

若草色と橙は後ろの二人を見ながら話し、黒は藍色を気遣う態度を見せ、藍色は頷きを黒へと返す。

四人を見送る老人は階段の上に立ち、柔和な笑みをうかべている。

「アルト君とリラ君、どちらにとっても良い出会いとなつてほしいですね。」

願わくば彼らのこれからを明るく照らす変化をもたらしたまえ」

「とても昨日、吐きまくってた方の言葉だとは思えないね」
「ははは、いやいや」

女性の声に苦笑声を出して振り向く老人。

「こう見えても大神官ですからね僕は」

「誰がどう見ても立派な大神官様だよ、酒を呑み過ぎなきゃね」

エラールが歩いてきてブツファの横に並ぶ。

そのまま視線を四人が混ざっていった人ごみへと向け、ブツファも同じく前を向く。

「異界から突然喚ばれるか、想像できないね」

「アルト君がどうして喚ばれたのか、代々の奏者がどういった理由で喚ばれたか。

原因は不明ですが喚ばれる方にとっては不安でしかないでしょう」

「唯一の希望は呼ばれた連中は皆、元の世界へ帰っているという言い伝え、か」

「ええ、ですがもしかしたら記録が失われる以前には例外がいたかもしれません」

どうということだい、とエラールは不審顔で尋ねる。

「風の図書館が焼失した2000年前、大地全体が災害に見舞われたそうです」

「そんな話、初めて聞いたよ」

「いま初めて話しましたからね」

しれっとした顔で老人は言う。

「神殿に保管されていた歴代の大神官が書き残した記録、といつても2000年分しかありませんが」

「んん、どうして2000年分しかないんだい？風の図書館みたく焼けちまつたわけでもないのに」

「いえいえ、風の図書館が焼けたことを受けて、大神官も記録を付けるようになったのです。」

「もちろん僕も記録を日々付けています」

毎日付けているというわけでもないですが、と付け加えて言葉を続ける。

「最古の記録であり最初の記録、2000年前の神殿記録には『賛美歌の道』を終えても、

当時の奏者はしばらくは帰ろうとせず、この世界に留まっていたようなのです」

「そりやまたどうしてなんだい」

「理由などについては記録のところどころが色あせて読み取れませんでした。」

しかし、のちにやってきた災害に見舞われた大地を巡り、一段落したところで帰ったようなのです」

「わざわざもう一度大地を旅したのかい」

「巡ったといつても近くをうろついただけかもしれない。」

昔の記録は多少美化や誇張されていることがありますからね」

ふうとため息をつく老人。

「ただ、もしかしたらですが過去の奏者のなかに、

この世界で生きようと考えた人がいてもおかしくはないかと思つてまして」

「元の世界よりも居心地が良かったり、想い人なんかできたりして

かい？」

「あつてもおかしくはないでしょう、なにせ言い伝えが確かなら29人が喚ばれていたのです」

「けっこうな数だよねえ、と相槌を返す。

その相槌に頷く老人だったが、

（誰ひとりとして旅に失敗せず帰っているということが不思議でもありますが）

一瞬だけ険しい顔を浮かべて内心を流す。

「ところでエラーールさん、貴女もアルト君の様子を見に来たのですか？」

「そうさ、まゝだ元気がないようだったらこいつを吞ませてやろうかと思つて」

そう言つてエラーールは背後に持っていた硝子瓶と杯を手前に振りかざした。

「あまい！ あまいぞアルト！ そんな腕で自分を負かせると思つなよー！」

「ちつくしよー！ エオリアおまえずるしてるだらうー！」

若草色の男と黒髪の青年は、小魚が泳ぐ水の張られた台の前にいた。二人のすぐそばには橙と藍色の少女が立ち並んでいる。

煙管を吹かしている鱗を輝かした屋台の店主は、

「奏者のあんちゃん、魚すくうの下手だなあ〜」

「さつきから十回以上やってるけど全部逃げられてるもんね〜」

「セ、セリアさん！ アルトさん頑張ってるのに！」

橙の少女の言葉にがつくりと肩を落とす青年。

その横で大きく笑い声をあげている若草色の男。

「はっはっは、どうやら今度の勝負は自分の勝ちだなアルト！」

「くっそー！ だったら次はあそこの的当てだ！」

男と青年は隣の屋台へと駆け走っていく。

二人のあとをゆっくりと歩いて追いかける少女たち。

「あゝあアルトにも馬鹿が移っちゃった〜」

「でも元気になってくれたようで良かったです」

よく冷えた氷飴を舐めながら嘆くセリアに、

同じく氷飴を手に持ちほっとした表情で言うリラ。

そのリラを横目に見ながら、

（やっぱりアルトがいると灰布をかぶらなくても幾分か平気みたいだね）

顔には出さないでこちらもほっと胸をなでおろす。

それでもセリアは人ごみを避けるようにリラを連れて二人を追いかける。

「ありえん、ありえん！ 全段命中するなど！」

「エオリア……一言だけ言っておこう、これが実力の差だよ！」

若草色の馬鹿が頭を抱えて地面に伏している。

対する黒髪の馬鹿は腰に手を当てて高笑いをしている。

「ええい！ まだだ！ まだ勝負は終わってない！」
「いい加減にしなさい馬鹿二人」

馬鹿に追いついたセリアは呆れ顔で言う。
地面から勢いよく復帰したエオリアは、

「止めるなセリア！ 男には、男には絶対負けられない勝負があるのだ！」

「分かる、分かるぞエオリア！」

アルトと向き合って熱く手を握り交わす。

「あーもーなんなのこの馬鹿は……」

呆れ顔のまま肩を落としているセリアのかたわら、
リラは三人を見て、口元を手で隠しながら小気味よく笑っていた。
その笑顔に気づいたのか、急に恥ずかしそうにアルトは頭をかいた。

「リ、リラ。楽しそうだけど、その気分は平気？」

「はい、大丈夫です。ですから気にせず頑張ってください」

気遣いに励ましで返す。

「ああ、任せて。次も勝つ！」

「はい、期待しています」

片手を握りしめて答える青年に、藍色の少女は口元を笑みに曲げて
頷き返す。

数時間後、広場の噴水にはしゃぐこどもたちのそばで、地面にたおれこんでいる黒と若草色の二色、息づかいが荒い。近くの石の長椅子には藍色と橙の少女が、地面の二色を見ながら話していた。

「あれから散々勝負して引き分けてどうなの〜その馬鹿」

「二人ともとっても楽しそうでしたし、見えて面白かったからいいじゃないですか」

「まあね〜終いにはボクたち以外の人もどっちが勝つか賭けだすくらいだし」

言葉とは裏腹に笑顔を浮かべて杯を傾げるセリア。

そうですね、と言葉を並べるリラ。

地面にたおれている馬鹿の二色は、

「はあはあ、まだ、まだだアルト。しょう、勝負はこれからだ」

「ぜえぜえ、へ、へへ。とこ、とことん、つきあつて、や、やるぞ」

息も絶え絶えに言葉を交わし合っている。

その横を通りすぎていく人々からは、

「よーうにいちゃんたち！ あんたたちのおかげで儲かったよ！」

「奏者のあんちゃん、また店に来てくれよな！」

「二人ともいい勝負だった！ これ置いてくから飲んでくれ！」

賞賛を交えた声が届けられ、途中で飲み物を渡された。

一息ついたところで二人は立ち上がり、渡された飲み物で喉をうるおしながら、

長椅子に座っている少女たちへと近づいて行く。

「おつかれ、二人とも」

「おつかれさまです」

労いの言葉が少女たちより掛けられる。

ありがとう、と男達は答えて同じ長椅子に腰掛ける。

「しっかし驚いたよ。あの高台飛びでエオリアが十段以上を捻り飛ぶなんて」

「驚かされたのはこっちだ。なんだアルトの犬猫鶏豚を問わない懐かれっぷりは」

「見ているこっちが一番驚いてたつてのー」

「本当ですね」

男達が互いを褒め讃える横で、少女たちは呆れ半分笑顔半分となる。そのまま先ほどまでの勝負事で会話が盛り上がっていくなか、あつと声を出して橙の少女は胸元を探り、

先に丸い金属らしきものが付いている首飾りを取りだした。

首飾りの先にある丸い金属らしきもののふたを開けて中を見ると、

「エオリアーそろそろ打ち合わせの時間だよー」

「む、そうかもうそんな時間になっていたか」

セリアの言葉になにかを思い出したエオリアに、

「打ち合わせ？」

とアルトとリラが同時に尋ねる。

「ああ、明日行われる舞台での演奏会、その打ち合わせだ」
「演奏会……あ、ノンさんがくれた招待券のやつか」

口髭の男を思い浮かべ得心する青年。

橙の少女は立ち上がり、大きく背伸びしながら言う。

「久しぶりの演奏会だからねーボク気合い入れていくよー」
「三ヶ月ぶりぐらいですね、セリアさんの歌声が聞けるの」
「ほんとほんと、ここ最近は儀式や祭りとかでばたばたしてたし」

嬉しそうな声で藍色の少女は、包帯で隠れた眼で橙の少女を見る。
ふと思いを得てアルトはリラの横顔へと振り向く。

「リラ、演奏会には来れるのー」

「アルトと一緒に来たらいい。それならリラも近くで聴けるだろう」
言葉を遮りエオリアは言う。

ええっ？ とアルトはエオリアへと向き直る。

「確かトロツポ会長の話では奏者であるアルトには、専用の席を設けると言っていた」

「うんうん、そうだね。トロおじさん一番の席を用意するって意気込んでたよー」

口髭の男とは知り合いなのかそれぞれが名前を挙げていく。
二人の言葉に戸惑い顔をする包帯の少女は、

「え、でも、私がいたら迷惑にー」

「いいのいいの。どうせ専用って言ったって二人分くらい余裕だつて」

断りの言葉を発しようとして、橙の少女に笑顔で諭される。

隣にいる青年はエオリアとセリアに苦笑顔を向けつつ、どうしようかとリラに言う。

昨日のこと、昼間のことをそれぞれ思い浮かべ、包帯の少女は堅く手を握って口を開いた。

祭り三日目の早朝、神殿外の階段では泥酔している老人と女性、口髭の男がいた。

近くの地面には幾本もの瓶がころがっており、数個の樽もころがっている。

周囲にはやれやれと通り過ぎていく人々。

「今度の犠牲者はトロツポ会長か……顔と髭が酒樽につかってんぞ」
「大方、エラの姐さんに見つかって無理矢理吞まされたんだろう」
「見るよ大神官様の顔、白目むいて鼻水だらだら笑顔だ。あそこまでいくと芸術だな」

後ほど倒れている三人を見た少女の怒声がとどろいた。

時刻は昼を過ぎての夕刻、大地の頭上は暗く染まっていく半ば。空には黒い体色の鳥が数羽はばたいており、ときおり長く低い鳴き声を響かせる。

鳥たちの眼下、神殿外の大地では何力所もかがり火が焚かれている。舞台の近くには大勢の人々が集っており、軽食を売り歩く者が間をわっていく。

人々は舞台へと視線をおくっているため、頭上の影には気づいた様子はない。

「ノンさん、誰の邪魔も入らないって言ってたけれど……」
「まわりに誰もいませんからね……」

アルトとリラは大して厚みのない絨毯にのって空中に浮かんでいた。大人が四、五人は座れそうな広さの絨毯の四隅には、薄く緑に輝く小石が縫い付けられている。

絨毯は二人を乗せたあと、ノンの指示によって現在の位置まで浮かび上がっていた。

リラは不安定な足場と慣れない場所への緊張により震えている。自分にしがみつくようにしている少女を気遣う青年。

（一緒に見に来たのはいいけれど、こんな場所じゃ落ち着いて聴けないだろうな）

それに、と青年は自分の腕に感じるやわらかさに意識が集中する。

「あーあー、あーあのリラ」
「……」

声がとどいていない。

だめだ、このままではだめだ！ 内心頭を抱えるアルト。

同時に脳裏には”誰の邪魔も入りませんからな”とささやく口髭の顔。

され邪念、と意識を舞台の方へと集中し、極力腕の感触を無視しようとしていた。

突風。

「きゃああああー！」

「うわっ！」

青年は絨毯を掴み、少女は青年の身体に深く抱きつく。突風が過ぎる。

詰めていた息を吐き、大丈夫だよと声をかけようとして青年は気づく。

背中に感じるあたたかなぬくもり、ふたつのやわらかみ。状況は、さつきより、悪化していた。

「ああああのの、あのあのリイイイララアラ」

震える声で背に顔だけを向けると少女はより強く震えていた。

(！ いけないこのままじゃ！)

自分の理性も限界だが、少女の限界が先に来るのも明白。

なんとかして少女の気を保たせようと考えたとき、横笛の旋律が耳に入る。

聞こえてくるのは前方、舞台の方から。

そのことに気づき青年は、少女に舞台を見るよう言って前に向き直る。

絨毯から見える景色の大半を占める舞台中央には、いつもの普段着ではないエオリア。

礼服を思わせる白い服装に身をしつらえた若草色の男の少し前には、髪の毛の色と同じドレスのような衣装に包まれたセリアが立っていた。

震えながらもアルトに促されて舞台に顔を向けたリラは、

「セリアさん……綺麗」

「うん、エオリアも凜々しいや」

地上にいる人々は静まりかえり、エオリアが奏でる旋律に耳を傾け

ている。

絨毯の上で聴いているアルトとリラも人々と同じように静かに舞台を見ている。

途中、何かに気づいたリラは左右を見るように顔を振り、不審に思ったその様子を青年は疑問顔で見つめる。

「……リラ？」

「アルトさん、精霊が、精霊たちが踊っています」

「精霊が、踊ってる？」

アルトもリラと同じように左右を見渡すが、何も眼には映らない。はっとした顔になって青年は少女へと振り返る。

少女は青年の様子を気にする事なく、何かに向かって微笑んでいる。その顔にアルトは気づかされる。

「リラ、もしかして君の眼には……」

黒髪の青年がはった問いかけは途中から力を失い、最後は聞こえなくなる。

包帯の少女は虚空へと手を伸ばし、上に向けた掌にのった何かへ包帯に巻かれた眼を向ける。

アルトには何も見えない、しかし、少女の動きを通して何かがあることを知る。

笛の旋律が止む、そして再び笛の音が響きだしたところ、空へと通る少女の歌声が広がります。

祭りは、最後の夜を迎えようとしている。

第五話 不安を越えて

包帯で目元を隠している少女は、歌と旋律に合わせるように左右へと手をかざしている。

口元は笑みを浮かべ、先ほどまでの震えなどなかったように身体を動かす。

黒髪の青年はただ黙ってみつめてはいるが、何を言おうか考えあぐねている様子でもあった。

歌と旋律は二人のことなど構わないまま徐々に弱々しく音が落ちたかと思えば、再び明るく力強い音がひびきわたり地面にいる人々を盛り上げさせる。

布下から響き渡る歓声に青年と少女は身体を振るわされる。

その震えで少女は青年の存在に気づく。

「あ、あのアルトさん……私……」

少女は何をどう言うべきか戸惑い顔と声で青年を見る。

声には恐れと期待を僅かに含ませているのが彼には感じられた。

アルトは、リラの覆い隠されている眼へ視線を合わせたまま口をつむっている。

（リラには、精霊が見える。リラは、それをどう思っているんだろ
う）

思い出されるのはエオリアが話したこと。

――ひどく虐められてたらしい。

舞台の巫女は歌声とともに身体を踊らせ、騎士は横笛を高い音色で旋律を流し続ける。

巫女は声を張り上げて歌い踊りながらも、眼前の人々ではなく上空へと意識をとばしていた。

（あんな高いところリラ大丈夫かなー）

いままで包帯の少女が外にでるとき、セリアは出来る限り付き添い、彼女の安心を守って来た。

それが自分にできる一番のことだと、少女を大切に思うセリアの意思。

踊りで身体を回転させるついでに横笛を吹いている騎士へと視線を当てた。

エオリアは眼前へと顔を向けて横笛を吹きながらも、セリアの視線に眼を合わせて答える。

しかし、彼の目線も人々へではなく、上空へと戻る。

自分と同じく彼も二人を気にしている、そう感じ取り、大丈夫アルトを信じようと思った。

あの少女が、出会ったときは母親の後ろにずっと隠れ、

ひとりで『大地の間』の花壇を手入れしていて、声をかけても黙っていないなくなってしまった彼女が、

たった数日前に出会ったアルトにあそこまでの笑顔を見せるのだ。

アルトが、少女の花を一番最初に褒めたのも大きいだろう。

何よりも花を大事にして花とともに過ごしてきたリラだ、自分のことのように嬉しかったに違いない。

セリアは回転を止めて人々へと向き直り、今度は叫ぶに近い声を早い拍子で出していく。
隣からは低音を響かせる旋律が生み出され始める。

いま歌っているのは、人を信じずに愛を憎む男がひとりの女によって信じる心を取り戻す歌だ。

歌い上げる歌詞には女の想いが込められているが、歌の作り手は男性だと聞く。

最初に歌を聞いたときは歌と同じ経験をした女性がつたものだとばかり思っていた。

しかし、のちに聞いた事実は違っており、
親の愛に餓えた養子を歳のいった男が不器用ながらも共に過ごすなかで、

子を歪みから明るい方向へと歩み育てていったなかで生まれた歌なのだという。

この世界は厳しい、セリアは歌声には込めず胸に秘める。

精霊の加護と術のおかげである程度は安全に生きていられるとはいえ、

生まれた子の多くは大人の力およばず失われてしまう。

それに神殿や街をはなれば凶獣が人を襲うこともあり、

飢えや生活の苦しさから盗みや殺しをせざるえない人もいる。

結果、リラのように壁や悲しみを得てしまう人も少なくはない。

それでも、と思ひ喉を限界まで振るわせて声をふりしぼる。

厳しさに、悲しさに負けることなく、生きてほしいと願う。

悲しいことがあった分だけ嬉しいことをたくさん見つけて幸せになつてほしい。

そう、普段から父であり大神官でもある人が口癖のように言うことを、

セリアは無言の願いを、大きく左右に手を振り広げて歌声にのせた。

眼下から聞こえる歌は勢いを増していき、人々からは熱気が溢れ始める。

絨毯の上に座る青年と少女は互いを見ていた。

拳を薄くにぎりしめてアルトは口を開けようとして閉じるを繰り返している。

リラは、こちらの言葉を待っているかのように空中に掲げていた手を胸の前で握っていた。

(そういや、リラ、よく胸前で手を握っているよな)

そのしぐさも彼女なりに意味のあることなのだろうと思いつながら、思案に頭を巡らせる。

思案に意識を集中していたところで、耳にはこれまでの音量を超えて熱い歌声がとどく。

歌声の熱さに聞いているこちらまで胸が熱くなって来た、熱く悲しい歌だ。

歌には男がどれだけ人を想い、ゆえに人を信じなくなったか。

しかし女は信じることを諦めず男をただ信じているのかが詞に込められていた。

横笛は歌声の熱さとは対照的に、静かに波打つような音を奏でる。

青年と少女は知らず知らずのうちに舞台へと眼をむけている。

「とても悲しい歌……だけど、ただそれだけじゃない」

少女がつぶやく、青年は頷く。

聴こえる歌詞とは裏腹に感じられる、男が女を信じようと自身と向き合おうとしているのが。

男は逃げた、自身の悲しみから、自身の不安から。

それでも、女を信じようとするのは、希望を、自身を信じたかったから。

――僕たちは不安だけが心にあるわけではありません。

――明日への見えない不安と、明日への希望も夢も楽しみも一緒に持っているのです。

ブッフアの言葉が、自身の抱いていた不安とともに呼び起こされる。しかし、いまは不安をぐつと胸の奥に押しとどめた。

歌声とともに聴こえる静かな笛の音に心を落ち着かせる。

「リラ……ちょっと聞いてもらってもいいかな」

「アルトさん……はい」

青年は、ふりしぼるように声をだしていく。

少女は、前を向きつつ答える。

「俺、とても不安なんだ、ちゃんと帰れるのか。

自分が大地を巡って神殿まで無事に戻って、元の世界へと帰れるのか」

「……はい」

「でもさ、同時にこの世界がどんなところだろうって興味もあるんだ」

最初よりも明るい声が出る。

「俺のいた世界と違ってびっくりするような髪の色の人がいったりさ、漫画や映画でしか見たことないような龍翼人や岩石人なんてのがいるし」

「……」
「聞けば木霊族や人魚族つてのもいるっていうから、旅先で出会えるかなって楽しみなんだ」

少女は何も言わず、胸前の手を解くことなく聞いている。

「俺の見たことないもの、知らないことが、たくさんたくさんこの世界にはある。」

精霊術なんてまさにそう、火の玉を自在に操ったり、空中からいきなり水出したり」

強制的に吞まされた夜が思い出される。

「だからさ、どんなことでも驚いたりするだろうけど、怖がらずに触れていきたいんだ」

「アルトさん……」

言葉の終わりとともに青年は少女へと向き直る。

少女は、待っている、言葉を。

「俺、羨ましいよ。精霊が見えるなんて、すごいよ」

「……」
「リラにしか見えない世界、いつかは俺も見てみたいと思う」

静かに言葉を言い終える異界から喚ばれた青年。
花の似合う少女は言葉もなく涙をながしていた。

歌声と音色は終わりを迎え、地面が歓声と拍手に包まれていく。

時間は過ぎて二日後の昼、神殿外では二頭の馬がつながれた荷台近くに人が集まっている。

「それではアルトさん、訓練がんばってくださいね。また会えるの、待ってますから」

「ありがとうございます、リラも元気で。また色々話を聞かせてくれるのを楽しみにしてるよ」

馬車の台座に座っている灰色の布をかぶったリラへ、アルトは片手をあげて笑顔で答える。

「あなたたち、ずいぶん仲良さそうじゃないか」

「え、そな、そんなお母さん何言ってるの!？」

「はは、ははは……」

同じく台座の横にすわるエラールの言葉にリラは慌てる。どう反応したらいいかと照れて頭をかくアルト。

「んんん〜ボクも気になるな〜気になっちゃうな〜」

「止さないかセリア、馬に蹴られるぞ」

「はっはっは、若い人はいいですねえ」

近くにいる三人からの野次が恥ずかしい。

「それじゃあ大神官様、世話になったね」

「いえいえ、こちらこそいつも助けてますから」

「なーに、うちのお得意様なんだから当然さ。
今度くるときはフランから上等な酒かっぱらってくるよ」

是非とも！ と頬をゆるませて言うブツファに呆れ顔になるセリアとエオリア。

「道中気をつけてね、リラもエラおばさんも」

「まだ日が高いとは言え、危険がないとは限らないからな」

「大丈夫ですよ、街道沿いに行きますし、祭りからの帰りで人がたくさんいます。」

それに……お守りもありますから」

包帯の少女が頭にかぶる灰布のなかで一瞬光りがきらめく。
光を発したのは藍色の長髪に付けられた花を象った髪飾り。

青年は素知らぬ顔をしているが、巫女と騎士はにやけた顔で彼を見ている。

「ありやりや、いつのまにかうちの娘が色気づいてるよ」

「！ も、もーちがうったらー！」

「さてからかうのはここまでにして、そろそろいくかね」

エラールが意地の悪い顔を見せる横、リラは小さく唸っている。

「ええ、名残惜しいですが、それではまたエラールさん、リラ君」

「二人ともまたねー」

「道中気をつけて」

「向こうでも元気で」

それぞれの呼びかけに二人は手を振って答えつつ、馬車は街道へと向けて駆け出していく。

神殿から遠ざかり街道を歩く人々や、他の馬車に混ざって見えなくなるまで四人は見送る。

姿が見えなくなったところで、さあと大神官は青年へと振り向く。

「今日から訓練と勉強を始めますよアルト君」

「そんな酒臭い口で言わなくても分かってますよ」

苦笑いを浮かべるアルトに、はっはっはと笑い声が返ってくる。

青年の後ろにいた騎士は、アルトの肩に手をかけて

「よし、さっそく神殿周りを十週走るぞアルト」

「ちょ、ちょっとまで！ いきなり過ぎるだろそれ！」

「ほう……アルト、おまえ逃げるのかな？」

「なに〜？」

「訓練では同じことを自分も一緒にやる、負けるのが恐いのかな」

エオリアの売り言葉を買おうようにしてアルトは、

「エオリア、俺が、いつ、負けるのが怖いと言った」

「そう聞こえたんだが気のせいだったか」

「舐めんな！ これでも陸上部だったんだ！」

「はっ！ りくじょうぶとやらは分からんが、運動には自信があるわけか！」

「ああ、おまえに敗北ってやつを教えてやるぜ！」

「その言葉、そっくり返してやろうー！」

「ただの訓練になにをそこまで張り合ってるのかなー」

「はっはっは。やる気があるのはいいことですよ」

言い終えてから神殿の角へと走り出した二人を見ながらばやくセリアに、

楽しそうにあごをなでて二人を見ているブツファ。
馬鹿二人の雄叫びが神殿付近に響き渡る。

街道を形作る石畳を進む馬車には、蹄と車輪の音に揺られる金髪の女性と包帯の少女。

女性は馬の手綱を持って前を向いており、少女は本に顔を向けている。

馬車の周囲には荷物を携え歩く人や、同じように馬車を揺らす者もいた。

ときおり雲間から日差しがのぞくものの、気温は涼しく空気は乾いている。

気持ちのよい空気と定期的に聞こえる足下からの音に、リラは眠気を感じ始めた。

（ん……もうちょっと読んでから眠りたいな……）
手元にある本に書かれているのは、奏者の言い伝えが書き連ねられたもの。

神殿から出立する際、図書館からセリアを介して借りた。

自分が生きている間に奏者が喚ばれることがあると耳に挟んだ言い伝えで知ってはいたが、

もともとそこまで興味があつたわけではなかった。

外に興味を持ってない自分には関わりのないことだと、思っていたからだ。

しかし、現代の奏者、アルトに出会った。

彼は、いままで出会った人とは雰囲気も色もなにもかも異なっていた。

異界の人間、興味がないと言えば嘘になる、しかし怖くもあつた。度重なる眠気に耐えれそうになくなってきて、はあと本を閉じる。そのまま本を膝上に置いたまま、台座の背もたれに背中を預ける。

（彼は、アルトさんは、お花を褒めてくれた。そして、羨ましいと言ってくれた）

それに、と思いながら髪に留められた髪飾りに触れる。

祭りの演奏会が終わったあとのことが思いつかぶ。

アルトとともに夜店をまわり、彼が花の似合う自分に合うと言って買ってくれたことを。

嬉しかった、髪飾りを買ってくれたこと以上に、なにより花が似合うと言ってくれたことが。

知らず知らずのうちに口元が微笑んでいる、とても暖かな気持ちがある。

それから知りたくなつた、アルト以前に喚ばれた奏者はどのような人たちだったのか。

そして、それぞれの奏者が喚ばれた頃の大地はどうであったのか。

これからはもっと外のことを知っていこう、アルトともっと話ができるようになるう。

包帯の少女はそう意思を抱いて、街へと着くまでの間、眠気に従つて暗闇へと落ちた。

数日後の神殿外、午後の日差しが突き刺す暑さのなか、

神殿に寄り添うよう大きく枝葉を広げて佇んでいる樹木の下、幾人の人が集っている。

日差しから逃れるように樹木の影に隠れ、木の根もとには橙の少女が立っている。

少女の横手には黒に近い色合いの板が地面に突き刺して立ててあり、板の前にはこどもたちに混じって黒髪の青年があぐらをかいて座っていた。

青年のあぐらの上には何人かのこどもたちがのっかっている。

左右や後ろから服や髪をひっぱりこどももおり、青年は対応に疲れ顔。

「よっし、じゃあ皆、今日の勉強始めるよ〜」

「はい」

とどく声に、ようやくかとつぶやいて青年は前を見る。

黒板には白い文字でいろいろと書かれていた。

アルトは左から右へと眼を動かしていく。

(やっぱり読めるなあ……どうなってんだろ)

見た事の無い文字だったが、内容が頭に入ってくる。

耳には少女の声と質問をすることも声が交互に聞こえてくる。

そのまま考えに意識を向けていく。

訓練と勉強を開始してからの数日。

アルトは改めて気づかされたことがいくつもあった。

もともと陸上部で運動していたから、それなりには訓練についていけるだろうと思っていた。

だが訓練を始めてみればおかしなことに、身体が想像以上に動く。初日のエオリアとの神殿周り十週もなんなくこなしていた自分がい

た。

息切れはしていたものの、横を走っていたエオリアは汗をいくつもかいていた。

おかしい、明らかにそう感じ取れた。

（俺は短距離走が専門だったし、マラソンではドベの体力しかないのに）

そして、セリアの地理や歴史、精霊術などの勉強では、文字が読めていた。

どれもこれも始めて見る文字であるのに理解ができてしまう。

一体これはどういうことなのかと、自問したとき言葉が通じていることにいまさら気づく。

おかしさに不安と気味の悪さを覚え一度ブツファに相談をしたが、理由はわからない、代々の奏者も同じだったと聞かされた。

得体の知れないなにかの力が働いてる、そう思うと不安だったが、ブツファはアルトへ「きつと精霊の加護が付いているのですよ」と優しく言葉をかけてくれた。

だが、そう簡単に納得ができたわけではないが、

気にしてもしょうがないかとアルトは考え過ぎないようにした。

はあ、と下向きに息をつく。

「アゝルゝトゝそのため息はなんなのかなー」

「わーアル兄ちゃんふまじめだあー」

「はっ？ へえっ？」

少女が眉と口をゆがめ、両腕を組んで青年を見ている。

近くのこともたちは皆、アルトへ指を向けたりして笑っていた。

「罰として、術の受ける役！」

「わーいっ！」

「えええええ、またかよお！」

音が鳴りそうな勢いでアルトを指差したセリアはそう言い放ち、青年の近くへとよって片腕を引つ張って無理矢理立たせる。

そのまま黒板横まで引つ張り、木の根元から少々離れた位置に立たせた。

「よおし！　じゃあ今日はボクがお手本を見せるからね」

「はぁーいー！」

「うわぁ……手加減、してくれるよな？」

「し・な・い・よ」

語尾に心臓を象った記号を付ける勢いと、眼が笑ってない笑顔で言うセリア。

少女は眼を閉じて、両手を目の前へとかざす。

「みんなーよく聞いて、ちゃんと覚えるんだよー」

眼をつむったままこどもたちへ教えを説く。

こどもたちは期待を浮かべる顔で言葉を待っている。

「まず、眼を閉じたりして気持ちを集中。

そうやって精霊さんが近くに感じるのを感じ取るの」

目の前へとかざされた両手を左右に広げ、手の平を上にして止める。

「それで心のなかでお願いするの、精霊さん力を貸してくださいな

って」

左右の手の平からは拳ほどの水球がそれぞれ生じている。

「いまやっつてるみたいなのは、水の球と一緒に作りませんか、な感じをお願いするの」

拳ほどだった水球が、一回り大きくなる。

さらに一回り、さらにさらに一回り。

こどもたちの眼は見開かれ、思い思いに驚きと喜びの声を出している。

「あんまり強引なお願いの仕方は駄目だよ、精霊さんが困っちゃうからね」

生じたところより三倍近くも大きくなった二つの水球は、ふたたび両手を目の前にもってくることに、さらなる大きさのひとつの水球となる。

セリアは眼を開いて口元を笑みに歪めて、

「んふふふふ〜アルト〜」

「セ、セリア！ おまえそれやばいって！ 死ぬって！」

「アル兄ちゃんがんばれー」

「おお、がんばるよー……ってあああああああああああああああああああ
ああああ！」

こどもたちの声に応えた瞬間、アルトの全身へ巨大な水球がぶつかった。

あとには右手を振り抜いた姿勢で立つ、満面の笑みのセリアがおり、派手に展開された精霊術にこどもたちは歓声にわいていた。

夜、神殿住居の一室では柔軟体操をしているアルトの姿。昼過ぎまでは身体を鍛える運動、過ぎてからはこどもたちと勉強。加えて夕飯を終えるまでは神殿で働く人々の手伝いを青年はしていた。寝台の上で身体を伸ばしながら、

「あー……セリアにやられたせいであちこちが痛い」

伸びたさいに生じる骨に響く音と肉体の軋みに顔をひそめながらぼやく。

腕と足の位置を組み替えて、先ほどとは反対の箇所を伸ばす。手に力をこめて足を伸ばしつつ視線を動かす。

室内に据え付けられていた木製の机、上には一冊の本。

ロウソクの灯りに照らされて横開きになっている本のページは白紙。

「日記、か……どんなこと書くの？」

股関節あたりからいい音が鳴る。

今度は背筋を伸ばすように姿勢を整えるアルトの脳裏には、ブツブツアとのやりとりが浮かぶ。

「アルト君、これをお渡ししておきます。」

「ブツブツアさん、これは？」

「これは『賛美歌の道』へ旅立つ奏者に書いていただく記録帳です。」

「記録帳、ですか。」

「ええ、とは言ったものどちらかと言つと日記ですね。」

日々なにがあつたか、旅した場所ではどのような人と出会い、出来事があつたか。

そういったことを思いのままに書き綴っていただけでかまいません。

そのように言われてわたされた本だ。

旅が終わり自分がもとの世界へ還つた際には風の図書館に納められるという。

(この世界に、俺がいた証として残されるのか、というか他の人が見るのかなあ)

下手なこと書けないな、そうどこか恥ずかしい気持ちを抱きながら身体を伸ばす。

目線を日記帳からひとつ横へとずらす。

机の上には四色の宝石がはめこまれた銀の腕輪もあつた。

ブツファから初日に渡されていた腕輪。

その腕輪について、詳しい説明も受けた。

「腕輪には、人々の気持ちが込められていくのか」

言い伝えでは初代の奏者が四大精霊と心を通わせた証拠としてもらったものらしい。

そして腕輪にはめ込まれた宝石は、旅で出会った人々の思いや願いを受け取り、

旅の終わりで完成される賛美歌の質を高めるのだとブツファから聞いた。

それゆえブツファは、旅先では多くの人々と積極的に触れ合うと良い、とアルトに伝えた。

柔軟を終えてベッドに寝転がる。

石造りの天井をしばしみつめるが、考え顔をして脚を地面へとおろしアルトは立ち上がる。

そのまま木製の机へと歩み寄り、同じく木製の椅子に腰掛けた。腕組みをしたまま白紙のページを見る、本の横には黒いインク壺と灰色の羽根ペン。

ふと眼に入った羽根ペンの色に、灰色の布を思い出しリラのことを思う。

（そついや、もう何日も会ってないなあ）

包帯を巻いた少女の顔と声を思い浮かべて、寂しさに胸がすこし痛くなる。

この世界には携帯電話などの遠方と即座に通信できる手段はない。手紙のやりとりや精霊を通じて交信するぐらいにしか術はないという。

元の世界では考えなかったことを考える。

「会いたくても会えないって、こんなにつらいなんて」

家族たちと会いたい気持ちがなくなったわけじゃない。

いまだって会えないことの寂しさと不安はある。

だけど、こつちの世界では自分のことを思い受け止めてくれる人たちがいる。

不安と寂しさを埋めるだけでなく、希望と楽しさをあたえてもくれる。

「あーだめだだめだ、暗くなんな俺」

湿っぽい思考を吹き飛ばすように頭を左右に振り回す。

右手で羽根ペンを手に取り、インク壺へと突っ込む。

やや付け過ぎなインクを垂らさないようペンを運び、ページに文字を書いていく。

他人に読まれてもいいよう元の世界の文字で書こうと思ったが、現代の記録になることを思い出してこちらの世界の文字で書きだす。

こちらに喚ばれたときのこと、祭りのこと、訓練と勉強のこと、それらを一通り書いたところで気づく。

「あ、タイトルとかあったほうがいいかな」

日記ではあるが記録でもあることを考えて悩む。

半時ほど唸ったり頭をかいたりして青年は脳を働かせ、

ようやく思いついた末に日記帳の表紙にタイトルとなる文章を書き込む。

満足した顔で日記帳を引き出しにしまい、銀の腕輪も一緒に入れる。そしてロウソクの火を消し、室内灯のランプも消してベッドに潜り込んだ。

引き出しにしまわれた日記帳の表紙には、

――大地の歌を奏でる者たち――

と書かれていた。

第六話 奏者の旅立ち

曇天模様につつまれた空からは、時折雲間から陽光が射し込んでい

る。時間は朝早く、神殿の周囲には人の気配は少なく、鳥の鳴き声が遠く空から聞こえる。

黒髪の青年は灰色の旅装束と長衣に身を包んでおり、鳴き声の方を見上げていた。

隣には長衣の下に鎧を着込んだ若草色の男と、白い装束の上に長衣を着込んだ橙の少女。

男と少女は互いの荷物の確認に余念がない。

「セリア、地図と通行証は忘れていないな？」

「エオリアこそ狩り道具とか置いてきたりしていないよね？」

「念のためもう一度ここで確認するか、アルトおまえも見ておいてくれ」

「え？ あ、ああ」

「もうう、なにをばーっとしてるのかな？」

遠くの鳥へと意識を飛ばしていたため、名を呼ばれた青年は鈍い反応を返して振り向く。

エオリアの方へと向いたアルトの顔には日焼けと幾つかの擦り傷などがある。

地面に置かれた革袋を手に取りうとした腕にも擦り傷が刻まれている。

「筆記用具と記録帳、それに通貨も入ってる。あとは・・・うん、大丈夫」

革袋を開き、中に入っている物をひとつひとつ手にとり確認して青年は応えた。

同じように男と少女も自分達の革袋に入っている物を確認し終えた。うんうん、と頷いているのは白い神官装束を着た、柔らかな皺をきざんだ老人。

「三人とも荷物の忘れはないようですね」

「はい、大神官様。すぐにでも出発できます」

ブツファの言葉にエオリアは力強く頷いて答え、少女と青年も同様の仕草をする。

もう一度ブツファは頷き、そしてゆっくりと口を開く。

「アルト君」

「はい」

名を呼ばれた青年からははつきりとした通る声での返事。男と少女は青年を見る。

老人は右手に持った杖で、ひとつ地面を打って音を出す。

「今日、たつたいまより『賛美歌の旅』が始まります。

奏者であるアルト君が歌を集める旅が、です」

静かに緊張した面持ちで青年は聞く。

左手首にはめられた銀の腕輪は鈍い輝きをうつし、雲間からの陽光が背中から降り注いでくる。

「君にとって異界であるこの世界、その旅はどのようなものか。

それは楽しい出来事や嬉しい思いだけでなく、つらい思いも厳しい出来事も得るでしょう。」

ですが、これらひっくりくるめて貴方にとって良い旅となることは願っています」

「はい。俺も、俺達にとって良い旅にしたいと思っています」

青年の隣にいる男と少女も頷く。

大地に射し込んでいる陽光は白い石造りの神殿を輝かせる。

「ええ、そしてそれ以上にこの世界を楽しんでください」

「はいっ。たくさん楽しんできますっ！」

腕輪のある左腕を持ち上げ応える。

その様子に老人は一層皺を深くした笑みを抱く。

「エオリア、セリア」

「はい。大神官様」

「はい。お父さん」

「アルト君を頼みましたよ。貴方達にも良い旅になるよう願っています」

「ありがとうございます。騎士エオリア・パール、護衛の任確かに承りました」

「ありがとうございます。巫女セリア・オペラ、案内の任確かに承りました」

「巫女と騎士、奏者の旅路に精霊の守りがあらんことを」

丁寧な言葉を持って言葉を返す騎士と巫女。

二人を満足げな表情で見て大神官は言葉を送った。

青年達はそれぞれの革袋を背負い、街道へと歩き出す。

老人は三人の背中を見つめて立つたまま。

三人が向かう街道には神官装束に身を包んだ人々やこどもたち。

「アルにいちちゃんたちいつてらっしやーい！」

「セリア嬢ちゃんもきいつけてなあ！」

「エオリアしっかりやんなさいよー！」

三人に数限りない声が掛けられ、それぞれが手を振って応える。

青年は歩きながら軽く俯いたが、目の端を少し濡らした顔で前を向く。

立ち止まり、大きく口を開く。

「いつてきます！」

第七話 地へと向かう(前書き)

∧ 0 5 3 | 3 7 9 8 1 ∨

第七話 地へと向かう

神殿を出発してから数日後。

出発時と変わらない曇天模様の下、煉瓦が敷き詰められた街道を歩くのは三人の人影。

橙の少女が前を歩き、後ろを黒髪の青年と若草色の男が隣り合って歩いている。

少女は歌いながら歩いており、男は周囲を警戒しながら歩みを進め、青年は街道沿いに生えている草木やたまに通りがかる動物に眼を奪われていた。

（神殿の図書館にあった図鑑で絵を見たりしていたけれど……実際に見ると違和感がすごいな）

視界に映るのは木陰にひそみながら黒い瞳で視線をよこす小動物。

視線を向けてくる瞳は、兎のような体躯でありながら頭部に一本の角をはやしている。

そのまま見つめっていると、こちらに興味を失ったのか視線をそむけて走り去った。

「あ……いつちゃった」

思わず手を伸ばしかけ、触ってみたかったな、と思っていると、

「いまのは棘兎の一種だな」

「ああ。なんで角がついてるんだらうな」

隣のエオリアも兎が立ち去った方向へと眼を向けて言葉を口にする。

その言葉に対して思ったままの疑問を歩みながらアルトはつぶやく。

「学者の話では、威嚇や縄張り争いをするために得たと考えられている」

「へえ、俺の世界にいた兎と違って結構凶暴なんだな」

「いや、こちらから手出しさえしなければ大人しくて可愛いものさ」

そうなのか、と相槌を打って前を見ると、少女はこちらを気にもせず歌い続けている。

話しかけるような声量でありながら通る声は耳障り良く、気持ちが落ち着いてくるものだった。

旅を初めてから暇さえあればセリアは歌っている、それが役目だと言わんばかりに。

（神殿でもよく歌ってたもんな、仕事さぼって。それぐらい歌、好きなんだな）

そういえば、と金属がこすれる音を立てて歩く隣の鎧姿に視線をうつし、

アルトはエオリアとの模造剣などを使った訓練を思い起こす。

顔や腕などに付けられた擦り傷は訓練の結果によるものだが、訓練の最中にセリアの歌声が聞こえて来たとき、自身の目の前にいたエオリアの動きは眼に見えて鋭く力強いものになっていた。

ただ、近くで訓練を見ていた人々の話では、アルトも同時に手足の動きが素早くなっており、

セリアの歌声には何かしらの力があることが感じられた。

「不可思議なことだらけだ……」

もう何度目になるか分からない驚きと、わき上がってくる好奇心を隠すように、

誰にも聞こえないよう小さく小さくつぶやいた。

ときにエオリアと雑談を交わし、ときにセリアの歌声を聞きながら、しばらく街道を歩いていると太陽が傾き始めたのか、曇り空は徐々に暗さを増す。

頭上で黒い体色の鳥が鳴く、暗くなった空を見上げて鎧姿が言う。

「ふむ。そろそろ街に着いても良い頃なのだが」

「神殿を出発してから三日くらいか、さすがに足が痛くなってきた」

「ボクも野宿じゃなくて柔らかい布が敷かれたところで寝たいよ」

同じように曇り空を見上げて橙の少女の嘆き声が上がる。

ついでにお湯も浴びたい、最近の野宿生活を思い浮かべてアルトは心に思う。

身体を洗ったりするのは街道近くの小川や、セリアが出す精霊術による水でどうにかなった。

食事などは持つている保存食をエオリアの術による火であぶったりして、暖かいものが食べれた。

それでも神殿の生活を思うと不満が出ないわけではなかった。

「分かっていたつもりだったけど、やっぱり旅って不便なものだね」

「アルトにとって初めての旅だからな。なに、そのうち慣れるさ」

神殿を出発した頃に比べて三人の歩幅と歩調は落ちており、

誰もが薄く疲れが出て来た顔ではあったが、青年は頷いて歩みを進

めた。

たまに青年たちとは逆方向に歩いて通り過ぎる人々と挨拶を交わしたり、
遠くから大きく響き渡る獣の声に心をすくませ、周囲に警戒をはら
いっつ三人は歩いていく。

雲が晴れて夕闇が空を占めてきたころ眼の方向に映る景色には、出
発時に地図で確認した大河。

大河が見えた瞬間、橙の少女は両手を大きく広げて青年と鎧姿に振
り返る。

「大河が見えたよ！ もうすぐだよ！」

「そんな大声で言わなくても分かってる」

「セリアの元気が羨ましいな……」

疲れが濃くなってきた顔と苦い声で答えるエオリアに続いて、
同様に疲れを顔に浮かべたアルトは苦笑声で言葉を出す。

セリアの軽装に比べ、エオリアは鎧装束、アルトは多めの荷物を抱
えている。

歩き通しの三日間は男二人に、特にアルトにはきついものがあつた。

「最初の街へ着くまでに心が折れそうになるとは思わなかった」

「安心しろ、パストラへ辿り着いたらそこからは馬に乗るから少し
は楽になる」

「パストラか……たしか街を興した人の名前だったっけ」

「ああ、言い伝えではかなり昔の奏者とともに旅をした人物だつた
とのことだ」

ふたたびセリアの歌声が響いてくる、もうすぐ街に着くとあつてか

高めで早い拍子だ。

少しばかり身体が軽くなったのを感じて青年と鎧姿は足を早めていく。

空が闇に覆われ、星がまたたき始めた頃、三人の視界には街の出入口を示すかがり火が映る。

「あれが……パストラカ」

「そうだ、あの街だ」

「やった〜ふかふかで寝れる〜！」

幾つものかがり火に照らされ浮かび上がる街の姿に、

小さな感動を胸に覚えたアルトだったが、喜色満面のセリアの姿に思わず苦笑。

青年は、両手を上げて喜んでる様子の少女と呆れ顔を向けてる鎧姿を見て言った。

「よし、美味しいもんくって、熱い湯浴びて、気持ちよく寝よう」

数日間天を覆っていた雲は過ぎ去り、太陽が地の方角より顔をのぞかせる頃、

人気の少ない街の通りにある白い壁の建物には、様々な形と色に彩られた植木鉢などが置かれていた。

建物の一階は通りに面しており、硝子戸で通りと建物が分けられている。

その硝子戸近くにある一階と二階をつなぐ階段を降りてくる影。

眠そうに口をすこし開き、隠すように手をあてて階段を下りるのは

目元に包帯を巻いた少女。
一階の床へと足を着けた少女は、所狭しと置かれている植木鉢の草花や樹を見回して、

「おはよう、みんな」

話しかけるように微笑みをもって言葉をかける。

すると足下から小さな鳴き声。

見れば白地に黒いまだら模様がのった尾の短い猫が、少女の足へと頭を擦り付けている。

ふふつと笑ってしゃがみ込み、すり寄ってくる猫の頭を少女は撫でる。

「またご飯もらいに来たの？」

その言葉に答えるようにひと鳴きする猫に、待ってと声をかけて建物の奥へと向かう。

猫も少女を追って奥へとついていく。

天窓からの光に照らされる建物奥に備えられた台所へ立った少女。光が少女の髪飾りに反射する。

「お母さんが昨日、フランセおじさんからもらったものでいいかな」

色褪せた木材でできたテーブルの横には少女よりも背丈の高い棚があった。

棚は硝子と木材を組み合わせた戸で前面を閉めてあり、中身が外に出ないようにしてあった。

少女は戸を開くと、少しだけ背伸びした先にある棚から紙箱を取る。手元の紙箱をあけてみれば中には日干しにされた魚がいくつか。

魚の匂いをかぎとったのか、猫はせわしない動きで足下をまわり鳴

き声を出す。

「いまあげるから待ってて」

紙箱から魚をひとつ手にとり、しゃがみ込んで猫の顔へと差し出す。すこしばかりくすぐったい感触を手の平から感じて少女は笑う。

「そんなにお腹へらしていたんだ、まだあるからね」

空になった手の平をひっこめて魚をのせて再び手を出せば、再度くすぐったい感触。

紙箱を木のテーブルへとのせ、反対の手で猫の頭を少女は撫でる。包帯で覆われた目線は猫の黒いまだら模様へとびる。色に黒髪を青年を思い浮かべる。

「……アルトさんが喚ばれて一ヶ月、もう来てるのかな」

満足したのか猫は嬉しそうに鳴き声をあげながら、少女の手に頭をすりつける。

四角い窓から差す朝日がベッドに寝ている男の顔に当たる。

若草色髪の男は日差しをよけるように寝返りをうつが、日差しは追いかけるように移っていく。

身体にかかっている布を頭に被ってまで日差しを遮ろうとしたが薄い布では効果がなく、

眠そうな瞳としかめっ面で上半身を起こし、大きく口を開き息を吸い込んで吐き出す。

両腕を唸りとともに上空へと伸ばす。

伸ばしきったところで窓に眼を向けると、人々の喧噪が耳にはいつてきた。

「……う、もう昼近いのか。ずいぶんと寝てしまったな」

肩に手を置いて、首を鳴らす。

ベッド脇へと立ち上がり右腕の肘を下に、拳を肩に寄せ、

左肘を右肘の内側へと置いて身体を右へと捻り、今度は反対の姿勢で同じ動作。

身体を動かしながら視線を自身が寝ていたベッドとは逆へやると、

枕を抱いてシーツを床へと吹き飛ばして眠りこける黒髪の青年。

思わず吹き出す若草色髪の男。

「なんだその寝相の悪さは、子供じゃあるまいし」

歩きづめだったせいか、眠っている青年の顔から疲労は抜けきれていない。

旅の経験がある自分と違い、青年は初めての旅だという。

おそらく身体だけでなく気持ちも大きく疲れているだろうとエオリアは思い、

床に落ちているシーツを拾い青年の身体へとかける。

(それにしても、細い身体のわりにずいぶん体力があるのだな)

アルトの身体能力には訓練初日から驚かされはいたが、

ずっと鍛えて来た自分よりも高い運動能力と、

どうみても細身であることがエオリアの内心に疑念を抱かせる。

(神殿を出発するまでの一ヶ月、日に日に上がっていく力と技術…)

これが奏者の得ている精霊の守護なのか？ 答えのない自問を胸に秘めつつ、

いまも枕を抱いて寝息をたてる黒髪の青年を見つめる。

そこへ響く木の扉を叩く音。

「どうぞ、開いている」

扉の方へと振り向き声をかけると、橙髪の少女が部屋へと入って来た。

片腕に抱えた紙袋にはパンや果物、逆には透明な液体の入った硝子瓶と二つの杯。

「おっはよう二人とも〜ご飯もってきたよ〜ってまだアルト寝てるし」

セリアはそう言うと、そのまま二つのベッドの間に置かれた丸い木の机に紙袋と瓶などを置く。

礼を言つてエオリアは紙袋から三日月形のパンを取り出してかじりつく。

パンからは焼きたてを意味する香ばしいさと、甘みを感じさせるところが油っぽい匂いが漂う。

「ふむ、このパン甘くておいしいな」

若草色の男がさらに二口、三口とパンをほおばっていく横で、

橙髪の少女は硝子瓶の栓をひらいて二つの杯へと中身を注ぎ込み、

「はい、目覚めの一杯だよ」

エオリアへと杯を手渡したあと、自身は紙袋から赤い皮の果物を取り出してかじりだす。

窓の外から聞こえる喧噪が強まり、街の中が賑やかになっていくのが伺える。

杯の中身を飲み下しながら窓を見ていた若草色の男は、

「セリア、もうトロッポ会長のところへ顔は出したのか？」

「んーん、まだだひいてなひいよお」

「口のなかをからにしてから話せ」

「……うん、まだ顔出してないけど」

「そうか、街の人々が騒がしいから気になったが……」

瞬間、なにか大きな物が落ちる衝撃と音。

同時にどこか潰れた声が二人の耳に入る。

男と少女が音の出所である青年が寝ていたベッドへ振り向くと、そこに横になっていた青年の姿はなく、ベッド奥で片手を上げてうめいている姿があった。

「……あーくそ、まだ頭がふらふらする」

「ははは。あんなに寝相が悪いとは思わなかったぞアルト」

「ほんとほんと、ボクびつくりしちゃったよ」

白い漆喰を塗られた建物が立ち並ぶ大通りを進む三人。

黒髪の青年を真ん中に、笑っているのは若草髪の男と橙髪の少女。青年と男は昨日までの旅装束ではなく、少女の服装と似た服を着て歩いている。

「そんなに笑うなよ。それでどこへ向かってるんだっけ」

「すまんすまん、トロツポ会長のところだ」

「えーと、口髭のおっさんだったか」

そうだよーと言って一歩先に出てセリアは後ろ向きに歩く。
通りの建物からは威勢良く商品売る声が響いてくる。

「トロおじさんはね、ボクらの演奏会を催してくれたり」

「自分らの旅の援助をしてくれるのだ」

二人の言葉にへえっと頷いたところで、

「え、なに。ものすっごい金持ちなわけあの人」

「その通りだ」

急に驚き顔になって尋ね返すアルト。

その横をこどもたちがはしゃぎながら通り過ぎていく。

軽く声を出して顔に手をあてだした青年を見て、

「？ どうしたの急に」

「いや、俺、けっこう失礼な態度だったような気がして」

セリアの疑問声にアルトは少しばかり落ち込んだ声で答える。

思い出すのは祭りでトロツポから声をかけられたとき。

「確かりラがやばかったから、俺そっけない態度とつたんだよな…」

…

「だ〜いじょうぶだつて〜そんなの気にする人じゃないよー」

「セリアの言う通りだ。そこまで気にしなくていい」

そうかな、と男と少女へ言葉を返して歩くそばを、荷車を引いた馬が通っていく。

後ろ向きに歩いていた橙髪の少女が足を止める。

「さーてさて、トロおじさんの家に着いたよー」

少女が声とともに指差した方向を見れば、

石造りの壁に黒い金属で形作られた門が視界に入り、門の向こうには赤茶色の館があった。

「ようこそ奏者様！ おまちしておりましたぞお！」

たつぷりとした口髭をたくわえた中年の男性は、両手を広げて三人を迎えた。

床には朱に染まった絨毯、天井には硝子で飾られロウソクを多くのせる照明器具、

白い壁にはどこかの風景画などがいくつも掛かっている。

（絵に描いたような金持ちの部屋だな……）

アルトが部屋の装飾に対する感想を抱く先では、

「トロッパ会長みずからのお出迎え恐縮です」

「トロおじさん、お久しぶりです」

セリアとエオリアが挨拶をのべて握手を交わし合っていた。それを見て軽く焦った顔になったアルトは、

「ど、どうも、祭りのときは、いろいろありがとございました」
「はっはっは！ いやいやお礼などいりませんからな」

取り繕うようにこわばった笑みで挨拶をするが、
口髭をふるわせながらの笑顔で返され、右手を差し出されて握手を
求められる。

一瞬、どうしたものか迷い顔だったが同じく右手を出して応じる。

「さて、挨拶はこれぐらいにして座りませんか」

握手を終えた手で四人のそばにあった、弾力性のありそうな布で包
まれた長椅子を指す。

トロッポが座った長椅子の対面にあった長椅子へ三人が腰掛けたと
ころで、

「おーい！ 四人分のお茶を頼むな！」

アルト達が入って来た扉とは違う位置にある扉へ向かって声をかけ
た。

数瞬してひらひら付きの上着と白い前掛けをした女性がお盆に陶器
の杯と、

注ぎ口が高い位置にある薬缶を運んで来た。

女性は、二つの長椅子の間にある背の低いガラステーブルへ杯をな
らべて薬缶の中身をそそぐと、

一礼して入って来た扉からでていった。

トロッポはお茶の入った杯を手にとり、眼を閉じて匂いをかぐ。
興味をそそれアルトも同じ仕草をする。

「うーん、相変わらずこの匂いがたまりませんな」

「これは……良い匂いですね」

「おお、奏者様に褒めて頂けるとは！ これは嬉しいですね！」

そ、そうですか、とやや困り顔をした青年の横から、

「会長、それで本日お伺いしたことについてですが」

「そうですね、どこから話したもんですかな」

エオリアの尋ねる声が発せられ、口髭をつまんで中年は言葉を浮かばせる。

「順を追って話しますとな、我がトロツポ商会はご先祖様がお世話になったお礼として、

奏者様の旅の資金援助などをさせてもらっているのです」

「ご先祖様がお世話になった……？」

「ええ、十二代前ですから千二百年前ですな。当時喚ばれた奏者様とともに、

我がご先祖であるゴーン・トロツポは大地を旅し、この地で商会を興しましてな」

青年がトロツポの話の聞いているそばで、

橙髪の少女と若草色の男はどちらも音をたてずにお茶を楽しんでいる。

「商会を興すにあたっては、当時の奏者様に多大な恩を受けたよう
でしてな。」

以後トロツポ商会は奏者様の旅を助けることを誓ったのです」

「そんなことがあったんですか。じゃあ今回の旅も」

「ええ、もちろん助けさせて頂きますが」

「が？」

いつのまにか顔を近づけて来た口髭は、左手の指を二本たてて青年の顔へと出した。

「二つほど奏者様にお願いしたことがありますな」

「……いったいなんですか」

「いやいや、そんな険しい顔をなされずとも、何簡単なことすな」

ひとつめは、と右手で左手に立てた指を折りまげて、

「これから旅で巡る街や村などで演奏会を開いてほしいのと」

ふたつめは、と先ほどと同じ要領で指をまげ、

「旅でどんなことがあったのか聞かせてほしいのですな」

「え、それだけでいいんですか？」

意外な内容だったのか、驚き顔で中年を見るアルト。

橙髪の少女はお茶のお代わりを頼んでいる。

「お恥ずかしい話をしますとな、ワシはこの歳になっても『精地』へと赴いたことがなく、

人づてにまばら聞いた話や言い伝えでしか知っておらんです」

豊富な口髭をいじりながら苦笑めいた顔で続ける。

「できれば一緒に行ければと思いますが、会長の立場ゆえそうもい
かなくてすな」

「そうなんですか……」

「だーいじょうぶだってト口おじさん！ ボクらがいっぱい土産話

もってかえるよ！」

「おまえは！ アルトと会長が話してるところに割り込むんじゃない！」

「はっはっは、それは楽しみですな！」

男が少女を咎めるのも気にせず笑顔となるトロッパ。

あ、と思い出してアルトは尋ねる。

「そういえば、俺、演奏会って言われても」

「そっかそっか、アルトは楽器とか習ったことないんだっけ」

「よし、だったらこの街にいる間に練習だ」

「え、ちょ、俺も出なきゃ駄目なのか!？」

「それがワシらが旅を助けるための条件ですからな」

人の悪そうな笑みを浮かべた三人に囲まれて、青年は思わず天をあおいだ。

白と茶と黄土色の建物を視界におさめ、宿屋に雑貨屋に酒場の看板を視線を上に見上げる通り。

黒髪の男は、自身の腰ぐらいある、弦の張られた先端は細い板状で、尾は楕円を半分にした弦楽器を、自らの身体に革のベルトを巻いて背負っていた。

通りすぎる人がちらちらと背負った楽器へ視線をよこしていく。

「……なんかこれだと旅芸人って感じじゃないか？」

「いいじゃないか、似合っているぞ」

横を歩く若草髪の男はあらぬ方向を見ながら口に手を当てている。

その様子に引きつった笑みを顔に出しているアルト。

「はあ、ところでこの楽器、リュートだけ」

「ああ、それであっている。楽器をさわったことがないアルトでもいいよう簡単なやつだ」

「弦を弾いてればそれっぽくなるってトロツポさん言ってたけど…」

旅の饒別としてトロツポに渡された楽器だが、ちらりと背を見る。リュートの先端にはトロツポ商会の印章が押されていた。

（これを見せれば行く先々で支援が得られるって言ってたもんな）絶対楽しんでるだろあのおっさん、と内心に口髭の笑い顔を思い浮かべる青年。

「だけどさ、これの練習ってどこでしたらいいんだ？」

「いま向かっているところでやればいいさ」

「ふーん、って。セリアはどこいったんだ」

「さあな、ちょっと行ってくるねーと消えた」

「えええええ……」

「気にするな、どうせリラのところへ行っているのだから」

「え」

アルトの足が止まる。

青年が止まったことに気づいて振り向く男。

口を二度、三度開いて閉じて尋ねる黒髪の青年。

「リラ……この街のどこにいるんだ？」

「エツラおっぱさあーん！ リイラー！ やっほー！」

硝子戸が勢いよく外側へと引かれて、橙髪の少女が草木や樹々の鉢植えが並ぶ建物へ入る。

桃色の花を咲かせた小さな鉢植えを移動させようとしていた藍色の長髪が振り向き、

奥にいた金髪の女性が声を片手を上げて声をかける。

「セリアさん！ お久しぶりです！」

「やあ、久しぶりじゃないか。おや、あんたひとりなのかい？」

後ろ手に硝子戸を閉じながらセリアは、ちがうよーと答える。

「エオリアの馬鹿とアルトもいつしよに街にいるよー」

「あ、じゃあ皆さん旅に出られたんですね」

包帯を巻いた少女は顔をほころばせて鉢植えを抱く。

軽い足取りで足下に並べられた鉢植えをよけて奥へと歩いていくセリア。

「そうだよート口おじさんのところでアルトが楽器もらったし、

いまごろはフランセおじさんとこで練習してるんじゃないかなあ」

「へえ、アル坊楽器もらったのかい、どんなのだい？」

白い前掛けで手を拭きながらエラールは橙髪の少女へと近づく。

「リユートっていう、こうなんていうかな、まるっぱいの」

「そんなんじゃない、どういふ楽器かまったくわかりゃしないよ」

「ふふ、ほんとに。でもアルトさんも楽器を習うとしたら」

そうなの、とセリアは付け加えて、

「トロおじさんから演奏会にはアルトにも出てほしいって言われたよー」

「そうなのかい、じゃあ三日後の夜が楽しみだねえ」

「？ お母さん、三日後になにかあるの？」

リラは金髪へと振り向き尋ねる。

エラールは拭った手を二、三度手の平でこすり合わせた。

「そっか、リラにはまだ教えてなかったね。

三日後の夜にはトロツポ商会が行う演奏会があるんだよ。

場所はフランスの奴がやってる酒場『ガイオ』さ」

木製の丸い机ひとつに、木の椅子が四つならんだ組み合わせが幾つもある室内。

床も天井も壁も木造であり、床や壁は一部分が変色している。

通りに面した出入口から大人が歩いて二十四か二十五歩歩いた先に黒塗りのカウンター。

しかし、室内には人気はなく、酒気帯びた匂いも料理の香りもない。あるのは調子外れの弦の音と、とどろく怒声だった。

「なあんだあ！ その気の抜けた音はあ！ 馬鹿にしてんのかてめえは！」

黒塗りのカウンターを握りこぶしで叩き付けた音が響く。

音を出した主は焦げ茶色の髪を短く刈り上げ坊主頭の人物だった。

「だあくつそ！ おめえ、本当に奏者なのかあ！？」

「そ、奏者ですよ！……きつと、ヒーリーさん」

「きつとってなんだあ！ はつきりせんかあ！ あとおれのごとはフランセって呼びやがれ！」

カウンターの内側にいる人物に怒鳴られ、外側の椅子に座っている黒髪の青年は視線を床に落とす。

その青年の肩を軽く笑いながら叩くのは、隣の椅子に座る若草髪の男。

「そう落ち込むなアルト、誰だって最初は下手に決まってる」

「甘やかすなエオリア！ このガキの下手っぷりはひどすぎんだあ！」

「フランセおじさん、そうは言うがー」

「お・じ・さ・んと呼ぶなと言ってるだろうがあ！ おれあはこれでもまだ若いんだぞ！」

「若いと言う歳でもないと思うが」

「おめえ、年上に対する口の利き方になってないんじゃないやあねえか！？」

坊主頭はエオリアへと向き直りその顔を睨む。

が、すぐにその表情を崩して片方の眉尾をあげた顔をする。

「しっかしよおエオリア、言い伝えじゃあどの奏者も楽器を華麗に奏でたつていうじゃねえか」

その言葉に肩を小さくしてリュートを持つ青年。

はあ、とひとつため息をこぼした若草色の男は、

「フランセおじーさん」

「おめえ、わざと切って呼んだろいまの」

「どうでもいいことだ。それよりいまの話は少々おかしい」

「あん？ おかしいなあ？」

へ？ と青年も関心を持ったのか首を上げてとなりを見る。

「アルトは間違いなく奏者なのは自分が保証する。喚ばれた瞬間に立ち会ったからな。」

そのアルトは残念なことに楽器の腕がひどい、ひどすぎる」

「エオリア……そこまで言うなよ……」

「事実だから仕方ないだろアルト、そんな死んだような顔するな、でだ。」

逆に喚ばれた奏者全員が、最初っから上手く楽器を奏でたとは言い伝えにはどこにもない。

少なくとも自分が知っている限りでは、だが。」

「まあ、おめえの言う通りではあるが、それでもなあ」

とちらりと完全に頭を床へと垂れているアルトを見るフランセ。

「三日後の演奏会までにはマシなもんしないと、まじいだろこれ」

「まずいな、色々まずい。」

まず演奏会にはこの街にいる多くの人々が来るだろう。

ついでにトロッポ会長や偉い方々も来られるだろう。

それに何と言っても……」

エオリアが言葉を重ねていくごとに、青年の肩がびくつと反応する。その反応を横目に見ていた若草色の男は、最後の言葉を言うまえに、顔をすつとアルトの横へと持っていく周囲に聞こえないよう手を当てて言う。

「……リラも来るだろう」

瞬間。

勢い良く立ち上がるアルトの姿。

細かく震える顔は、僅かに赤い。

「あーくそくそ！ 練習してやるよ！ 練習して少しはマシになっ
てみせる！」

初めて辿り着いた異界の街にて、青年の奮闘が始まった。

第八話 音色が響く夜

時刻は下り、空には星が瞬いている。

通りを行き交う人々は減る様子を見せず、しかし昼間とは様相の異なる人々が道を占める。

そのひとりは金髪の女性。

彼女は歩いていく先々で通りを行き交う人々に声をかけられる。

「よおーエラ姐さん、いまから呑みかい？」

「エールさんこないだ良い香水仕入れたのさ、また見に来てよ」

「おっと待ってよ姐さん、この硝子玉娘さんの土産にどうよ」

片手を上げて答えたり、また今度と声を掛けたり、酔っぱらいを蹴つ飛ばして女性は歩いてく。

「はあ、なんだか妙に人が多いねえ。アル坊が来てるせいなんかねえ」

そう言つて、自宅へと残してきた盲目の娘のことを思う。

(リラは……まあ、セリアがいるから平気だろうねえ)

昼過ぎにやってきた橙髪の少女には、久しぶりに会って色々話したいこともあるだろうと、

リラの部屋に泊まってもいいよと言っておいた。

思えば一ヶ月と少し前ぐらいから娘の様子が変わった。

理由は分かっている、あの黒髪の青年だ。

あの青年が娘を祭りへと連れ出してから、娘は外へ眼を向け始めた。

(やっぱあれかい？ 女は男で変わるって言うのかい)

そう思いながら苦笑が顔に浮かんでくる。

波がかった金髪を揺らしながら歩いて向かう先は、十二歩くらい離れた位置でも室内のにぎわいが外にもれてくる酒場。騒がしい声にまぎれて弦の音が聞こえてくる。

その音にあゝあと再び苦笑いを顔に作って、エラールは酒場の門をくぐった。

酒場のなかを見れば、カウンターに向かって多くの客が顔を向けていた。

だれもかれもが楽しそうだ。

「いよおフラン、繁盛してるかい？」

エラールは酒場奥のカウンターへと向かいながら、

カウンター内で酒を取り出しては客に振る舞っている坊主頭へと声をかけた。

「よお、エラ！ あたりまえだろうがあ！」

と豪快に笑いながら返答がきた。

その場にいる他の人らにも声をかけてエラールは奥へと歩いていく。カウンター手前で足が止まる。

「……ちょっと、こりゃいったいどうしたんだい？」

黒髪の青年は顔を赤く、酒臭い声で調子外れに歌いながらリュートをおかしの音で弾いていた。

青年の隣に座っている若草色の男は耳を真っ赤にして、青年の歌に手拍子をとっている。

アルトもエオリアもエラールには気づかず歌と仕草に夢中だ。

なんだいこれは、と呆れ顔をしながらカウンターの空いてる席に金髪の女性は座る。

「ん？ ああ、このガキが人前で歌うなんて恥ずかしい、などとほざきやがるから、ほれ」

カウンターに鈍く打ち立てる音を立てて一本の硝子瓶が置かれる。中には赤みがかかった液体が入っており、瓶の底には黒い石が数個入っていた。

その瓶の口元を持って、にやりと笑みを浮かべたフランスは、

「火の方角にある村から仕入れた、溶岩酒つてやつよあ。

砂漠葡萄酒を使った葡萄酒に、火の精地付近から取れた溶岩が突っ込んであるんだ」

「溶岩が入ってるなんて変わった酒もあるもんだねえ」

「おうよあ！ 呑めば陽気な気分になれることたしかよ！ こいつらみたいになあ！」

言いながら完全にできあがっている青年と男を指差す。

「ふうん、ちよいと興味が沸いたねえ。一杯おくれよ」

「もちろんよあ！」

鈍い光沢を放つ赤茶色した深めの杯を取り出し、その杯へと硝子瓶の中身をなみなみと注ぐ。

注ぎ終えるのを目で確認して金髪女性は杯を手に取り、

「精霊の恵みに感謝して、頂くよ」

「ああ、精霊の恵みに感謝だあ！ 乾杯！」

同じく杯を持ったフランセと杯を掲げあつて呑み出した。

「で、どうなんだいアル坊の腕は」

「どうしたあもこうしたあもねえよ。こいつはひでえもんだ」

「ありや、なんだい。あんな立派な楽器こさえてるくせに」

「楽器なんか関係ねえよ。もともとの腕がわるすぎだあ」

そう言い返してフランセは鈍く光る杯を煽る。

「おーおー飲むねえ、と感心しつつ自分も杯を傾けるエラール。」

「そんなに悪いかねえ、ここにいる連中は音にのってるけどさ」

「んなもん酔っぱらいだからに決まってるじゃねえかあ」

カウンターに肘を置いて振り返れば、酒場のどこもかしこもエオリアのように手拍子をとったり、

適当な歌を歌ったりしながらアルトの生み出す音に揺れている。

「酔っぱらいでもいいじゃないか、楽しめるんだからさ」

「あほかあ！ 聞かす奴も聞く奴も酔っぱらってるからの話だろ。」

「たくよお、こんな早く酔っぱらうなら飲ますんじゃなかった」

坊主頭をかきながら答える男性はだらしない顔をして音を出している馬鹿と、

真っ赤な耳の頭を前後に振りながら手拍子している馬鹿を交互に見やる。

その様子を、楽しいじゃないか、と笑い飛ばしているのは金髪の女性。

「いいさいいさ。おかげでエオリアの奴はともかく、アル坊はなじんでるぞ。ほら」

そう言つて指差す方を見れば、

「おーおーいいぞあんちゃん！ おらの歌に合わせてもつと音だせえ！」

「なんだいあれ、珍しい髪色のくせに面白い顔してるじゃあないか」「ひゃっひゃっひゃっ！ 黒髪さんよお一緒に呑もうぜ！」

酔っぱらいが集つて馬鹿二人と一緒に騒ぎ立てていた。

下手な歌に合わせて流れる外れた音は酒場の上空を踊る。

馬鹿ばかりじゃねえかよ、と言いつつも酒場の店主は上機嫌だ。

「たくよお。ちつとばかりし心配してたのがあほらしいじゃねえかよ」

「へえ、あんたでも心配するのかい」

「女の色も知らねえガキ相手に心配すんなつてのが無理だ」

「言つねえ言つねえ」

くくく、そう含み笑いをしながらエラーは杯を煽る。

しかしねえ、と言つて杯に入った氷をからからと鳴らしながら、

「それにしちやあんた、アル坊たちにこれ、どれだけ飲ましたんだい」

「ああ？ んなもん飲めるだけに決まつてるじゃねえか！ ここは酒場だぞ！」

歯をひんむいて大笑いをする坊主頭は、自分らが開けたのとは別に空となつた硝子瓶をかざす。

硝子瓶に入っている溶岩玉を鳴らす男へ半目顔を向ける金髪女性。

「フラン……あたしは平気だけどこの酒相当きついんじゃないか」
「んなもん酒が美味けりゃ関係ねえよ！」

「美味しいことは美味いけど、こりゃあとでひどいことになりそうだねえ」

そうつぶやいて、もう何杯目かも分からない溶岩酒のお代わりをするエラール。

カウンター横に集った酔っぱらいからは黒髪と若草色髪の外れた歌声が混じり出した。

薄暗い部屋がある。

四角い窓は厚手の布に覆われているが、隙間から朝を知らせる角度の光が射し込む。

隙間から入った光は壁へと当たり、室内に一点の輝きを与え、輝きは静かに室内へと光を散らして、部屋の様子を浮かび上がらせた。

部屋の端から端までを埋める何段にも重なった棚は天井と同じ高さ。その棚には様々な鉢植えが置かれており、色とりどりのつぼみを持った草花があった。

草花たちが無言の居住まいを揃えているなか、床には白い布をかぶってうごめく影。

うごめいた影は衣擦れの音を出しながら身体半分を起こす。

「あああああ……あ、あたまがっあたまがあ！」

なんだこれ前にも同じことがあったような、とってから影は一人

頭を抱える。

眼を開くがとびこんでくるのは薄暗さ。
痛む頭をもちあげて周囲を見るが見覚えがない。

「どこだここ……？　　といつかなんで酒場じゃなくて？」

霧がかかっているのか記憶がはつきりしない。

ぼさぼさの髪の毛をかいていると、鼻に入ってくるにおい。
どこかで嗅いだことのあるにおいだと思い、すんすんと鼻息を吸う。

「あ……土と草のにおいだ」

分かった途端、気持ちが悪くなり落ちてきた。

においを身体にとりこむように大きく口を開いて呼吸をする。
が、痛み。

「てててててて！　　だーなんだよこれ！」

頭の奥から鈍くひびいてくる痛みで顔をしかめる。

再び頭を両手で抱えて俯くと、僅かに木材が擦れた音が耳に。
音の方向へ眼を向ければ部屋の扉がちいさな隙間をもって開いてい

た。
隙間から射し込んでくる光が室内の人影に当たる。

「まぶしい……」

だれがいる？　　と思って見ていると扉の隙間から入ってくるちいさな影。

ちいさな影はとことこと歩いて部屋のなかまで来ると、
白い布をかぶった影にむかって鳴いた。

ちいさな影は白地に黒斑模様の猫。

「なんだおまえ？　ここの猫なのか？」

ひと鳴きした猫へと手をのばして頭を撫でる。

撫でられた猫は眼を閉じて嬉しそうに唸って鳴き、腕によりそいながらそのまま布の上へと乗っかる。

「お、おいおい」

影の胸元へと頭をこすりつけて甘えた声で猫は鳴き続ける。

（なんだか懐かれてるなあ）

どうしようかと手持ち無沙汰にしているとちいさく開いていた扉が大きく、開いた。

「え、あ、あの。もしかして……アルトさん、ですか？」

目元に包帯を巻いた藍色の長髪少女が目の前に立っていた。

「ねえねえ、ボクらに分かるよう説明してくれないかな。その馬鹿二人！」

「セ、セリアさん馬鹿馬鹿言っちゃいけませんよ」

花屋の一階奥にある台所では大きな木机にて男女二組が向き合って座っていた。

包帯を巻いた少女と橙髪の少女が座る反対側には、

黒髪の青年と若草色髪の男がどちらも頭を抱えて苦悶顔を浮かべていた。

「たのむ……あんまり大声を出さないでくれ……」
「リラごめん……俺にもよく分からないんだ……」

しほりだすように声を出す馬鹿二人に対して、
セリアは大きく息を吐き、リラは二人を見てセリアを見ておるおる
している。

「もう、エオリアはともかくアルトは分からないだろうけど、

ここはリラとエラおばさんが住んでる花屋なんだよ」

「え……ここが？」

「はい。ここで花を育てて売っているんです」

橙髪の少女からの説明に顔をあげて疑問符をあげる青年。
包帯の少女がその疑問へと答えると、足下から鳴き声。

「あ、ごめんね。お腹すいたんだね」

「その猫……ここで飼ってるの？」

「いいえ、この子。数年前からここに来るようになって、それでい
つもご飯あげてて」

足にまとわりつく猫の頭をよしよしと撫でながら、リラは台所へ向
かう。

台所へ立った少女の背中を、青年は頭の痛みも忘れてぼんやり眺め
る。

その横、いまだに頭を抱えているエオリアにセリアは顔を近づけて、

「でさでさ、昨日ト口おじさんの家からフランセおじさんと」
「行ってしょ」

「……ああ」

「そこで何してたの？」

「覚えてる限りでは……おじさんにアルトの腕、演奏の腕を見てもらい……」

ぼつぼつと声がひびく。

「ああ、そうだ……酒場が開いて人が増え、おじさんがアルトに演奏しろと言って……」

確かアルトはそれを嫌がって……」

だんだんと思い出してきたのが、声は明瞭になり大きくなる。

「あの親父……！ 自分らに『酒場にいる奴はまず酒を飲め』などと無理矢理に！」

声を荒げた瞬間、うめきながら頭を抱えるエオリア。

あーあと声を出したセリアは馬鹿馬鹿しそうな顔をして言った。

「じいのお、馬鹿！」

「リラちゃん、こちらのお花、頂けるかしら」

「はい。持ちやすいように包みますのでお待ちください」

老婆が手に持っていた鉢植えを受け取り、二階への階段近くにある小さな机の上に置く。

机の引き出しから大きな布を取り出し、机の上へと敷いたのち鉢植えを置いて包む。

丁度上部で持てるよう布のふたつ端を結び、老婆へと渡す。

「ありがとうリラちゃん。いつもありがとうねえ」
「いえいえ、おばあちゃんこちらこそ」

老婆は礼を言つて鉢植えの代金を渡したのち、硝子戸を開いて、閉じて通りの流れへと混じつて行つた

あの子が幸せでありますように、少女はもらわれていった花のことを思い祈る。

いままで母とともに育てて来た花々がこの家を出て行くとき、欠かすことなく祈つて来た。

胸前で握つていた手をほどき、通りから台所の方へと振り向く。そこでは三人の人物がそれぞれ動いている。

「エオリアー火加減もうちよつと強くしてー」

「むう、まだ足りないか」

「うわこの野菜どうなってんだ、包丁の刃がうまく入らないや」

リラが訪れる客への応対をしている間に三人は騒がしく昼食の準備をしていた。

(こつやつて大勢で賑やかに過ごすのっていつぐらいだろう・・・)

包帯を巻いた少女はなんとはなしに、包丁を手に持ち悪戦苦闘している青年の背中を見た。

一ヶ月前よりも髪の毛が伸び、たまに見える横顔や袖をまくった腕には傷痕が見える。

日焼けしているだけでなく、気のせいかな身長が伸びているようにも思えた。

(なんだか、たくましくなりましたねアルトさん)

そう思つて自分のことのようにリラは嬉しく思う。それにしても少女は考える、どうしてアルトとエオリアは二階の倉庫で寝ていたのかと。

エオリアの話では酒場で飲まされてからの記憶がないと言っていた。酔つてここへ来たにしても鍵がないから入れるわけがない。

それどころかアルトは花屋がどこにあるかを知らない。

じゃあ誰かが？ と考えついた先で少女は気づく。

朝から見えていない人物がいることを。

「そつか、お母さんが連れて来たんだ……」

答えに気づいてため息が出た。

「あ、こ、こらおまえ！ そんなところに乗るなつて！」

台所からアルトの叫びと猫の鳴き声が出た。

丁度朝食ができたころ金髪の女性が寝ぼけ眼で一階におりてきた。

台所の長机には緑や赤色の刻まれた野菜に、炒められた魚や湯気のたつスープが置かれ、

同じく机の上に置かれている布の敷かれたカゴにはパンがいくつか入っている。

猫はすでに腹を満たしたのか姿がない。

「おや、リラだけじゃなくあんたたちも起きていたのかい」

「おはよう。お母さん」

「おはよーエラおばさん」

「おはようエラおばさん」

「おはようございます。エラールさん」

おはようと娘たちに返した母は、長机へと近づいて娘の横にある椅子へと座る。

「それじゃあ、精霊の恵みに感謝して、いただくかねえ」

そう言っただけで食事が始まった。

途中、野菜をつまみながらエオリアは、スプーンでスープを飲んでいるアルトに言う。

「ところでアルト、あの猫にはずいぶん懐かっていたようだな」

「ん？ ああ、眼を覚ましたとき部屋……倉庫か。そこに入って来たんだけど。」

頭を撫でてやったら妙に懐いてきて」

「へえ。あの子、あんたを気に入ったんだろうねえ」

「そうなんですか？」

丸いパンを一口かじったエラールへと顔を向けるアルト。

「あの猫、名前もない子なんだけどあたしには近寄らなくてねえ。」

「どういっわけかりラには近づいて、いつもご飯をねだるんだよ」

「エラおばさん、だめだよーこわがらせちゃー」

「馬鹿言いなよ、あたしがそんなことするかい」

「ふふ。お母さんがご飯あげようとしても近づかないもんね、あの子」

スープをスプーンですくって飲んでいたらラが微笑んで言う。

「エラールさんには近づかないのか……そういや、隣でエオリアが寝ていたのに、

そっちはまるで近寄らなかったなあ」

「きつと馬鹿がうつると思うって近寄らなかったんだよー」

「おまえはいちいちうるさいぞセリア！」

まあまあとエオリアを宥めるアルトは朝から思っていた疑問を口にする。

「それよりもエラールさん」

「なんだい？」

「昨夜……酔ってからの記憶がないんですが、ここへ連れて来たのって」

「ああ、あたしさ」

「やっぱり……」ご迷惑おかけしてすいません」

「エラおばさん、すまない」

「いいっていいって二人とも。あたしが好きでやったことなんだからさ」

頭を下げた二人に対して、それよりもさ、と言葉を加え、

「アル坊、あんた演奏会ではちゃんと弾けるのかい。」

フランから聞いた話じゃ最悪の腕だって言われてたけどさ」

「……はい」

青年は昨日のことを思い出して俯く。

そんな様子の青年を心配そうに包帯の少女は見ている。

「だーいじょうぶだよエラおばさん」

「またおまえはそうやって人の会話に割り込む」

「うつさい馬鹿。アルトはちゃんと演奏できるようになるから大丈夫だよー」

「大丈夫って……アル坊は素人なんだろう？」

「そうだけど、リユートは素人でもそれなりに弾ける楽器だからねー簡単な曲を練習すれば演奏会なんてらくしようだよー」

「口で言うのは簡単だけどねえ」

「いや……ちゃんと演奏してみせます」

見ればいつのまにか顔を上げた青年が答えた。

口元を引き締めた顔は、一ヶ月前よりも気骨のある雰囲気を漂わせている。

包帯の少女はほっとしたように微笑んで青年を見つめていた。

太陽が傾いてきた昼下がり、街の大通りを歩く四人。

露天が並んでいる通りには足を止めて商品を見る人々などで活気が溢れている。

単純な骨組みで組まれた屋台には人族だけでなく龍翼人や岩石人の姿も見かける。

「この通り賑やかだなあ。祭りの雰囲気みたいだ」

「実際この通りにあつた屋台も祭りに店を出していたからな」

前方を歩いていた片方の青年は通りを見渡しながら言う。

隣を歩いている男は同じように通りを眺めながら答えた。

二人の背後には橙髪の少女と灰色の布をかぶった少女がいる。

「なんだかこうやって一緒に出かけるのって久しぶりだよー」

「そうですねセリアさん。お祭りとき以来です」

「うんうん」

楽しそうに頷く橙髪の少女にエオリアは振り返って口を開く。

「ところでセリア」

「なーにーかーなー」

「アルトが弾く楽曲になにか思い当たりでもあるのか」

「んーんーぜーんぜーん」

「ええええええ！ どういうことだよそれ!？」

驚き顔で振り返る青年。

「素人でも簡単に弾ける曲があるって言ってたじゃないか!？」

「ん、あれね。いきおいで言っちゃった」

「言っちゃた……じゃないよ」

「ア、アルトさんそんなに気を落とさないで」

「ああ、うん。ありがとリラ」

頭をかいて、あーとぼやいた青年の横で、

「安心しろアルト。これから向かう楽器屋でなら簡単な楽譜があるかもしれない」

「うう、そうだといいんだけどな」

「あそこの主人とは自分も付き合いが長いからな。そこで駄目でも知り合いに聞けるかもしれない」

「付き合いが長いってのは？」

青年の疑問に対して男は腰裏に取り付けてある小さな皮袋から、細長い布包みを取り出す。

「それは……」

「祭りでの演奏会で用いていた横笛だ。アルトが喚ばれたときに吹いてもいたが、

向かっている楽器屋でしつらえてもらったもので、調律もしてもらっている」

「これから行く楽器屋はねーボク達が昔からお世話になってるんだー」

「この街でも有名な楽器屋さんで、多くの人が使っているそうですよ」

二人の少女の説明にふんふんと頷いて返し、青年は背負ったリュートを指差す。

「もしかしてこのリュートもそののだったりするのかな」

「トロッポ会長が所持していた楽器だからな、おそらくそうだろう」「そっか……俺でも弾ける曲があればいいなあ」

アルトは天を仰いだ姿勢で、路上開店している散髪屋の行列横を通りすぎる。

「あの、アルトさんは元の世界では楽器などに触っていなかったのですか？」

「んー触ってなかったわけじゃないけれども、縦笛や鍵盤ハーモニカ……て分からないかな。」

「こっ、小型の鍵盤でいいのかな」

リラに楽器の姿を伝えようと見ぶり手振りをする青年。

「その鍵盤からはチューブ、じゃないんだ、中身が空いてる紐がのびてる」

「変わった形をしていますね」

「そうなんだ。その紐に息を吹き込みながら、鍵盤を押すと音が出る仕組みで、

それで演奏とかはしていたんだけど……リユートのような弦楽器は触ったことなくて」

そうなんですか、と包帯の少女は心配そうに答える。

「で、でもさ。演奏会ではなんとか弾いてみせるからさ、その、なんだ」

リラの方へと振り向いて後ろ向きで歩くアルトは、先ほどよりも大仰な手振りをしながら、

「リ、リラにも演奏会には、来て欲しいと思って、るんだ」

「……アルトさん。はい、私、楽しみにしてます」

たどたどしい青年の言葉に驚きから笑みへと表情を変化させる包帯の少女。

二人の様子に若草色の男と橙髪の少女も笑みを持って見守っていた。

時間は過ぎて二日後の夜。

丸い机を壁へと立てかけ、木の椅子だけが置かれている酒場には大勢の人々が集っていた。

直角のカウンター横には演奏する人物のために空間が空けられており、椅子がいくつか置かれ、

空間から数列後ろに置かれている椅子には、金髪の女性と包帯を巻いた少女。

大勢の人がいるためか軽く俯き、胸前で手を合わせている少女。騒がしさに包まれている酒場内では椅子に座れなかった人々が、壁などにもたれかかって立っている。

カウンター前にいる口髭を携えた中年の男性は、店内を見渡して、

「ふむ、人も多くなったようですし、そろそろですかな」

とつぶやき、手を二、三度叩いて人々の視線を自身へと集める。

「さて、今宵の演奏会へ皆様ようこそ！ これより演奏会を開始いたしますぞ！」

その声に拍手と歓声が起こり、店内は音に埋め尽くされる。

口髭の男は立ち上る音を両手の手の平を見せて抑えると、

「土地はパストラ、場所は酒場ガイオ、奏でるは奏者のご一行でございます！」

さらなる拍手と歓声が響き渡る。

今度は抑えることなく口髭の男は大声で言い放った。

「奏者、アルヒト・ヤマハのリユート演奏をお聞きあれ！」

空間横にある酒場の出入口から黒髪の青年がリユートを持って現れた。

黒髪の青年は胸から止まない鼓動の音と、心を占める緊張感に歯を食いしばって耐えていた。

調律を済ましたリユートがまともな音色を出すようになったのと、
運良く見つけることができた簡単な楽曲の楽譜を二日間練習してい
たことで、

フランセからは「聞くにはマシになった」と言われた。
それでも人前に出ることに慣れていない。

(逃げたい逃げたい逃げたい、でも駄目だ駄目だ。きっと、リラが
来てるはず、いるはず!)

名を呼ばれてカウンター横の空間へと進み出て、人々の前へと向き
直れば包帯の少女が視界に入る。

(良かった来てくれてた……ってほっとしてる場合じゃないんだ!)

目の前のことよりも、必死で練習して覚え込んだ楽譜を椅子の前に
ある楽譜台へと置く。

言葉での挨拶代わりに、ひとつ頭を人々に向かって下げる。

その姿勢に拍手が返された。

数秒を持って下げた頭を持ち上げ、口元を引き締める。

(間違ってもいいから止まらずに演奏すること……)

フランセから教わったことを頭のなかで繰り返す。

椅子に座り、右手に持っていたリユートを膝上に抱える。

口を大きく開いて息を吸い込み、そして吐き出す。

弦に手を掛けると、店内は静寂を得る。

音色が、奏でられる。

自信がないのか、弱々しい音から演奏は始まった。
楽譜を見ては、手元を交互に見る黒髪の青年を見て、包帯を巻いた少女は祈る。

(アルトさん……頑張って、頑張ってください……！)

周囲にいる人々は軽くざわつきはじめたが、

「静かにしやがれてめえらあ！」

カウンター内にいた坊主頭の一喝に黙る、が驚き顔の青年も手が止まる。

手を止めた青年を坊主頭が睨むと演奏は再び始まった。

音色は相変わらず弱かったが、次第にこわばっていた青年の口元が緩んでくると、

音のつつかえはなくなりはじめ、よどみなく音色が流れ出した。

胸前で握っていた手をゆるめた少女は、包帯で覆われた視線でまっすぐ前を向く。

次第に演奏されている曲そのものが落ち着いたものであることを人々は理解しはじめる。

ゆっくりと、ひとつひとつの音色を確かに鳴らし、曲は進んでいく。丁寧でありながらも柔らかな音色は、静かな店内へと響き渡っていた。

リユートを演奏する青年は、すでに楽譜を見ていない。

ただ、ひたすらに身体で腕で指先で覚えたリズムを曲に刻む。

「優しい音……」

包帯を巻いた少女は耳へと伝わってくる音色につぶやく。青年の指先がひとつ弦を弾くたびに、ひとつ音がリユートより流れ出る。

隣に座っている金髪の女性は瞼を閉じて聞き入っていた。

店内にいる人々も女性と同じように、頷いたり、眼を細めたりして聞いている。

音は高くもなく、低くもなく、ただ淡々と繋がって曲をつむいでいく。

(とても優しく、気持ちがいやすらいでくる……不思議な感じ)

握っていた手はほどかれ、胸元へと少女は手をあてている。

しばらくの後、人々や少女が見守るなか、青年は弾く手を弱めていき演奏を、終える。

まばらに拍手が沸き上がり始め、次第に大きな拍手へとなる。

その拍手に応えるよう手を挙げる青年は、照れた表情を浮かべている。

照れた顔のまま頭を下げて一礼すると、今度は若草色髪の男が空間へと入って来た。

「奏者様、演奏ありがとうございました！ さあ、続いては奏者様と、

騎士エオリア・パールによる合奏でございますー！」

口髭が言い放った言葉にどよめきを得る人々。

少女の母親も「ほう、合奏するのかい」と感心した顔をしている。一方で驚き顔になった少女。

青年と視線を合わせて頷いた男は、手に持っていた銀の横笛を構えた。

立ったまま構えた男に合わせるように、椅子から立ち上がりリュートを構える青年。

ふたたび静まり返った店内に、横笛の音が奏でられ始めた。

音はゆるやかに流れ出し、低く、ときに高く音を響かせる。

そして、一度笛の音がとまり、一拍の間を置いて激しくかき鳴らされるリュートの音色。

先ほどの落ち着いた遅い音ではなく、指先を上下に激しく動かして複数の音が生まれる。

その様子に人々が驚きの声をあげ、歓声も飛び始める。

激しい音を奏で始めた青年に合わせるがごとく、横笛の男は手拍子をとりはじめ、

店内の人々も同じように手拍子をしだした瞬間、高音の音色を響かせる。

周りの人々につられて少女も最初は弱く、そして強く手拍子をとっていき、身体を揺らす。

早い拍子と生み出される激しい音に、店内は熱い空気を醸し出す。

リュートを弾く青年は楽しそうな笑顔で身体を揺らしながら手を動かす、

横笛を吹く男は青年や人々の方へと身体を向かせたりして音を紡い

でいく。

(すごい、あんな笑顔で、楽しく演奏できるなんて。いいな、もっと、もっと聞いていたい)

いつのまにか笑顔となって手を叩いてる少女は頬が火照るのを感じた。

途中でリユートだけの演奏に入っても青年の手は止まらず音が生まれていく。

「すげえすげえぞ！ 奏者のあんちゃん！」

「こないだの下手っぷりはどこいったんだい！」

「あひゃひゃ、もう楽しくてしょうがねえよ！」

人々からは思い思いの歓声が前方の空間へと投げられた。

熱気に包まれていく店内を流れる音にもう一度笛の音が混じり、さらなる興奮が起きた。

興奮を冷まさないよう横笛は高い音を鳴らしていくかと思えば、唐突に低音を流し出し音が止まる。

手拍子を止めて人々がどうしたのかと見ていると、今度はゆっくりとした拍子で音が漏れ出す。

青年の手は激しさから落ち着いた動きへと戻り、生み出す音色が店内の熱気を和らげていった。

朝の穏やかさを表したかのような二つの音色に人々はうっとり聞き惚れる。

そこへ歌声が混じり出す。

おおおつと店内から声が聞こえてみれば、
橙髪の少女が両手を広げ、ステップをとりながら人々の前へと躍り
出た。

人々から見て左手に若草色髪の男、右手に黒髪の青年を置いた絵と
なって、橙髪の少女は歌い出す。

「お次は、巫女セリア・オペラによる歌唱と、奏者様と騎士様の演
奏でございますー！」

酒場の熱気と興奮と歓声は、皆の笑顔とともに最高潮に達した。

演奏会のあつた日から数日後、パストラの街の出入口を示す、かが
り火近くには三頭の馬。

それぞれの馬には旅の食料などが入れられた革袋が吊るされており、
馬の側には旅装束を着た人物がいる。

日差しを避けるように手を眼の上へとかざしている黒髪の青年は、
馬に吊るされている皮袋がしっかり吊るしてあるかどうかを確認し
ている。

「エオリア、こっちの馬に吊ってある革袋も大丈夫だ」

「こっちもだアルト」

互いに確認を取り合い、一息つく青年と男。

横手を見れば、金髪の女性と包帯を巻いた少女、旅装束の橙髪少女
が談笑している。

談笑している様子を見てみると、声が掛けられる。

「おい坊主！」

「え、あ。フランセさん！」

青年が声の主へと振り返ると、坊主頭が硝子瓶を突き出していた。

「饞別だ、くれてやるよ！」

「こ、これ俺が飲まれた酒じゃあ……」

「ああっ！？ おれの酒が飲めねえってのか！？」

「そうじゃないですけど……でもいいんですか？」

「あんな下手な演奏聞かされてたんじゃあなあ」

「下手つて……素直にほめてくださいよ」

ふざけんな、と言って大口開けて笑うフランセに困り顔をするアルト。

瓶を受け取ると手を差し出される。

「フランセさん……」

「元気でやれよ、坊主！」

「……ええ！」

差し出された手を力強く握り返す青年。

「おや、フランも見送りに来てたのかい」

「フランセおじさん、こんにちは」

「こんちゃーおっじさん」

坊主頭に気づいた三人がこちらへと寄ってくる。

「おじさんって呼ぶ……まあ、リラちゃんはいいがよ」

「えーなにそれボクだけ扱いおーかーしい」

「うるせえ」

しっし、と手をセリアへ振るフランセ。
足を止めた三人のうち、金髪の女性が言う。

「アル坊、旅先でもしっっかりやりな」

「はい、わかってます」

「だいじょうぶだよーエラおばさーんボクらがいるよー」

「その通りだ、安心してもらってかまわない」

「はは。ま、あんたらなら大丈夫だろうねえ」

手の平を大きく広げて振る橙髪の少女と、腕組みして頷く若草色髪の男。

二人を見て、それから大きく頷いて金髪女性を見る黒髪の青年。

その青年へと、花を象った髪飾りを付けた少女が一步近づく。

「アルトさん……あの、これを」

「え、リラ……」

少女が両手で差し出した手の平には、手の平に収まる大きさの布包み。

「アルトさんに、受け取ってほしいんです」

布包みを受け取り左腕の手の平にのせて、右手で包みをほどく。

「これは……花の腕輪？」

四色の花を象った金属らしきものが連なって作られた腕飾り。

「はい。旅人のお守りとして多くの方が身につけられているそうです」

す

「そっか、そうなんだ。うん、ありがとうリラ」

嬉しそうに礼を言った青年は、右腕に腕飾りを通す。

「大切にするよ、なによりも一番の宝物になったし」

「良かった……気に入ってもらえて嬉しいです」

ほっと右手を胸にあてて息を吐き出す少女。

「でも、また……当分会えなくなりますね……」

「あ……うん」

馬のいななきが聞こえる。

青年と少女から離れて馬のちかくにいた若草色髪の男と橙髪の少女は、

金髪の女性と坊主頭に世話となった礼をしていた。

「もう、出発ですね……」

「うん……」

包帯を巻いた少女は見えない視線を地面へと傾ける。

青年は何を言うべきか迷いを顔に出している。

「リ、リラ！ あのさー！」

「！ は、はい！」

突然の大声に、顔を上げて同じく大声で応える少女。

「手紙！ 旅先からさ、手紙出すよ、俺！」

「て、手紙……ですか？」

「うん、手紙を、そつだリラに送るよ」

「でも……私、からは送ることは……」

場所が分からないからできない、と少女が言おうとして、

「いいんだ、俺がさ、送りたいんだ。リラに。それに知って欲しいんだ。」

俺が見て聞いて感じた、この世界つてのを」

両手を左右に大きく広げた青年が言葉を先に放った。

しばし呆然とした様子だった少女は、

「……アルトさん。はいっ！ 待ってますから！」

「ああ、絶対送るから！」

馬の方から青年達を呼ぶ声。

そちらに振り向き歩き出す二人。

既に馬へと乗っていたエオリアとセリアに続いて、アルトも馬へと乗る。

「フランセさん、エラールさんお世話になりました。」

それじゃありラ！ 行ってくるよ！」

右腕の花飾りが見えるように空へと腕をかざす黒髪の青年へと、
藍色の長髪に花の髪飾りを輝かせた包帯を巻いた少女が言葉を贈る。

「いつてらっしやいアルトさん！」

第九話 命をつなぐ死（前書き）

> i 9 3 8 5 | 1 3 9 9 <

第九話 命をつなぐ死

薄い雲が尾を引く晴れ空を、大柄の鳥が甲高い声を出しながら、高空を飛ぶ姿が見える。

大河沿いに歩いていく馬の蹄が定期的なリズムを刻んでいく。

そのリズムに乗るように三頭の一番前をいく馬からは、歌声が流れては後方へ過ぎていった。

三番目に行く馬からはリユートを弾く音、二番目からは笛の音が歌についていく。

馬の背に揺られてリユートを弾く黒髪の青年。

視線は左を流れる大河へとやりながら、右へと動かしていく。

そこでは地面から生える草などを食べている最中の牛や馬の群れがいた。

群れの近くには武装した人間が幾人かおり、周囲に警戒した動きをとっている。

(この世界でも放牧だっけ、そういうことしてるんだな)

リユートをかき鳴らす手を上下させながら視線は牛たちに合わせるアルト。

そのまま進んでいると、こちらの音に気づいて手を振ってくる人物が数人。

馬に乗っている三人はそれぞれ手を振り返して進んで行く。

大河の水面には赤茶色した先端がとがった形の小舟が何隻か浮かんでいる。

そのうちの二隻は互いの間にある水面へ向かって網を投げ飛ばす。

船から腰を乗り出して水面を眺めていた人物は、少々時間が経過し

た頃、

互いの船に乗っている人物へ合図を送り網を引き上げて行く。

(こっちでは魚をとってる最中か。そういやお腹空いてきた)

船に乗っている釣り人や漁師たちもこちらの音に気づき手を振る。

手を振り返した左手はそのまま青年の腹に当てられる。

もうすぐ昼時か、との思いを得たころ前を進んでいた笛の音が止む。

小高い丘にて敷かれた布の上では思い思いに昼食を摂る三人。

橙髪の少女は黄色く細長い果物の皮をめくって中身にかぶりつき、

若草色髪の男と黒髪の青年は焼かれたばかりの塩をふった魚にかぶりついている。

一通り食べ終えた青年が口を開く。

「運が良かったなあ。漁師さんたちに魚わけてもらえるなんて」

「んぐんぐ、ほおひいとだねー」

「……いまはめんどろだ」

言葉は少なくとも魚が美味しいのか男は勢いよく食べ続けており、二匹目に手が届いた。

はやいな、と言った青年の言葉も構わずに食べ続ける男。

「そんなに昨日食べた保存食が不味かったのか」

「たまたま、エオリアが食べたのが痛んでただけじゃない？」

「知らん。どうでもいい。いまは魚が美味しい」

「朝飯も食べてないんだから、そりゃ美味いって」

苦笑しつつ、三匹目を食べ始めたエオリアを見るアルト。
セリアは近くへ寄ってきた小鳥たちに果物を小分けにして配る。
二匹目を手に取った青年は、厚い雲が流れる空を眺める。
革張りの出納を取り、蓋を開けて中身を男は飲み出す。
空を二筋の細長い雲が、小さく輝く物体を先頭に走っていく。

(……………？ 飛行機？ なわけじゃないよな、なんだあれ)

アルトの視線と空を走る音に気づいた男と少女は同じ方向を見る。

「あれは……………龍翼人だな」

「龍翼人ってあんな高く早く飛べるんだ」

「そだよーむかし背中に乗せてもらったけど楽しかったなー」

「……………自分は腕に掴まれて怖い思いしかなかったぞ」

「はは。エオリアはそんなのばかりだな」

「セリアに振り回されてどれだけのことがあっただろうな……………」

遠い眼をしだす男に、苦笑だけを送った青年は、もういちど空を見る。

「でも、あんなに早く空を飛べたら、気持ちいいだろうな」

いつかは空を飛んでみたい、そのことを一つの夢としてアルトは胸にしまった。

太陽は山の合間に半身を隠し、夕日が空を染め出す頃。

「ふむ、湖が見えてきたな」

若草色髪の男から聞こえた声に前を見れば、アルトの視界に眼の端から端まで埋まる湖。

そのまま蹄鉄の音は湖まで音を止めることなく進む。湖が目の前となったところで三人は馬から降りる。

「今日はここらで野営だねー」

「ああ、セリアはここで馬を見ていてくれ。アルト、薪をさがしに行くぞ」

頷いた青年は樹々がまばらにたつ湖そばへ男とともに歩み進んだ。

薪となった木が小さく爆ぜる音を出す焚火を前に座る青年。

空には満天の星空が詰めており、青年は湯気を出す杯を手に空を眺めている。

青年が座る近くには、それぞれ毛布を被って寝ている少女と男。

耳に聞こえるのは遠くに流れる大河の音と、樹々からときおり聞こえる鳥の低い鳴き声。

「綺麗な星空……こんなに見えるんだな星って」

思い起こされるのは元の世界での星空。

（あっちだと星なんてあんまり見えなかったもんな）

胸に覚えた感動をしまいこみながら、かつての夜空を思う。

そうだ、と何かに気づいた風に青年は口にして、馬に吊るしてある革袋をあさる。

取り出して手に持つのは黒色のインク壺と灰色の羽根ペン、そして

日記帳。

焚火の前へともどり、地面へとインク壺を置いて書き始める。

「あつちとは星の位置が違うだろうけど……」

そう言いながら青年は日記帳の頁へところどころ点を描き、線でつないでいく。

自身の記憶にある星座をたぐりよせつつ日記帳へと書いていく。ときに星空を見上げ、ときに日記帳へ頭を下げ、手を進める。

手元の頁には幾つもの動物や人の姿が点と線で描かれ、下には名前が書かれる。

「思い出せるのはこれぐらいかな」

手が止まったところでつぶやく青年。

点を星と見立てて描かれた星座はいくつもの数の数となっていた。

「あとはここ数日のことも書いておくか」

手負いの凶獣に遭遇して全力で逃げ出したこと。

結局、エオリアの強い要望で怖々と退治しに向かったこと。

神殿に務める騎士には安息を守る義務があると知ったこと。

セリアの持っていた保存食を食べてエオリアが即刻吐き出したこと。そのことを警戒して翌日の朝食を抜いてエオリアが我慢していたこと。

空を飛び交う龍翼人は街や村の郵便や配達を担っていること。

練習したおかげでリユートの新しい楽曲が何曲か覚えられたこと。

思わず歌わされそうになって無理矢理ことわったこと。

セリアに煽られてエオリアと馬で勝負したこと。

何行も書き進めていく手。

ふいに止まる。

青年は止めた手をじっと見つめる。

「精霊……やっぱり感じとれないな」

日記帳を閉じ、羽根ペンからインクを拭き取って壺とともに革袋へと戻す。

視線を焚火へとやり、膝を立てて腕組みをして頭を腕にうずめる。

（精霊術の使えない俺に、リラの世界は、見れるのかな）

勉強と特訓をしていた一ヶ月、アルトには精霊術が使えないことが分かった。

焚火のなかで燃えてる薪が、音をたてて爆ぜる。

座っている地面の横に置いてある薪を手に取り、焚火へと放り込む。

精霊術が使えないのは、術を使う前提である、精霊が感じ取れないからだっただ。

頭のなかを掠めるのはいつかの勉強風景。

話を聞いていなかった罰としてセリアの術を受けたあと、

セリアがやっていたように精霊を感じ取るうとしたがまるでできなかった。

「俺が……やっぱりこの世界の人間、じゃないからかな」

沈む口調で言葉が漏れる。

言い伝えでは過去の奏者はだれもが精霊術を使えなかったと聞いた。それでも使ってみたい、と青年は思いひとりで鍛錬に励んでいた。夜、少女と男が寝静まったのを頃合いに、ひとりきりで術の鍛錬をしていたが、

一ヶ月以上が過ぎたいまでも変化はなく、精霊は感じ取れない。

「……使えなくても不便は、ない。けど」

焚火の輝きを受ける顔は憂いを映す。

視線が右手の地面へと動く。

そこには神殿出発前に用意された、鞘におさめられたアルトの剣。既に何日も会っていない大神官ブツファの柔和な顔を思い浮かべる。彼から渡された剣を見て、記憶を掘り起こしていく。

「アルト君、旅への饞別として僕からこちらをどうぞ。」

「ありがとうございますブツファさん。」

「そうそう、その剣。風の精霊がともにある剣ですので、仲良くしてあげてくださいね。」

「え……仲良くって言われても、どうしたらいいんですか？」

「む、そういえばアルト君は精霊術が……まあ、大切にしてもらえれば良いのです。」

ブツファの言葉を思う。

「仲良くしてあげて……精霊が感じ取れないんじゃないやあ無理だよな……」

はあ、と深いため息を吐き出して、さらに記憶を掘り起こす。

手負いの凶獣と戦ったとき、エオリアは炎に包まれた大剣をふりか

ざし、
セリアは水を矢として打ち出す弓を持って挑んでいた。
アルトに出来たことと言えば、二人の後ろで臆病腰で剣を持って震えていること。

交差した手の平が強く、強く腕を掴む。

胸を、心の内を、占めるのは恐怖と情けなさ。

大きな身体には傷を負い、足などから血を流し、それでも生きようと必死だった凶獣。

相対したとき、命の危険、そのことをはっきりと感じた。

剣術の特訓はしていたものの、心までもが鍛えられたわけではなかった。

「なんにも……できない、ままじゃ、いやだ……」

組んだ腕の中へ顔をうずめて青年は声をしぼりだす。

夜は静かに更けていき、星空はなんにも言わず地面へと輝きをおろす。

船が数十隻と並ぶ湖の淵。

それぞれの船縁には木で組まれた足場があり、船の上に立つ人々と足場に立つ人々の間にて、

盛んに商売などが行われている様子が見受けられた。

湖に作られた港の近くにある街では、よく日に焼けた肌をあらわにした人々が多く行き交う。

人々のなかを馬を引いて歩く青年と男。

「パストラの人々よりもごつい人が多いなあ」

「ここらでは漁師などをしている者が多いからな」

「そんなことよーりー早く宿へいこーよー」

少女が馬上から疲れた声を出している。

二頭の馬の手綱を引く男が振り返る。

「まだ昼過ぎだというのに、だらしないぞセリア」

「だーって、アルトの特訓につきあったから疲れたあー」

「あーうん、ごめん」

「いいよいいよ、ちよつと心配だったしー」

「そうだな。凶獣と戦ってだからか、少し落ち込んでいたからな」

「え、うそ。そんな顔に出てた？」

焦った顔つきで二人を見た青年に対して、頷きを返す男と少女。

うわーっと言いながら前を向いた青年は顔に手をあてる。

「恥ずかしい……」

「気にしないのーいきなりあんなのと向かい合ったら腰抜かすのがふつうだってー」

「自分らは小さい頃から凶獣退治などしていたから平気だが、

アルトのいた世界ではそんな危険なことはしないのが当たり前みたいだな」

「うん……俺の世界だと、ほんと危険らしい危険なんて滅多になかったよ。」

人が人を襲うこともほとんど無ければ、動物が人を襲うなんてそれこそ……」

だんだんと声のトーンを落としていく青年。

石畳の上を蹄が音をたてていく。

「想像、つかなかったわけじゃないんだよ。」

神殿にいたとき、時々騎士団が凶獣退治に出発するのを見たりしてたし、

ほかにも神官の人たちにどんな凶獣がいたりしたか聞いていた」
たださ、と言葉を加える横、少女と男は黙って聞きながら馬を進める。

「それが、自分の目の前にやってくるなんて、思ってもいなかった」
青年は胸に思う、どっか他人事にしか思ってたんだよな、と。元の世界でもテレビから伝えられる紛争など気にもしていなかった。自分には関係のないこと、危険など自分にはありはしない。そう思い込んで、信じ込んで生きていた。

「けど、いまは違う。目の前に危険はあって、いつでも危ないんだって」

船の出発を知らせる叫び声が港から聞こえてくる。

青年の引いている馬は、アルトの顔をときどき舐めようとす。少し笑った困り顔で馬をなだめて舐めるのを止めた青年は、

「ここは俺の知ってる世界じゃない、異世界なんだって」

もう何度思ったかわからない言葉を口にしたとき、木造の宿屋へとたどり着いた。

「うーん、いいお湯だったあー」

頭上から湯気をただよわせ厚手の布を肩にはおる橙髪の少女。
木造の通路を歩いて泊まっている部屋へと向かう。
目的の部屋へとつながる扉を開ければ、そこは灯りが点いた無人の
部屋。

「あれ？ 二人ともいない？」

後ろ手に扉を閉めて左右を見渡す少女。

四人部屋の広さを持った室内に置かれたベッドへと腰をおろして、
髪を布で拭う。

髪を拭いながら、それぞれの荷物が置かれた空きのベッドへと眼を
向ける。

「……アルトとエオリアの剣、なくなってる」

人々の喧噪が聞こえる木枠の窓からのぞいて見えるのは、濃くなっ
た夕闇。

夕闇に混じるは風を切る音と地面を蹴る音。

真つ正面から振り下ろされる大剣。

身体を左へと動かし足先で強く地面を蹴る。

青年が飛び避けたとき、地面へ剣先が大きくめりこむ。

めりこんだ剣を支点に青年へと向かう蹴り。

着地するまえの不安定な姿勢で蹴りを受けたため、後ろへと倒れ込

む青年。

男は蹴り足を地面に置いてから、勢いよく大剣を地面から引き抜く。引き抜いた勢いそのまま叩き付けるように大剣は青年へと振り込まれる。

右へと身体を転がして青年は回避。

立ち上がり、剣の峰で男の手元を狙って振る。

地面へと振り込まれた大剣が下手から上へ跳ね上げられる。

大剣が下から、剣が上からぶつかり合う。

重量差から剣は上へと跳ね飛んで青年の手から離れ、地面へと落ちる。

男は大剣を横へと放り投げて、無手で構える。

衝撃に痛む手をおさえていた青年は、構えた姿を見て同じく構えをとる。

にらみ合いが数瞬。

左足のふくらはぎ付近を狙って男の右蹴りが放たれる。

背後へと飛んで避ける青年。

着地して即座に前方へと左足から飛び込み、右腕をふりかぶる。

足を戻した男は両手を胸程に開いて青年を見据える。

空中の姿勢から男の顔面へと右腕が飛ぶ。

顔面へと迫る拳を右足を軸にして、左後ろへと回ってよける。

よけると同時に左の手の平で相手の右腕を掴み、右の手の平は相手の左肩を掴む。

青年の飛びかかった勢いを殺さず、左後方へ回転しつつ男は投げ落とす。

右肩から地面へと投げ落とされる青年。

後ろの両足を背中の方へと投げ出して青年は身体を一回転させる。

両足から地面へと着地して、男の手を身体捻って振り切る。

「……ここまでにしようアルト」

「はっはっ、ああ、わかった」

息づかい荒く答える青年に近寄る男。

通りとは反対側である、宿屋の芝の生えた裏庭。

ふたりのそばには馬が入られた納屋があり、三頭の馬が桶に入れられた草を食べている。

地面へと倒れ込むアルトの横に、二つの剣を拾って座り込むエオリア。

「つつかれたあゝそれと、こわかったあゝ」

「そんなに怖かったか？」

「あんな、恐い顔と、大剣が勢いよく、飛んでくるんだぞ！」

疲れと息切れでうまく言葉にならない青年。

「前は、模造剣だったから、そんな怖くもなかったけど。

それは当たっても平気だから、だったから」

「模造剣でも十分特訓にはなるさ」

「それでもさ、危険を感じられないんだ。それじゃ、駄目なんだ」
「……」

わずかに震える身体を抱きかかえる青年を、複雑な表情で男は見ていた。

「アルトは……危険に慣れたいのか？」

「慣れたい、のとは違う。いや慣れたいわけじゃない」

荒くなっていた息を整えるよう顔を上げてアルトは息を吸い込む。

「向き合いたいんだ、危険……恐れや不安なんかと」

胸に思い起こされるのは、元の世界へ帰れるのかどうかの不安。

旅を始めて好奇心に刺激される日々だとは言え、夜になれば、ひとりになれば、心を占める。

その不安とは付き合っていくしかないが、向き合う意志も必要だと
ブツファに教えられた。

アルトは、思っていた。

(自分は弱い、心が意志が)

自分よりも身体が弱くても生きている人々はいる。

旅の道中すれちがった人々のなかには手や足が欠けた人がいた。だが、彼らは明るい顔をしていまを生きようと一生懸命だった。誰も彼もが弱くなど、なかった。

「そうか……よし！ ならば今夜は徹夜でやるか！」

「おいおいおいおい！ そんな意気込まなくてもー」

「アルト」

きつく強く名を呼ばれた。

びくつと震えて青年は男を見る。

「命を賭けるなどという安っぽいことは言わん、その代わり……」

「そ、その代わり？」

「自分に十連敗したらリラへ送る手紙の文面、こっちで考えさせる
！」

「なに言ってるんだおまえはー！」

「馬鹿な！ 自分の気遣いがわからんのかアルト！」

「思いつきり悪い顔して言いやがって！ 誰が負けるか！」

「ふははは！ それでこそ真剣勝負の甲斐がある！」

青年は白く羽飾りの模様が刻まれた剣を手に取り、

男は赤く猛々しい炎の刻印がなされた大剣を手に取り、向き合った。

「もーどこ行っただかと思っただら二人で馬鹿やっちゃってー」

木枠の窓から裏庭を見下ろしている橙髪の少女は、再び剣で打ち合う二人を見ている。

椅子にすわりながら木枠に左肘をのせ、右手には赤い液体の入った杯。

すぐそばにある四角い机の上には、底に黒い石が入った赤い液体の硝子瓶。

「んーそれにしてもこれおいしいー」

杯を傾けて流し飲むと、瞼と口を閉じて味を楽しむ。

地面から剣同士がぶつかる甲高い音、ときに肉を打つ鈍い音、ときに叫び声や怒号が飛び交っていく。

橙髪の少女は二人のやりとりを微笑で見つめる。

(あの馬鹿、すごい楽しそう)

視線が向かう先、若草色髪の男は鋭い目つきでありながら口角を上げた笑顔。

神殿で青年の訓練に当たっていたときの彼は見ていて退屈そうだった。

事実退屈だったのだろうな、とセリアは思う。

(だからこないだの凶獣退治も、自分がやりたくて言い出したんだろうねー)

昔から血気盛んで勝負事になると馬鹿みたいに楽しい表情で挑みはじめる。

そんな彼を見ているのが楽しくて無理矢理振り回したものだ。でも、と橙髪の少女は一色、表情を落とす。

(リラのことやボクとの約束とかもあって……)

エオリアは一步引いた姿勢をとることが多くなった。周りの人々は落ち着いたと彼のことを言う。それは違う、少女は胸に思う。

(誰かを巻き込んだりしないため、なんだよね)

一緒に過ごして、勉強して、訓練していたからこそ解る。どこか抑えているのが見え隠れしていた。いまの彼はどうなのだろうかと思う。

「……あんな笑顔でいるなら心配、いらないよねー」

アルトとの関わり合いで彼にも小さくはあるが変化があった。眼に見えて解ったことは、遠慮がなくなったこと。そして、一步引いていた姿勢から僅かではあるが前に進もうとしているのが解る。

(リラのこと、アルトに任せようと思ってるんだよねエオリアも)

三杯目を注ぎ込んで中身を口元へ傾ける。

喉元を上がってくる熱を口内に留めるように口を閉じて軽く唸る。

木柵の下からは金属が地面に落ちる音がふたつと猛り声。

何度か肉を打つ音が響いたあと、鈍い音がふたつ同時に聞こえて人が倒れる音。

数分後には再度立ち上がって剣を取り合い、斬り結びだす影ふたつ。

「いまのところ、引き分けばっかだねー」

酔いのまわってきた頭を軽くふらつかせて杯に口づけする少女。外からは室内の灯りに誘われて、羽虫が窓から入ってくる。少女が見上げる先は、黄金色の真円を主役に星々が瞬く夜の空。

時間は過ぎ行き、陽光が照りつける日中。

港近くには船や棧橋の先で座ったり立って湖を眺める人々の姿。視線の向かう先には数隻の船が湖面に浮かび、そのうちの一隻から音が奏でられていた。

音を出す船とは別の船に船頭ひとりと、三人の人物。

「すごい……船が揺れてるのに音の乱れがまるでないや」

「ここ、ルステイカではさ、みながみんな漁師やって船乗ってますんで」

黒髪の青年がつぶやいた言葉に、近くの船頭が答えた。

「え、じゃあいま楽器を弾いてる人たちもですか？」

「そのとおりでさ。うちの息子や娘たちも演奏会で歌ってますさ」

歯を剥き黒く日に焼けた笑顔の船頭がかぶる、

植物の蔓で織り込まれて作られた日除け帽子は色褪せており、漁師の長さを感じさせる。

聞こえてくる歌声と音色へと青年が眼を向ければそこには、船の上で露出の大きく白い服装で浅黒い肌を見せる体格のよい男性と太めの女性。

低く力強い声でありながら遠くまでよく通る歌。

隣の女性は、なめされて伸ばされた獣皮が丸い切り口に張られ、

先端がすばまった形状の木製の楽器をふたつ、首後ろから前面へ回した紐で身につけ叩き鳴らす。

叩く拍子は速く強く、心臓の鼓動を、打ち表すかのよう。

見れば歌と音を出す船の周囲では、大小様々な魚たちが飛び跳ねている。

船の上空では同じく大小様々な鳥たちが鳴きながら旋回している。

「豊漁を願う音楽でさ。人も魚も水も楽しんでのさ」

「人だけでなく……魚も水も楽しむ音楽……」

「わしらが生きていけるのは、腹を満たしてくれる魚やパンだけじゃなくさ、

精霊様たちの恵みがあってこそだからでさ」

船頭が語っていくとともに音の激しさは増し、

大きな声で歌う男性は顔と喉を震わしながら口を縦に開き伸ばす。

青年は眼を離すことなく男性らを見つめる。

「そんでわしらはさ、いつかは死んじまう。骨となって土や水、風や火に還るのさ。」

そしてまた、どっかの生き物となって生まれんだよ」

年老いた船頭は情熱的な音楽に乗せられたのか饒舌に語り出す。

船頭の向こうにいる橙髪の少女と若草色髪の男は手拍子を取っている。

「んで生まれた生き物を食って、またわしらは生きるのさ」

「命が……つながってるんですね」

「んだ。生きてるってのはそういうことぞ。」

恵みに感謝することで、わしらは毎日食っていけるんぞ」

老人の言葉に青年は深く頷き、言葉を噛み締める。

男性の歌と女性の演奏が終わり、港からは拍手と歓声。

船頭は舵をとり、三人を乗せた船を人々の前へと移動させる。

青年たちの歌と演奏が、湖面に波紋を生み出した。

太陽と月が数度天を横切ったころ、旅装束を着た影が森の入口に立つ。

森には人ひとりが通れるかどうかの小道が奥へと続いている。

森を構成している樹々は高く、入口に立つ人物の三倍以上はある。

樹々の頂点を見るように顔を見上げている黒髪の青年は、

「でかい……噂には聞いていたけど、こんなにでかいんだ」

高さのある樹々の葉からこぼれる日差しを手で遮り言う。

「初めてここへ来たときは、森そのものが生き物に見えたな」

「だねーもうなにがなんだかって感じだねー」

「ああ、どこを向いても樹だらけで案内役がいなければ危ないところだった」

「そうそう、そういえばあの子元気にしてるかなー」

隣にいたエオリアとセリアは互いに頷きあっている。

「あの子？　　というか二人は来たことがあったの？」

「そうだよーボクとエオリア、それぞれ修行としてねー」

「自分達以外にも何人か一緒にいて、各地を巡っていたのだ」

そうだったのかと言葉を口にして森の奥へと視線を移すアルト。
すると森の奥で動くひとつの影。

影は樹々の根っこをよじのぼりながら、こっちへと近づいてくる。

（なんだろあれ……森に住む動物かな？）

青年が疑問を得て眼をこらしていると、影の動きが止まる。

影は翠色に輝くふたつの眼を向けていた。

高くそびえる樹々からの木漏れ日が影に当たる。

そこには青年の腰ほどもない高さを持った小さな子供の姿。

肌は茶褐色、髪は濃く深い緑色をたたえている。

頭部と髪の間目には文様の入った緑色の布を巻いていた。

青年は神殿で知り得た知識と、目の前にいる小人を照らし合わせる。

（あの髪色と肌の色……！ そうか、木霊族か！）

胸には恐怖と好奇心がないまぜになった感情が渦巻き出す。

小人はアルト達三人の前まで、短い手足を動かしながら歩いてくると、頭を下げて一礼した。

「ようこそ、そうしやさま、たち。おまち、して、ました」

ただたどしい口調とともに迎える言葉が述べられた。

第十話 小人達の広場

黒髪の青年は高い樹々に囲まれた小道を歩いていた。
青年の目の前には小さな姿。

腰程の高さもない小人は地面をはう樹々の根っこや、
咲いている花を一生懸命な様子で避けては、歩いて行く。
ときおり避け損ねた根っこにつまづき、両手を上下に激しく振って
倒れないようにしていた。

（大丈夫……かなあ。見ていてはらはらするんだけど）

またもつまづきそうになった。

「あつ」

背後にいた男と少女は声を揃える。

小人は耐えた。

三人へと振り向く。

「だ、だいじょうぶ、です。へいき、です!」

口を横に開いて数度頷いてみせた小人は、再び前へと向いて歩き出
す。

思わず立ち止まっていた三人と三頭の馬も歩き出し始めた。

大丈夫に見えないんだけどなあ、と頭をかきながら青年は思う。

森の入口で木霊族の小人に案内され始めてから数十分、景色は変わ
る様子を見せない。

左右を見渡しながら歩く青年。

(それにしても……密集して樹が生えてるなあ)

密集というよりも密着してる？ そんな思いを抱く樹々の様子。樹々は複雑に絡み合い、他者の侵入を拒むがごとく隙間を埋めるように生えている。

しかし、青年らが行く小道には樹は生えていない。

まっすぐに伸びている小道だけは、樹が避けたように道がある。

(……樹が移動、なんてこと……ある、かもな)

青年は胸に得た疑問を打ち消すように、目の前を歩く小人を見つめる。

歩きとともに揺れる身体は茶褐色、がさがさと葉がすれる音を出す髪は深い緑色。

神殿の図書館にて読み知ったことを再度、青年は頭の中に思い浮かべる。

(背が小さい木霊族は一生住処の森を離れることなく生きていく)

そして、と思う。

(二、三十年で寿命を迎え、自らを樹へと変化させて森へ還り)

続けて、思う。

(樹となったあとは、幼生の木霊族をその身から生み出すと)

さらには、と思い、

(生まれた幼生の木霊族は、親樹の記憶を受け継いでいるという)

桃色の花を咲かす草を、避けて歩く青年。
不思議な一族だ、書物を読みながら何度も思ったこと。

(地の大精霊から祝福を受けた木霊族は、一族誕生からいままです
と精霊の土地である、

森と精地を守り続けて来た。森へ訪れる人々と関わり合いながら
……か)

青年は手綱を握る手を左へと寄せて、馬に花や草を踏ませないように
誘導する。

彼らが森から出ないのは色々理由があるんだろうな、と思ったと
き、
左へと持つていこうとした手綱が止まる。

「あれ？」

とつぶやいて青年は背後を歩いている馬を見る。
馬の隣には、馬の形をした茶褐色のなにかがいた。
アルトと馬は一緒になって、なにかを見つめた。
馬の形をしたなにかも顔と思われる部分をこちらへと向ける。

「へ、は、ええ？」

状況が理解できず、おかしい声を出す青年を尻目に、
若草色髪の男と橙髪の少女は笑いを堪えている。
馬の形状をしたなにかと二人を交互に見ながら青年は、

「な、なに笑ってるんだよ二人とも」

わけがわからず焦った声で言い放った。

その瞬間、馬状のなにかは動きを見せる。

青年が、動きを見せたなにかをよく見れば、そこには蔓が複雑に絡んだ物体。

全体を構成する蔓はところどころが解かれ始め、じよじよに馬であったときの中央部分に集う。

円状となった蔓のかたまりは地面へと落ち、青年の前へと転がる。

青年と馬がかたまりを眼で追いかけていると、かたまりが止まり、弾けた。

「うわっ！」

咄嗟に両腕で顔面を覆うが衝撃は、ない。

予想した衝撃がなく疑問顔で青年は腕を下ろす。

目の前には笑顔で手を上下させて笑う、文様入りの青い布を頭に巻いた、木霊族の小人。

「ひっかかった、ひっかかった！」

けらけらと笑い声をたてる青い布を巻いた小人。

その声につられて、青年のうしろにいた男と少女も笑い声をあげながら言う。

「ひさしぶりだな。フェス」

「フェスのいたずら好き、あいかわらずだねー」

「セリア、エオリア、ひさしぶりだー」

両手を振ってフェスと呼ばれた小人は答える。

小道を先行していた緑の布を巻いた小人が振り返った。

「ああ！ フェス、なに、してる、ですか」
「ツイス、おまえ、おそい。まち、つかれた」
「がまん、しろ、です！」

そっぽを向いたフェスへと詰め寄ったツイスは怒り顔。
目の前で始まる小人たちの問答に呆れた顔をする青年は、後ろの二人に尋ねる。

「セリアが言ってたあの子って……」

「そだよー青い布を身につけた木霊族がフェスだよー」

「いたずら好きだが、おもしろそうな奴だろう」

いまだ笑みの抜けきれない顔で答える二人に、そうだねと返す青年。前へと向き直ると、そこには全身を蔓で構成された狼が顔を向けていた。

アルトが思わず後ずさると蔓の狼から聞こえる声。

「さんにとも、フェス、あんない、する。ついてこい！」

聞こえた声はフェスのもの。

見れば狼の背には蔓で固定されてわめく、緑の布を巻いた小人。ひと吼えしたのち、蔓の狼は小道の奥へと向いて駆け出した。アルトたちはその様子を見て、急いで馬に乗り追いかけ始める。追いかけ出した三人を見守るように樹々はざわめき、そこかしこから動物の鳴き声が聞こえる。

暗雲が天を占めるはパストラ。

地の方角から、パストラの街へと向かう上空には、二つの筋雲。街へと向かっていた二つの筋雲は、一方は街へ、一方は神殿へと向かい別れる。

街が近づくとつれ筋雲は薄くなり、駆け飛ぶ先端は高度を下げている。

高度と速度を下げていき、先端を駆け飛んでいた龍翼人は地面へと足をつく。

鱗の翼と鱗の肌、その肌の背中付近には長い皮の帯で固定された靴がいくつもある。

片膝を地面へとついて一息つき、空を見上げる龍翼人。

「雨に降られる前に到着できたようだ」

一息で言葉を吐き出し、膝を上げて街へと歩き出した。

歩き出しながら龍翼人は腰裏の鞆を開き、三つの手紙を取り出す。

「届け先はノン・トロツポにフランセ・ヒーリーにエラル・カマツク。

およびリラヴェル・カマツク」

右手にそろえもった三つの手紙を、左手で確認しながら宛先を読み上げていく。

出入口を示すかがり火を超えた先にある詰め所にて、それぞれの住所を確認する龍翼人。

赤茶色の館前にある、黒い門横の郵便受けへと手紙を入れる。

次に開店の準備に追われている酒場の店長へと手紙を手渡す。

店長には後で呑みに行くことを約束して龍翼人は酒場をあとにした。

「最後は花屋だったな」

大通りを後ろに一本、前に三本伸びる爪の足で進みつばやく。酒場から歩いて行った先に見えて来た花屋の前には、表に出されていた鉢植えたちを店内へと運び入れていく金髪の女性。金髪の女性が両手にかかえた鉢植えを運んでいくと、店の硝子戸からは藍色髪した長髪の少女。少女も小さな鉢植えをかかえ、店内へともどつていく。

「ちょうど店を閉じる頃合いだったか」

その様子に、無事渡し終えられるな、と内心に思い龍翼人は店に近づいていく。ふたたび表へと出て来た金髪の女性は、近づく龍翼人に気づき手をあげる。

「やあ、龍翼人のあんちゃん。うちへの配達かい？」

「そのとおり。エラール・カマックさんで間違いないかな」

「そうさ、あたしがエラールさ。手紙の送り主はアルヒト・ヤマハつて奴だろ」

「当たり前だ。あなただけでなくリラヴェル・カマックさん宛てでもある」

「おやおや、アル坊の奴ちゃんと送ってくるなんて、けっこうまめだねえ」

ははつと微笑を浮かべたエラールは、龍翼人から差し出された封筒を受け取る。

封筒は指二本ほどの厚みがあり、大きさも大人の両手の平を合わせたくらい。

礼を言ったエラールに対して会釈した龍翼人は、酒場から来た道をもどつていく。

封筒を手に持ち、硝子戸の開いている店内へともどつたエラールが、

「リラ、アル坊たちから手紙が届いたよ」

奥で鉢植えの整理している藍色髪の少女へと声をかければ、笑顔で振り向く少女がひとり。

頭上の樹々から漏れてくる光は次第に赤みを強く帯び始めていた。小道を走り駆ける蔓の狼と三頭の馬は、いくつもの分かれ道を通り過ぎ、

小川を駆け抜け、道を遮るように倒れた巨木を飛び越えて走っていた。

一体どれだけの時間走っているのだろうか、そう黒髪の青年が思い始めたとき、

視界が大きく左右へ開く。

「ここが、木霊族が住む場所……」

勢いをゆるめて歩き足となった蔓の狼と三頭の馬は、芝生が広がり生えた広場へと進み出る。

風が吹き抜けて、樹々がざわめき、芝生に風の波がながれていく。青年の視界には地面から緩やかに盛り上がり、草などで覆われた土のかまくらがいくつも映った。

土のかまくらからは、それぞれ色違いの布を頭に巻き付けた小人が何人も出入りしており、

大勢の木霊族がいることが見受けられた。

ときおり、木霊族だけでなく人族や手紙を届けに来ている龍翼人の姿も見られる。

「森の奥にあるわりには、けっこう人がいるんだ」

「ああ、自分らがかつて修行で来たように、精地を巡っている人々や、

ここで採れる植物などの交易でやってくる商人もいるからな」

「うんうん、ここの森で採れる新芽で煎じたお茶がおいしいんだよーもちろん果物も！」

「セリアの情報はいつも食べ物ばかりだなあ」

ははつと笑ってアルトたちは馬から降り、手綱を引いて蔓の狼に歩いていく。

進む途中、蔓の狼に乗る緑の布を巻いた小人を見た、広場の小人たちは、

「ツイス、おかえり。あんない、おつかれ」

「フェスも、おかえり。あとで、あそぼう」

「そうじゃ、さま、いらっしやい、ませー」

小さな手を振りアルトたちにも言葉をかけてくる。

精霊の腕輪が見えるよう左手を振って言葉に応える青年。

近くで人族の大人に肩車された小人らも手を振ってこちらを見ている。

いくつかの土のかまくら横を歩いていくうちに、見えてくるものがあつた。

ひとつ大きく土を盛られて作られたかまくら。

蔓の狼は大きな土のかまくら入口へたどり着くと、背中のツイスをおろし、蔓をほどいて小人の姿へ。

二人の小人らは青年たちへと振り返り、

「ここが、フェスたちの、おさ」

「デイセス、のばしよ、です。そうじゃ、さま」

それぞれが言葉をつなげて言い放った。

空はすっかり暗く染まり、広場のあちこちでは灯りがともり始めていた。

暗雲に覆われていた天からは、小粒の水滴が地上へと降り注いでいた。

地上へと降り落ちた水滴は、建物に小さな跳ね音を生じさせて闇夜の街を包んでいく。

斜めに取り付けられた木のひさしを流れては落ちていく雨水。

ひさしに隠れた位置には硝子をはめた木枠の窓。

窓からのぞく室内、包帯を目元に巻いた少女は、数枚の紙を手に寝台へ腰掛けていた。

少女の顔を彩るのは、ときに笑い、ときに驚き、ときに憂い、ときに喜び、の色たち。

寝台に腰掛ける少女の横には封を開けられた封筒と、絵が何枚か置かれていた。

一枚の絵には大きな湖を背景に描かれている三人の人物。

三人のうちのひとりには、黒い前髪が眼の近くまで伸びており、時間の経過を感じさせる。

青年の右腕には四花の腕飾りも描かれていた。

青年の左に髪の毛を後ろでくくっている橙髪の少女、右にはつつすら髭の生えた若草色髪の男。

三人とも楽しそうな笑顔で描かれていた。

手紙を読み終えた少女は立ち上がり、寝台に置いてあった絵を手にとった。

そのまま机へと向かい、机の前にある壁へ掛けてあるコルクの板を、机の上へと置く。

三人が描かれた絵だけを選び取り、コルクの板へと、持つ部分が丸くなっている小さな針で固定する。

絵の四隅を針で固定したのち、板をふたたび壁へと掛ける少女。

目元を包帯で覆った少女は、嬉しそうな笑みを浮かべていた。

馬たちをかまくら付近にある樹へとつなぎ止めた三人は、

フェスとツイスの木霊族ふたりに促されて、ひときわ大きな土のかまくらへと入る。

入口にかけられていた布を右腕でめくりあげて入れれば、そこには灯りに照らされた空間。

半円の広がりをもった空間は、天井中央に円錐状の花を地面へと咲かし、

数本の花からは淡い光が空間内へと放たれていた。

青年は見とれるように、淡い光を放つ花から視線を外せずにいる。

「そのはなが、きにいった、ですか」

聞こえた声に気づいて、声の主へと青年が目線向ければ木霊族の小人がひとり。

空間奥に敷かれた干し草に座る小人は、頭に黄色い布を巻いていた。その小人へ一度頭を下げてから青年たちは空間へと入り、小人に促

されて地面へと座る。

「初めて見たので、なんだか驚いて」

「ここへ、くるひとたち、みんな、そういます。」

はじめまして、そうしゅさま。おさの、デイセス、います」

「初めまして木霊族の長さん……いや、デイセスさん。奏者のアルトです」

「デイセス、とよんでもらって、かまいません」

「ありがとうございます。なら、俺のこともアルトと呼んでください」

翠色の眼を弓なりに細めて小人は、嬉しそうに頷いた。

小人の目線は青年の背後に座る二人へと向く。

「セリア、エオリア、おふたりとも、ひさしぶりです」

「お久しぶりです。族長デイセス」

「以前はお世話になりました」

エオリアに続いてセリアが言葉をつなげて、それぞれが頭を下げる。二人が下げた頭を元の位置へと戻したとき、ひとつの音が鳴り響く。音の主は橙髪の少女、音源は腹部。皆の視線が少女へと集中した。

「あはは……お腹空いちやったー」

「……さすがに自分も腹が空いた」

「思えば、ずっと馬で走り詰めだったもんな」

苦笑顔で互いを見た三人へ、両手を勢いよく広げたデイセスが言う。

「でしたら、ごはんに、しましうー」

森の広場に集う、月明かりに照らされる人々の影。

賑やかな声と音楽が混ざり合う広場では、干し草の上に座る木霊族や人族。

円を形作るように座る彼らの前には、大小さまざまな果物が盛られた茶色の大皿。

人々の視線が交わる円の中央で四人の小人が踊っている。

頭に巻いた布で、深い緑の髪近くに、ぼんやりと光放つ花弁が付けられていた。

その花弁へと視線を向けながら青年は杯に口づける。

（あの花……の種とかもらえないかな）

青年の右隣では、エオリアとセリアがフェスを挟んで賑やかに話している。

左をちらりと眼だけをやると、デイセスとツイスが頬を膨らませて果物をかじっている。

視線に気づいたのか、黄色い布を巻いた小人が声をかけてきた。

「どうしました？ アルト、ごはん、あわないですか？」

「いえ、おいしいですよ。ただ、あの花が気になって」

アルトとデイセスは互いに視線を前へと向けた。

そこでは左右にステップをとりながら、歌を歌いながら踊る小人たち。

小人たちの頭部近くには、淡い光が残滓としてただよう。

「ひかるはな、ですね。デイセスたちは、よつゆそうと、よんてます」

「よつゆそう、ですか」

「夜の露と書いて、夜露草と言うのですよ奏者殿」

背後から穏和な男性の声。

青年が振り向けば、茶色い短髪とあご髭を携えたやや太めの男性。太めの男性はアルトとデイセスの後ろへと座る。

「がくしゃどの、たのしんで、ますか」

「ええ、ええ。とても楽しませてもらっていますよ族長殿」

「あ……初めまして奏者のアルトです」

「おお、これはご丁寧に。わたくしは学者をしているトランと申します」

差し出された右手に応えて青年も右手を差し出し、握手を交わす。

「学者をしていると、いま言われましたけど」

「そうです。ここ、木霊族の住む地にて息子とともに、彼らの生活を学んでおるのです。」

ああ、いま真ん中で木霊族に混じって踊っているのが我が子です」

そう言われて指を向けられた先には、四人の木霊族に混じって、黄緑色の髪をした少年が同じ踊りで動きをとっていた。

「トロンは、とてもいいこ、です。みんな、なかよく、あそんでます」

「そう言ってもらえると、親として嬉しさを隠せません」

「……」

デイセスの言葉に、暖かな眼差しと緩やかな笑みを浮かべた太めの男性を見て、

青年は父親のことを思う。

家にはあまり帰らない仕事馬鹿だと、母に呆れた顔をされていた父も、

こんな顔をするときがあつたのだろうか、そう青年は口元に当てた杯を傾けつつ思った。

「おや、どうかされましたかな奏者殿」

「……なんでもないです。それよりトランさん、聞きたいことがあるんですが」

「なんででしょうか」

「あの光を放つ花、夜露草なんですけど種とかあつたりしますか？」

「ふうむ……夜露草の、種、ですか」

アルトの質問に、トランは眉をひそめ苦い声で言葉を放つ。

「え、なんか変なこと、聞きましたか俺？」

「いやいや、気になさらずに。夜露草の種なのですがー」

「よつゆそうの、たねなら、デイセスが、もっています」

「族長殿、ですがこの地以外で夜露草は……」

「むずかしい、かもしれませんが、でも、さかないとも、かぎりません」

太めの男性と、黄色い布を巻いた小人とのやりとりの意味が解らず、疑問顔の青年。

「あの……どういうこと、なんですか？」

「これは申し訳ない奏者殿。じつは夜露草など、この地で採れる植物の多くは、

この地以外では育てることはおろか、種から芽が出ることすらままならないのです」

「じゃ、じゃあ種をもらっても……」

「花を咲かすことは、難しいというより、無理かもしれせん」

「そうなんですか……」

少しばかり気落ちした青年は肩を落とす。

その肩をぽんぽんと叩く手がある、それはディセスの手。

「おちこまないで、ください、アルト。」

よかつたら、はなを、もってかえって、もらっても、いいです」

「ありがとうディセス。でも、それだと花がもたないかも」

「それは、どなたか花を贈りたい方がいるので？」

「え、ああ、はい。その、花の似合う子が、いるもんで、ははは」

照れ笑いをする青年を、いつのまにか右隣の三人がにやけた顔で見ている。

三人のにやけ顔には気づかないまま青年は言葉を続ける。

「でも、その子、花屋で草花の世話をしているんです。」

俺には無理かもしれませんが、花と一緒に過ごしてるリラなら……

……

「花屋……にリラ？ もしやエラール殿の花屋ですか？」

「知っているんですか？」

「もちろんです。わたくし、この地へと来る前はパストラ付近に住んでおりましたので。」

そうか、そうですか。ふうむ……族長殿、種を差し上げてもいいと思います」

「エラールのこ、なら、ディセスも、あんしん、です」

先ほどまでの態度から一変したトランの様子にアルトは戸惑う。

「奏者殿はご存知ないようですが、エラール殿の花屋は有名でして、彼女の手にかかればどんな草花たちも芽を出し花を咲かせると」「
「そ、そうだったんですか。そんなすごい花屋とは、知らなかったです」

「にと、じゅうねんよりまえ。ここにエラール、きたこと、ありません。たくさんの、くさはなのたね、もちかえり、みのらせて、くれま
した」

だから、と言って黄色い布を巻いた小人は、三粒の白い種をのせた手の平を出す。

「よつゆそうのたね、おわたし、します」

「……ありがとうございます。かならず、リラのもとへ届けます」

「うん、きつとエラール殿の子なら、立派な花を咲かせるでしょう」

種を大事そうに受け取った青年は、腰に身につけた革袋の内側、小さな袋へとしまい込む。

しまってからディセスとトランの方へと振り向くと、眼前には黄色い中身の硝子瓶。

硝子瓶のよこにはトランが顔を並べていた。

「な、どうしました、トランさん？」

「なに、奏者殿。エラール殿と知り合いであるならば……呑める口
で？」

「え”っ”」

「こだまぞく、ひでんの、かじつしゅ、です。アルトにも、のんで
ほしいです」

秘伝の果実酒ってなんだよ！ その疑問を浮かべているうちに杯へと酒が注がれていく。

背後から手前へと回る腕にアルトは身体をかためられる。

「！？ なんだ、エオリアなにするんだ！？」

「はーはっはっはっ！ 愚問だなあアルト！」

「うわくせえ！ 酒臭いぞおまえ！」

「によほくんアルトおゝ呑もうよゝ」

「ってセリアまで酔ってるかよ！」

「のむ、のむ！ アルトも、のむ！」

右肩からは若草色髪の子、反対の肩からは橙髪の子が、青年へと抱きついて来た。

三人の頭上へ飛び跳ねる動きで、青い布を巻いた小人が乗っかる。

「わっはっは！ いい呑みっぷりですね騎士殿も巫女殿もフェス殿も。」

「というわけで奏者殿も呑みましょう！」

「というわけで、呑まそうとしないでくださいよー！」

宴が深まっていく森の奥から、青年の叫びがこだました。

小雨が奏でる、跳ね音が響く家屋の二階一室。

藍色の長髪を、机の上へとたらしめている少女がいる室内は薄暗い。

唯一の灯りがあるのは机の上、油が燃えての光となる褪せた翠のランプ。

少女は青年から送られた、文章のつづられた手紙を左手側に、自らが文字を紡ぎ出している便箋は、右手側に置いて羽根ペンを動かしている。ときおり、目の前へ顔を持ち上げる。

包帯に覆われた目線は、コルク板へと固定されたいくつかの絵へ。顔を持ち上げた拍子に、ランプの光が花の髪飾りに反射し煌めく。声の無い笑い声とともに口元をゆるませ、ふたたび少女は手元を動かしていく。

幾ばくかの時間が過ぎたころ、少女は便箋に書き連ねていた文字を止める。

青年から送られた手紙への返礼となる手紙、それが少女の書き終えたもの。

机の引き出しを引いて、中から一丁の封筒を取り出す。

書き終えた返礼の手紙を二つ折りにして、封筒へと入れる。

手紙を包む封筒にのり付けはせず、青年から送られた手紙を元の封筒へと戻す。

少女が書いた封筒には宛名が書かれていない。

左手には青年からの手紙、右手には少女の書いた返礼の手紙。

ふたつを満足そうにながめて、うん、と頷き胸元へそれらを抱く。

しばらく抱いたのち、少女は机の一番下にある引き出しを開く。

青年の手紙に少女が書いた手紙を重ね、引き出しの一番奥へと置く。そして、引き出しを閉じる。

少女は椅子から立ち上がり、ランプの蓋を開き、火を吹き消す。

光源を失った室内は闇に包まれるが、窓からは別の光。

手紙へと夢中になっていた間に雨はあがり、雲間から月光が降り注

いでいた。

窓からの月明かりが室内を淡く広がり、闇とまどろんでいく。寝台へと近づいた少女は寝そべり、身体に布を掛ける。そっと意識を閉じる前に、胸にうかぶひとりの顔を思い、つぶやいた。

「おやすみなさい」

視界にうつる景色は、まどろみ。

白と黒と、あまたある色。

まぎっては消え、あらわれてはまぎえる。

まどろみを粹に、ひとつの絵。

ひとが、ふたり。

どちらも、黒髪。

右に男性、左に女性。

眉根を詰め、厚みがあるレンズの眼鏡をかけた男。

ゆるい波がかった肩までの髪と、微笑みをもつ女。

ふたりをうつした絵に、生じる意識。

ー トウサン、カアサン。

意識は、手を伸ばす感覚だけを得る。

絵はとおくまどろみ、薄れていった。

ー マツテ、オイテカナイデ。

意識は、涙がながれる感覚を得る。

正面ではない方向、違う絵がまどろみより生まれる。

先ほどと同じ、しかし若い姿の男女と、男の子。

さんにんの背後には一件の住宅。

ー オレノ、オレノイエト、カゾク。

意識は、両手を伸ばす感覚だけを得る。

またも絵はまどろみへと消え落ちる。

意識は、どこかへと引つ張られていく感覚を得る。

ー ヤメロ、ヤメテクレ、カエラセテクレ！

意識は、途絶えた。

開いた視界に見えたのは、土の天井。
その視界には自身の両手が、天へと伸ばされていることに、黒髪の青年は気づく。

両手を自分の脇へと戻した青年は、上半身を起こし、自分の顔へ片手を当てる。

「なんで俺、泣いてるんだ……」

右目に右手を当てた姿勢の青年は、戸惑いを含んだ声でつぶやいた。なにか夢を見ていた、そう思って夢の内容へと意識を走らせるが、思い出せない。

「思い出せないけど……なんだろう、とても大事なことだったような」
なんとか思い出そうと眼を閉じて、記憶を探るがなにも出てこない。再度、眼を開き、右腕で目元をこすり涙を拭う。
拭っている最中に、胸の奥、苦しさと不安があることに気づく。

「……一体なんなんだよ……」

顔を洗いおくと、立ち上がるうとした青年は脚に重みを感じる。
のしかかる重みはふたつ。
なんの重さだ？　と思い眼を向ければ、青年の脚を枕に寝ているツイストとフェス。

「人の脚を枕にしゃがって……」

寝息をたてている小人たちに苦笑した青年は、起き上がるのを諦め、ふたたび干し草の敷いてある地面へと寝転ぶ。

しかし、瞼は開いたまま、天井を見つめている。

「もう一眠りして、それから……地の大精霊へ会いに行くんだっけ」

それだけをつぶやいて、青年は瞼を閉じて、もう一度、意識を暗闇へと落とした。

樹々が一層濃く生い茂る森の奥。

昼前を知らせる角度で、天からの木漏れ日が、低い草花を照らしていく。

木霊族の広場へと続いた小道と、同じだけの幅がある小道を、大柄の蔓の狼に乗った木霊族の小人ふたり、三人の人が徒歩で道を進んでいる。

黒髪の青年は若干の緊張を顔に浮かべていた。

「アルト、そんなに緊張しなくてもいい。肩がこわばってるぞ」

「そだよーもつと気楽にいこーよー」

「そこまで気楽にはなれないって……」

青年の後ろを歩く少女と男に声を掛けられるも、顔から緊張は抜けない。

「だって、これから大精霊……様に会うわけじゃん」

「そこまでかしまることはない」

「ええ？ そんなわけにはいかないだろ？」

地の精霊たちのトップ……というか一番偉い存在なんだし」

「一番偉いってというのはあってるかもね」

あつてるかもねーってのはどういう意味だよ、と言つと、

「だいせいれい、ジヨコさまは、きさくな、かたです」

「そうです。みんな、だいすき、です」

狼の背にのる黄色い布を巻いた小人に続いて、緑の布を巻いた小人が言う。

ふたりの小人の言うことを肯定するかのように狼が吼える。

近くを黒地の黄色いまだら模様の蝶が飛び回っている。

(元の世界にいた蝶と似てるけど、やっぱり違うな)

視線だけで追いかけて青年は思う。

前へ向けていた視線を遮る影がひとつ。

「? なんだ?」

影を追つて眼をやれば、全身が黒い蝶がひとつ。

ゆらりゆらりと羽ばたく黒い蝶は青年の近くを飛び回る。

何度か回ったかと思うと、蔓の狼付近をとぶ黒地の黄色いまだら模様の蝶へと向かっていく。

そのまま、黄色いまだらの蝶と黒い蝶は、互いの周囲を飛びまわりながら森の奥へと消えていった。

「綺麗な……もんだな。蝶つてのは」

標本とかあればリラにも見せてあげれるのにな、胸に思ったまま青年は歩く。

「いきているものは、みんな、きれい、です」
「ほんとに……こつちへ喚ばれてから、何度もそう思わされます」

蝶へと手を振っていたディセスが青年へと振り向き言う。
同意を示す言葉で答えた青年へ、小人は笑顔を向ける。

「アルトも、きれい、です。ディセスたちと、いつしょ、いきてます」

「あ、ありがとう」

思わぬ賛辞を受けて、照れと困りが混ざった顔になるアルト。

「ボクもボクも、きれい？」

「よさないかセリア。意地がきたないぞ」

「う、うるさい！ この馬鹿！」

「セリアも、エオリアも、きれい、ですよ」

「えええ〜この馬鹿といっしょに言われてもな〜」

「族長ディセス……遠慮は無用です」

エオリアへと怒声が飛ぶ背後に呆れた表情になった青年だったが、次第に小道の幅が広がってきていることに気づく。

小道を見る視線を奥へ、奥へ、奥へと辿らせていけば、大樹。

大樹の根元までたどりついたところで、黄色い布を巻いた小人は狼から飛び降り、

アルトたち三人へと、大樹を指さして言葉を放つ。

「さあ、つきました。ここが、だいせいれい、ジヨコさまの、おうち、です」

第十一話 地よりの試練

森の最深部となる場所。

そこに佇む三人の小人と三人の人族、彼らの目の前には巨大で長大な樹木。

地面をはう根は太く、深いしわをきざんだ足先を地面の下へとめりこんでいる。

黒髪の青年は、地面へとくいむこ根へ近づく。

太さも、高さも、長さも、青年の身体を超えた大きさ。手で触れながら青年は目前の物質に圧倒されていた。

（目の前にあるのは根っこ？ こんな大きいのが？）

眼を大きく見開いた表情には放心とも驚愕とも言えるものが浮いていた。

両手で樹木の根を触りながら、青年は根を生やす樹木を見上げる。

「なにがどうなったら……こんなに樹が大きくなるんだよ」

見上げる顔の角度は鈍角から、鋭角へ。

それでも青年の視界には樹木の頂上は映らない。

ただ、高くそびえる樹木の幹が映るだけ。

（湖近くのルスティカからも見えただよな……何百メートルあるんだ……）

感嘆とも呆れともつかない思いを内心に得る青年。

樹木を見上げた姿勢のまま、動こうとしない青年を見るのは五つの

視線。

そのうちの黄色い布を巻いた小人が動く。

「アルト！ だいせいれいさま、のもと、いきます！」

「！ ご、ごめんディセス。いまいく」

掛けられた言葉に、青年は慌てて振り向き小走りで五人へと近づく。

「自分も初めて見たときは、あんな感じだったのだろうな」

「なに言ってるのーフェスと一緒になって幹に登ろうとしたくせに

ー

「そうだ、エオリア！ いまからでも、のぼるか!？」

「フェス！ ばか、いうんじゃ、ないです！」

苦笑している橙髪の少女へ笑顔を向ける若草色髪の男、

隣では青い布を巻いた小人が緑の布を巻いた小人に腕を掴まれている。

六人の先頭を歩くディセスは、樹木の根を何本か越えたあと樹木の側へと立ち止まり、

人が三人分横になって通れそうな樹木のうろを手でさして言う。

「ここから、だいせいれい、ジヨコさま、のところ、いけます」

長年の経過とともに硬質化した樹木の肌は堅く、しかし弾力をもっていた。

青年たちが歩いた際に足下からはきしむような音が響く。

六人の先頭を歩く小人は、手にろうそくを差したカンテラを持ち暗闇を進んでいく。

デイセスだけでなく、エオリアも同様のカンテラを持ち最後尾を歩く。

外からの光が一切差し込まないうるの先にあつた空間。ときおり、カンテラに淡く照らされた壁に手について歩く青年。

「樹木のなかに……こんな通路ができてるなんて」

「ここは、フェスたちの、あそびば、なんだ」

「こんなところで遊ぶんだ？」

「うん！ まつくら、のなかで、おいかけっこ！」

「それ……相手を捕まえられるのか？」

青年へと振り向いて話す小人へ苦笑顔になるアルト。

「アルトも、あそぼう！」

「いや、いまはそれどころじゃ……」

「フェス！ ふざけすぎ、です！」

「ツイスは、つまらない、やつだ」

「~~~~~っ！」

ツイスの怒りを察して駆け出すフェスを追いかける、緑の布を巻いた小人。

そのままふたりの小人はデイセスを追い抜き、暗闇へと姿を消す。

「あ。い、いつちゃったけど……どうする？」

「ほおっておけ。フェスがからかい、ツイスが追うのは昔からだ」

「あんなふうでもあのふたり、とっても仲いいんだよね」

「へ、へえ。意外、だ」

ふたりが消えた暗闇の方向へと四人は歩みを進めていく。

坂道をのぼり、縦へと樹木の壁をのぼり、青年たちの身長を越える

段差をのぼり、

途中で小休憩を入れながら樹木内を歩く四人。

外よりも湿度の高い樹木内は動くものに大きな汗をまとわりつかせる。

青年は顔から垂れそうになる汗を拭いつつも脚を動かす。

青年の頭上を飛んでいく影があつたが、暗闇へと溶けて消えた。

「……？」

「どうしました、アルト」

「ん。なんでもないよ。それより、あとどれぐらいで着くのかな」

「もう、すこし、です」

そっか、と頷きを返し、再び四人は暗闇を進んでいく。

しばらくの後、樹木の通路が広がりを見せ始めた。

人が三人分並べれる横幅が五人、七人、十人以上となったとき、

四人の目前には暗闇だけが座す樹木内の広大な空間。

「ここが……ここに、大精霊が？」

「はい、そのとおり、です。」

「だいせいれい、ジヨコさま、そうしゃ、アルトを、おつれ、しました！」

アルトの疑問に答えた小人は、そのまま両手を振りかざして眼前の暗闇へと声を張った。

耳に聞こえるは、なにかが羽ばたく音。

小さく、しかし大きくなってくる音。

音が聞こえる方向は、頭上の暗闇から。

青年らが見上げる方向からは、ふたつのランタンに照らされ現れる姿。

次第に姿が羽ばたく音とともにアルトたちの前へと躍り出る。

「……………蝶？」

大小様々、色とりどりの蝶たち。

蝶の大群は四人の前へと降って来たかと思えば、

青年たちの周囲を一度、二度、三度まわって四人の前へ動きをとめ、広大な空間をそれぞれが自由に気俣に飛び始める。

「なんで……………蝶がこんなに？」

左右へ顔を動かし、状況が掴めない様子の青年。

黄色い布を巻いた小人は頭を伏せており、習うように騎士と巫女は膝き頭を下げている。

三人を見た奏者は、数秒どうしたものかと迷ったすえに騎士と巫女と同じ姿勢をとる。

広大な空間を自由に羽ばたき、飛び回る蝶たち。

次第に羽ばたく音が小さくなり、いつしか音が止む。

奏者は、無音を聞く。

（なんだ……………？ なにも、聞こえなくなっただ？）

眼を閉じた奏者の右隣、騎士と巫女が立ち上がる音が聞こえる。

腰の袋から銀の横笛を取り出した騎士は、低い音色を奏で始める。

その音に続くように巫女はささやく声色で、空間に歌声を満たしていく。

（この音と歌は……………俺が喚ばれたときのもの……………）

奏者の脳裏には、この世界へ召喚されたときの光景が浮かんでいた。はつきりとしらない記憶のなか、思い出されるのは騎士と巫女が奏でる音楽。

大地を奉る曲であることを、大神官から教えてもらったことを奏者は思い出す。

『……眼を開きなさい。奏者よ……』

騎士の旋律、巫女の歌声が終わるとともに声が生じる。

男性とも女性ともとれる、不明瞭な声。

声に従い、奏者は眼を開いて声の方角へと顔を向けた。

アルトの眼前には、羽ばたきを止めて空中に漂う蝶の群れ。

だが、見えているのは蝶の群れ、だけでない。

蝶の群れがかたどった人の姿。

長い髪を後ろへと流し、長いあご髭、垂れ目顔の男性と思われる容姿であった。

手前で杖をついているかのように、両手を突き出して手の甲と手の平を重ねている。

アルトは跪いた姿勢のまま尋ねた。

「あなたが、大精霊……ジヨコ、様？」

『そのとおりです。我は地を司る精霊ジヨコ。奏者、汝がその名、教えて頂けますか？』

「は、はい。アルヒト・ヤマハと、言います」

『アルヒト・ヤマハ。奏者、アルヒトよ』

「はい。なんでしょうか」

『この大地に喚ばれし者が降り立ちて、百年が三十と繰り返されました。』

そして汝が魂は三十を刻みし数に喚ばれました。汝ならば……』

ジヨコは最後の言葉を濁す。

「ジヨコ様……?」

『汝ならば、いつかの奏者と同じ瞳を持つ汝ならば、真の歌を得られるでしょう』

「真の歌って……賛美歌のことですよね?」

確認するように問いかけたアルトに、ジヨコはなにも答えない。

「あと、賛美歌を得るには試練を受けると聞いてはいますが」

『そのとおりです。これより地の精霊から試練を汝に与えます。出てらっしゃいフェス、ツイス』

え、と声を出したアルトの眼前。

空中に浮かぶジヨコの背後から、小人の姿が現れた。

右に青い布を巻いたフェス、左に緑の布を巻いたツイス。

「どうしてふたりがそこに?」

「ふたりは、だいせいれい、ジヨコさまに、えらばれた、ものです」

族長の言葉に、ふたりの小人はそうです、と答える。

『奏者アルヒトよ、これから汝に試練を与えます』

「は、はい!」

『ツイスとフェスの謎掛けに答えるのです』

「はい。……謎掛け?」

『そうです。我は知の祝福を持って木霊族とともにある存在。なれば知の祝福には、知を持って応えてもらいます』
「知を持って……知恵を見してみろってことですね」

理解とともにやる気が沸いたのか言葉に力がこもるアルト。その言葉に頷いてみせるジヨコ。

『よい意気です。それでは汝の答え、楽しみにしています』

ふつと微笑を見せた瞬間、ジヨコの身体を構成していた蝶たちが羽ばたき散る。

羽ばたきの波はアルトへとぶつかり、思わず眼前を両腕でおおう。大量の羽ばたき音が過ぎ去ったあとに眼を開いてみれば、ふたつの蝶。

「黄色のまだら蝶と、黒い蝶……もしかして」

アルトが言葉をつぶやいている間に、黄色のまだら蝶はフェスの頭部へ、

黒い蝶はツイスの頭部へと身体を留める。

「ふたつの、ちょうは、だいせいれいさまの、つかい、なのです」

黒い蝶を髪飾りのように留める、緑の布を巻いた小人はアルトへと答えた。

樹木を出れば、外は朱色の陽光が差す夕焼け空。

黒髪の青年と若草色髪の男は袖をまくって、顔の汗をぬぐう。

橙髪の少女は手の平をうちわがわりに扇いでいた。

「あー暑かった、もう汗だらだらだ」

「これで少しは身体の重さ落ちてるといいなー」

「おまえのような大食漢がどの口でそれを言うか」

「こーのーくーちー」

「ぐっ！」

男と少女のやりとりに笑っている青年のもとへ近づく小人たち。

「アルト、きょうは、もう、かえりましょう」

「うん、そうしようかツイス。だいぶ日も暮れてきたし」

「はやく、かえって、あそぼう、アルト！」

「はは……フェスは元気だな」

汗と疲れにまみれた三人と違い、小人たちは疲れのない笑顔を見せている。

青い布を巻いた小人は姿を蔓の狼へと変じ、背中にふたりの小人を乗せる。

背中に乗った黄色い小人が皆へと声を掛ける。

「では、みなさん、ひろばへ、かえりましょう！」

翌日。

小人達の広場、昼下がりの空気が漂い南天に太陽が煌めく。

広場の芝生と森の境目には黒髪の青年と黄緑色髪の少年。

青年はしゃがみ込んで森を構成する樹々を見つめ、少年は陽気に樹々の説明。

「へえーなら、この樹は？」

「この樹はね！ この樹はね、父さんがうっかり触ってかぶれたから、かぶら樹だよ！」

「か、かぶれたのか……」

「一ヶ月くらい治らなくて大騒ぎだったよ！」

指差した手を引つ込める青年。

少年はかまわず樹の説明をしていく。

樹の説明を聞きながら、青年は昨夜のことを思い浮かべる。

「ーアルト。なぞかけ、します。

「ーするぞ！ なぞかけ、するぞ！」

「ーひとつとは。

「ーいのちとは。

「ーいきるとは。

「ーじぶんとは。

「ーせかいとは。

「ーたにんとは。

「ーだいちとは。

「ーしとは。

「ーなんですか。

「ーなんだ。

(謎掛けて言うから、ひとつの謎だけだと思ってた……)

少年の説明に頷いて理解を示しつつも、別の思いを得る青年。
昨夜、答えがひとつか複数であるかは小人達は言わなかった。
ただ謎掛けだけを青年へと残した。

(あの謎に答えることが、試練。でも、意図がわからない)

一通り、樹の説明をし終えた少年は、青年へと手を振って小人達の輪へと飛び込んでいった。

応じるように手を振り返っていた青年は、目的もなく広場の外周をうろつく。

しばし歩いた先では、手帳と鉛筆を手にしゃがみ込む太めの男性。

「あれ、トランさん？」

「ん？ おお、これは奏者殿！ いや、アルト殿。どうなされたかな」

「いえ、とくにこれとなくうろついてるだけですが。トランさんは何を？」

「わたくしは植物の調査です。ここに紫色をした草がありました」「紫色の草ですか。これですか？」

「そうです、その草です。珍しいので写し描いておこうと思いましたが」

トランの隣にしゃがみ込む青年。

しゃがみつつ、男性が指を動かす先を見る。

「草の絵、ですか。うまいですね」

「いやいや、昔から絵ばっか描いていたので。」

それに草だけでなく、珍しい動物や鉱石、風景など見ると絵に描きたくなってしまふもので」

そう言って太めの男性は手帳の頁をめくって他の絵を見せる。

頁には特徴を記す文章と、実物と変わりない表現をされた絵があった。

「これ…全部トランさんが？」
「ええ。これでも学者ですので、というのは建前で、
ほとんどはわたくしの興味や好奇心でやってることですけどねども」
「でも、すごいですよ。やりたいことを仕事にしてるなんて」
「……そうでも、ありませんよ」

不意に表情を暗くするトラン。

「ト、トランさん？」
「はは、なんでもありません。さて、わたくしは森へ行つてきます」
「あ、はい。わかりました。……草は採らないんですか？」
「わたくしは採らないことにしているのです」
「どうして、ですか」
「必要でなければ採らない、狩らない、持ち帰らない。それを信念
としているのです」
「信念、なんですか。……信念ってなんですか」
「……強い、強い思いと言えがいいのでしょうか」
曲げない、折れない、揺らがぬ。そんな意思のことを指すのだ
と、思います」
「どんなときも、ですか」
「どんなときも、です」

太めの男性は立ち上がり、側においてあつた大きめの革袋を手に取り
る。

青年も立ち上がる。

男性が青年へと振り向く。

「俺にも、信念ってものが得られますか」

革袋をかついだ男性は、ゆっくりと首を振る。

「わかりません。ですが、アルト殿」

「はい」

「……生きる力さえ失いそうになったとき、信念は得られるかもしれません」

「トランさん……それは」

「ははは」

トランは、笑って森の方へと、歩いていった。

夜。

芝生に寝転がって空を眺めるは青年。

服装は短い袖をもった衣服。

頭裏に組んだ両腕を小さな虫が通り過ぎる。

青年の鼻上には、指二本ほどの小さい蝶がとまり、飛んでいった。眼だけを動かして蝶を追いかけて、やめて、空を見る。

「綺麗な……星空だな……」

光の点がばらつき浮かぶ黒い景色。

近づく足音。

「アルト、こんなところにいたのか」

「エオリア」

「答え、考えてるところか」

「んーそんなところ」

若草色髪の方は、青年の横へと並び寝そべる。

「あの謎掛け、なにを聞きたいんだろうな」
「なにを、とは？」
「なんだろうな。大精霊の意図というか、考えがわからない」
「それはそうだ。自分達は大精霊ではないからな」
「そりゃそうだけどな」
「あまり深く考えすぎるなアルト。これは遊びのひとつと思えばいい」
「遊びのひとつって……試練だろうが、これ」
「試練ではあるが、謎掛けでしかない」
「なんか、うまいこと丸め込まれてる気がするな」

蜻蛉に似た昆虫が青年の眼前を過ぎる。

「共通点を見いだす、でもないし、なんなのかな」
「なんだろうな」
「って、手伝ってくれるわけじゃないのかよ」
「なんだ、もう諦めるのか？」
「くそ。そんなこと言われて諦めるかっての」
「ははっ。手伝ってやってもいいがな」
「腹のたつ言い方しやがって。絶対ひとりで答えてやる!」
「悪い悪い。なに、これはアルトの試練だからな」
「分かってるよ。俺が考えなきゃ意味がないのっでは。」
「ただ、漠然としたことしか浮かんでこなくて、それでいいのかどうか」
「ほう。それは？」
「まだ自信がないから教えない」

それは残念だ、と言って男は口を閉じる。
しばらくふたりは夜空を眺める。

「ひと、いのち、いきる、じぶん、せかい、たにん、だいち、し。
禅問答みたいだな」

「？ ぜんもんどう？ なんだそれは」

「んーっと、なんて説明したらいいんだろう。」

俺の世界にある宗教に仏教というのがあって、仏を信仰するって
やつ。

こっちでいう精霊を信仰してるようなもので

「ほう」

男は両腕を枕にした寝転がった姿勢から、

片腕を枕にする姿勢となつて青年へと顔を向ける。

「その仏教つてのに、さつき言った禅問答があるんだ。

学校で習っただけだから深くはわからないけど」

「アルトの知ってるだけでかまない」

「そか。じゃあ説明すると、何かを問いかけられたら、考えるので
もなく答える。」

それが禅問答、って俺の先生は言つてた」

「考えるのでもなく答える？ どういう意味だそれは」

眉をひそめた男に、青年は片手を空中に泳がして言う。

「いや、意味つていうか、そのまんまなんだ」

「むう、よくわからないな」

「うん、実際よくわからないんだ。俺の先生が言うには、

問いと答えに意味はなく、答える側が明確な意思を持って答えた
ならそれでいい、と」

「問いと答えに意味がない？ ますます意味がわからない」

「俺もよくわかってないし、先生の説明が間違つてるかもしれない

な

小さく笑い声をたてる青年に、唸る顔となった男。

「しかし、問いと答えに意味がないとすれば、それこそ意図が読めないな」

「意図なんてあるのかなあ。案外、勢いだけのやりとりかも」

「それでもひとつの宗教のなかにあるものだろう？」

「そうなんだけど、禅問答のことだけを知っても多分わからない。

先生は、仏教全体を理解しないことには、禅問答も理解できないって言ってたな」

「ふむ、アルトの話の聞いていると、仏教が禅問答であり、禅問答が仏教である。」

「そんなふうには聞こえてくるな」

「ええ！？　なんだかエオリアが賢くなってる！？」

「なっ！？　おまえまでセリアのように馬鹿にするか！」

「冗談だよ、冗談」

「冗談でなかったらリラに送る手紙、内容書き変えてやる」

「エ〜オ〜リ〜ア〜それだけは許さんぞ〜」

「は、それこそ冗談に決まってる」

ほんとだろうな、と横目で男を睨みつけた青年は、再度天へと視線を投じる。

「……リラに送った手紙、ちゃんと届いてるかな」

「安心しろ。龍翼人の配達は数日前後かかるとはいえ、

高い空を飛ぶ彼らを襲うような獣はいないし、仕事熱心な種族だ」

「そう、だよな」

届いたかどうかすら確認できないことに幾許かの不安を抱く胸。

山と山の合間から太陽の光が地面へと差し込みだした頃。
太陽の光が顔に当たったことで、黒髪の青年は眼を覚ます。

「う……ん。あれ……ああそうか。話してるうちに、ふわあああ、
寝てたのか」

眼を覚まし、上半身を起こして両腕を伸ばした青年は、寝転がって
いた芝生を見渡す。

左隣には両腕を枕にして寝ている若草色髪の男。

なにかを思いついた青年は、芝生に生える細く長い草を数本抜き取
り、男へと近寄る。

口端をつりあげて、その場を離れる青年。

青年が小川で顔を洗っている最中に、広場からは盛大なくしゃみの
音が数度響いた。

小川から青年が戻ると広場には数人の人影。

「おはよう。フェス、トロン」

「おはよ、アルト」

「おはよう！ アルトにいちちゃん！」

片手を上げて挨拶する青年に、両腕を振って答える小人と少年。

「あ、そうだアルトにいちちゃん。さっきエオリアにいちちゃんが探し
てたよ？」

「エオリア、おもしろい、かおだったぞ」

「そうか。エオリアはどっちにいた？」

「広場の中央付近にいたよ」

「わかった、ありがとなトロン、フェス。俺はちょっと用事あるから向こう行くな」

「あとで、あそぼうな、アルト」

「いつてらっしやい、アルトにいちゃん」

手を振った青年はエオリアがいると思われる方向とは反対へと歩き出した。

「おはよーエオリア。なにやってるのー？」

「アルトはっ！ アルトはどこだあ！？」

「知らないよーあと朝からうるさーい」

「ぐっ。悪かった、がアルトはどこだ！」

「だから知らないって言ってるでしょー」

「くそ。あいつめ、人が寝てる間に」

「なにかされたの？」

「自分の鼻と耳の穴に草を詰めていきやがった！」

広場には少女の笑い声が響き渡った。

広場の人々が朝食を終えたころ、

黒髪の青年は大樹へと続く小道を歩いていた。

隣には緑の布を巻いた小人。

「朝から道案内頼んでごめんな、ツイス」

「かまいません、アルトの、たのみなら」
「ありがとう」

そう言つてふたりは小道を進んでいく。

「なぞかけの、こたえ、できましたか？」

「うーん。まだ、だね」

「そうですか」

「……あの謎掛け、大精霊様がツイスたちに与えたんだよね」

「そうです、ジヨコさま、じきじきに、あたえて、くれました」

話す小人の髪には黄色のまだら蝶が留まっている。

「じゃあツイスたちは答えを知ってるわけじゃないのか」

「はい。ツイスたち、こたえ、しりません」

「ヒントくらい欲しい気もしたけど、これは無理だなー」

「アルト、だったら、こたえ、られますよ」

「はは、ありがとう」

礼を言いつつも内心は曇つたまま。

（昨夜、エオリアと話しててなにかが分かった気がするんだけどなあ）

声には出さずに頭をかいて青年は歩く。

視界には遅しく生えそびえる樹々。

樹々の合間をぬつように飛んでいる昆虫たち。

視線が上を向くあたりでは猿のような影や、鳥の影がちらほら見える。

(前は気づかなかったけれど、こんなに生き物があるんだな、この森)

「あ！ アルト！」

「え？」

小人に呼ばれて足を止める青年。

「どうしたのツイス？」

「あしもと、みて」

言われて足下を見ると地面には、

仰向けとなって動かない指二本ぐらいの大きさをした赤い昆虫。

動かない昆虫に群がるようにしているのは、指の幅ほどもない茶色い昆虫。

ツイスが指差す先をしゃがみ込んで見るアルト。

「この世界でいう蟻なのかな。死んだ虫に群がってるのは」

「あり？ この、ちいさい、むしろ、ありですか？」

「俺の世界では、そう呼んでいたんだ」

言い終えて、しばらく昆虫たちの動きを見るふたり。

(こんな小さくても、生きようとしてるんだよな)

せわしなく身体を動かす茶色い昆虫を見て、青年は思う。

ふたりが見ている先、小さい虫は仲間の虫と協力して、死んだ虫をばらばらにしていく。

死んだ虫は、次第に原型をとどめなくなり、足を失い触覚を失い、外殻を失い、頭を失い、

やがては姿そのものがその場から無くなった。

そして小さい虫は、ばらばらにした死んだ虫を担いで、小道から森へと消えていく。

消えていくところまでを見つめて青年は内心に思いを得る。

（死んでも、他の生き物の餌となる。そういやルスティカで似たような話を聞いたな）

思い起こされるのは湖の港町ルスティカにて、年老いた船頭が語ったこと。

――そんでわしらはさ、いつかは死んじまう。骨となって土や水、風や火に還るのさ。

――そしてまた、どっかの生き物となって生まれんだよ。

続いて出てくる会話。

――んで生まれた生き物を食って、またわしらは生きるのさ。

――命が……つながってるんですね。

――んだ。生きてるってのはそういうことさ。

――恵みに感謝することで、わしらは毎日食っていけるんさ

そこまで思い出して、青年は気づく。

「そうか……そういうことか」

「アルト？ どうか、しました」

「うっん、なんでもない。けど、答えが分かった気がする」

「ほんと、ですか!？」

「たぶんね。だから広場にもどって朝ごはんを食べよう」

来た道を戻りだした青年の足取りは軽くなっていた。

場所は樹木の内部、大精霊の空間。

蝶を髪に留めた小人ふたりが空間中央へと進む後ろ、ランタンを持った木霊族の族長と騎士は、巫女をはさんで端に。奏者は三人を後ろに、二人を前にした位置。

空間中央で足をとめて奏者へと振り向く小人ふたり。その様子を見て、奏者達は足をとめた。大量の羽ばたき音が頭上から聞こえる。

空間中央に立つ小人の髪に留まっていた蝶が飛び、頭上で旋回している蝶の大群へと混ざり飛ぶ。二度、三度旋回したのち、蝶の大群は小人ふたりの間で停止し、人の形へと成る。

蝶により形作られた人は瞼を開き、奏者に言葉を掛ける。

『奏者アルヒトよ。答えはでましたか？』

「はい、大精霊ジヨコ様」

言葉に奏者は頷く。

『よろしい。では、ふたりから謎掛けをしてもらいます。その後、
答えを』

「わかりました」

奏者が言葉を終えたあと、精霊の左右にいる小人が一步前へ進んだ。

「なぞかけ、します」

「なぞかけ、するぞ！」

「ひとは」

「いのちとは」

「いきるとは」

「じぶんとは」

「せかいとは」

「たにんとは」

「だいちとは」

「しとは」

「なんですか」

「なんだ」

小人の謎掛けが終わる。

族長、騎士、巫女は奏者を見ている。

精霊と左右に並ぶ小人も奏者を見つめている。

「答えは……円です」

『円とは、どういふことかね？』

尋ねる口調で精霊が問いかける。

「すべてが、つながっている。そう思うと円に見えました。

ひとも、いのちも、いきること、じぶんも、せかいも、

たにんも、だいちも、しも、それぞれだけが存在するわけじゃあ

りません」

言葉を止め、空気を吸い込む。

「人が命を持って生まれて生きていることで死があつて、大地も他人も世界も、人がそこにあると考えることで初めて、存在を感じられます」

だから、とつなげる。

「謎掛けにあつたそれぞれは、その存在だけで、有るのではなくて、全部とつながって初めてそこに有るといっつか」

少し言葉尻を濁す。

「それぞれが関わり、つながっている、そう思ったんです。なので答えは円、俺はそう考えました」

言い切る。

無言が空間を占める。

精霊は視線を奏者に合わせている。奏者も視線を精霊から外さない。精霊が口を開く。

『合格です。奏者アルヒト』

笑顔でもって言葉を述べた。

「やったなアルト！」
「アルトすごーい！」

騎士は奏者の首に腕をまわし、巫女は腕を掴んで上下に振る。

「いでついでで！　そ、そんな引つ張るなつて！」

「おっと悪い悪い」

「ごめーん、興奮しちゃった」

痛がる様子を見て騎士と巫女は腕と手をはなす。

「アルト、おめでとう」

「おめでとう、ございます」

「めでたい！　めでたい！」

三人の小人から祝福の言葉が掛けられる。

「ありがとう、三人とも」

頭をかきながら照れ顔で奏者は言葉に答える。
うんうん、と頷いていた精霊が口を開く。

『試練をよくぞ突破しました。奏者よ』

「ありがとうございます。大精霊様」

『それでは試練を突破した証として、賛美歌のひとかけらを授けます。』

左腕を差し出してください

「わかりました」

奏者は言われた通り、精霊の腕輪をはめた左腕を空中へと掲げる。

杖をつくように交差していた両手を動かし、精霊は手の平を腕輪へと向ける。

瞼を閉じて集中する姿から、空気の流れが生じる。

「腕輪が……輝いてる」

見れば、奏者が掲げた左腕、精霊の腕輪が黄色に輝いていた。腕輪にはめられた宝石のひとつ、黄色の宝石は一層の輝きを秘めている。

黄色の宝石がひとつ、強い輝きを発したかと思えば、腕輪を包む輝きが失せた。

『これで我が持つ賛美歌のかけらが、腕輪へと収められました』

「ありがとうございます！」

奏者は礼とともに頭を下げる。

その姿勢を見る精霊は、視線を奏者の右腕へと移す。

(あれは……四花の守り。奏者への強い思いが込められていますね)

精霊が、手の平を上にして右腕をあげると、そこから生まれたように羽ばたく蝶がひとつ。

琥珀色した蝶はゆるやかに羽ばたいて、頭を下げている奏者へと近づく。

そのまま右腕の腕飾りへと寄り、腕飾りを構成する黄色の花へと留まる。

琥珀色の蝶が触れた瞬間、腕飾りが一瞬、淡く光る。

光がおさまったあと、蝶は腕飾りを離れ精霊のもとへと戻る。

「? 大精霊様、いまなにを」

『賛美歌とは別の、我からの贈り物をしておきました』

「贈り物……ありがとうございます」

もう一度、頭を下げる奏者を見て精霊は思う。

（できるならば、その贈り物が役に立たなければ良いのですが）

哀れみと悲しみが混ざった目線で奏者を見つめる精霊。

（奏者、貴方が帰りを望めば全ては問題無きこと。だがそうでなければ……）

先ほどよりも一層強い感情を混めた視線で奏者を見る精霊。

頭を上げた奏者は、精霊からの強い視線に戸惑う。

「だ、大精霊様。どうしたんですか？」

『……いえ、なんでもありません。族長デイセス』

「はい！　なんで、しょうか、ジヨコさま！」

『今夜は宴を開きましょう。奏者アルヒトの試練突破を祝して』

「わかり、ました！　せいだいな、うたげを、ひらきましょう！」

族長は両手を上げて精霊に応じた。

星明かりがまたたく夜の広場。

明かりが落ちていく先では賑やかに踊り歌う人々。

数人の小人が円となって踊り歌うなか、橙髪の少女と若草色髪の男、黄色髪の少年が混ざって踊る。

その円の頭上では蝶の大群が揺れ流れて羽ばたいており、

歌に合わせて大きく広がり、小さく円をえがくなど見る者を楽しませる。

族長の住処である大きな土のかまくら前で座るのは、黒髪の青年と黄色い布を巻いた小人。小人の髪には琥珀色の蝶が留まっている。

青年は不思議そうに琥珀色の蝶を眺めていた。

「大精霊様……その姿でも動けるんですね」

『この姿というか、この蝶の身体を借りているだけですからね』

青年の頭に精霊の声が響く。

『我は肉体を持たない、地に住まう精霊でしかありませんから』

「そんな言い方されなくても」

『奏者よ、勘違いをされていると思いますが我は意思持つ精霊。』

大精霊や様を付けて敬う存在ではないのです』

「けれど、文献なんかでは木霊族をいまの姿へとしたのは大精霊様だっ……」

『我が彼らをいまの姿へとしたのではありません。彼らが望んだのです』

一拍の間が空く。

『我は、この地に生まれ、意思を持ち、彼らと関わり、何年も過してきました。』

かつては尊大な態度を示したこともありましたが、そのようなこととは無意味だと思い知りました』

精霊の声はどこか呆れた感情を含ませている。
なんと言っていていいか分からず、青年は杯を傾けた。

『……長く、長く考え生きていると、これで良いのか、と考えることが多々あるのです』

「後悔、していること、あるんですか？」

思いもかけない精霊の言葉に、少々驚きつつ青年は言葉を掛ける。

『肉体がない以外をのぞけば、我も汝らも変わりはありません。』

意思と記憶、そして通ずる言葉があればおのずと考えることです』

「そう……ですか」

『意外でしたか？』

「……ちよつと」

苦笑いを浮かべた青年の頭へと飛んで留まる琥珀色の蝶。
黄色い布を巻いた小人は両手を叩いて笑っている。

『過去の奏者にひとり、我に説教してきた者がいましたね』

「ええっ!？」

『女性の奏者だったのですが、気の強そうな奏者でした。』

私の態度に怒鳴りつけて来て、その後は延々と怒られ説かれました』

「そんな人も、いたんですね」

『我も思い上がっていたのでしよう。我も女性の奏者に怒りの言葉を放ち続け、』

試練どころではない騒ぎとなっていたほどです』

ため息をつく音が青年の頭に聞こえた。

隣にいた小人は立ち上がり、踊っている輪のなかへと飛び込んでい

った。

『そのような騒ぎも数週間続くと、互いに頭が冷え、態度を改めるようになったのです』

「それは、そのなんて言ったらいいのか……」

『当時の奏者の言葉を借りるならば”若かった”なのでしょう』

なんだか親戚のおじさんに絡まれてる気分だ、青年はひとり思う。

『ところで奏者アルヒト。貴方はなんの楽器が弾けるのですか』

「へっ。ええと、リュート。リュートが、弾けます」

『でしたら、一曲。我に奉じてもらえますか』

「……ええ。喜んで！」

そう言うと青年は傍らにおいてあったリュートを手に持ち、目の前の輪で歌い踊っている連中に合わせて弦を弾いて音を鳴らし出した。

夜が更ける森、樹々が生える各所から、樹々に潜む昆虫や動物たちの鳴き声が響き出し、

いつしか森全体が合唱しているかのように音が重なり、それは遠い遠い街まで届く調べとなった。

第十二話 地からの帰還

夜が更けて来た頃、神殿より地の方角にある街、パストラは賑わっていた。

賑わいの中心は酒場ガイオ。

焦げ茶色の坊主頭が黒塗りのカウンター内で酒を振る舞う横、演奏がおこなえる空間では、帽子を目深にかぶったひとりの男性が詩を謡っていた。

男性の背後には木目をみせる大型の鍵盤楽器を弾く、髪を結い上げた女性。

帽子をかぶった男性が口に行っている詩は、奏者の旅をもとにした内容。

感情を込めて謡う男性の声を消してしまわないよう、鍵盤楽器を弾く音はささやかな音量。

謡われている奏者は過去の人物。
何代前かは分からない、実在したかもわからない奏者の旅を男性は謡い上げる。

酒場の人々は日々の疲れを労いあいつつ、詩に興じて杯を交わし合う。

黒塗りのカウンターには、金髪の女性と口髭を携えた中年の男性。カウンター内にいる坊主頭は、ふたりの杯へと酒を注いでいく。

「何度聞いても良いものですな。」奏者の旅”は「

「はっはっは、会長さん。あんたあそれ言つの何回目だよ!」

「何回でも言ってしまうからな」

そう言うと口髭の中年は、坊主頭とともに笑い声をあげた。中年の隣で杯を傾けていた女性が口を開く。

「ところでトロツポさん、あんたのところにも手紙が来たって？」
「おお、そうなのです。ワシにも無事試練を突破したと手紙が」

中年は懐から一通の封筒を取り出す。

すでに封を開けたため封印は破れており、内部から三枚の紙を手に取り取る。

封筒の送り主はアルヒト・ヤマハ。

「で、フラン。あんたのところにも来たんだって？」

「おうよ！ いっちょまえに手紙を送るなんざ、うざいガキだ！」

坊主頭は笑顔で言葉を放つ。

相変わらず素直じゃないねえ、と言って手紙を読む中年を見やる女性。

「あたしにも届いたけれど、リラが読んだ方がいいだろうと思って読んでないんだ。」

「というかりら宛てでもあったからねえ」

「本当にあのガキは抜け目なくて可愛げがねえなあ！」

「フラン、そりゃどういう意味で言ってるんだい」

「そりゃそのままの意味さ！」

半目になった女性の視線を笑ってごまかす坊主頭の手前、手紙を熱心に読んでいる中年。

カウンター横からは第二幕を謡い出す帽子をかぶった男性。

「おっ第二幕の始まりかい。あたしは第一幕よりこっちが好きなん

だよね」

「ああ、おれもこっちが好きだな。なんといつても奏者の戦い！
これが燃える！」

「未知の場所へと旅して、未知の獣と戦う。いいねえ、昔を思い出
すねえ」

「昔か…… エラも昔は大地を旅していたんだっけっか？」

「そうだよ…… まあ、いまじゃ旅することもないだろうさ」

「だろうな。店も…… リラちゃんもいるもんなあ」

坊主頭の言葉に、金髪の女性は杯を傾けて答える。

隣、口髭の中年は、小声で「おおっ！」「なんとっ！」「驚きっ！」
とつぶやいている。

女性は傾けた杯を、肘を預けているカウンターへと置く。

「ときどき、旅に出たくもなるけど……長いことリラをほっとけな
いからねえ」

女性の声色は小さく影を感じさせたが、言う表情に暗さはない。
空いた杯を、水を絞った布で拭う坊主頭。

「……なあ、エラ。おまえさえ良けりゃ……」

「よしなよフラン。”おまえさえ良けりゃ”なんてあんたらしくも
ない」

「お、ま、え、は人の気持ちも知らんと言いやがって！」

「ははっ。……知ってても言うよ、いまのあたしは」

「……馬鹿やるうが。おまえはひとりで背負いすぎだ」

「あたしはさ……いまのまま、いいと思ってるんだよ」

「それでいいと思わねえから、おれは口出ししてんだ」

ありがとう、と口にして杯をあおる女性。

隣の中年は手紙に向かって「うんうん」「頑張ったなあ」と声に出している。

女性と中年の背後を給仕姿の人物が通り過ぎていく。

「リラちゃんには……いつか話すのか？」

「……なあ、フラン。全部話す必要ってあると思うかい？」

「そんなもんおれが知るか。おまえが話したいかどうかだろ」

「そうさね……あたしは、どうしたいんだらうねえ」

「……リラちゃんは、あのガキが来てからか。なんつうか明るくなつた気がするな」

女性は何も答えず、杯を傾けた。

「前はよお。店に顔出しにいつでもおまえの後ろに引っ込んでるか、

二階の部屋にいたりしてろくに顔とか見せてくれなかったからよ」

「そりゃあんたが怖いからさ」

「あほか！　こんなおれのどこが怖いんだよお！」

「すぐ大声張り上げるとこに決まってるじゃないか」

ぐっ、といきを詰まらせた声を出す坊主頭。

「そ、それでもよ。ここところは、いないおまえの代わりに店番やったり、

顔出しにいつでも話してくれるようになっちまってさ。

知ってるか？　この酒場でもリラちゃんがちよっと評判になってんの」

「……へえ、初耳だね」

「花屋で、眼の見えない包帯巻いてる女の子が頑張ってるってな」

「……眼の、見えない、ねえ……」

そついや、そついうことにしてたねえ、と内心に思う女性。

「あのガキのせいかどうかは知らねえけどよあ」

カウンター下から封の開いていない、中身の詰まった硝子瓶を取り出す坊主頭。

「リラちゃんもよあ、変わろうと頑張ってるってことじゃねえのか？
親をやってるおまえが、それを知らないわけでもないだろ」

「あの子はねえ、いまだけじゃない。……ずっと頑張ってきたのさ」

そうなのか？ と声にしつつ、坊主頭は手紙を読んで感涙している
中年の杯へ、
封を開けたばかりの硝子瓶の中身を注ぐ。

「だからさ。あたしはあの子がやりたいと何か言うなら、それを止めるつもりはないさ」

金髪の女性は、自分の杯にも新しい液体を注がせながら、もういちど杯をあおった。

カウンター横からは”奏者の旅”の第三幕が謡われ始めていた。

朝日が昇り出したころ、白い石作りの輝きをもって陽光を反射する
神殿。

神殿上部に設置された天窓から降り注ぐ陽光は、神殿内を反射し明るく照らす。

陽光のもと、大地の間ではひとりの人物が片膝をついて眼をとじ、

たたずんでいた。

白く縦に長い帽子は人物の横に置かれており、両手を組んだ手を前に深いしわきざんだ老人。

天窓付近からは羽根を休める鳥たちのさえすり。

「……………」

老人はひとり、無言でたたずみ、陽光が照らすなか静かにいた。胸中を過ぎていくのは祈り。

(……………我らが精霊よ。我らが世界よ。我らが大地よ。娘を、息子を、彼を守りたまえ……………)

ただ、ただ祈りを、捧げる。

老人の閉じられた眼前には、閉じられた扉がひとつ。陽光に照らされながらも光を反射せず、黒い扉は大地の間、中央にある。

大地の間を照らす陽光が角度を変えていく時間、老人は姿勢を崩さず祈り続けた。

「……………」

無言の姿勢。

時間だけが過ぎていく。

手の組みは堅く、顔の皺は深く、祈りは一心に。

「……………」

祈りつつも老人は奏者の言い伝えを思い浮かべる。

旅路でどのような危険を被ったとしても、奏者だけは必ず無事であ

ったこと。

だが、無事なのは奏者だけであり、従者たちがどうなったかは伝えられてはいない。

奏者だけは何かしらの力で守られている、そう老人は考えていた。奏者をこの世界へと喚ぶ何者かの意味、それが力の源ではないかと。

「……………ここまでにしましょう」

祈りとは別の思惑を浮かべたことで、老人は祈りを終え帽子をかぶる。

地面に着いていた片膝を持ち上げて後ろへと振り向く。

黒い扉の正面には、大地の間への出入口がひとつ。

老人の振り向いた視線の先、立っている人物。

「おや、おはようございます。ヒルダさん」

老人が会釈すると、出入口に立つ年配の女性が頭を下げる。

女性は頭を上げると老人の隣へと歩いていく。

そして、先ほどの老人と同じ姿勢をとる。

姿勢をとる年配の女性に、ひとつ頷いて言う。

「日々のお祈り、お疲れさまですヒルダさん。

お祈りが済んだあとで結構ですので、のちほど朝食の用意、お願いいたします」

言い終えた老人は、眼を細めながら光差す天井を見上げた。

(三千年もの間、途切れることなく行われて来た奏者召喚の儀……)

直射日光をさえぎるように片手で顔を覆う老人。

(いつか、いつか終わることがあるのでしょつか……)

さえぎった手の平から、太陽をみつめる老人。

(終わるとしたら、それはいつなのでしょつか……)

答えなき自問を繰り返す老人は、小さなため息をひとつ吐いた。

昼下がり。

パストラの街を東西につらぬく大通りを行き交う人々。

行き交う人々のなか、立ち止まって話に興じる集まりが数力所ある。集まりから聞こえてくる声。

「聞いたか？ こないだの夜に聞こえたやつ」

「ああ、聞こえた聞こえた。なんか音楽が聞こえるなーって思ったら」

「いきなりはつきり聞こえだして、でも」

「数分するとまた小さくなっていった」

「またもはつきり聞こえるのが繰り返す」

「奏者が喚ばれたんだし、もしかして」

「間違いないだろうな。こないだのが”森の調べ”ってやつだろ」

「まさに言い伝え通りだな。いやあ聞けて幸運だなあ」

「ほんとほんと」

人だかりのひとつは花屋の近くにあり、立ち話の声は店内まで聞こえていた。

店内では草花の鉢植えに、如雨露で水をやっている目元に包帯を巻

いた少女がひとり。

鉄色した如雨露を両手でかかえ、鉢植えに水をやる少女は、意識だけを話に傾けた。

……アルトさんのこと、みんな話してる。すごいなアルトさん……)

ひとつ、またひとつと如雨露で水をやっていく少女。

しばらくすると人だかりは散って、話声も聞こえなくなった。

鉢植えに水をやりおえた少女は、壁際にあるおおきな樹木の苗を見る。

「こっちはお母さんが手入れしてるから、私は触らなくてもいいのだけど……」

小さい頃は触らせてもくれなかった草花の鉢植え。

そのことに寂しさを覚えてもいた記憶もあったが、

植物の手入れの仕方を知らない娘に対する母なりのしつけだったのだらうと少女は思う。

「一緒にお花の世話をしてもお母さんと私では、咲き方が違う……どうしてだらう」

十となった頃、世話することを許され、同時に世話の方法も教えてくれたが、結果が母とは異なった。

苗とは違う方向に振り向き、しゃがみこむ。

しゃがみこんだ視線の先には桃色の蕾をつけた植物の鉢植えがふたつ。

並んでおかれた鉢植え。

少女の眼前、右にある鉢植えの蕾は大きく色も良い。

反対に左にある鉢植えの蕾は、右より劣る大きさ、色もつやも勝っていない。

少女は左の鉢植えを手に取り、視線の先へと持ち上げる。

「どうしたら、貴方を綺麗に咲かせてあげられるのかな……」

十を越えて母の手伝いをするようになって知ったことがふたつ。

母、エラール・カマツクは大地で名の知れた、花を育てることに長けた人間だと。

訪れる人々から聞いた話では、パストラに店をかまえる以前は旅に出ていたと。

「お母さん……どんな旅をしてたんだろう」

これまで幾度も思った疑問。

だが、母の旅を知る人物はこの街にはおらず、母もまた教えてはくれない。

ただひとつ「あんたがあたしの腕にかなうようになったら教えてやるよ」と言うだけ。

その言葉を胸にしまつて七年。

いまだに母の腕を越えられそうにない。

（小さい頃は外や人が怖くて、ただお花の世話をしていただけだったけれど……）

いまは違う、少女は強く、思いを得る。

思いとともに胸の内に描かれるのは黒髪の青年。

初めて会ったときに言われた言葉を思い出して、吐息する少女。

（いまよりも、もっと綺麗なお花を咲かせたい）

手に抱えた鉢植えを身体で抱いて、少女はさらに強い意思を得る。

(そしてアルトさんに、綺麗に咲いたお花を見て欲しい)

数瞬、抱きしめた鉢植えを元の位置へと戻した少女は、立ち上がり建物の奥へ。

建物奥に置かれたテーブルの上には、一通の封筒と数枚の手紙。書かれた宛名はエラール・カマツクとリラヴェル・カマツク。

昨日届けられたものであり、届け主の名は、アルヒト・ヤマハ。

包帯の少女はテーブルに置かれた手紙を手取る。

手紙には以前送られた絵よりも精密な絵が付随していた。

色鮮やかに描かれた精密な絵には三人の人と、小人が三人。

「木霊族の小人さん、可愛いなあ……私も会ってみたい」

湖の絵と同様、笑顔で描かれている三人の人物。

中央にたつ黒髪の青年の肩には琥珀色した蝶が留まっている。

以前見たときよりも日焼けした青年の顔は、引き締まっているように少女は感じた。

「アルトさん……頑張ってる。不安もあるだろうけど、前向いて頑張ってますよね」

手紙へ話しかけるように少女は声を出す。

店先の硝子戸を軽く叩く音が聞こえる。

「！はい！」

音の聞こえた方へと返事をよこして、包帯の少女は歩き出す。自分も頑張ろう、との思いを抱いて。

数週間後、曇り空が濃く流れる神殿。

日光が差し込まない神殿内部は薄暗く、通路の各所ではロウソクの灯りがあつた。

その神殿の出入口、縦に長い白帽子と白い衣装を身につけた老人。曇天を見上げていた視線は、馬の蹄音が聞こえるとともに地面へと下げられていく。

老人の視線の先には、多くの草花を積んだ馬車。

煉瓦道を走る馬車は神殿そばまでくると速度をゆるめ、止まる。馬車からは金髪の女性と、灰色の布を被った少女が降りる。

老人はふたりの姿を認めると、馬車へと歩み寄っていく。

荷台から草花を地面へとおろしているふたりに近づいたところで、老人は声をかける。

「エラールさん、リラさん、お久しぶりです」

「はい。お久しぶりです、大神官様」

「やあ、大神官様。神殿来るのも久々だからねえ」

老人はふたりの返事に笑顔で頷き返す。

「アルト君が喚ばれたときから数えて、もう三ヶ月くらいですね」「そんなに立つちまつてたかい。これは神殿内の花は全部かえないといけないねえ」

大人ひとりぶんの大きさがあるカゴを、両手で持ち上げる金髪の女性。

灰色の布を被った少女は、小さなカゴをふたつ、片手に持つ。

老人は振り返り、ふたりを連れて神殿へと歩き出した。

白い石作りの長机と椅子が並ぶ、同じく白い石造りの部屋。

通路の出入口とは反対に位置するところには、厨房への出入口。

年配の女性が厨房の水場に立って、洗いものをしている。

腰よりも高い位置にある台には重ねられた食器。

流し台では蛇口から水滴が一粒、一粒と垂れ落ちていく。

厨房へと近づく軽い足音。

年配の女性は出入口へと顔を向ける。

出入口には花の入ったカゴを持った包帯の少女。

「ヒルダさん、お久しぶりです」

ヒルダはひとつ頷いて、水気を切った両手を動かして見せる。

両手の動きに合わせて少女は「はい」「ええ」と答える。

「私のところにも手紙が来ていて、アルトさん無事に試練突破できたようですね」

ヒルダは笑顔で頷きを繰り返して、再度両手を様々な形に動かす。

その動きを見て少女は小さく笑みを得る。

「ふふ。セリアさんが無茶してないかの方が心配って、私も思いま

す

少女とともにヒルダも笑みをほころばせる。

「そういえばヒルダさん。お花の交換に来たのですけれど」

ひとつ大きく頷いた女性は、厨房の奥を指差す。

指の先には台の上に乗せられた水色の花瓶。

花瓶には黄色と赤色の花が生けられてはいたが、何本かはしおれ、枯れてもいた。

花を見た少女は悲しそうに表情を変える。

「……すっかりしおれてしまっていますね。いま交換しますね」

両手を動かして頼む意思を伝える女性。

頷いてみせた少女は花瓶へと歩み寄り、カゴから白い布を取り出す。

花瓶の横へ布を広げたのち、生けられた花を布の上へと置く。

置かれた花へ向かって少女はささやく。

「……いままでありがとう……」

カゴを同じ台の上に置いた包帯の少女は、胸前で両手を組み、花へ頭を下げる。

しばらくそうしたのち、少女は布に置いた花を布で包み、

カゴから新しい花を取り出して花瓶へと生ける。

新しく生けられた花は桃色。

花を見た年配の女性は小さく驚き、少女の横にたって両手を動かす。手の動きを見た少女は照れた様子。

「いえ、まだお母さんにはかないません」

その言葉に女性は顔を左右にふって両手を動かす。
小さく頷く少女。

「はい。もっと頑張ろうと思います」

眼を細めて笑顔となった女性は、少女の頭をなでる。
なでられていた少女は不意の音に気づく。
女性もなでるのをやめて、天井を見上げる。

「雨……降って来ましたね」

「あゝあ、降って来たねえ」

「エラールさんたちが来られる前から、風に雨のにおいが混じって
ましたからね」

「だろっねえ。あたしも来る途中で降られないか心配したさ」

「はっはっは、降られていたら今頃たいへんでしたでしょう」

「まあ、あたしは日頃の行いがいいからねえ」

金髪の女性と老人は、互いに顔を見て笑い合う。

互いの手には再会を祝した杯が握られていた。

雨音が止まない神殿のなか。

「ここで最後……かな？」

新しい花の入ったかごを持った包帯の少女は、神殿住居部分にある部屋の扉を開く。

部屋には何日も人の気配がなく、しかし掃除されていたことで、ほこりや汚れとは無縁の状態が保たれていた。包帯の少女は気づく。

「あ、そっかここ……アルトさんがいた部屋だ」

見覚えのある家具の配置。

壁には吊るされた白い服と黒いズボン。

寝台横にある花瓶には、三ヶ月ぐらい前に少女が生け直した四色の花。

カゴを両手で下げた少女は、扉そばに立って室内を見回す。

こもった雨音が聞こえる、閉じられた窓。

少女は手に持っていたカゴを寝台へとのせて、窓へと近づく。外側へと両開きとなっている窓。

包帯の少女が鍵を外して軽く押せば、窓はゆっくりと開いていく。

開いた窓からは湿気混じりの空気。

乾いた室内の空気と混ざり合い、少女の身体を通りすぎていく。身体で空気を味わった少女は、まどの外を見る。

雨はすでに小雨へと変わり、遠くの空では雲間から日差しがあった。

雲の動きとともに日差しは場所を変えては照らしていく。

日差しが照らす先には煉瓦道。

少女の目の前では小雨が止みつつあった。

小雨ではなく神殿に通じる煉瓦道を見つめる少女。

日差しが照り、途切れ、照っていく道には人影。

少女は見つめている。

小雨が止む。

日差しが少女の顔へとかかる。

道の上では誰かに手を振る人影。

少女は手を振り、部屋の扉へ歩む。

少女は神殿の通路を歩く。

歩きは、小走りとなり、やがて走り出す。

出入口にたどりつき、階段を走り降りる。

煉瓦道を歩く足音へと少女は近づく。

道を歩いていた人影は足を止めて少女を見る。

息を整える包帯の少女。

息を落ち着かせた少女は顔を上げる。

目の前には黒髪の青年。

青年はひとつの言葉を少女へと掛けた。

少女は満面の笑みと声を持って言葉に応えた。

「おかえりなさいアルトさん！」

第十三話 火へ繋がる街

大きな雲がひとつ、白い穴を開けたように浮かぶ青い空のもと、黒髪の青年と若草色髪の男は、剣戟からの音を神殿外に響かせていた。

半袖と短い裾の衣服をまとう青年は、右手に構える白い剣を、片手と両手に持ち直しながら手数多く、甲高い風切り音とともに剣を振っていく。

青年に対峙する男は袖のない上着と足首までを覆う長い裾を持った衣服を着ており、自身の身長ほどの長さがある赤き大剣を、柄を天にもって青年の剣を防ぎ、

ときに鈍い風切り音をたてながら青年へと大剣を振り下ろしている。剣を受ける男に対して、剣を避ける青年。

男の肌には細く小さな切り傷、青年の身体には数力所に剣先を引っ掛けた傷と流れる血。

神殿の外壁に立っているふたりの少女のうち、両手を胸前で組んでいる包帯の少女は、落ち着かない様子で青年を見ている。

隣に立って外壁にもたれている橙髪の少女は、ときどき欠伸で大きく開く口を手で隠している。

男が大剣を縦に構えて一步踏み出す。

青年は剣を正面へと伸ばすように持って一步下がる。

青年が下がった瞬間、男はさらに踏み出して後ろ足で地面を蹴る。
跳ぶ。

相手の動きに青年は停止。

顔には動揺。

意味をなさない言葉が口から漏れる。

大剣が振り下ろされる。

青年は眼をそらしながら両手で剣を頭上へと掲げる。

響く金属音。

地面へと大剣を振り下ろした姿勢で着地する男。

男の背後、地面に勢いよく打ち倒された青年。

青年が持っていた剣は地面へと刺さっていた。

「おつかれアルト。立てるか？」

「つつつ、大丈夫。最後受け流したから」

傍らの地面へと大剣を突き立てた男は、青年へと手を伸ばす。

「そのわりには握りが持たなかったな」

「エオリアの振りが強すぎるんだよ。というか跳ぶなんて思わなかった」

出された手を握って青年は地面に立ち、衣服を叩いて土ぼこりを落とす。

「だーくそ、いまだに勝てる気がしないや」

「ははっ。剣を握って数ヶ月の相手に負けたら騎士の名折れだ」

「そのうち必ず名折れさせてやるから覚えてる」

「いいだろう。いつでも挑戦は受けてやる」

そう言っつて男と青年は互いに笑いあう。

ふたりのもとへ歩いてくる少女たち。

包帯の少女は足早に青年へと駆け寄り口を開く。

「アルトさんっ！ 身体大丈夫ですか！？ 怪我とか平気ですか！？」

「え、あ。だ、大丈夫だつて。いつもこんな風だし」

「いつもの……ことなんですか。でも、でも気をつけてください！」

「う、うん。なるべく気をつける。いや、ちゃんと気をつけるから！」

普段にはない強い口調で青年に接する包帯の少女に、

青年は両の手の平を向けて戸惑い気味に答える。

少女の後ろから歩いて来た橙髪の少女は欠伸しながら言う。

「ほあゝわあ。アルトー傷、リラに治してもらおうといいよー」

「欠伸しながら話すのは止せ、セリア」

「だってーまだ寝足りないもーん」

「昨夜は神殿のみんなが帰還を祝ってくれたからしょうがないよ、

エオリア」

いまだに欠伸をしている橙髪の少女と、眉を詰めた顔をしている若草色髪の男に、
苦笑顔を送った青年は頬をかきながらつぶやく。

「ってリラに傷を治してもらおう？ 傷ぐらい自分で手当するけど」

「あの、アルトさん。すこしじっとしててもらえますか？」

「え、いいよりラ。自分で手当するから」

「その、術を使いますので手当はしなくてもいいと思います」

「術？」

と自分で言ってから精霊術のことかと青年は気づく。

「はい。地の精霊にお願いして身体の傷を治してもらいます」

そう言ってリラは胸前で両手を組み、組んだ両手を顔に近づける。

数瞬後、青年は身体全体が暖かい空気に包まれる感覚を得る。

腕や足にあった傷が青年が見ているなかで血が止まり、傷がふさがっていく。

「痛みも……なくなつた。すごい、傷が治せるなんて……信じられない」

青年は傷があつた箇所をなでるなどして、傷が治っていることを実感した。

「リラは地の精霊術が使えてな。育てている草花の傷や痛みなども術で治しているんだ」

隣に立った男を見れば、青年と同じように傷が治っていた。包帯の少女に礼を言った青年は、男の言葉に疑問顔となる。

「あれ、でもおかしくないか？」

「なにがだ？」

「なんで地の精霊術は傷を治せるんだ？」

他の術みたいに土を出したり、地面をどうこうするわけじゃないのか？」

「もちろん、自分の術やセリアの術のように土の塊を出すことはできる」

言葉を言い終えた男は、包帯の少女を見る。

包帯の少女はひとつ頷く。

「いま私が傷を治してみせたように、精霊の力を身体に与えることもできるんです」

「精霊の力を、身体に与える？」

「あーそっか、アルトは術が使えないから説明忘れてたー」

「精霊術の授業では何を教えていたんだセリア……」

橙髪の少女の背後で、若草色髪の男は苦悩の顔を浮かべていた。

「ボクにはボクなりの教え方があるんだよー」

「ほう。ではその教え方とやらを教えてくださいらおうか」

「馬鹿は黙って聞いてたらいいの！」

「一体いつになったらおまえは自分を馬鹿呼ばわりするのをやめるんだ！」

口喧嘩を始めた二人をよそに青年は口を開く。

「……で、リラ。どういうことなのかな？」

「……はい。私たちが使っている精霊術には大きく二つの使い方があって、

そのうちのひとつがアルトさんも知ってるように術を放つやり方です」

「ふんふん」

「もうひとつが先ほど私が使った身体へと力を与えるやり方、

これは精霊の力を使って身体の治る力を強めるといったことができます」

「へえ……そっか。なら地じゃなくて火や水でも似たようなことができるの？」

「はい。地とはまた違った形で身体的能力を強くすることができたりします」

「そうなんだ。いろいろできるんだなー精霊術って」

「はい」

両腕を組んで頷く青年に、包帯の少女は嬉しそうにこちらも頷きを返す。

青年の腹部からくぐもった音が響く。

「ん。そっぴや腹へってきたかな」

「でしたら食堂にいきませんか？」

「うん、そっしょうか。エオリアとセリアも行くだろ？」

いまだに口喧嘩をしていた二人へと声を掛ける青年。

その声に気づいて振り向く若草色髪の男。

「……いや、ちょっと用があるから先に行っててくれ」

「……ボクももうちょっとしたら行くよー」

そっか、と声を出した青年は剣を拾って、包帯の少女を伴い神殿へと歩いていった。

青年と少女の姿が見えなくなったところで、若草色髪の男は後ろから地面へと倒れた。

「あー！ー！疲れた……そして危なかった」

地面へと倒れ込んだ男の隣に、橙髪の少女は座り込む。

「最後の跳び込みからの切り掛かり。エオリアらしくなかったね」

「ああ。アルトの早さに付いていくのがやっとだった。それで焦ってあんなことやった」

「ほんと、見ててはらはらしたよボク。負けちゃうんじゃないかって」

「馬鹿言え、負けるか。負けてたまるか」

「……ボクも負けてほしくないかな。かっこわるいし」

「はつきり言ってくれな」

「ふふっ。だって負けたら騎士の名折れでしょ？」

「余計なことを言ってしまった……」

顔を手でおおう男、その男を少女は優しく微笑んで見つめる。

「でも負けてもいいよ。ボクのなかでのエオリアはずっと”騎士”だからね」

「……」

「あれ、もしかして照れてる？ やだーいい歳した男が照れてるー」

「お、ま、え、は……」

「あははは！ さてさて、ボクもお腹空いたから先に食堂行ってるねー」

顔を怒らせて身体を起こした男から逃げるように少女は立ちあがり、神殿へと向かって駆け出していった。

その姿を見てちいさくため息を吐いた男は、再び地面へと腰をおろす。

しばらくの間、風に当たって火照った身体を覚ましていると、後ろから近づく足音。

「アルト君、強くなりましたね」

「大神官殿！」

立ち上がるうとする男を、老人は手で制して顔を左右にふる。

「そのままで結構ですよ、疲れてもいることですし」

「……ありがとうございます」

「どれ、僕も座りましょうか」

言葉とともに老人は男の横に座り込む。

「大神官殿……アルトの強さ、どう思いますか」

「ふむ。それはどういう意味でしょうか？」

「そのままです。剣も握ったことがない人間が、たった数ヶ月で自分を追い越そうとしている。

……正直、自分には得体が知れません」

「おやおや、神殿を代表する騎士にしては弱気な言葉ですね」

「大神官殿！」

「はっはっは。そんなに気味悪がる必要はないと思います」

「なぜですか？」

「それはアルト君だからです」

遠く空へと視線をやっている老人へ、眉をひそめた顔をする男。

「アルト君は……君も知つてのとおり常に不安を抱えています。

いつ帰れるのか、生きて帰ることができるのか、このままでいいのか、と。

僕が言うよりは、旅を一緒にしてきた君の方がより分かっていることだとも思っています」

男は僅かに顔を俯けて視線を地面へと向ける。

「ですが彼は、不安と向き合おうといまを生きています。

そしてアルト君はリラ君を隣に笑っています。

リラ君を思いやり、リラ君のためにできることは無いかと頑張ってもいます」

「……」

「わかりますかエオリア？ アルト君は、異界の人間ではありませんが、

その意思、その心、その思いは僕たちとはなんら変わりがないのです」

「ですが……あの力は……」

老人はゆっくり顔を振る。

「力と意思は、また別です」

「……わかつてはいます、わかつてはいますが！」

「ならば、こう言いましょう。アルト君より強くなりなさい」

「えっ!?!」

「得体の知れない力、確かに薄気味悪いかもしれません。」

しかし、そのような力を前にしても臆することのない強さを得るのです」

「そんな、一体どうやって……」

「エオリア。貴方も問われたことがあるはずです。強さとはなんなのかと。」

強さとは……ただ単に力だけを指すのですか？」

老人の言葉に、男ははっとした顔となる。

「強さとは、力だけでも、知識だけでも、技術だけでも、経験だけでも、意思だけでもありません。」

ありとあらゆる事柄を己の内に取り込んで初めて、強さが現れるのです」

男は両手を強く、強く握りしめる。

「強く、強くなりなさいエオリア」

「……はい！」

橙髪の少女は鼻歌を背後へと流しながら神殿外を歩く。両腕を背中で組んで、大股で一步一步をゆつくり刻む。少女の前方からはこどもたちが駆けてくる。

「あ、セリアおねーちゃんやほー！」

「おねえちゃん、ぼくらがこっちきたのないしょねー」

「また旅のおはなしきかせてー」

それぞれが声とともに手を振りながら少女の横を通りすぎて行った。

少女も子どもたちに歩きながら手を振り返す。
そのまま鼻歌を歌いながら少女は歩く。

強く日差す太陽のもと、神殿外に生える樹木からは甲高く鳴る虫の音。

少女は歌いながらそちらへ眼を向けて、季節の変わりを思う。
立ち止まり、背中に組んだ腕をとりて片手を頭上へとかけける。

白い穴を開けたようにぽつかりと浮かんだ雲は、太陽を隠し始める。
歌う少女の周囲は陰り、少女が感じる暑さもやわらぐ。

大きく浮かぶ雲に、少女は知識だけで知っている大きな生物を思い浮かべた。

次第に雲は流れていき、ふたたび周囲は陽光が差し出す。
背中で腕を組み、歩き出す、歌う少女。

視界には左右を見渡しながら歩いている子どもがひとり。

「あ、セリアねーちゃん。あいつらどこか知らない？」

こどもの言葉に少女は歌いながら指をさす。

礼を言っつて子どもは、あらぬ方向へと指さされた先に向かって駆け出した。

内心で笑みを抱きながら少女は歌い歩く。

そのまま歩く少女の視界には、数人の男女とともに衣服などを干している金髪の女性が映る。

女性の姿を認めると、少女は歌うの止めて女性へと近づいていく。

「やっほーエラおばさーん」

「やあ、セリア。なんだい散歩中かい？」

「そんなとこー干すの手伝うよー」

「ありがとさん。だったら向こうに置いてあるカゴの中身を干してくれるかい」

「はい」

金髪の女性が指差したカゴに近寄る橙髪の少女。

カゴから数着の衣服を手に持ち、太く長い紐を衣服に通していく。大小様々な衣服を紐に通したあと、紐の端を近くに生えている樹木に結びつける。

紐の真ん中部分を樹木にひっかけ、もう一方の端も違う樹木に少女は結ぶ。

近くには同じように樹木に結ばれた紐と、吊るし干される洗濯物の姿。

吹かれる風になびいて揺れる衣服たち。

「んー気持ち良いかぜー！」

「これならあつという間に乾くだろうねえ」

「だねー」

金髪の女性に微笑んで振り返る橙髪の少女。

「ねーエラおばさん」

「なんだい、セリア」

「……リラ、最近どんなかんじ？」

「そんなの聞くより見た方が早いんじゃないかい」

「そーだけど、なんか押しが強くなった、かな」

「ふふん。だれに対してつてのは野暮だろうね」

「あーおばさん意地わるーい」

「悪そうな顔してるあんたに言われたくないよ」

他の洗濯物を干していた数人の男女は、金髪の女性と橙髪の少女に礼を言つて神殿へと戻る。

「でも、アル坊から手紙が届くようになって、色んなことを知つて、あの子自身なにかできることはないかって……思つてるんじゃないか」

「あゝあ。アルトつてずるいなー」

「なにがだい」

「だつてだつて、ボクやエオリアもいっぱいリラのことを思つてさ、あれやこれやと色々としてきたのにー」

「ははっ。なーに言つてんだい、いまのリラがあるのはあんたたちのおかげじゃないか」

「……そうだと良いんだけど」

「たく、あんまりそんな顔したら駄目だよ？」

「いつも能天気にしてるあんたがそんなんじゃないや周りまで暗くなつちまうさ」

「能天気つてひーどーい……ボクも心配、ううんちよつと迷つてるのかな」

草の生える地面に腰を下ろして空を見上げる少女。

「アルトが一生懸命リラのことを思つて動いているけれど、」

「ならボクはどうしたらいいのかなつて思つちやつて」

少女は見上げる視線の先に片手を広げる。

「いまはね、アルトの案内をしてるからリラのこと、どつちすることとできないし。」

かといつてアルトだけに任せてもいいのかなーとも思つたの」

広げた指から差し込む光に眼を細める。
隣に座る少女を見て、金髪の女性はふうとため息。

「……あんたもけっこう、ひとつのことしか見えなくなるんだねえ」
「えっ？」

「リラは、さ。あんたたちのおかげもあるけど、あの子なりに頑張ってもいる。」

どうにかしようなんかしようっでずっと頑張っているさ」
「……」

「だから、って言うわけでもないけどさ。お姉さんは妹離れする頃合いじゃないかい？」

「妹、離れか……」

「ま、物のたとえだけだね。思いやることを忘れさえしなきゃいいのさ。」

あとは、なんだろう、あんたもあんた自身のことをもっと考えてやりなつて話さ」

「ボク……自身のこと？」

金髪の女性は少女の隣に座り、少女は女性に顔を向ける。

「だれかを思いやる事が出来るのは良い事だと思うよ。」

「ただどね、思いやつてるだけがあんたの生き方かい？」

「どこかにはあんたのことを思いやつてくれる人がいて、」

「たまにはそうやって思ってくれてる人のために動いてもいいんじゃないか」

「ボクを、思ってくれてる人……」

そうつぶやいて少女は、自身の父親やいままで傍らにいてくれた若草色髪の男を思い浮かべる。

「うーん、どうしたらいいかな。エラおばさん」

「それこそ野暮ってものさ。あんたのしたいようにしたらいいのさ」
「そう言うと思った」

「ははっ。そうやって笑えるなら平気さ。笑顔でいることも大事だからね」

「うん！」

神殿の出入口付近を歩く、黒髪の青年と包帯の少女。
出入口から神殿内へと吹いてくる風に、少女の藍い長髪が揺れる。

「んっ……」

「リラ？」

声を漏らした少女へと振り向く青年。

花の髪飾りをした少女は気恥ずかしそうに俯いていた。

「いえ、そのちょっと髪がくすぐったくて……」

「そっか。どうしたのかなって思っちゃった」

青年はちいさく笑う。

立ち止まった少女は恥ずかしさを誤摩化したいのか長い髪を両手でいじっている。

笑い終えたあとで青年は、なにかを思い出した顔になる。

「あ、そうだ。リラ、ちょっと付いて来てくれる？」

「？ はい。アルトさん」

疑問顔をした少女を連れて、青年は神殿住居へと足を進める。

そのまま歩き続けてふたりが着いたのは青年の寝泊まりしている部屋。

扉の前で少女に待つよう言った青年は、ひとり部屋へと入る。

少女の耳にはなにかを探している音が聞こえたが途中で止まり、扉へとちかづく足音。

少女の前に現れた青年は、手の平ほどの大きさの袋を持っていた。

「アルトさん、それは？」

「これ、地の精地に住む木霊族からもらった花の種なんだ」

「もしかして……手紙に書いてあった渡したいものって」

「うん、この種のことなんだ」

青年は手に持っていた小袋を少女へと渡す。

少女は大事そうに両手で小袋を持ち、なかをのぞくと三粒の白い種。

「精地へと行ったときにさ、とても綺麗で不思議な花があったんだ。

けれど持って帰るには保たないだろうから、種をもらってきた」

「アルトさん……ありがとうございます」

少女は両手で小袋を包み持ち、頭を下げる。

青年はその様子に両の手の平をひらひらと空中に泳がせる。

「いいんだって、俺があげたかっただけだから。

でもさ、その種どうも育てるのが難しいって話なんだ」

「そうなんですか？」

「うん。地の精地、というか精地の森でないと芽すら出ないって言われた。

けれどさ、リラのお母さん、エラールさんの子なら大丈夫だろうって族長さんがさ」

「……………」

青年の言葉に、少女は軽く視線を下げる。

（私の知らないお母さん……一体どこでなにをしていたんだろう）

「リラ？」

「……アルトさん、私がんばって育てます。

ちゃんと育てて立派な花を咲かせたいと思います」

「うん。俺もリラが育てた花が咲いたところ見てみたい」

「はい！ 楽しみに待っててください！」

小袋を胸前で抱えた蒼い長髪の少女は、見えない眼を青年に向けて力強く答えた。

数日後、神殿から火の方角へ馬で進み行くのは三人の人影。

影が進む道は地の方角と同じように煉瓦で作られているものの、道の周囲に草木はすくなく、砂利や大きな岩ばかりが目立つ。

先頭に行く馬には、強い日差しを避けるためにつばの長い帽子を被った橙髪の少女。

中央の馬にまたがる黒髪の青年は、白い布をかぶって日差しを遮る。最後尾では水筒に口をつける若草色髪の男。

風景を見ている青年の視界の先、遠くにはゆらいだもやが映っていた。

（膺気楼ってやつのもとな、あれって）

ときおりいくらか離れた地面からは、地中から低くとどろく音が聞こえてくる。

その音に疑問を覚えつつ青年は、後ろを進む馬へと声を掛ける。

「エオリアー生きてるかー？」

「……鎧が熱くてかなわれないが生きてはいる」

「昼間ぐらいは脱いでもいいんじゃないか？」

「……いっどこから危害がやってくるとも限らないから駄目だ」

「そっか。でも暑さで倒れたりするなよ」

「だいじょーぶだよーボクが涼しくなるよーにしてあげるからー」

先頭から聞こえた声に、どうやって？と振り向いた青年の先、馬を飲み込むくらい大きな水球が、片手を振り上げた少女の頭上に浮かんでいた。

「セ、セ、セリアアアア、もしかしてそれを……！」

怯えた顔になった青年といっしょに乗っている馬も怯えた声を出した。

青年の反応に、口角をつりあげる少女。

最後尾の男は諦めきつた顔。

「やってくれるならひと思いのほうが楽だ」

「なんで諦めてんだよエオリアー！」

「それではエオリアの思いに応えましょー！」

「ばっか、やめろー！」

叫びながら両腕を眼前で交差させた青年。

瞬間、大きな物体がはじける音が聞こえた。

「これは……霧か？」

左右を見渡した男の周囲には薄い霧がかかり、気温が下がっていくのが男にはわかった。

「セリア……おまえ、いつのまにこんな術を？」

「んーどうせ火に向かうなら暑いだろうし、あれば便利だと思っ
ねー」

「と言ってもせいぜいひとりの周りにぐらいしか霧かけてられない
けどー」

「……すまない」

「そこはお礼を言ってくれとボク嬉しいかなー」

「ああ、ありがとうセリア」

前へ進みながら片手を後ろへと振る少女に、男は微笑みを浮かべる。
青年はふたりのやりとりを聞きながら両腕をおろし、呆れた表情。

「ったく、人をからかうのも勘弁してくれよ」

そう言った青年の視界には、土色の大きな壁を備えた街が映った。
そして街からは昼時を示す鐘の音がいくつも鳴り響いてくる。

「やっと見えて来たな」

「ああ」

「そうそうーあれが鐘が鳴り響く街、ディオソだよー」

火への旅路において、初めての街へと黒髪の青年たちはたどり着く
うとしていた。

第十四話 鐘鳴る街名物（前書き）

∨ i 1 0 9 8 1 | 1 3 9 9 ∨

第十四話 鐘鳴る街名物

遠くに陽炎を揺らめかす大地を歩く馬に乗った人影が、土壁に守られた街へと近づいていけば彼らの視界には、槍や剣などで武装した男達の姿が見受けられた。

武装した男達は三人が歩いてくる方向以外にも視線をはりめぐらしており、男達を見る黒髪の青年は、なにかを警戒してる？ と内心に思いを得る。

「エオリア……あの人達、なにかすごい警戒してるんだけど」

「ああ、いまの時期はー」

身体周辺を薄い霧に包まれた若草色髪の男は、青年の言葉に答えようとした。

瞬間、道を進む三人の背後と前方の街から音が鳴り響く。

背後からは地鳴りを思わせる低く連続した音。

前方の街からは甲高い鐘の音が断続的に鳴る。

青年の視界に映っていた男達はだれもが慌てた顔になり、三人の方へと向かって叫び始めた。

「おまえたちー！ 早くこっちへ来るんだ！」

叫びが聞こえる前に、背後の異常を察した三頭の馬は、駆け出し始める。

先頭の馬に乗っていた橙髪の少女は、突然走り始めた馬にしがみつく。

同じように馬にしがみついた青年は、いきなりの事態に焦る。

(え、なんだ、なんだよ一体！ 後ろになにがいるってー)

上下に揺さぶられながら青年は焦る内心のもと、背後へ視線を振り向ける。

そこには、馬に乗った青年たちの五倍以上は背丈のある、土色と茶褐色と黒色がまだらに混ざった模様の物体。

時に高く、時に長く伸ばされる十数本の足らしきもの中心に四つの黄色い眼。

眼がついているのは丸い頭部であり、頭部だけでも五倍以上の背丈があった。

「う、う、うわあああああああああああああああああああああ
あ！」

内心の焦りは意識の混乱を促し、混乱は恐怖を呼んだ。

青年は声の出る限り叫び、馬にしがみつく。

最後尾を走る馬に乗る男は、青年と同じように叫びたくなる衝動を抑えながら、

背後から煉瓦道を破壊しながら追って来る巨大な生物を見据える。

「これが……ディオソ名物の、巨大砂蛸か！」

土壁近くに陣取る男達は、馬にのって掛け走ってくる三人へ叫んでいる。

「もっと馬を走らせやがれー！ いそげいそげー！」

「最後のやつ、振り返ってないでさっさとこっちへ来い！」

「ぎゃー！ もうだめだー！ いやーばらばらのぐつちゃあ！」

顔を手で覆って叫ぶ男は、隣にいた男から拳骨を喰らった。

「あほかテメエは！ なに諦めてやがんだ、ほれさっさと行くぞ！」

隣の男を殴った長槍を手にした男は、拳骨喰らった男に声を掛けて走り出す。

拳骨を喰らった男は頬を抑えつつ、背中に矢筒を背負い長大な弓を手に駆け出す。

二人へと続くように幾人かの男たちはそれぞれの獲物を手に動き出す。

後方から迫る巨大砂蛸へと視線を見据えていた若草色髪の男は、一度前方へと顔を向ける。

先を行く二頭の馬には、しがみついている姿勢の少女と青年。

男は手綱を握る手に力をこめ、再度背後へと振り返り、片手を後ろへ高く掲げる。

背後から迫り来る巨大砂蛸の勢いは凄まじく、見ているだけで男は気圧される。

奥歯を噛み締めて、男は胸に強く念じた。

（我が守護となる精霊よ！ 我が使命果たすための力、目の前に現せ！）

念じるとともに身体に熱を感じた、同時に掲げた片手の掌からは拳ふたつほどの火の球。

(もつと、もつとだ！)

さらに念じることで、火の球は男自身を飲み込むほどの大きさとなる。

(こんなもので足りるかっ！)

噛み締めた奥歯から歯ぎしり音を響かせ、男は眉を強く立ててさらに、さらに、さらに念じる。

掌の上空へと現れた火の玉は馬に乗った男ごと飲み込む大きさとなり、

火の玉の影響を受けて男の周囲にあった霧はすでになくなっていった。掌先から感じる熱さに汗を垂れ流す男は、背後の巨大砂蛸を睨みつける。

地面へと叩き付けられる足の動きを見て、男は火の玉をぶつける機会を伺う。

数瞬、時間が流れたとき、背後へと振り向いている若草色髪の男へ届く声。

「そこで火の玉出してる野郎！ ワシがやつ動き止めたらぶっぱなせ！」

届く声は低くも通る声だった。

声を聞いた男は、かざした掌に意識を集中させる。

「うおっ！？ また火の玉がでかくなりやがった！」

いつのまにかすぐ側で聞こえた声に、若草色髪の男は声の方向へ眼を向ける。

そこには長槍を手にし、あご髭を生やして頭部には白布を巻き、布から伸びる黄土色の髪を肩口でぎっくり切りそろえている人物がいた。

馬とは反対の方向へと走っていった黄土色髪の人物は、地面へと長槍を突き刺し、叫ぶ。

「化け蛸があ！　ここはおめえの遊び場じゃんねえだよ！」

力強く叫んで地面を勢いよく殴りつける。

瞬間、地面から太い土の柱が数本飛び出して巨大砂蛸へと向かう。飛び出した土柱は砂蛸の歩みを防ぐように、砂蛸以上の高さまで伸びる。

砂蛸は自身の前方に現れた土の柱を叩き落とそうと足を振りかざす。

「コル！　さつさと放て！」

「いまやりますよ！」

コルと呼ばれた白い帽子をかぶった人物は、黄土色髪の人物横に長大な弓を構えて立ち、矢を放つ。

風がまとわりついた矢は、土柱をたたき壊そうとする砂蛸の足よりも早く、土柱に着弾。

土柱は矢のまとなっていた風に碎かれ、その身を大きな土塊となす。矢がまとっていた風はそこで止まらず、土の塊を砂蛸の身体へと吹き飛ばす。

同じように矢で碎かれた他の土柱も、大量の土塊を雨のように砂蛸へと降らせる。

砂蛸は、降り注ぐ土塊に、ひるむ。

「火の玉あー！」

馬から降り立ち、男達の背後に立っていた騎士は、黄土色髪的人物からの合図に無言で頷き、上空へと掲げた掌の腕を後ろへと引き、肘を曲げる。

曲げた肘をばねにして広げた掌とともに、火の玉を砂蛸へ向かって押し込んだ。

砂蛸にぶつかった火の玉は周辺に熱風と砂埃をまき散らす。

熱風と砂埃を遮るように顔を腕で覆う男達。

辺りにはなにかが焦げた臭いが漂う。

音は、風が吹き付ける以外、なにも聞こえない。

三人は武器を構えて、砂埃に隠れて見えない前方を注視する。

「……おい、火の玉出してたやつ。手応えはどうだった」

「……確実に当たった、が先ほどの沈むとも思えん」

「え〜!? あれ食らって生きてるとか勘弁してくださいよ〜?」

長大な弓を構えた男が泣き言をほざいてるなか、

街の方からは武装した男達が大勢追いついて来た。

追いついた男達は三人の周囲に立ち並び、構える。

街へと半ば暴走気味に走っていた二頭の馬は、

武装した男達に止められ、橙髪の少女と黒髪の青年は地面へと降りていた。

地面へと足を降ろした青年は、落ち着かない胸を手で押さえながら

街と反対方向を向く。

視線の先には、空中で大量に舞っている砂埃。

「……どうなったんだ？ あの生物はどこに？」

状況を理解していない青年はひとりつぶやく。

そのまま視界をさまよった視線は、大量に舞う砂埃の前にいる男達のなかに、若草色髪を認める。

「！ まさかエオリア！」

あのでかい生物と戦うつもりなのか！ と心で続けた青年は、腰横から白き剣を抜き出して駆け出そうとする。が、横手から伸びた手に腕を掴まれる。

「セリア！ なにするんだ！？」

「だめ。アルトはいっちゃだめ。これはエオリアのためなの」「なにを言っ……」

目の前の少女の様子に、青年は言葉を最後まで言えない。

橙髪の少女は身体を震わせ、腕を掴む手は強く力が込められていた。涙をこぼしそうになる目元を腕で拭った少女は、震えの止まらない身体を持って言う。

「エオリアは、アルトを守るための人。だからアルトはいっちゃだめなの！」

「そんな……助けにもいけないのか」

普段とは違う焦りと恐怖がないまぜとなった少女の声に、青年は胸に強い衝撃を受ける。

音が響き渡る、低く地鳴りを思わせる音。
少女と青年は咄嗟に音の方へと視線を向ける。

砂埃が晴れた向こう、各部位を焦げつかせた巨大砂蛸が街へと進み出した。

砂埃が晴れた地面には黒くなった土の塊が落ちていた。

「くそが！ 土を降らせたのが反対にじゃまになっちまったか！」

「リゾル先輩！ んなこと言っていないで早く逃げましょーよ！」

「馬鹿野郎！ ここで食い止めねえと街があぶねえだろうが！」

地面を叩き付ける砂蛸の足をかいくぐりながら言葉を交わす男二人。同じように足を避ける若草色髪の男は、思考する。

（さっきのは降る土が邪魔して頭部に当てられなかった。ならそうでもないなら！）

「さっき土術を使ったおっさん！」

「ワシはおっさんじゃねえがなんだ！」

「……ワシって言うてるからおっさん呼ばわりされるんですよ」

「黙れコル！ で、なんだ！」

「でっかい壁を奴の前に作ってくれ！」

「はあ！？ それで止まるわけねえだろ！」

「いいからやってくれ！」

どうなっても知らんからな！？ と言った黄土色髪の男は、巨大砂蛸から大きく距離を取るため街へと走りだす。

周囲にいた武装した男たちも同じように街へと走り出した。エオリアも同様に駆け出しながら、身体の鎧を外して地面へと捨てて走る。

立ち止まった黄土色髪の方は、地面に長槍を突き立て、

「くそつたれがああああ！」

地面を強く殴りつけた。

巨大砂蛸の眼前にある地面の土が盛り上がる。

盛り上がった土はそのまま壁となり背丈を伸ばし続ける。壁が伸びるのを振り返って確認したエオリアは声を出す。

「さつき風術つかった弓の人！」

「えええ！？ 今度はぼくですか！？」

「風で自分を壁の上へと飛ばしてくれ！」

「ばらばらになっても責任とりませんから！」

泣き言をほざきながら弓を構えた帽子をかぶった男は、エオリアとともに足を止める。

足を止めたエオリアは赤き大剣を抜き出し構える。

構えたエオリアの背後に立った男は、矢をつがずに構えた弓を騎士の背中に合わせる。

「ぶつとばすよ！」

「やっつけてくれ！」

応答に弓の弦を鳴らす男。

瞬間、暴風が騎士を背後から襲い、空へと身体を吹き飛ばす。歯を噛み締めるとともに漏れる声。

暴風に飛ばされる身体はなんども空中で回転しつつ、壁上の空間へ

とたどりつく。
回転する視界のなか、騎士は街の土壁付近にあるふたつの色を認める。

黒と橙。

(そんな泣きそうな顔するなセリア)

場違いな思いを得る騎士。

一瞬、そんな自分に呆れたが、すぐに眼下に意識を向ける。

すでに身体は勢いを失い、巨大砂蛸に向かって落下しはじめていた。砂蛸は眼前にたちはだかる土壁を高く振り上げた足で叩きつける。

「ちい！ やっぱもたんか！ おまえら奴の注意をこっちに向ける！」

黄土色髪の叫びに武装した男たちは各々の精霊術を砂蛸へと放つ。放たれた術のことごとくが砂蛸の足に阻まれ打ち消されていく。

「せんぱい！ 正面からは無理ですよー！」

「だからあいつは飛んで行ったんだろ！ 黙って仕事しろ！」

落下しつつ太陽の光を背中浴びるよう姿勢を制御した騎士は、頭上で赤き大剣を構える。

(今度は外さん！ 頭部に直接当てて！)

決意とともに苛烈に念じる。

（一撃で！ 一撃で！ 一撃で！）

身体が燃えた、そう騎士が感じたとき握りしめた大剣に熱を覚える。炎をまとった赤き大剣は、炎の剣先を伸ばす。

伸びるとともに剣幅も広がり、数瞬の後、騎士の背丈三倍以上となる炎の大剣が出来上がった。

掌が熱く痛みを得るが、騎士は無視。

目の前には巨大砂蛸の頭部が迫る。

街の土壁付近に立っていた橙髪の少女は、駆け出し始めた。慌てて黒髪の青年も駆け出していく。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

激しく鼓動する胸を誤摩化すかのように騎士は咆哮する。

そして、咆哮とともに炎の大剣を眼下へと強く握って、振り降ろす。

直撃。

炎の大剣が巨大砂蛸の頭部へとぶつかるのを見て、黄土色髪の男と帽子をかぶった男は走り出す。

砂蛸の頭部は中央部分が凹み周囲が焼き焦げていた。しかし、砂蛸はまだ生きているのか足は動き続けており、動きは激しくなっていた。

また、炎の大剣は既に失せており、赤き大剣を手放した騎士は地面へと落下している。

騎士の掌は火傷しており、顔にも水ぶくれや軽度の火傷があり、炎の大剣をぶつけた際の衝撃で気絶しているようでもあった。騎士が落下していく先には激しく動き回る砂蛸の足。

それを見た帽子をかぶった男は、矢をつがえずに弓を構える。

「人命救助も仕事のうちだ！ 黙って放て！」

「まだ何も言ってますんから！」

弓の弦を鳴らして、暴風を視線の向こうに飛ばす。が、砂蛸の足に暴風は阻まれ、騎士に届かない。意味をなさない言葉が帽子の男の口から漏れ、黄土色髪の男は小さく毒づく。

二人の横を人影が駆け抜けていく。

「！ おまえら！」

咄嗟に伸ばした手は届かず、男の声も届かない。くそっ、そう言い漏らして男たちは二人を追いかける。

黒髪の青年は砂蛸に恐怖を覚えつつも戸惑っていた。自分を止めたはずの橙髪の少女が、騎士のもとへと走り出したことを。

走り出した少女を見て、自分も走り出したが何か考えがあったわけではなかった。

(このままだとエオリアがでかい生物の足に巻き込まれる……！)

この状況が危険であることは分かっていたが、どうやって騎士を救い出すかは思いついていない。どうするべきか、そう考えているうちに足は少女に並ぶ。

「セリア！ どうしよう！」
「……」

隣に並んだ青年の声には答えず、巫女は考える。騎士を救う手だてを。

(ここから水を飛ばしても、足に邪魔される……)

先ほど、暴風が足に阻まれたのを思う。

あの足さえなければ彼が助かるのに、そこまで考えて気づく。

(そうだ！ あの足を止めればいいんだ！)

でもどうやって？ 巫女は自問する。

水術で生物の動きを止めることは、今の自分には難しい。

青年がぶつかつた足は切れた部分から地面へと折れだし、激しく動く足に隙間を空けた。

その隙間に向けて、一筋の風が通りすぎる。

風は騎士の身体を再び上空へと飛ばし、砂蛸が通りすぎた地面へと運んでいく。

「そこのお嬢ちゃんは、あいつの元へ行きな！」

黄土色髪 of 男の言葉に巫女は頷き、巨大砂蛸を避けて騎士の元へと走って行った。

「あとは……あの化け蛸の始末だな」

「あの先輩……蛸の頭部、見てください」

「……なにやってんだあいつ！」

男の視界には、巨大砂蛸の焼け焦げた頭部に剣を突き刺して立つ青年が映った。

「うわあああああ！ 剣が抜けないiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

足にぶつかり、そのまま砂蛸の頭部へと身体を飛ばされた青年は、飛ばされた拍子に剣を突き刺したまま身動きがとれないでいた。身体を上下に揺さぶられながらも剣を抜こうと力をこめるが、抜けない。

(なんだかさつきよりも足の動き、激しくなっていないか?)

剣に手を掛けたまま周囲を見渡すと、先ほどよりも地面や空中を激しく動く足が眼に入る。

鈍い風切り音がときたま鳴り、青年は身体を強ばらせた。

(くっそ！ 早く逃げないとやばい！)

内心に焦りと恐怖を得ながらも剣を抜こうとするが微動だにしない。

「くそ、くそ！ 抜けるよ！ 抜けるよお！」

叫びながらも剣を引っ張る。

「だああああああ！ 抜けるって言うてるだろおおお！」

苛立ちを含んだ叫びとともに青年は右手を剣から放し、空中で拳を握りしめて剣の柄を強く殴りつけた。

剣先が頭部へと深く沈んだ。

沈んだ剣の様子に間拔けな声を漏らす青年。

次の瞬間、激しく動き回っていた足が一度大きく震えたのち、地面へと打ち倒れて動きを止めた。

青年が剣を突き刺していた頭部も斜めに倒れ始める。

「え？ え？ なにこれ、どうなったの？」

事態が飲み込めず周囲を見回す青年。

「その黒髪！ 倒れるからさっさと逃げろ！」

声とともに地面から伸びた土柱が青年の隣へと伸びる。
声のした方へと振り返って青年は言う。

「で、でも剣が抜けないんだ！」

「そんなもんあとで取ればいい！ いまは逃げるのが先だ！」

その声に青年は迷い、数瞬ののち、刺さった剣へと、

「ごめん、あとで必ず取りに来るから！」

詫びるように言って土柱の上を走って地面へと向かった。

鈍い地響きを立てて巨大砂蛸はその身を地面へと倒した。

もはや動く気配はなく、巨体は静かに身体を横たえている。

武装した男たちはそれぞれの武器を構えて砂蛸を取り囲み、砂蛸を見つめている。

そのうちの長大な弓を手にした男は、

「どうやら死んだみたいですね。はあ疲れたー皆さんもう構え解いてもいいですよ！」

武装した男達へと声を掛けた。

砂蛸から離れた場所では、布を敷かれた地面の上に若草色髪の男が

寝かされていた。

両隣に少女と青年、そして頭に白布を巻いた黄土色髪の男。

白布を巻いた男は眼を閉じて、寝ている男へ両の掌を向けていた。

少女と青年が見守るなか、寝ている男の顔や掌にできた火傷が治っていく。

「……うし。これで傷の方は大丈夫だろう」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「ワシはおじさんじゃねえって！ けど、礼を言いたいののはワシらの方さ。」

今年現れた砂蛸を早くも退治できたのはあんたらのおかげだからな

「そんな……それは俺たちというよりエオリアのおかげだと思います」

青年は顔を左右に振りながら男に答える。

「俺たちは、砂蛸でしたっけ、あれを倒すよりもエオリアを助けることに必死でしたから」

「そう言うなって、結果としてあんたらが助けになったのは変わりねえ」

笑いながら話す男を見ていた青年は何も言えない。

「それにしても……エオリアって名前、どっかで聞いたような……」

あ！？ もしかして神殿騎士のエオリア・パールか、こいつ！
「こいつ呼ばわりはないと思うなー」

男の声に少女は苦笑いになる。

「ああ、そりやすまねえ、つてもしかして……あんたは」
「言われる前に名乗るよー大地の神殿が巫女、セリア・オペラでー
す」

「うわあ！ これはすまん！ 巫女と騎士とは知らずに！」

「気にしないよーそんな偉いものじゃないしー」

「ははは、そう言ってもらえると助かるが、じゃあこっちの黒髪さん
んは？」

「あ、えーと俺は」

青年はどうやって名乗ったらいいかと思い、精霊の腕輪を付けた左手で頭をかく。

「ああ！？ そ、その腕輪っておいおい！」

「え、知ってるんですか？」

「知ってるもなにも言い伝えにある精霊の腕輪じゃねえか！」

「ってことはってことはだ、うわーワシもう死ぬかもしれん……」

「待って待ってくださいって、そんな暗い顔しなくても！」

「だめだめ、まさか今代の奏者様に対して”その黒髪”なんて呼びつけちゃったんだ……」

「うちのかーちゃんが知ったらワシ殺されるわ……」

肩をがっくり落とした男は暗い口調で言葉を吐く。

その様子におろおろしている青年の向かい側、橙髪の少女は笑みを浮かべる。

「そっかそっかー知られたら殺されちゃうんだー」

「けどなんでだる美味しいもの食べたら全て忘れちゃう気がするなー」

「え、おいセリア」

「！ 本当かお嬢ちゃん！」

「でも、満足できなかったらどうしよっかなー」

「わかったまかせろ！ 街一番の料理をおごってやっからな！」

「やったやったー！」

先ほどとは打って変わって力強い顔となった男と、

美味しいものが食べられると知って笑顔になる少女を見て青年は呆れ顔になった。

そんなやりとりがされている元、地面に寝かされた男は心地よさそうに寝息をたてていた。

第十五話 外へ出た少女

薄雲が細く太く流れる夜空からは月明かりが途切れ途切れに地面へと降りそそぐ。

降りそそぐ先には日干しれんがを積み重ねて作られた建物の群れ。建物の群れを囲むように厚く高さのある土壁が円状にある。

通りのところどころではかがり火が置かれ、武装した人間たちが歩き回っている。

建物の群れ中央にはひとときわ高く作られた塔。

塔の頂上付近には月光を反射する赤銅の鐘がひとつあり、その鐘が反射する一筋の光は一軒の建物を照らしていた。

反射する月光が窓から差し込む室内。

寝台近くのおびたランプから照らし出される淡い光は、月光と混ざりて室内に散る。

寝台に寝転がる影がうごめく。

「……」

光をさえぎるように片腕を顔にのせ、口が開く。

「……う、ん？」

気づいたかのように声が漏れ、疑問符となった口はそのままに腕を脇におろして眼を開く。

寝転ぶ影は上半身を起こしそうつとして、

「……っ！」

眉を詰めて瞼を強く閉じ、歯を食いしばる。
身体の脇へと置かれている両腕の掌の指には力が入り、掌を閉じる
ことなく宙を搔く。

「ぬ……ぐう、があ……！」

痛みを堪えるように影は呻き、月光の角度が変わるまで声は止まら
なかった。

月光が差し込まなくなり、室内には古びたランプの光だけが占める
なか、
寝台に寝転ぶ影は荒い息づかいを繰り返し、両腕を持ち上げて掌を
握りしめる。

「くっ、はあはあ……ようやく、治まった……」

脂汗を浮かべた顔からは掠れた声がひとつ。

掌を数度握っては開いてを繰り返したのち、影は寝台から背を起こ
し、寝台に腰掛ける。

腰掛けたことでランプの光を間近に受けた影の髪色は若草色。

（これだけの痛みを受けるとは、相当の術を使っていたのだな自分
は）

記憶が見せるのは、昼間の戦い。

巨大な砂蛸に対して無我夢中に振るった炎の大剣。

若草色髪の男は両腕を見ながら思う。

（あれほどの術、使ったのはいつ以来だろうか……）

記憶が掘り起こされていく。

騎士となるための試練、修行途中の凶獣退治、大神官との荒稽古。いくつかの場面が浮かんで消える。

「……強く、なれ、か」

数日前、言われた言葉を口に出す。

両腕の掌は力強く握り込まれる。

と、同時に腹部からは虫が鳴くような音。

「腹が、空いたな。そういえば、ここは宿か？」

右手から淡いランプの光に照らされた室内を見渡せば、

ランプの向こうには同じような寝台があり、

部屋の扉付近には四角い台があった。

「……鎧、拾っておいてくれたのか、それに剣も」

四角い台の上には上半身を守る鎧が組まれており、側には外された籠手や具足。

その横に置かれている鞘に収められた赤き大剣。

寝台から立ち上がり台へと近づく。

近づいて鎧に手を掛ければ、鎧の下に紙があることに気づく。

「これは……セリアが書いたのか」

紙を手に取り、視線を左から右へと動かしていく。

口元が微笑に歪む。

「心配してるのか、駄目出ししてるのかどっちなんだ」

声色に笑みを含めて紙を見る男。

紙には砂蛸との戦いに関する文章と、街の警備員が立ち寄る食堂への地図が描かれていた。

男は手に持っていた紙を丸めると、台に置かれていた革袋へと入れ、革袋を腰から吊るす。

そして、部屋の扉を開いて、外へと男は出て行った。

「あーっ！ エオリア、こっちこっちー！」

長く平たく切り出された岩を食事台として活用している食堂。

その食堂へと若草色髪の男が足を踏み入れた瞬間、奥から声が届く。男が視線を声へと向ければ、そこには橙髪の少女に黒髪の青年、それに黄土色髪の男と帽子をかぶった男などがいた。

片手を挙げて声に答えた若草色髪の男は、食堂中央にて食事している連中へと歩み寄る。

「よー騎士さん。昼間は見事だったぜ！」

「おかげで仕事しなくて済みましあぶう！？」

「おまえは真面目にやれといつも言ってたんだろが！」

黄土色髪が帽子の男をどつく横、橙髪の少女は手を振って若草色髪の男を迎える。

「エオリアー身体、というか手の平、へいき？」

明るい口調でありつつも、気遣いが含まれた声色。

平気だ、と頷いてみせる男に少女は嬉しそうに頷き返す。
男は食事台へと近づいて石の椅子へと腰をおろすと、

「……で、アルトが突っ伏してるのは何故だ？」

男の手前、料理皿を避けて食事台へとうつつ伏せてる黒髪の青年がいた。

「ああ、奏者の兄ちゃんは料理の美味さにやられちゃったのさ！」

「……美味さというか見た目というか臭いというか」

「うっせえコル。美味しいことには変わりないだろが！」

豪快に笑って見せる黄土色髪の男に怪訝な顔をするエオリア。

「っと、そついや名を名乗ってなかったな。ワシはリゾルト・スピオ。」

この街の警備をやってる。リゾルって呼んでくれていい」

「自分はエオリア・パール。すでに聞いたかもしれないが、大地の神殿が騎士だ」

「聞いているどころかワシらのなかじゃ有名だよ。三年前の話でな」

リゾルの言葉に、若草色髪の男は顔を曇らし、その顔に気づいた少女が声を出す。

「ねえねえ、そつちの人も名乗ってあげてよエオリアに」

「え、こつちもですか？ 静かに呑んでようと思ってたのに……」

あーコル・レーニって言います。コルでいいです、というか放つ
といていいですよ」

帽子の男の言葉にエオリアは戸惑い顔となる。

「あ、気にしたらすんません。こっち人見知りなんで」

「おいこらコル。おまえのどこが人見知りなんだ、この女好きが。すまねえな騎士さん、こいつ普段からものぐさでな」

「あ、いや、そうなのか」

返答に窮したエオリアは適当な言葉を返す。

「それよか騎士さん、呑もうぜ！ 今年初の砂蛸を退治することが出来たんだ！」

「自分は気を失っていたから分からなかったが、退治できたのか。それは良かった」

リゾルから杯を受け取ったエオリアは、杯を掲げて祝いの言葉を互いに掛け合った。

「そっぴや騎士さん、あんた腹へってないか？」

「ああ、さつき起きたばかりだからな」

「だったら丁度いい、巫女のお嬢ちゃんにも食ってもらった、

この街一番の料理を味わってくれよ！」

そういつて黄土色髪の方は厨房へと料理を頼む。

どんな料理が来るのだろうかと思ったエオリアは、言葉少ない様子でいるセリアの視線に気づく。

「？ どうしたセリア？」

「んーんーなんでもないよー」

「なら良いが、ところでセリアは料理を食べたのか？」

「うん食べたよ！ とっても美味しかった！」

「そうか……じゃあなぜおまえの前には皿がなくて、アルトの前にあるんだ？」

「だってとっても美味しかったからアルトにも食べさせてあげたんだ！」

嘘くさい、男は少女の言葉に警戒心を抱く。

（セリアは昔から嘘をつくときは言葉が普段より少なくなる。

……なんだ？ 料理が不味かったのか？）

うつぶしている青年へと眼をやれば、青年は微動だにしていない。エオリアの警戒心が跳ね上がったところで、料理が到着した。

「さあ、食ってくれ騎士さん！ ワシが一番美味いと絶賛する料理だ！」

リゾルに促されて料理へと眼をやったエオリアの視界には、唐揚げにされた大さそり、炙られた芋虫、煮固められた飛蝗の煮物など、

数々の虫を用いた料理が食事台へと並べられていた。

「……………！」

見た瞬間、エオリアの腰が後ろへと逃げた。

「どつした、そんな顔して」

不思議そうに見て来るリゾル。

「……先輩、虫料理大好きなんですよねー」

目深に帽子をかぶって、ぼそっとつぶやいたコルの声に若草色髪の男は汗を垂らす。

冷や汗を垂らしつつ男は橙髪の少女を見る。

少女はあらぬ方へと顔をそむけて鼻歌を歌っている。

「そうか、アルトそういうことだったのか……」

おそらくセリアの奴に無理矢理食わされたんだな、

内心を同情で一杯にしたエオリアは、意を決して料理へと挑んだ。

大地の神殿より地に位置する街にて、ひとり思い悩む少女がいた。暗い室内にランタンの光が灯るなか、机に向かう包帯を巻いた藍色髪の少女。

机の上には土が入った小さな鉢植えが置かれており、横には生育を記録した筆記帳。

筆記帳には既に十日以上の記録が残されているが、日々の記述には、

「種を埋めてからもう十日以上も経つのに……芽が出ない」

少女の気落ちした声と同じ内容が書かれていた。

なにがだめなんだろう、少女は内心に思いを得る。

「土、水、肥料に……暑さや冷たさも変えてみたけれど……」

種は一向に少女の期待とは裏腹に芽を出そうとはしなかった。

(お母さん……なにか知ってるみたいだったけど)

青年からもらった種の名前を言ったとき、母親はどこか懐かしむような顔をした。

しかし口からは「頑張って育てな」の一言だった。

かつて大地を旅して回った母、おそらく母も夜露草のことを聞いたことあるのだろうか、と思う。

それよりも、少女の胸には青年の顔がよぎる。

「せっかくアルトさんにもらったのに、咲かせられないなんて……嫌」

包帯の合間を抜けて、片目からは涙がこぼれ落ちる。

(どうしよう……どうしたら、いいんだろう)

まだ試していない方法はいくらかもあったが、いまの自分では駄目な気が少女はした。

こぼれる涙を手の指で拭う。

「……お母さんに聞きたいけれど、まだ、だめ」

落ち続ける雫を拭いながら、少女は前を向いた。

太陽が輝きだして数時間後、宿の室内では寝台に突っ伏している青年と男がいた。

二人からは声にならない呻き声があがっており、寝台に敷かれた布や枕を掻きむしるかのように抱いている。

男とは別の寝台に突っ伏していた青年は、無言の叫びとともに勢いよく身体を起こす。

「う、うわあああああああ！ ああああ、もう虫は勘弁してくれ……」

窓からの陽光に気づいたあと、うなされていた元凶を口にする青年。右の手の平で顔を覆い、大きく口を開いて空気を吸い込む。

「最悪な夢を見た……」

青年は夢のなかでありとあらゆる虫に襲いかかられ、拳げ句に口のなかへと入り込まれたことを思い、吐きたい気分に戻られた。

「あーもう、リゾルさん酒癖悪過ぎだよ……」

寝台から立ち上がり、水場へ行こうと青年は動こうとする。そこへ扉を叩く音。

どうしようかと寝ている男を見て、諦めて返事をする青年。扉を開いて入ってきたのは帽子を被った男。

「あ、えーとコルさん、でしたっけ」

「どうもどうも、名前覚えててくださって。あ、こっち街案内で来ました」

長大な弓を背に抱えてコルは挨拶を青年にする。

「えーっと、すみません。仕度しますからちょっと待ってもらえますか？」

「かまいませんよーこっちは仕事さばれてますから」
「そ、そうなんですか」

歯切れの悪い返事を後にして、青年は顔を洗いに水場へと向かった。

「この通りからの一角が主に街の民が住んでいます、ただの家なので面白味はないです」

「そりゃ人の住んでる家見ても面白くはないですけど……」

日干し煉瓦で組まれた住居を見上げながらは青年は言う。

隣にいるのは長大な弓を背負い、帽子をかぶった男。

通りに行く先々を案内はしてくれるものの、説明はどこか投げやり。投げやりな説明をパンをかじりつつ聞きながら青年は思う。

(しっかし暑いな……俺も帽子とか買おうかな)

通りを行き交う人々は誰もが頭になんらかの日差し除けを身につけていた。

突き刺す日差しはじりじりと肌を焼く。

持ち歩いている出納に口を付けるも、すぐに喉は乾きを訴える。

「あのコルさん」

「ちょっと待ってください。向こうに可愛い子がいたので」

「はあ……」

帽子の男はあらぬ方向へ眼を輝かせていた。

さっきからこればかりだよ、青年はため息とともにつぶやく。

隣の男は街の説明をしつつ、女性が近くを通りがかると説明そっち

のけで興味を向けていた。

(昨日は後ろから見てて術すごいと思わされたけど、なんだかなー)
呆れを含んだ半眼で女性へ手を振っている男を見ると、男が視線に気づく。

通りでは地面に水を撒いている人々を背景に男は口を開く。

「どうしました？　もしかして奏者君も興味が？」

「ちがいます。それより帽子とか売ってる場所に案内してくださいよ」

「えーっ！？　そんな君ぐらいの歳で興味ないなんて……もしかして色無し？」

「！　な、なに言ってるんですか！？」

「だめですねーこれはだめですねー」

眼を細め、口の端っこをつり上げて帽子の男は言う。

腕組みをしてひとり頷きだした男を見て、青年は嫌そうな顔になる。

「帽子なんかを買うよりも、もっといいもの買いましょうー！」

そう言っつて男は青年の腕を掴み、空を飛んだ。

「ななななな、ど、どこへ連れて気なんですか！？」

「というか、どうして空飛ぶんですか！」

「いーいところですよ奏者くーん。あと気分」

巻き付く風に帽子を飛ばされぬよう手で押さえる男は上機嫌で答え

る。

青年は落ちないよう男の腕にしがみつき、
身体に巻き付く風で服がばたばたと音をたてる。

(うわ、うわわわ、す、すごい！ 飛んでる！ 空飛んでる！)

飛んだ際に落としたパンは見る見る間に小さくなり粒となる。
浮いている身体には浮遊感。

上下左右前後どこも空であり、地面は遠くしたにある。

耳へと唸りの音を届ける風は強く、青年と男の身体を包むように渦
巻いている。

(これって、風の精霊術、なんだろうか)

疑問は口に出さず、ただ飛ぶままに任せる青年。

やがて高度は街を囲む土壁を越え、地平線が見える位置となる。

「……うわ、こんな、こんな風景が見れるなんて」

「いやーいい景色でしょ。仕事さぼりたいときはよく飛びに来るん
です。」

「とそんなことより、さあていーいところに着きますよ」

青年が空と大地が境界を形作る景色に見ほれているのをよそに、
帽子を手で押さえた男は相変わらずの上機嫌で下降を念じ始めた。
高度が下がり始めたことに気づいた青年は、景色を忘れまいと必死
に眼をこらす。

眼をこらしている間にも視線は下がりはじめ、ついには土壁にさえ
ぎられてしまった。

今度の手紙にはいまの景色のことを書こう、そう青年が思っている
うちに地面は近づく。

「よぉ〜っし、着きましたよ奏者君！」

まわりつく風が弱まり、二人は地面へと足をつける。

青年は浮遊感が抜けきらないのか、地面へと片膝をつく。

ははは、と少し興奮気味に誤摩化して笑った青年は立ち上がり尋ねる。

「コルさん……ここは？」

周囲は日干し煉瓦で組まれた建物だったが、どれも色とりどりの布や塗料で彩られており、

青年の鼻には刺すような臭いがちらほらと漂って来ていた。

「ここはディオソにて春を謳う場所ですよ！」

帽子の男は両手を広げて大声で言い放った。

「いらっしゃーいって、なんだフランか」

「なんだはねーだろエラ」

花屋の扉を引いて入って来たのは、焦げ茶色の短髪を坊主頭にした男。

後ろ手に戸を閉めた坊主頭は、足下の鉢植えを避けて奥へと歩く。

奥には金髪の女性がしゃがみこんで樹木の苗を見ている。

「あれ？　なんだ今日はリラちゃん店番してないのかよ」

「あー……リラはね……」

エラールは言いづらそうに言葉尻を濁す。
ああん？ とフランセは問い返す。

「ひとりで……出かけてんのさ」

「はあ？ おい、なに言ってるんだ。なんでリラちゃんがひとりで出てんだ？」

「いろいろあるんだよ、年頃の娘には」

「いやいやいや、おまえおい！ リラちゃんが一人で出歩けるわけねえだろ！」

声を荒げて女性に詰め寄る坊主頭。

女性はやれやれとつぶやいて、服をはたいて立ち上がる。

「でかい声を出すなって言ってるだろフラン」

「おまえ……！ なに落ち着いた顔してんだあ！？」

「あんな、フラン。あの子が自分から出かけて行ったんだよ」

大口を開けて声が出せなくなった坊主頭。

「そんな顔するほど驚くことかい」

呆れた声を出す女性に、坊主頭は動けない。

この数日間、少女が何かを思い悩んでいたのを女性は思い浮かべ、
悩みの元はあの種のことだろう、と内心につぶやく。

「……あの子も、怖がってばかりじゃだめだと気づいたのさ」

今朝のことを思い出す。

灰色の布をかぶり、手は強く布を握りしめ、身体をわずかに震わせ

ながらも、
しっかりと言葉を口にした娘のことを。

（驚いた、てつきり種のことを聞きに来るかと思えば、
種のことを調べに街へと出かけると言うのだから）

いまだに大口開いて動かない坊主頭を横目に女性は娘を思う。

（けどねりら。夜露草は昔あたしが散々苦労した上で咲かせた花さ。
決して簡単にはいかない、けれど咲かせることができたなら……）

言葉の先を胸奥にしまいこんで女性は、再び樹の苗と向き合った。

「だーからー！ 俺は嫌だって言ってるんです！」

「いーいーからー！ その歳で色無しはもったいない！」

桃色や赤紫色で塗られた看板には片目をつぶった女性の裸体が描か
れている。

その看板が掲げられた建物の前で、帽子の男は青年の首裾を掴んで
連れ込もうとしている。

首裾を掴まれた青年は首を左右に振りながらも、腰をふんばって抗
っている。

近くを歩く人々は横目でちらりと見ながら通り過ぎて行く。

「奏者くん！ ちょっと、ちょっと覗くだけですから！」

「右手にそんなお金握りしめておいてなに言ってるんですかー！」

「いやだなあ、これは見物料ですよー」

誰が信じるか、と思い青年は帽子の男が掴む手を、身体を振って引き離す。

あっ、という声ですぐ側で漏れ、青年は通りを走りだす。

「コルさん案内ありがとうございますー！」

「ちょ、ちよっと……そんな簡単に逃がすわけがないでしょー」

慌てて走り出した青年は、数歩横にふらついてから姿勢を正して勢いを増す。

その姿を見ながら帽子の男は背中から長大な弓を取り出して構える。矢をつがないで弦を伸ばす男は、ひとつ口端をつりあげて大きく弦を鳴らす。

瞬間、帽子の男が視ている先へ突風が駆けていく。

走っていた青年は半ば振り返りつつ、迫り来る風に声を上げそうになる。

身体が、浮く。

「うわあ……！」

「よおっし！　って、え？」

青年の身体は一瞬浮いて、地面へと落ちる。

その様子に一度は歓喜した男の顔は戸惑いへと転じた。

走りと風の勢いが抜けずに地面へと落ちた青年は、地面を転がり止まる。

青年が腰に見つけていた白き剣の鞘からは、薄く風が巻いていた。

「いつつつ、なんだ？　どうして落ちたんだ？」

状況が理解できずに青年は身体をさする。

帽子の男も不可解そうに顔をかしげたが、もういちど長大な弓を構える。

「うーん、不思議ですけどもう一発」

「少しは考えないんですか!？」

青年の訴えを横に弦は鳴る。

今度こそ風に乗せれるだろうと、帽子の男が視ている先、地面へと腰をつけながら顔を腕で覆った青年の正面で、風は土壁に阻まれる。

「えっ」

双方から同時に声が響く。

土壁を見た帽子の男は、汗を一筋頬から垂らす。

地面から立ち上がり、土壁の横から顔を出した青年は、ひとりの人物を眼に映す。

「……リゾルさん!」

黄土色髪 of 男から放たれた強烈な拳骨が、帽子の男に直撃した。

第十六話 恐れ胸に前へ

街の通りには行き交う人々の姿、その端っこでは灰色が足取り重く歩みを進める。

建物の壁に手を当て、息苦しそうに灰色の布を被った少女。包帯を巻いた顔は僅かに俯き、布を握る手は力がこもっていた。

(やっぱり……怖い、怖い……)

耳から聞こえて来る雑踏の喧噪が、少女の胸へ不安と恐れを沸かせる。

頼れる誰かが近くにいないこと、そのことがより一層少女の意思を揺らす。

花屋を出てから少女が歩み進んだ距離はいくらも無い。しかし、歩み遅く足取り重くあった少女には、それだけでも長く長く感じた距離。

(こんなんじゃ、夜露草のこと……調べられない……)

堪らず少女は涙がこぼれ落ちそうになるのを我慢しつつ、しゃがみこむ。

胸を包む不安と自身への情けなさから唇を噛み、涙を堪える。

通りに行く人は怪訝な眼差しを灰色へと向けるものの関わりはしない。

いちどしゃがみ込んだ足は鉛のように重く感じられ、少女は動けなくなっていた。

そのことに少女は、否定の意思を胸に唱える。

(嫌……！ 嫌なの！ お願い動いて！ 私は、私は！)

だが足は思い通りにはならない。

少女は涙をこぼす。

小さく呻くような声が閉じた唇から漏れる。

(どうして……どうして、私はこうなの……)

内心を渦巻く暗雲は、自身への嫌悪感へと変わる。

瞼裏には過去にいじめを受けた記憶が映し出され、少女の意識は外を拒絶し始めていた。

帽子を被った男は、拳骨で赤くなった頬を手で押さえながら、通りの向こうへと歩いて行った。

男の後ろ姿を見送る青年と黄土色髪の子。

「まったく、朝から見当たらんと思ったら……すまねえな奏者の兄ちゃん」

「いえ、やばかったから助かりました。リゾルさん」

どこか疲れた顔になった青年は、同じような顔をした黄土色髪の子に言った。

「ところでリゾルさんはどうしてここに？」

「ん、ああ、それは飛んでるコルの奴を見かけたって聞いたからな。それでもってどっちへ飛んだかを聞いたらここだったわけだ」

「……街中で飛べば、そりゃ目立ちますよね」

あの人ばれるって思わなかっただろうか、内心でつぶやき呆れる青年。

頭に巻いた布を指でかく男は、どうしたもんかと悩んだ顔をしてから口を開いた。

「うーむ、しかしコルの奴が言ってた案内はワシもしようと思っていたから、そうだな。」

兄ちゃんさえ良ければ、街の見回りがてらワシが案内するが」「ぜひお願いします。というかコルさんは変な案内しかしてくれなかったんで。」

あ、帽子売ってるお店に案内してもらえますか。もう暑くて死にそうなんで」

互いに苦笑いとなった二人は、そのまま道を歩きだした。

時間にして数秒、だが少女にとっては長大にも感じられた時間。

いつのまにか俯いた顔を抱えるように、両手は灰色の布をかぶった顔の横へと伸ばされ、

地面へとしゃがみこむ姿勢となった藍色髪の少女。

そっと近づいてくる小さな影。

影は少女のそばまでくると二度、三度鼻をひくつかせ、ひと鳴きする。

少女は鳴き声に気づかない。

影はもう一度鳴き声を上げるが、動かない少女を見てさらに近づく。

背中から顔の前へと回り込んだ影は、少女の顔を見上げて鳴く。

灰色の布の上から耳を塞いでいる少女に鳴き声は届かなかった。
地面へと座り込んだ影は、じっと包帯の巻かれた少女の顔を見る。
影が鳴く。

少女は震えたまま応えない。

首をかしげた影は、そのまま少女の顔に近づきひと舐め。

「きゃっ!?!」

不意の刺激に、少女は驚き、腰を地面につける。
布から手を離し、片手を地面につけて前方を見れば黒ぶち模様の猫
がいた。

猫は少女がこちらに気づいたことを認めると鳴き声をあげる。

「あ……いつもうちに来る子……」

少女のつぶやきに、猫は嬉しそうに唸り声を出して、地面に着いた
腕へとすり寄る。

すり寄って来た猫を恐る恐るもう片方の手で撫でているうちに、
手の平から感じる猫の体温と柔らかく刺激してくる毛並みに、
知らず知らずのうちに強ばっていた少女の顔はほぐれていった。

「そつえば……お家の外で会っの、初めてだね」

微笑を浮かべて少女は言う。

気持ち良さそつになでられている猫。

猫のあごをなでながら少女は思う。

(ん……ちょっとは楽になれたけど、まだ……)

胸元をきつく握りしめる。

少女は立ち上がり、腰の汚れを払ってかがみ込んで猫を見る。

猫は不思議そうな眼で少女を見つめる。

その顔を少女は見てくすつと笑う。

笑い顔のまま手を伸ばして、頭をなでる。

「ねえ……猫さん、私……ひとりじゃだめみたい」

暗く静かに言葉が口から出る。

だから、と続けて唇を動かす。

「猫さん、私に着いて来てくれる？」

言葉に猫は力強く鳴く。

ありがとう、と微笑んだ少女はゆっくりと立ち上がり、

重く感じる足を動かしつつ歩み始め、黒ぶち模様の猫は少女の足に寄り添って着いていく。

「あの、良かったんですか、お金出してもらって？」

「いいっていいって！ 兄ちゃんらには砂蛸倒しに協力してもらったからな」

「そんな大したことしてないんですけど……」

苦笑しつつ答える青年に、笑い声を立てる黄土色髪の男。

青年の手には三つ分の帽子が入った布袋。

「なに言ってるんだ。最後に砂蛸へとどめ刺したのは兄ちゃんじゃないか」

「いや、だってあれは、たまたま」

手を左右に激しく振っている青年に、またも笑い声をたてる男。

「はははっ兄ちゃんはなんだ、褒められんのが恥ずかしいのか？」

「え、いや……そういうわけじゃないんですけど」

ふと昔の記憶が思い起こされる。

あまり目立つこともなかった学校生活のことを。

懐かしさと寂しさを思い、声が暗くなる。

「あんまり、その……慣れてなくて」

「そっか、すまんな変なこと聞いちゃって」

いえ、と返した青年を見て、頭に手を押さえながらあらぬ方向を見る。

男の顔はどこかばつの悪そうな感じをしており、しばし無言となって二人は道を歩く。

「……あーっと、そうだそうだ。悪い奏者の兄ちゃん、いつこ寄り
たい場所あるんだがいいか？」

「別に構いませんけれど……」

一体どこだろうと疑問顔となった青年の手前、男は笑い顔となって
先を歩み出した。

「あ……猫さん、待って！」

首もとで灰色の布を掴みながら包帯を巻いた少女は、先に行く猫を追いかけていた。

最初こそはゆっくりとした足取りだった猫は、同じくゆっくり歩く少女に焦れたのか。

いつのまにか駆けるように少女の前方に行く。

それを見た少女は慌てて小走りとなる。

そのまま猫を追いかけるようにして右へ曲がり、左へ曲がり、小道を行く猫と少女。

「待って……！　お願い、待って、猫、さん……！」

猫につられるように走っていた少女は、息苦しそくに声を出し、同時に足が遅くなる。

声に気づいたのか猫も立ち止まり、少女の方へと振り返る。

「はあはあ……はあはあ……」

両膝に両の手の平を置いて立ち止まる少女。

口からは荒い呼吸が繰り返され、少女の左胸は身体を叩くような鼓動を打つ。

黒ぶち模様の猫は振り返りの姿勢から動き、少女の足へとすり寄って鳴く。

少女が呼吸を落ち着けるまでの数瞬、鳴き声があがり続ける。

「ごめんね……私、そんなに、走れないの……」

途切れ途切れに絞り出される言葉。

猫は心配するかのように短く連続した鳴き声を出す。

いまだ落ち着かない呼吸とともに少女はしゃがみ、猫の頭をなでる。なでられていた猫はいちど長い鳴き声をだしたのち、少女の手から離れ駆け出す。

「あつ……」

言葉とともに手が猫の駆け出した方へと伸びるが、止まる。少女の視線が猫でなく、猫の駆けで行った先にある建物を見ていた。そこには少女が目指していた本屋があった。

「あらまあ！ 貴方が旦那が話してた奏者様なんだ〜！」

「あの、初めまして……ははは」

身体の各所に装飾品をちりばめ、髪を結い上げた紫髪の中年の女性に、

満面の笑顔で話しかけられた青年は曖昧な笑いで返す。

場所は外の日差しが扉以外から差し込まない薄暗い建物内。

室内の柱にはロウソクの灯りが派手な装飾とともに飾られており、焚かれた香のにおいが青年の鼻を強く刺激していた。

青年が座る場所は扉から入ってすぐにあるカウンター。

その背後にはカウンターとは反対の向きに一律ずつ整列して並べてある椅子の群れ。

椅子の群れが向かう方向には舞台があった。

中年女性への挨拶ののち、青年は物珍しそうに室内を見やる。

「あらあらくもしかして奏者様に気に入って頂けたかしら。ワタクシの劇場”ブリランテ”」

「ベティ、ワタクシの、じゃなくてワシたちの間違いだろ」

「黙ってらっしゃい。ろくに芝居も知らない貴方に劇場なんて作れて？」

「そりゃ無理だろうけどよ。作るための金ワシだって出したろうが」

「ええ、ええ。その通りですわ。でもね、劇場を続けていられるのは誰のおかげでしょう」

「……ベティのおかげ」

「うふふふ。貴方はちゃんと分かってくれてるとワタクシ信じていますわ」

カウンター内にいる紫髪の女性と話すのは、黄土色髪の男。

「あらごめんなさい奏者様。そういえば旦那がお世話になりました
そうです」

「えっ、いえいえ、そんなことないです。むしろお世話になってる
ぐらいです」

「まあ礼儀正しく、謙虚なお方ですこと」

「その、そんなに褒められると困るといっかなんといっか……」

「ベティ、その辺は勘弁してやってくれ」

酒の入った杯を掲げて言う男に、ゆっくりと頷きを返す女性。

「でしたらお礼として我が劇場のお芝居を見ていきませんか？」

「芝居、ですか？」

「ええ、我が劇場ブリランテは、

鐘鳴る街ディオソに住まう人々の娯楽として、お芝居をふるまっておりますの」

流れるような声色で紫髪の女性は言葉を発していく。

「もともと、この街はな、火の精地で採れる鉱石なんかを運ぶために作られたんだ」

「え、そうだったんですか」

「ああ。だけど街が作られてから数年して、運んでる鉱石なんかを狙ってか、

野党やら凶獣のやつらが襲いかかってくるようになったんだ」

「だからあんなに警備をしてる人がたくさんいるんだ……」

「その通りだ。けどな、相手がワシらと同じ大きさならそこまで苦労はしねえ。

問題はあの砂蛸だ」

男は苦々しそくに顔を歪めて杯を煽る。

カウンター内で皿を布でぬぐっていた女性は言葉を引き継ぐ。

「今ではすっかりディオソの名物として語られる砂蛸。

けれども現れた当初は恐怖そのものでしかありませんでしたの」

「……一体いつから現れるようになったんですか」

「ワタクシが可愛い子供だった頃ですから四十も昔でしょうか」

「どうして砂蛸がこの街を襲うのかは誰にもわからん。

だが、砂蛸を止めないとこの街が危ないのは誰もが知っている」

杯を煽り呑む男を、青年は黙って見つめる。

「街から逃げる奴らもたくさんいた。その逆に砂蛸を自当てに来る奴らもいた」

「危険だというのに、むしろ危険を楽しみに来る方もいて不思議でしたわ」

「コルの奴はまさにそんなのだったな」

「彼はどちらかと言えば春の通りがお目当てだったのではなくて？」
女性は品の良さを感じさせる笑いを浮かべる。
ちがいないえ、と返しておかわりを男は頼む。

「……あの、じゃあ街を囲う土壁は砂蛸から守るために？」

「そうさ。ワシが十になるかぐらいだったか。」

警備団にいたワシの爺さんが土術を使える人をたくさん集めてな
いまでも覚えてるなあ、すごい光景だったな」

「ワタクシも覚えていきますわ。旦那のおじいさまの掛け声があがっ
たと思つた瞬間、

街の周囲には高い、高い壁が現れておりましたのよ」

昔を懐かしむように二人は表情を和らげ、言葉を紡いでいく。

「それから、それからも色んなことがあって、な。

ベティと一緒にってからよ、考えたのさ」

「ワタクシたちの街を、共に生きる人のためにできることはないの
かと」

「それが、この劇場、だったんですね」

青年は、背後へと振り返り舞台へと視線を合わせる。

静かに見つめる視線の元、青年は胸が熱くなっていた。

「なんだか……すごいな。俺、なんか感動してしまいました」

「おいおい、兄ちゃん。そんな感動するほどのことじゃねえよ」

頭を振る青年。

「いえ、上手く言葉にはできないんですけど、リゼルさんとベティ

さんが、
ああしよつこつしよつとずっと生きてきて、それが形となつて
るのが、すごくって」

舞台を見つめながら、両手で持った杯を握る手に青年は力を込めた。

「俺、元の世界では、あんまり人から褒められることがなかったんです。

なにかを成し遂げるだとか、目標を決めて動くことが苦手です。きつと、と唇を動かす。

「言われるまま、流されるままに生きてたんだと思います。たぶん今も……」

だからお二人の生き方に、なんて言うかすごく、そう！　すごく憧れたんです！」

青年の言葉に男は照れ笑いを浮かべ、女性は暖かいまなざしで微笑む。

「ありがとうございます。そう言って頂けることがなにより嬉しいですわ」

「はははっ！　憧れるってかワシら！」

男は上機嫌のまま新たに酒をつがれた杯を大きく煽る。

「そうだ！　ここの舞台で演奏会をやらせてもらえませんか？」

「ええっ？　まさか奏者様が演奏を？」

「はいっ！　と言っても俺だけじゃなく一緒にいる仲間もなんです
が」

「騎士さんの笛と巫女のお嬢ちゃんの歌が聞けるってか！ そりゃあいい！」

ワシらとしても願っても無い話だ、決まりだなベティ！」

「勿論ですよ貴方。奏者様、是非お願いいたしますね」

「ありがとうございます！」

青年は嬉しそうに頷いて力強く答えた。

「ごめんよ、お嬢ちゃん。うちではそこまでの本しかないんだよね」「いいえ、気にしないで、ください。無理、言っ、ごめんなさい」

困惑した表情で頭をかく本屋の主人は、目の前の灰色の布をかぶった少女を見る。

たどたどしく言葉を語りつつ、主人を包帯で覆われた目線で見ると少女。

「けど、お嬢ちゃんはたしか、エラールさんとこの子でしょ？」

うちのような古書屋に来るよりも聞いた方が早いんじゃないの」

「……それは、は。できない、できないん、です」

灰色の布を被った少女は俯き加減で言葉を出していく。

「自分で、自分の手で、見つけなくちゃ、いけない、です」

「ふーん……まあ、それならしょうがないけど、さ」

台の上に置かれた幾冊かの本を片付けながら主人は言う。

置かれているのは植物に関する本ばかり。

どれもこれも光に色褪せており、端々がぼろぼろになっている。

本の様子を見た主人はひとしきり唸ったあとで口を開いた。

「……どれもこれも売れずに残ってた上、もう古くてぼろいしな。いいよ、ただであげるよ」

「えっ!? そんな。お金、払います、から!」

「いいよ、いいよ。どうせ売れなきゃ捨てるどころだったから」

苦笑まじりに主人は片手を振って答え、お金を出そうとする少女を制する。

主人の態度に困惑しつつもお礼を述べて頭を下げる少女。

「そんなに頭下げなくてもいいって、その代わりまた買いに来てくれたらいいよ」

「はいっ! また、来ます!」

喜びを含んだ声色で少女は主人に言葉を返す。

台に置かれていた本を手に取り、胸元に抱える少女。

足下からは猫の鳴き声。

「あ、待たせてごめんね」

「ん……?」

猫の声に気づいた主人は、眉をひそめながら台の下をのぞく。

「あれ、おめえさん何でここにいるんだ?」

「この子、のこと、知っているん、ですか?」

台の下をのぞきこんだ主人の顔を見て、黒ぶち模様の猫は鳴き声をあげる。

「ん、いや、こいついろんなところで見かけててさ。

けど、誰に聞いても誰かが飼ってるわけじゃないみたいで」

「そう、なんですか」

「聞いた話じゃあ、もう二十年以上も前から見かけるとか聞くけど、そんなに猫が生きるなんて聞いたことないからなあ」

台の上へと顔を戻した主人は、上から猫を見つめる。

「どっかの詩人には、この街の守り主です、なんて言われてるらしい」

「ふふつ。おもしろい、お話、ですね」

「ときどき、街で一番高い建物の上で、ぼーっと空を見てるみたいでな。」

他にも猫はいるはずなんだが、なぜかこいつだけそうしてるんだ」

主人と少女に見つめられている猫は、不思議そうに顔を傾けている。その様子に主人も少女も笑う。

「まったく、悩みなんてなさそうな顔しやがってこいつは」

「悩み、あるかも、しれませんか？ 明日の、ご飯、とか」

「……はは、そうだとしても、そりゃ幸せな悩みだ」

ふたりの言葉に何かを感じたのか、猫が不満そうな声で鳴く。

「ごめんね、そろそろ帰ろうか」

「また来てくれよお嬢ちゃん、猫と一緒に」

笑顔の主人に会釈して、少女は本屋を後にした。

喧噪が聞こえて来る宿の室内。

ふたつ置かれた寝台のうち、ひとつに呻きながら寝ている男がひとり。

寝台の横には丸い椅子に座った橙髪の少女がいた。

丸く平べったいパンを手でちぎりながら口のなかへと放り込んでいく。

「ん〜おいしい！ もうひとくち、もうひとくち！」

柔らかい触感に頬をゆるめながら少女は、手に持ったパンを小さくする。

少女が眉を弓なりにしている間も、寝台に眠る男は苦悶顔で横たわっている。

「……いいかげん起きないものかなーせっかくボク、おいしい蒸しパンもらってきたのに〜」

パンの名前だけを強調する少女。
名を聞いて寝ている男は呻く。

「ほう〜らほう〜ら、おいしい蒸しパンですよ〜蒸しパンだよお〜」

「や、やめろ……虫は、虫は、虫はく、くえない……」

少女は意地の悪い顔を浮かべて寝ている男にパンを近づける。

「ええ〜？ おいしい蒸しパンなの〜？」

「だ、だから……む、虫は……だああああああ！？」

男が眼を覚ました。

荒い息づかいを繰り返して、胸に手を当てて落ち着こうとするが、横に座る少女に気づいてそちらへ顔を向ける。

「ん……セリア、なぜここに？」

「もうお昼だよ〜ねほすけ〜」

「む、そうか。なんだ……ひどい夢を見たのだが、思い出せん」

「そっかそっかーはい、目覚めの一杯」

言葉とともに上半身を起こした男へ、硝子の杯につがれた水が差し出された。

「ああ、すまないな」

「ちーがーうーでーしょー」

「ははっ、ありがとう」

「その癖、早くなおしてほしいなー」

「……治そうと思って治せるものだといいいのだが」

「ボクは、お礼を言ってくれるほうが嬉しいの」

語尾を軽く尖らせて言う少女に、男は苦笑。

空いている寝台に置かれていた、布を被ったカゴから少女はパンを取り出す。

「はい、やわらかくておいしいパンだよ〜」

「……なぜだ。なぜか素直に受け取れないな」

「えーおいしいパンだよーむふふ」

どこか引きつった顔になったままパンを受け取り、パンに噛み付く男。

「さあさあ召し上がれ、む、し、ぱ、ん、を」
「ぶえっ!? えふっ! げふっ! ぶひえ!」

少女の言葉に、男は盛大に吹き出す。

「もーっ。きつたないなーエオリアはー」

「お、おまえな! ってこれは蒸しパンじゃないか!」

「だからそう言ってるじゃないのー」

「……」

男は黙ってパンに再びかぶりついて、口に含み、数度噛んだのち、飲み込む。

「……おいしいな」

「でしょでしょーボクの選びに間違いはないでしょー」

「ああ……間違い、ないな」

少しだけ、懐かしむように口端を男はゆるませる。

「おまえの目利きは、間違いない」

「ふふーん」

つぶやかれた言葉に、少女は上機嫌に頷く。

男が手に持っていたパンの、最後のひとかけらを飲み込んだとき、部屋の扉が開く。

少女と男が同時に扉へと振り向く。

視線の向いた先には黒髪青年と、黄土色髪の男がいた。

空は夕闇の朱と黒が交わり、大小様々な雲がまだらに染まる。

雲間をぬつように細く長い雲が何本も、地水火風の方角へと走つてもいた。

雲よりも低い位置を飛び交う鳥たちは、長く低い鳴き声をあげて飛んでいく。

鳥の鳴き声に誘われて、部屋の窓から空を見上げる少女。

窓の外淵には暑さを告げる虫が、伸びる音を刻みながら鳴いていた。その音に心地よさを感じながら包帯を巻いた少女は、手に持った本をめくる。

本は端が強く色褪せており、少女の僅かな力にさえ崩れそうになる。頁に書かれた文章はところどころがかすれ、描かれた絵も色が落ちていた。

少女は指で文字をなぞっていき、口に出して読んでいく。そうすることで、読みづらなくなっている部分やかすれて見えない文字を、

文脈から、読むあげる勢いから想像してうめていく。

そして、ときに重要と思える部分に関しては、本の隣においた筆記帳に写し書く。

わからない表現に当たったのか、口と筆を止めて悩む姿となる少女。小さく唸り、筆を顎に当てたり、机を指で叩いたりして考えたあと、本を持って椅子を立ち、部屋を出る少女。

階段をおりて、一階で樹木の苗を見ていた母親に声を掛ける。

母親は少女の持っていた本の古さに驚き、苦笑を浮かべて少女の疑問に答える。

少女は本と一緒に抱えていた筆記帳を開き、母親の言葉を書き留めていく。

そこへご飯の催促がてら鳴き声をあげる猫が一階の奥から現れる。

猫に気づいたふたりは言葉のやりとりを止めて微笑む。

本と筆記帳を腕で抱えた少女は、猫へと近づきしゃがみ込んで言う。
今日は一緒にいてくれて、ありがとう、と。

劇場は、椅子から立ち上がった人々の熱気とともに大盛況となっていた。
椅子から立って拍手と声援を送る先には舞台。

舞台では黒髪の青年と若草色髪の男、ふたりの間で両手をひろげて観客に応えている橙髪の少女。

青年は片手にリュートを携えて空いた手を振り、
男も銀の横笛を腰へと降ろした手で握り、前方へ手を振っていた。
どちらも劇場にこもる熱気に当てられて薄く汗を流している。

長い袖の衣装をまとった少女は、なおも続く歓声と拍手に向きを変えて応える。

笑顔の浮かぶ頬にも汗が流れてはいるが、少女は気にすることもない。

青年は、手を振りつつ、胸にこれまでとは違う感覚を得ていた。
楽器を手に、ただ一生懸命弾くことにだけ考えていたままで。
けれど、今日は違った、そう青年は感じていた。

熱い、胸が、心が熱い。

振っていた手を左胸に当てる。

熱い意思を示すかのように鼓動は強く打っている。

この感覚は、包帯を巻いた少女の前で演奏したときと同じものだった。

あときは分からなかったが今ならわかる、と青年は歓声を耳に思う。

意識を視線の先へと向ける。

映るのは暑さを除けるためか、淡く黄色い色の布をした服で身を包んだディオソの人々。

小さなこども、皺をきざんだ老人、片目をつぶした男性、片足がなく座ったままの女性。

大勢、とても大勢の人々が劇場に集い、青年たちへと賞賛の思いを向けている。

喜んでくれている、楽しんでくれている、自分たちの演奏を。

それが、なによりも、嬉しい。

青年は、かつて得る事のなかった満ち足りた気持ちで、頭を下げた。

ありがとうございます、と言葉を添えて。

激音が劇場全体に響き渡る。

音は震えを伴い、劇場だけでなく内部にいる人々も震わせる。声上がる。

「きゃああああ！ なに、なんなの！？」

「いやじゃー！ 死ぬときはおなこの腹の上と決めてんじゃー！」

「うわあああ！？ おい、おまえ抱きつくな！ けつ触んな！」
「あはははは！ 揺れる揺れるう〜！」

舞台の反対、劇場入口のカウンターに座って演奏を楽しんでいた黄土色髪の男は、側にいた紫髪の女性とともにカウンターにしがみついて揺れをやりすごしていた。

揺れがおさまると男は険しい顔となって声を張り上げた。

「皆、静まれ！ 静まってくれ！ くそっ、伝令！ なにがあったか聞いてこい！」
「りよ、了解しました！」

男の隣にいた少年は駆け足で劇場の扉をくぐっていった。数拍の間において、数度振動が劇場に響く。

「くっそ、なんだ、なにが起きてんだ！」
「貴方？ いいのですか、伝令の子をここで待っているだけで？」
「ベテイ……すまん！ ここは任せる！」
「当然ですわ。だってここはワタクシの劇場ですもの」
「ワ、シ、た、ち、の、だ、ろ」

鋭い笑顔を浮かべて言う男に、微笑んで頷く女性。

ふたりがやりとりを終えた瞬間、歌声と笛の音が流れる。

男と女性がはっとなって舞台へ眼を向ければ、騎士と巫女がいた。

赤子をあやすかのように優しく穏やかに唇からつむがれていく歌声。音色は静かな水面に波紋を広げるがごとく人々の合間を広がっていく。

ざわついていた人々は、聞こえる音に耳を傾け、静まりつつある。

席の横に設けられた通路を走る影。

「リゾルさんっ！」

カウンター横まで走って来た青年は、黄土色髪の人に声を飛ばす。舞台袖にリユートを置き、代わりに白き剣を手に持った青年は、

「俺、外見て来ます！」

走って来た勢いそのまま外へと出ていこうとする。

一瞬、呆気にとられた男は、次の瞬間大声で笑い出す。側にいた紫髪の女性もつられて笑い出す。

「待ちな兄ちゃんワシも行く！ ベテイ、あと任せた！」

「ええ、任されてよ貴方」

女性が見送る先、青年と男は一緒に劇場の扉をくぐって外へと駆けて行く。

劇場は、穏やかな歌声と静かな音色からなる人々の吐息に満たされていった。

劇場から出て大通りを走る男と青年。

すでに闇に包まれた空の下、地上からのかがり火だけが周囲を照らす。

なにかにぶつかる振動音が街の空間を震わせていく。

「……リゾルさん、これもしかして……！」

「たぶん、土壁に体当たりしてる馬鹿がいるんだろうな！」

「壊されるわけには、いきませんよね！」

「たりめーだ！」

ふたりは足の勢いを早める。

しばらく走っていると、ふたりが駆ける方向とは逆側から伝令役の少年が走ってきた。

「おおいつ！ ワシだ！ 止まれ！」

「あ、あわわつとつと！ リゾルさん、聞いて来ました！」

「なんだ、なにが土壁にぶつかってやがる！」

「蛸です！ 砂蛸です！ 昼間のよりもでかいのが！」

「なあああにいいいいいい！？」

方向を変えて青年と男に追走する少年の言葉を聞いて、男は絶叫した。

「わあああああ！ だからこつち狙わないでくださいって！」

白い帽子に手を当てて左へと跳ぶ男。

反対の手にもった長大な弓を目の前で暴れる砂蛸へと合わせるが、連続で繰り出される足を飛び避けるのが精一杯で矢をつがう暇がない。

視界に映るのは、昼間よりも大きい、背丈で言えば男の七倍以上はあった。

帽子の男近くにいる松明をもった警備員たちの灯りを下から受けて、巨大な砂蛸は赤黒く不気味な姿を闇にさらしていた。

「うえ……なんですかこれ、もしかしてただの砂蛸じゃないんですか」

周囲で武器を携えている男達も、異様な相手の姿に腰が引けている。体色が赤黒いだけでなく、こちらの姿を捉える眼は血走り、土壁を叩く腕は昼間の砂蛸よりも多く、さらに太い。

頬から一筋の汗を垂れ流しつつ、薄ら笑いを浮かべて帽子の男は言う。

「もしかして、凶暴化しちゃったり、します?」

高く、高くかざされた赤黒い砂蛸の太い足が、答えだった。

「まちがいねえな! そいつは凶獣となつた砂蛸だろう!」

「でも、いままで出たことないんでしょ!? なんで、また!」

「さあなワシにもわからんよ! 分かつてんのは街が危ねえつてことだ!」

伝令役の少年に、人々への避難を呼びかけるよう頼んだ男と青年は、土壁と空間を震わせる元凶へと近づきつつあった。

青年は走る身体に更なる力を込め、胸の奥に堅い意思を抱く。

「……リゾルさん、俺、この街いいなつて思います」

「……そうかい、そりゃまたなんでだ?」

「リゾルさんたちのような憧れる人がいたからです!」

「!?!? ……ぶわっはっはっは!!!」

「なんだかなあ……兄ちゃんたちには驚かされるわ、笑わせられるわ、色々だ！」

「へへっ。言つてて俺も恥ずかしいですけどね……」

互いに照れ笑いを浮かべながらも足は止めない。

土壁の地面に近い部分には街と外をつなぐ通路が空けてあり、ふたりは通路をそれぞれの武器を手に携え駆けゆく。

「おそいですよせんぱーい！　って奏者君までいるじゃないですか！？」

「コル！　さぼつてた分まで働けてめえは！」

「コルさん！　俺も、手伝います！」

「いま頑張つて働いてるんですけど!？」

外へとたどり着いたふたりは、

他の警備員たちとともに赤黒い砂蛸を足止めしている帽子の男のそばに並ぶ。

「伝令の奴に聞いてはいたが、でけえな、おい……」

「眼……血走つてますけど……」

巨体を目にした青年と黄土色髪の方は、迫力に圧倒される。

地面から生み出される地響きは間断なく、土壁を叩く砂蛸の足も動きを止める気配はなかったが、

青年たちを血走つた眼で捉えた赤黒い砂蛸は、そちらへも太い足を振り上げた。

「え、なんだかこつち狙つてませんか」

「おいコル、なにやったか白状しろ」

「なにもやってないですよ！ なに勝手に決めてるんですか！」

「リゾルさん、コルさん！ 足きます！」

青年の叫び声と同時に、三人はその場を跳ぶ。

跳んだ瞬間、三人がいた場所を赤黒い足が鞭のようになつて叩きつける。

一拍遅れて鈍い風切り音が辺りを飛んでいく。

（こわいこわいこわい！ けど、けれど！）

右へと大きく跳んで足を避けた青年は、白き剣を構えて赤黒い砂蛸を睨みつける。

左胸は劇場で得たのとは違う荒い鼓動を繰り返す。

鼓動を感じながら青年が砂蛸を睨むなか、

青年の左手首にはめられた精霊の腕輪は、静かに力強く輝き出す。

同時に右腕へとはめられた花の腕飾りは小さな輝きをこぼす。

白き剣を左へと振り傾けた青年は、

背に帽子の男と黄土色髪的男とともに、

大きな雄叫びをあげて赤黒い砂蛸へと挑みかかった。

その後、合流した騎士と巫女も交えた赤黒き砂蛸との攻防戦は夜通し続き、

戦いを目撃した旅の詩人は新たな”奏者の旅”を書いたという。

数週間後、パストラの街、酒場ガイオにて詩人が新たに書き起こし

た、今代の”奏者の旅”が謡われ、
母親とともに新たな”奏者の旅”を聞いた包帯の少女は、
遠く旅を続けているであろう青年たちを思い、彼らの無事を花に願
った。

第十七話 そわそわ想ひ(前書き)

> i 1 1 7 3 2 | 1 3 9 9
<

第十七話 それぞれ想う

土壁の街から旅立つ馬車の群れ。

旅立つ馬車の群れと同時に街からは鐘の音が、街から外へと響き伝わっていく。

音に振り向いて街へと手を振るのは、荷馬車に乗った黒髪の青年。同じように荷馬車に乗った橙髪の少女と黄緑色髪の男らは帽子をかぶって手を振る。

手が振られる方向には、街の土壁に立つ老若男女の人々。人々の先頭付近で手を振るのは黄土色髪の男と紫髪の女性。

「行ってしまわれましたわね」

「そうだな……また会えるだろうから、そんな顔するな」

「なに言ってますの？ 落ち込んでるのは貴方でなくって」

「ばっ……いや、まあ、ちょっと名残惜しいがな」

「ふふっ、名残惜しいのはワタクシですよ」

馬車の群れが遠くの景色へと混じっていくのを見届けた人々は、それぞれが思い思いの言葉を口にして土壁へと歩いていく。

途中、人々とは逆方向に足をもつれさせながら走る人物がひとり。

「ね、寝過ぎましたあ！ そ、奏者君たちはーっ!？」

落とさないよう帽子を手で押さえながら焦った声を出す男。

他の人々と同様に街へと戻ろうとしたリゾルとベティは呆れた顔。

「……おめえ、なにやってたんだ」

「……貴方。コル様の首元、首元」

言われてリゾルの視線は、荒い息づかいとなっている男の首へと向かう。

そこにあるのは赤くなった肌、形は唇。

「……コル。おめえ今日は日が没しても壁外の警備だ！」

「ひいいいいい！ そんなのないですよお！」

情けのない悲鳴は拳骨で閉じられた。

「なんか、いまコルさんの悲鳴が聞こえたような……」

「気のせいだろう」

「そーだよそーだよ」

荷台に揺られながら街へと眼を向けていた青年のつぶやきに、

馬を操る台座に座るエオリアとセリアはどつでも良さそうに返す。

「はは……二人ともそんなコルさん嫌わなくても……」

「あのような色にまみれた人間は好かん」

「ボクなどかおしり触られたんだよねー」

そのたびに二人してコルさんぶっ飛ばしてたもんな、と青年は呆れた笑み。

再び視線を遠ざかっていく土壁の街へと向ける。

揺れる荷物に肩肘を置いて思うのは街でのこと。

(珍しく一週間近くいたなあ……それに演奏会も、三回もやったし)

いままでと違ったのは、やってくださいと頼まれたのではなく、演奏会をやりたいと青年が自分から言い出したこと。言い出したきっかけは二人の人物と出会ったがため。

(リゾルさんとベティさんみたいに……俺もなれる、のかな)

早くも小さな点となりかけている土壁の街ディオソ。耳には長く伸びて聞こえる鐘の音。まぶたを閉じて、青年は思いを胸に落とし続ける。

(いつか……元の世界へ帰って、それからどうしよう……)

記憶に浮かんでくるのは元の世界で友人たちと過ごしていた日々。眠い眼をこすって学校へ行き、時に不真面目に、時に真面目に授業を受け、放課後は部活や遊びに興じたり、家では家族と過ごす。そこまでを胸に思い落として涙が一筋落ちる。台座に座っている少女と男に気づかれないように腕で拭う。

(あつちの日々は楽しいことばかりだけど、それももうすぐ終わりだった……)

友人たちが皆、一枚の紙に書く、将来の方向。

アルトは荷台で揺られながら思い出す。

なにがやりたいかも分からず、なにが将来にあるのかも分からず、紙の空白ひとつを埋めることなくシャーペンを置いた自分がいたことを。

(さんざん先生と母さんに怒られたなあ)

すこしばかり苦い気持ちを抱きつつ、父親の反応を思い返す。仕事帰りでくたびれた顔をした父親は、空白の紙を突きつけた怒り顔の母親に、一言を告げただけだった。

(好きなようにしたらいい、か……)

怒るのでもなく、呆れるのでもなく、父親は淡々と言った。けれど、無関心ではないと思う証拠に、そのとき父親はネクタイを解きながらも、顔と眼は母親ではなくて近くの椅子に座っていた青年へと確かに向けていたから。

(父さんは、俺と同じぐらいの頃、なに考えていたんだろう)

いまは会う事すらできない記憶のなかにいる父親を思う。

ふと大神官ブツファの顔が思い起こされる。

仕事一筋で家に帰っても口数の少ない父親に対して、

セリアの父ブツファは柔和な顔つきで穏和な口調で他者と接する。

続いて浮かんできたのは包帯を巻いた少女の母親エラール。

父親に対する愚痴を吐きつつも家事は疎かにしない母親に対して、エラールのリラに対する接し方は放任のようできて違つと感じさせる。

思えば、他人の親やそれぐらいの年齢の人と接することなど、あつちの世界ではそんなに無かつたな、と青年は思い返す。こつちの世界では年齢関係なく人が混ざり合い関わり合い生きていく。

(なんだろう……元の世界がひどく不自然に見えるや……)

年齢の区別、職業の区別、性別の区別、どれもが元の世界であったもの。

こちらでは区別らしい区別などほとんど感じない。

青年が思考している間に、土壁の街は景色の向こうへと消えていた。まぶたを開く。

被った帽子に遮られた薄い光が視界へと入って来る。

土よりも砂が多く視界を埋める大地。

大地を眺めつつ青年はさらに考えを頭に投じる。

(ろくに草も生えない環境で、あんなに人が集まって生き生きとしてる)

もう見えなくなったディオソの街にいた人々。

演奏会に来ていた人のなかには事故や凶獣に襲われ身体に欠損を持った人がいた。

しかし、かつて土の精地へと向かった道中で出会った人と同じように、

彼、彼女らは明るい表情を持ち、周囲の人からの支えを受けていた。

(障害者、なんて言葉も存在しない世界)

青年はこちらの世界へ来てから、いくつかの言葉が通じないことに何度もでくわした。

言語が異なるために英語などからの表現は通じないだけでなく、障害者などの言葉や差別となるような多くの言い回しが通じなかった。

(でもそれは言葉だけで、差別がないというわけじゃない)

包帯を巻いた藍色髪の少女が浮かぶ。

召喚祭で聞かされたエオリアの言葉も同時に浮かんで来る。

差別とはいかなくてもいじめはある、と。

(似たようで違う世界だけど、でもやっぱり似ている部分もある)

いつか自分は元の世界へと帰る。

けれど、藍色髪の少女は変わらずこの世界で生きていかなばならぬ。

胸が疼く、疼かせるのはアルト自身でも理解できない感情。

感情とともに湧き出る、祭りのときに得た、彼女を守りたいの思。

(いまは、旅で近くにいてあげられないけれど……)

かといって旅が終われば、自分はそばにいられない。

手紙を送ったりしているものの、それもいつかは終わる。

どうしたらいいのだろう、どうすればいいのだろう。

憧れから生じた、旅先へと眼を向けた青年の思いは、まどろみへと沈んでいった。

手綱で馬を操っていた若草色髪の男は、荷台で眠りに落ちた青年を振り返って見る。

帽子を目深にかぶって肘をのせた腕に顔をもたれさせている青年に、

男は小さく笑って馬が走る方向へと視線を戻す。

視線の周囲には男たちの馬車を囲むように、他の馬車が走っていた。

「それにしても隊商とともに移動とは、トロツポ会長がここまでしてくれるとはな」

「だねーこれですこしはエオリアも楽できるんじゃない」

「そのとおりだが、それでは自分の護衛が意味ないな」

隣に座る少女からの言葉に、苦笑して答える男。

「たまには休むのも必要だよーボクを見習いなさいっ」

「いや、それだけは遠慮しておく。そもそもセリアは休みすぎだ」

「えーっ」

不満の声を挙げた少女をほおっておいて、

ここ数日間は演奏会や宴で忙しかったために考えていられなかったことを、

男は前方を向きつつ考え始める。

(そういえば、凶暴化した砂蛸……明らかにアルトを狙っていたな)

一週間前に現れた赤黒い砂蛸は、初めて現れたトリゾルは言っていた。

それだけでなく間を置かずして連続で砂蛸が襲ってくること自体初めてであったと聞いた。

さらにおかしなことに赤黒い砂蛸は戦闘中、しつように青年へと攻撃を向けていた。

エオリアは思う、もしかして、と。

赤黒い砂蛸と戦う前におそってきた砂蛸はアルトを狙っていたのは

でないか、と。

(それに加えて、精霊の腕輪、だろつかあれば……)

赤黒い砂蛸との戦いで負傷した警備の連中を助けるため、青年とともに負傷した人の前に立ち、砂蛸と対峙したときのことだ。妙な脱力感を覚えた。

感覚は一時的なもので、すぐさま元に戻ったがあれは何だったのか。聞けば背後や周囲にいた警備の人間も同様の感覚を得ていたと言う。

(だが、アルトだけはそのような感覚は得ていないと言っていた……)

駆けつけたときから、青年の左手首にある腕輪が輝いていることは気づいてはいた。

同時に黒髪の青年が普段以上の速度を持って立ち回っていたことを。そして戦いが終わったときには腕輪の輝きは失せており、青年の動きもいつも通りとなっていた。

(もしかやアルトの身体に似合わぬ力と、異常な発達をみせる剣の腕は)

そこまで考えて男は頭を左右に振る。

まだ答えを出すのは早い、と。

無言で頭を振る男に少女は不審な表情をする。

「エオリア？ どうしたの、眠かったりする？」

「平気だ。ただ……考え事をしていた」

「……なに考えるかはわからないけど、考えすぎたらだめだよー？」

「まさか考えてないセリアに心配されるとはっ」
「だれが考えてないのー！ ボクだって悩んで考えてますうー」
「なにに悩んで考えているか当ててみせようか」
「だーまーれー！」

ふくれ顔となった少女に、笑い顔となる男はしばらくして表情を戻す。

（そうだな、考えても仕方のないことだ）

いずれ青年は元の世界へと帰る、そうなれば彼が持っている力も消える。

そう、いつかは彼もいなくなるのだ、そう考えたとき男は寂しさを胸に覚える。

この旅も必ず終わりを迎え、セリアと一緒に自分は神殿での生活に戻る。

気持ちが沈みかけるのを男は感じた。

一陣の風が通り過ぎる。

男の隣に座る少女は腰まで伸びた橙色の髪を風に流す。

「いい風ふいてるねー……んーくすぐりたい」
「いい風だな」

風に誘われて空を見上げれば、雲無き青空。

青空からは容赦なく日差しが降りてくるものの、

青年が渡してくれた帽子のおかげで男は暑さをしのげていた。

沈みかけた気持ちがすこしばかり軽くなる。

青年がいつかいなくなるとは言え、彼がともにいた記憶や物までは

なくならないのだと。

それまで自分は護衛の使命を全うするのみだ、男は改めて自身の胸の奥で思う。

隣の男がきつく前を見据えているのを、セリアは横目で見る。

長く伸びた髪を風に流しつつ、帽子は飛ばされないよう手で押さえ、若草色の男がなにを考えているのか少女は思う。

(きつと、こないだの蛸とのことだろうなー)

あのときの砂蛸は確かに異常であった、しかし青年も異常だった。

それは戦いの場から遠く、負傷した警備の人間を手当していたセリアにも分かることだった。

視界は砂の大地を映しながらも、脳裏には戦いの絵が流れる。

(とんでもない動き、してたもんねアルト)

エオリアにリゾル、コルなどともに赤黒い砂蛸を迎え撃つアルト。

他の人間が地面に叩き付けられる太い足を跳び避けるだけで精一杯だというのに、

青年だけは跳んで避けるさいに斬りつけるだけでなく、

地面へと叩き付けられた瞬間を狙って足に飛び乗ってみせたのだ。

(叩き付けた瞬間なんて見えなかったのに……)

雄叫びあげながら飛び乗った足を駆け、四つの眼が血走る頭部へと近づくと青年。

青年を振り落とそうと揺れる足を苦にもせず、たたき落とそうとす

る足を避けていく姿に、
まるでおとぎ話や詩人の詩に登場する人物を重ねたぐらいだった。

（その前の砂蛸のときは、あんなに驚いて怖がっていたけど……
夜の晩に現れた赤黒い砂蛸ですらボク怖くて仕方がなかったのに、
アルトは、そんなの全然見せないで戦っちゃうんだもん）

頭部へと迫ったものの、別の足に弾かれて地面へと落とされた青年
は、

それでも恐怖に足を止めることなく再度立ち向かっていった。
立ち上がる際に見えた顔には、怯えを含んではいたが、
眉は強く立っており眼はまっすぐに相手を見据えていた。

（あんな強さとか見せられちゃうとエオリアも困っちゃうよねー）
守る相手が、自分よりも強いという事実。

（でも……おかしいよね、アルトの強さは）
この数ヶ月の旅で筋力がつき、旅立ちの頃よりは遅しくなったとは
いえ、
それでもアルトの肉体はエオリアよりも細い。
なのに剣の腕はエオリアを越しつつあり、肉体にいたっては想像以
上となっている。

（お父さんは……なにか知ってるのかなあ）

風が落ち着いたところで、少女は帽子から手をはなし、
両肘を膝につけて両手の平にあごを乗せて幾つもの馬車が走る前
方へ顔を向ける。

隣で「そんな姿勢は……」と注意する声が聞こえるが無視。

(こどもの頃から奏者の言い伝えを、お父さん聞かせてくれたけれど、

そのたびになにか考えてる様子だったし)

いまは近くにいない人物のことを思い、少しだけ寂しさを得る。

金髪の女性や藍色髪の少女のことも思い出す。

(リラもエラおばさんも元気にしてるかなー)

遠くの空に知り合いの姿を描いては消していく。

できれば無事に旅を終えて、またみんなで過ごせたらいいなと思い、ちらりと横を見る。

手綱を握る男は似合わない柄の帽子をかぶって前を見ている。

その様子を見てセリアはくすりと笑う。

男は一瞬少女を見て眉をひそめたがすぐに戻して前を向く。

(いつかは終わっちゃう旅だけど……)

それまでは楽しく旅していたいな、そう少女は心に秘めた。

青年たちの馬車が数日間砂だらけの大地を走る旅に出た日、

人通りも少なくなってきた深夜、花屋の二階の一角からは明かりが漏れていた。

少女は筆記帳に筆を走らせている、送り主には決して届かない手紙

を。

書かれている手紙のよこには土の入れられた鉢植え。
鉢植えの中央には僅かな土の盛り上がりが見える。

夜露草の芽が出かけようとしていた。

ただ、鉢植えの横に広げられている筆記帳には、
僅かに土が盛り上がった記述が数日前の日付にて記されており、
そこから進展を見せていないことが見てとれる。

それでも少女は嬉しさと喜びを隠せなかったのか、
土が盛り上がった際の日付にはやや乱暴に文字が記され、
笑顔を模した絵が描かれてもいた。

青年から送られた手紙へ返事を書く少女の顔も、ほころんでいる。
ふと、少女は筆を止め、頬に手をあてて何かを考える。
その姿勢のまま下を向いていた視線を上に向けた。

向けた先には何枚も画鋏で止められた絵。

大きい、と言うどころではない巨大な蛸と戦う青年たちが描かれた
絵。

送られた手紙によれば、記録の為にディオソの警備の人が描いたの
だという。

神殿と生まれ育ったパストラの街しか知らない少女にとって、
何度も送られて来る青年の手紙はいつしか、

閉じた居場所にいた彼女の意思を動かそうとしていた。

少女は何度も思っていた。

手紙を送られているだけでいいのだろうか、と。

与えられているだけの自分で良いのだろう、とも。

「……私だって、アルトさんのためになにかしたい……」

視線が向かう先では、絵のなかで剣を構え立ち向かっていく黒髪の青年。

逞しくあり、凜々しくもある姿、だが少女は知っている。

青年の内にも自分と同じように恐れ、寂しさが宿っていることを。

「アルトさんに、私ができることってなんだろう……」

顔を動かして視線を移動させれば映るは鉢植え。

ようやく、ようやくにして芽が出ようとしている。

筆を置いて、鉢植えを手にとる。

「夜露草を咲かせること、だけでいいのかな……」

脳裏には青年の言葉がよみがえる、リラの咲かせた花が見てみたいと。

鉢植えを両手で抱え込み抱きしめる胸には、小さくも熱い感情。

手紙が届くたびに、青年の書いた文章を読むたびに、同封されている絵を見るたびに、

少女の胸元で疼く感情。

鉢植えを抱きながら少女は、少し早くなった自分の鼓動に耳を傾ける。

鼓動に心地よさを感じながら、少女はひとつのことを決める。

「うん……私、もっと動いていこう」

唇からは静かに、しかし強い意思の言葉を少女はつぶやいた。

ほぼ一日中日射しを浴び続けていた結果、馬車の台座で手綱を握っている青年はすっかり日焼けした肌となっていた。

帽子をかぶり、長袖の衣服を身につけているにも関わらず、天から降り注ぐ日光は容赦なく大地を走る人間を焼いていく。

ひとり台座に座る青年は周囲を走る馬車の一台に向かって声を投げる。

「グラーベさーん！ 今日で八日目だけど、もうすぐじゃないんですか!？」

声がかけられた先には青年と同じように帽子をかぶり、上半身を大きくおお布をみにつけた髭が長く伸びた老人。

「そつじゃのう！ おそらくそろそろ見えてもいい頃合いだのう！」

年老いた外見に反して返る声ははっきり通った声。

「と、昨日も言ったような気がするけどのう！ はっはっは!」「いい加減、ひからびそつですよ俺!！」

老人の笑い声に青年も笑いをにじませた口調で返す。

「いいじゃないか！ アルトもそのまま砂の隊商として臭い男になるのうや!！」

青年が声を掛けたのとは反対方向にある馬車から聞こえる野太い声。野太い声に振り向いた青年の視界には、赤紫色した長髪を細かく編んだ若い男。

「レッジさん、それだけは勘弁してください！」

「ちっ！ アルトだったら隊商の楽士として歓迎するのになあ！」

「そう言ってくれるのは嬉しいですけど、俺やることありますから！」

「ははっ！ 旅が嫌になっただいっでもこい！」

「ええっ！」

レッジからの声にアルトは笑顔となって頷く。

青年の背後、馬車の荷台からは動く人影。

「じゃあボクも旅が嫌になったらレッジさんたちと歌おうかなー」

「そいつはいいな！ 巫女さんの歌なら大歓迎だ！」

「本当じゃのう！ いっそ毎日歌ってほしいくらいじゃ！」

「えへへーよおっし！ それじゃあ一曲いくよエオリア！」

「……目が覚めたらいきなり歌に付き合わされるとはな」

荷台から台座へ立ち上がった橙髪の少女の背後からは、

あくびで口を大きく開きながら銀の横笛を構える若草色髪の男。

「いいじゃない、いいじゃない！ いまきぶんいいから！」

「自分の気分は……まあ、いいか」

「おっと騎士さんもお目覚めかい！ 楽しい曲を頼むな！」

「わかった。セリア、曲は演奏会のときのでいいか？」

「いいよー」

台座の後ろに立って両手を横に広げて風を受ける巫女。
その後ろに立ち、銀の横笛を構えた騎士は息を吸い込んで音を生み出した。

始めは高く伸びる音、に続いて短く連続した音をつないでいく。
音に合わせて巫女も高い声で歌い出し、幾つかの言葉を音に合わせたのち、

一拍の空き。

今度はゆっくりとした音色と拍子。

歌声も出だしよりもトーンを下げた合わせていく。

騎士の両手はせわしなく動きつつも、音は途切れず流れる。

巫女の歌声もときに小さくつぶやくような音量となりながらも、その声は馬車の駆ける音に潰されることなく周囲に響き渡っていく。

短い音の連続のなかにまじる高音の伸び、
合わされる歌声は落ち着いた色ながらも歌い述べる歌詞は激しい恋を歌ったもの。

それでも歌詞にて想いを进らせる人物は、激しさのなかにも終わりを感じている。

激しく燃え上がる恋は、火が消えるのもまた早い。
けれど、無駄ではない、と歌声はつむいでいく。

人に恋すること、恋を実らせようと努力すること、努力のために行動すること、

すべて消える恋とともに消えるのではなくて、
いずれ生まれる新しい火種をより激しく燃やす糧となるのだと。

だから諦めないでと巫女は声を出す。

どんな恋も人も、そのとき出会った幸運はそのときのものだけ、臆してはいけない、見失ってはならない、ただまっすぐに求めよと、背中を押すように横笛の旋律は短く、早い拍子で音を生み出していく。

台座の背後からの旋律と歌声を耳に聞きながら青年は思う。

(恋……俺の恋ってどうだったかな)

思い出を振り返れば、向こうの世界における二月の記念日での結果は無惨なもので、好きになった子はいても全然仲良くもなれなかったよなあ、と青年は苦笑いになる。それは周りで騒いでいた友人たちも同様だったし、男だけで遊んでる方が楽しかった。

(だからコルさんに色知らずとか言われたんだろうな)

でも、と青年は胸に疼きを覚える。手綱を握る手に力がこもり、視線が向いている方向にはひとりの顔が思い描かれる。包帯を巻いた藍色髪をした少女の、笑顔。

笑顔を思い浮かべた瞬間、胸がこれまでになく疼く。両手のうち右手だけを手綱から離れた青年は、左胸に手の平を当てる。

(リラの笑顔を思い浮かべると、いつもこうなる……)

もしかして、恋をしているのだろうか、青年は自問する。

(よく、わかんないな……恋らしい恋したことないし)

問いに返す意思はあいまいなもの。

(好きになったことはあっても、顔が可愛いかそんなんばっかだった)

だから冷めるのも早かった。

(けど……リラは、どうなんだろう。顔でどうこうじゃないし、好きとは……なにか違う)

言葉にならない思いを抱いた青年の前方、
天に向かって朱色に黒光りをした大きく横に広がる山が映り出した。
山に気づいた青年は、はっとして声をあげる。

「あれは火山!?!」

「やっーつと見えたのう! 待ちこがれた火の精地だぞう!」

「火山の麓にあるのが、火の精霊コンフォードを奉る精地、プレッシだ」

「いまのところは火山もお休みしてるからへいきだよー」

歌を終えた二人も青年とともに前方に現れた山を眺める。

山の頂上からは大きな白煙が上がっており、麓に見える街らしきところからも、

煙突のようなものから白煙が空へと登っていた。

手綱を両手で握った青年は、今一度強く手綱を馬に叩き付けて加速を促した。

第十八話 揺らく心と炎

白煙が上がる人里へ近づいたところ、緩やかな速度をともなつた馬車
が、蹄を鳴らして地面を進む。

容赦のない日射しに照らされながら、蹄はときに甲高い音を立てる。
台座に座っていた青年が地面を見れば、そこには堅い岩肌が露出し
ていた。

岩肌は平らにされているため、地面に埋まつた岩を歩く馬に支障は
ない。

「火山の近くだからか岩が多いな」

「岩もごろごろしとるが、ここらは鉱石を採るための鉱山もあるか
らのつ」

「グレーベさんからその辺りは嫌というほど聞きましたらね」

右隣を走る馬車へ青年は苦笑いをおくる。

「ふあふあふあ！ 知らないよりは知っておくもんじゃない！」

「じーさんの話はくどいから嫌なんだよ」

左隣から若い男の声がとぶ。

「ばかもんレツジ！ この糞孫、老いた言葉ほど大事なもんないぞ
！」

「へーへー何百回も聞かされたら大事に思えねえよ」

ふたりのやりとりに青年は声もなく笑う。

青年の正面を進んでいた馬車が止まり、青年たちも続くように馬車
を止める。

先頭の馬車から降りる人物は、彫りの深い顔立ちをした赤毛の男性。男性は青年の方向へと振り向くと口を開く。

「奏者様、我らが砂の隊商はここまでとなります」

「親父、そんな堅い口調でいまさら言わなくてもよお」

「そうじゃぞ息子よ。いつも通りでええじゃないか」

赤紫色の長髪を細かく編んだ若者には呆れた感じで言われ、

髭を長く伸ばした老人からは諭すような口調で言葉を放たれた赤毛の男性は、

ひきつった笑みを顔に浮かべながらも言葉を続ける。

「み、短い間ではございましたが、我ら砂の隊商は奏者様のー」

「じーさん。あの親父の頑張りをあとでおふくろにどう伝えたいい？」

「そうじゃのう。子供が浮かれて背伸びしておったと言ってやれ」

「このお糞親父に糞餓鬼がああああああ！」

せつかく綺麗に締めようとしてんだから少しは気を使えってんだあ！」

赤毛の男性からの叫びに、若者と老人は揃って笑顔になる。

青年は黙って腹を抱えていた。

馬車から降りて赤毛の男性と向き合う青年たち。

「本当にすまないアルト。せつかくお別れなのに滅茶苦茶にしちま
つて」

「い、いえいえ。気に、きにしなないですよ」

「アルトー笑いが抜けてないよー」

橙髪の少女の声に青年は顔を引き締める、がどうしても笑みがこぼれる。

その様子に隣に立つ若草色の男は呆れた顔をする。

「アルト、まだ笑っているぞ」

「も、もう大丈夫だって」

「ったく、うちの家族はそんな面白いもんかね」

頭を手でかきながら苦笑顔をする男性。

「面白いだけでなく、色々と知ることができました。星や砂漠のことなんかも」

「あんなこと、うちら砂に住む連中には当たり前だがな」

顔を左右に振って青年は言う。

「けど、俺は知らなかったです。そもそもこの世界のことだってよく知らないんですから。」

だからこそセグイドさんたちと一緒に旅ができて、俺楽しかったです」

「……そっか、そう思ってもらえるなら良かった、ってことだよな?」

「いいに決まってるだろ親父」

「うむうむ。多くを知ることでも多くのことを思いやれるようになるのじゃ」

男性のすぐ近くにいた若者と老人がそろって頷きを返す。

同じく頷いた男性は、青年へと右手を差し出す。

青年も右手を差し出して、互いに手を握り合う。

「また会おうアルト。エオリアにセリアもな」

「ええ、また会いましょうセグイドさん、グラーブさん、レッジさん！」

白煙の上がる人里ではなく、火山の麓へと走って行く馬車を見送る青年たち。

三台の馬車が見えなくなると、橙髪の少女は素早く荷台へと身を投げる。

素早い動きに反応できず、声だけが出る青年と男。

「……大丈夫、じゃないよねセリア」

「……月のものに加えて、この暑さだからな。宿に着くまでは寝かしておいてやるう」

「分かった、なら道案内を頼むよエオリア」
「任された」

男はそう言うと、馬車の手綱を持って歩き始め、青年は台座へと座る。

緩やかに歩み始めた馬に合わせて車輪が音を立てて回り出す。

青年は静かに首を動かして荷台の方へと視線を向ける。

影となっている荷台の奥では布の敷かれた上で、頭から布にくるまっている少女の姿。

姿を確認して青年は視線を馬が進む方へと戻す。

(生理だっけ、そういえば学校では女子がときどき休んでいたなあ)

そんなにつらいものだろうか、とアルトは当時思っていたが、いまのセリアの様子を見ると、とてもではないが口にはできない。
視線がふつと馬の横を歩くエオリアの背中へと向く。

（エオリアはその辺、分かっているみたいだったし……情けないなあ俺）

砂の隊商との道中、体調を崩した少女を気遣う男の様子は、慣れない出来事で慌てる青年と違って落ち着いたものだった。

突然泣き出したりわめき出したりする少女の傍ら、男は黙ってそばにたたずみ、ときになだめ、ときに話を聞いて過ごしていた。

（一体俺は学校でなにを習っていたんだろう……役に立たないことばっかだ）

隊商の人達がいる間は笑って誤摩化していられた不安の感情が、首をもたげはじめる。
前を向いていたはずの視線が知らず知らずのうちに俯いていく。
小刻みに揺れる台座の上、久々にひとりの時間を得たことが青年の心を曇らせる。

「はあ……」

ため息が漏れる。

「はあ……」

背後からため息が小さく聞こえて来る。

(ひさしぶりにアルトのため息を聞いたな)

手綱を引きながら、若草色髪の男はうつすらと背後へ視線を向ける。向いた先には台座に座りながら顔を俯かした青年。

視線を前へと戻す男。

ふう、と音にたてず息をついた男は、思案顔となる。

(それにしても、何故だ？ アルトは何故悩んでいるんだ？)

手綱を握った左手とは反対の手で顎を触る。

無精髭が生えてきた顎は、手にざらついた感覚を返す。

ここまでの旅を思い返すが男には心当たりがない。

(星座の違いにあれこれ言っていたが……違うな)

レヅジたちと夜空を見上げて話していた青年の様子は、明るかった。筆記帳をひろげて向こうの世界の星座を語る姿は楽しそうだった。そして新たに知ったこの世界の星座を筆記帳に書き留めていく青年は、

(笑顔だった……な)

ただの思い過ごしならいいのだが、と軽く頭を振った男だったが、もしかしたら砂風呂だと偽って頭以外を砂に埋めたことを根に持っているのかと一瞬悩むが、

嘘だとばれた翌日同じことをされたからそれはない、とすぐに思い直した。

(あるとすれば……前にアルトが言っていた常識とやらの違い、だ
ろうか)

人里に近づいてきたせいか、通りをまばらに人影が過ぎて行く。

人影のなかには岩肌を持った低い身長の人影、岩石人が荷物を背負
って歩いていく。

数人で喋り歩きしている岩石人を横目にエオリアは思う。

(この世界とは違う世界のことを色々知ってはいるようだが、なん
と云っていいのだろう。

知ってはいるが、知っているだけというか……)

時折、青年が見せる異界の知識からなる事実の数々。

どれも異世界の知識であり、こちらの世界では耳にしたことがな
いものばかり。

そのなかでも大地が平らでなく球の形をしていることにエオリアは
驚かされた。

(しかし、実際に見た事あるかと尋ねれば、ないとアルトは言う)

不思議だったのは何故見た事も無いことを事実だと信じているか、
だった。

他にも多くのことを旅の傍らエオリアはアルトから聞いてはいたが、
ほとんどと言っていいほどアルトは実際に物事を見知っていたわけ
ではない様子だった。

(それが当たり前の世界だった、と考えるべきか)

にわかには信じ難いと男は思い悩む。

再び手綱を握った手と馬の間から背後を盗み見る。
髪をびしょぬれにした青年が俯いて座っていた。

一瞬、状況が理解できず棒立ちとなったあと男は聞いた。

「……アルト。セリアにやられたのか？」

下向きとなった髪から雫を幾つも垂らしながら、青年は俯いたまま頷いた。

小さくため息を吐き出して若草色髪の男は振り返って言う。

「アルト、無理にセリアの世話をしなくてもいい。自分がー」

「エオリア」

消えそうな声であったが、男の耳にははっきりと名を呼ぶ音があり、続けて聞こえた。

「俺、自分が情けないよ」

薄暗い室内のなか、寝台で眠っていた橙髪の少女は瞼をゆっくりと開く。

おでこを右手で押さえながら上半身を気怠そうに起こす。

「あれ……どこだっけいま」

疑念を口にして周囲を見回す。

寝台から数歩離れた場所からは輪郭のゆがんだ朱の光が差し込んでおり、

少女の鼻には土と鉱石の臭いが強く感じられた。ぼやけていた視界は次第にはつきりと視界を映し出す。眼には大小様々な岩を積み上げて作られた壁と天井があった。

「あ……そつか、寝てる間に着いたんだ精地に……」

おでこに当てていた手の平は、下がって腹部に当てられる。

少女は小さくうなり声を出して自身の内側から来る痛みに耐える。だいぶ楽になったけどまだきつい、その声には出さずに胸につぶやく。

自身の身体に掛けられていた布を左手で握る。

しばらくの間、少女はひとり痛みに耐えていた。

輪郭のゆがんだ朱の光が差し込む方向とは反対から扉が開く音。

半目となった少女が眼を向ければ、そこには陽光に似た光を放つ石を持った岩石人。

岩石人は女性のもつと見える服装に身を包んでおり、足音をたてながら寝台へと歩み寄る。

「だいじょうぶですか、巫女さん。だいぶお疲れのようだけど」

金属質な声色で体調を気遣われる。

腹部に手を当てながら少女は左右に顔を振って、力のない笑みを浮かべる。

「なんとか頑張ってきたところ……ここって宿ですか？」

岩石人の言葉に答えてそのまま疑問を口にする。

大きく頷いて岩石人は言う。

「そうですね。ここは火の精地が火山の手前、センプリの里にある岩宿です」

所々から白煙の上がる人里を歩くのは黒髪の青年。

歩く地面からは黒光りする岩が隆起しており、土や砂に混じって多くの石が転がっている。

辺りは夕暮れを迎えるためのかがり火が焚かれており、岩石人や人々が混じって談笑していた。

青年の視線は談笑している人々の近くにある建物に吸い寄せられる。そこには黒く大きな岩を積み重ねて作られている岩宿。

岩と岩の間には灰色の物質が隙間を埋めるように詰まっており、近くを通りかかった際に触ったときには堅いゴムのような感覚を青年の手の平に返した。

場所によっては長い年月を経て黒い岩が灰色となった建物もあり、隙間に詰まった色と合わさって灰一色の建物と化していた。青年は近づいて壁を構成する岩に触れながら見上げていく。

「……こんな建物で暮らしてるんだ」

呆然とした声色でつぶやく。

壁を構成する岩の断面は鋭利であり、側に立つ青年の顔を映し出す。足音のような音が聞こえたとき、壁横に設けられた出入口から若い岩石人が飛び出す。

予期しないことに青年はびくつと震えるが、相手も同じ様子だった。が、若い岩石人はにこりと微笑んで通りで遊ぶこどもの輪へと駆け出していく。

「あつ……」

壁に触れていた手を思わず伸ばすが、空を切る。

空を切った手をそのまま頭へと持っていていき、誤摩化しついでに頭をかき。

どうしよう、と青年はひとりつぶやく。

（なんか……ひとりで見て回ってもどうしようもないな）

落ち込む感情とともに宿を出るときのことを思い浮かべる。

セリアを気遣うエオリアの邪魔になつては悪いと青年は宿を出たが、

（これなら一緒に宿でセリアが目覚ますの待ってたらよかった）

けれど、と内心につぶやき続けて、

「……なんにもできない自分が嫌だな」

言葉が口から漏れる。

建物から離れるように歩き出した青年は、

かがり火の明かりが当たるか当たらないかぐらいの位置にある適当な石に腰掛ける。

石に腰掛け、片膝を抱えて里の広場で遊ぶこともたちを視界に入れる。

耳には甲高い岩石人の声と、聞き慣れた人族の声が混じって響く。

岩石人のこどもが立ったまま両手を足へと伸ばし、天に向かって背中を向ける。

その背中を人族のこどもが股を広げ、両の手の平を背中について跳び越える。

（馬跳び……してるのかな）

跳び越えた人族のこどもが、同じように背中を天へと向けると、跳び越えられた岩石人のこどもが今度は跳ぼうとする。

しかし、人族の子は体重を支えられずに跳ぼうとした岩石人の子とともに転がった。

あ、と青年が小さく声を出すか、

こどもたちは転がりあったことを笑い合い、再び馬跳びに興じる。いつのまにか浮いていた腰を青年は再び石へと降ろす。

（……差別とか、そんなの無いんだよな）

生まれたときから彼らは一緒に生きてるからこそだろうな、と思う。近くのかがり火がちいさく爆ぜる。

近くから感じる火の熱さと、肌から得る夜気の冷たさを心地よく感じながら青年は考える。

（この世界に来て数ヶ月。こっちが当たり前前に感じるようになって大丈夫なのかな）

元の世界にへ帰ったとき、自分は向こうの生活に戻れるだろうか、と。

（もし、こんな身体のまま戻ったりしたら、大変だろうなあ）

いつのまにか何倍にもなっていた自身の身体能力。

それどころかディオソの街での闘いでは、普段以上の動きをしてい
たとも言われた。

そんなに動けてる自覚はなかったんだけど、と胸に思う。

（一体どこからそんな力が出ているのだろうか……）

そこまで考えて青年は、得体の知れないなにかを思い背筋が冷たく
なる。

頭で納得できないが実際に現実として目の前にあることが、青年は
おかしく見えた。

不意に柔和な顔をした大神官の言葉が思い出される。

――精霊の加護

（そういえば前も不安になったとき、そうブツファさんに言われた
んだっけ）

片膝を抱えていた両腕に頭をうずめていく。

（なんにもできない俺だから、こんな身体、いや力を授けてくれた
のかな）

組んだ両手の左手が、右上腕部に身につけてある四色の腕飾りに触
れる。

ちらりと視線を腕飾りにおくる。

（リラは……今頃がんばってるんだろっなあ）

綺麗に咲いた花束を抱える、藍色髪の包帯を巻いた少女を思う。

左胸の疼きとともに寂しさが生まれる。

青年は無言のまま、組んだ腕のなかに頭をつずめる。

耐えるかのようにじっとしていた青年がやがて顔を上げたとき、いつのまにか眼前にはこどもたちの目がいくつも並んでいた。

橙髪の少女が眠っていた室内は、天井中央に陽光を放つ石が金属の燭台にのせられたことで、

室内全体に朝日が差し込んだかのような明るさに満ちていた。

部屋には寝台にて上半身を起こした姿勢で湯気を放つスープを飲む少女と、

寝台へ向いた形で置かれていた椅子に腰掛ける若草色の男。

「……大丈夫なように見えるが、身体はどうだ」

「うん、だいぶ平気になってきたよーまだちょっときついけどねー」

スープの温かさを味わうようにゆっくりとスプーンを運んでいた少女は、

言葉は明るいものの困った口調で言葉を告げる。

「そうか、と男は言う。」

「火の精地にはたどり着いたのだから、おまえの身体が治ってから火の大精霊様には会いに行こう」

「……うん。ってそういえばアルトは？」

「アルトなら……ひとりで里を見て来ると外へ行った」

「そっかーあんまり覚えてないけれど、アルトなにか落ち込んでたよー」

「む？ そっだったのか？」

少女は頷き、スープの中に入っていた大きめの野菜をスプーンですくいとり、口のなかへ運ぶ。

「ふいんだひよー」

「何回言わせる気だ。食べてから話せと」

呆れつつも男は少女の言葉を待つ。

口内の食物を飲み込んだ少女は口を開く。

「そつだよー馬車で寝ぼけて水ぶっかけちゃったとき、ずっと俯いてた」

「ああ、あれか」

少女の言葉に合点がいったのか、両腕を組んで男は軽く頷く。

「……アルトは、言っていた。俺はなににもできない、と」

「え？ どうしてそんなこと言ったの？」

「自分が尋ねてもはつきりとは教えてくれなかった。だが、おそろくは……」

言いづらそうに口ごもる若草色髪の男。

少女はスープの入っていた器を持ったまま男の言葉を待つ。

眼はまっすぐに。

「セリアが寝込み、その世話をどうしたらいいか分からなかったことが、

関係しているかもしれない」

深刻そうな口調とともに放たれた言葉に、少女は驚いた顔になった

あと、吹き出す。

「あのなセリア、アルトにとってはー」

「だってだってー」

少女は口を手で押さえて笑い続ける。

その様子に困った顔となった男は、どう言葉が続けていいのか迷う。

「あーおかしいおかしい。だってアルト、おかしいよー」

「おかしいとは言ってもだな」

「だって寝込んだボクの世話はエオリアがしてくれたんでしょ？」

「む、そうだが」

「やっぱりーだったらアルトは気にしなくてもいいのに」

「……そうだな、アルトが気にすることでは、ないよな」

「うん、そうだよーでも、それでも気にするってことは」

「アルト自身、なにかしら思うことがあるのだろうな」

だねーと少女は言葉をつなぎ、器に残ったスープを飲んでいく。
やがてスープを飲み終えた少女は、器を手持って床に立つ。

「よおっし！ アルトを探しにいこう！」

「探しにつてセリア、身体がまだ」

「いいのいいの！ もう平気！」

わかった、と苦笑した顔で男は答えた。

「今度はだれだー!？」

「はーいっ！ はーい!！」

「ぼくだってばあ！」

青年の呼び声に人族の子と岩石人の子が両方答える。

「君はさっきやったから、この子が先だよ」

青年はしゃがんでこどもらと視線の高さを合わせると、人族の子の頭をなでて、岩石人の子を手で招く。嬉しそうな顔になって岩石人の子は青年へと近寄り、両手を青年へと出す。

青年は出された両手を自身の両手でそれぞれ握り、身体に力を込める。

「それじゃあ、振り回すからしっかり握ってて」

「わかったあー！」

甲高い声にうん、と頷いて青年は握ったこどもごと左へ身体を傾ける。

青年が大きく広げた足を踏ん張ると、岩石人の子は身体が宙に浮く。

(んぐ……！ やっぱ見た目通りすごく重い！)

さっきまで振り回していた人族の子よりも両腕にかかる重さが違った。

それでも青年は身体の動きを止めることなく左へと回り続け、岩石人の子を空中に浮かべて旋回する。

岩石人の子が浮いて青年とともに回転するのを、周囲にいるこどもたちだけでなく、

遠巻きに見ていた大人たちも一緒にあって歓声をあげる。

「すげーすげー！ 兄ちゃんすげー！」

「うわあ、いいなあいいなあ！」

「今度はおらを空へと放り投げて！」

何度か回転したのち、勢いを弱めて青年は動きを止めて岩石人の子の手を離す。

岩石人の子はお礼を言っただもたちに自慢をする。

その様子に小さく笑って青年は言う。

「ごめん、ちよつとだけ休ませて」

「えーでもいいよ！ またあとで遊んでね！」

「うん。またあとでね」

こども達にそう答え、青年は先ほどまで座っていた石へと近づく。

いつのまにか額に汗が浮き、身体には熱がこもっていた。

腕で額の汗をぬぐい、石に座ろうとして何かを感じた。

「ん……？」

見れば石の近くで燃えているかがり火の真下になにかがいた。

なんだろうと青年が眼をこらすと、一瞬なにかの輪郭がぼやけた。

えっ、と驚き声をあげたときなにかが青年へと近づく。

「な、んだ……って狐？」

思わず言葉に出した単語通りの生き物が青年の目の前にいた。

全身が燃えるような朱色の毛で包まれた生き物は、

首もとと尾に大きく広がった毛を持っていた。

青年の顔から見える生き物の高さは腰程しかないが、

地面へと伸ばされた四肢は太く、力強さがうかがえた。思わずあどずさりする青年。

(しまった……剣は、宿だ。けどこっちには……)

背後からこどもたちの遊ぶ声が聞こえる。

眼前の生き物は動くことなく赤い眼で青年を見据えている。先ほどとは異なる汗が青年の身体をつたう。

(こんな人里で……どうする？ どうしたらいい?)

青年は自問する。

知らず知らずのうちには身体の各部に力がこもり、開いていた手の平を握って拳を作っていく。

かがり火の炎が、大きく爆ぜた。

青年と、生き物は互いに動かない。

自らが吐き出す息の音と、生き物の口から聞こえる呼吸の音が、青年の耳へ響く。

青年は出来る限り生き物の視線を塞ぐよう、足を広げ、身体を大きく開いていく。

すぐそばからの熱気が、頬に汗をつたわらせる。

すでに空は夜をまとい、周囲にはかがり火の明かりだけがある。

熱気と、それとは別で沸いてくる汗を肌に残しながら青年は思う。

(なにもできない自分が、唯一できるのは、怪物退治)

ディオソの街にて覚えた憧れは、街に住む人々を守るための意思と
なった。

いまはどうか、と青年は自らに何度目かとなる問いを投げる。

（ここに憧れたあの人たちはいない。けれど、けれど！）

こどもたちを守らなくてはならない、そう意識する。

（リゾルさんやベティさんが言ってた、だれかのためにできること）

まだ自身は頼りなく、心には不安もある。そう青年は胸に思う。

（だけど、俺の力でもだれかを守れることを、俺は……！）

包帯を巻いた少女の笑みが思い出され、青年は奥歯を噛み締めた。
奥歯を噛み締めたとき、目の前の生き物が動きを見せる。

前脚を広げ、今にも飛びかからんとする視線をとり、尻尾がそそり
立つ。

生き物の輪郭が、ゆらめく。

「……………燃えて、る……………？」

事実をそのままに言葉が出る。

生き物の全身を覆う朱色の毛、それは炎。

青年は気づく、先ほどから肌で感じる熱さが、かがり火からではな
かったことを。

自身の目の前にいる生き物から発せられている熱であることを。

事実に気づき、足が一步下がる。

(まさか、炎でできた生き物がいるなんて!)

焔の狐が一步、踏み出してくる。

青年は拳を握りしめる。

(……こいつを倒すのに素手は絶対無理だ! でも、こどもたちを逃がす時間くらいなら!)

奥歯を噛み締め、睨みつけるように顎を引く青年。

瞬間、焔の狐が口端を左右に広げ、不気味に笑みを浮かべたとき、狐と青年の周囲を囲むように炎の壁が、燃え上がった。

第十九話 試される意思

岩宿の女将に、黒髪の青年を探しに外出することを伝えた、若草色髪の男と橙髪の少女は、岩宿に接する通り道を歩き出したところで、

離れたところから天へと伸びていく炎の柱を見つけた。

「っ！ あの炎は！」

「エオリア？ あ、待って！」

言葉を口にした途端、男は少女の声も聞かずに駆け出す。駆ける方向は、炎の柱が伸びる根元。

小走りから脚は大きく広がり一歩一歩、跳ぶように身体を動かしていく。

体調の戻っていない少女に追いつく体力はなく、男は通りの先へと姿を小さくしていった。

「あーもうっエオリアのばか！」

小さくなる背中へと言葉を投げる少女は、駆け出そうとした脚を止めて、

視界に炎の柱を収めつつゆっくりと歩き始める。

通りにいる住民たちは炎の柱を眺めつつ歡喜の顔を浮かべ、楽しそうに騒ぎ始めている。

「おーっ！ 久しぶりに柱が上がったぞーっ！」

「わーすげえすげえ、はじめてみた！」

「騒いでる場合じゃないよ！ さあ、さっさと祭りの準備だ！」

住民だけでなく里全体がにわか騒がしくなり始める。慌ただしく動き始めた住民たちを眺めながら少女は、

「……そういえば、三年前も同じようなことあったねー」

炎の柱を見上げながらつぶやいた。

少女が見上げる先、炎の柱は天へと伸びる先を曲げて火山へと伸びていった。

里の雰囲気騒がしくなっていくなか、通りを駆け抜ける男。いくらか駆けていったところで柱が現れたと思われる場所へとたどりつく。

そこでは何人もの人族と岩石人のこどもがはしゃいでいた。

「みた！？ いまのみた！？」

「みたみた！ 兄ちゃんが火に、まるっとつまれるとこ！」

「すげーすげー！」

駆けていた脚を止め、ゆっくりとこどもたちに近づく若草色髪の男。やっぱりな、と胸に思い男は口を開く。

「その子たち。その兄ちゃんやらは黒い髪をしていなかったか？」

「うんそーだよー」

「おいらたちといっしょに遊んでくれた兄ちゃんさ！」

「そうか、教えてくれてありがとう」

こどもたちに礼を言ったところで男は、

視線を丸く焦げ跡の残ったかがり火近くの地面へと向ける。
男は地面に近づきしゃがみ、右手を地面へと伸ばす。
焦げ跡に触れた手の平から感じるのは、精霊術の残滓。

「……まさか、来て早々にアルトを連れていくとは」

三年前、同じように炎の柱に包まれて連れて行かれたことを、男は
思い出す。
そして出会った存在を。

「火の大精霊コンフォード様……アルトには何を見せるといっ
つか」

言葉とともに見上げた先、天空を行く炎の柱は火山の火口付近へと、
その先端を伸ばしていった。

暗い空間のなか、人影がひとり地面へと倒れている。
明かりもない空間は時折、唸るような轟音に揺れ、
ところどころから勢いのある風が吹き抜ける音も響く。

地面に倒れていた人影が呻く。
仰向けとなった身体から伸びる手足が動き、身体を起こそうと間接
を縮める。

肘を起こし、膝を立てたところで人影は気づく。
閉じていた瞼を開いても景色が変わらないことに。

「!?!?」

両手を広げて顔の前で振るも、視界に映るのは暗闇だけ。
一瞬、眼が見えなくなったのかと思ひ込むが、
数分して眼が慣れて来たころ、周囲が暗いことが分かる。
眼が見えなくなったわけではないことに人影は安堵を得る。

(ここは……どこなんだ?)

暗闇のなかこわごわと立ち、近くに触れるものがないか両手を広げる人影。

ときに響く轟音と鋭利な空気音に鼓動を早くしながらも、ゆっくりと歩みを進めていく。

(出口はどこだろうか。それに、なんでここにいるんだ俺?)

ここ、という以外に場所を言い表すことが出来ず、分からぬことへの不安が胸に満ちる。

短く歩みを刻む足裏からは砂利を踏む感触。

何度か空を切った手の平から返ってくるのは硬質な岩と思わしき壁肌。

(……ここに来る前は、火でできた狐が目の前にいて……)

そこまでを思い出すが、今の場所へと至るまでの記憶がでてこない。人影は右手を壁につけて、頭を振って意識をはっきりさせようと足を止める。

その瞬間、顔に向かって熱い風が当たる。

はっとした顔になって、人影は風が吹いて来た方向へ素早く向く。

風が吹いて来た方向からは朱色の強い光が周囲を一気に照らす。

突然の光に眼を閉じた人影は、左手で顔を覆って光を避けようとす

る。

まぶしい光が通り過ぎたのち、周囲が淡い光で照らされていく。

人影が光に慣れて、まぶたを開いたとき、目の前には、
炎の狐と、白の上着に裾の長い黒い衣を履いた黒髪の青年が立っ
ていた。

「……!？」

人影であったものは、朱の光に照らされて黒髪の青年が現れていた。
青年は眼前に立つ、炎の狐と自分そっくりの青年を驚きの顔で見
ている。

壁に右の手の平をついている青年の衣服は、灰色が基本となった旅
装束。

対して狐のそばに立つ青年は、この世界に青年が喚ばれたときの服
装。

言葉が声にならず、青年はまばたきすることすら忘れていた。
数拍のあと、先ほどよりも勢いある速度で頭を左右に振った青年は
口を開く。

「お、おまえは誰だ!? どうして、どうして俺の格好なんだ!」

青年が思っている以上に大きな声が発せられ、朱の光に照らされた
洞窟内に声が反響する。

声を出した瞬間、青年は耳に大音量を食らう。
ぐっ、と呻いてまぶたを閉じて両耳をふさぐ。

すこししてから耳から手をはなし、まぶたを青年が開けば、

目の前にいたもうひとりの青年が消えていた。

「!?!? どこだ、どこにいったんだ!?!?」

左右を振り向くがもうひとりの姿はどこにもない。

いったいどうなってるんだ、そう心につぶやいて青年が前へと視線を戻すと、

炎の狐は笑うように前脚で口元を隠し、咳き込むように頭部を動かしていた。

その様子に不審なものを感じた青年は、一步後ずさる。

(笑ってる……? もしかしていまのはこいつの仕業?)

警戒心を高めて胯を開き、両腕を広げていつでも動けるよう力を抜いて構える。

笑い終わったのか前脚をおろした炎の狐は、口端をつりあげた笑みを見せる。

青年は、言い知れない寒気を感じた。

瞬間、炎の狐が立つ地面の左右から火柱が上がる。

地面から噴き上がった火柱は、青年が身構える正面、形を変えていく。

徐々に人の形へと変化していくふたつの火柱に対して、青年は構えを崩さない。

しかし、できあがった姿を見て、青年は表情が崩れる。

「……と、父さん、母さん?」

炎の狐が佇む左には、眉根を詰め、厚みがあるレンズの眼鏡をかけた男。

右には、ゆるい波がかつた肩までの髪と、微笑みをもつ女。思わず、抱きつきたい衝動に、青年は駆られる。しかし、意識ははつきりと否定を浮かべていた。目の前にいるのは自分の両親ではないと。

瞬間的に膨れ上がった衝動を否定の意思で押さえつけた青年は、目の前をにらみつける。
知らず知らずのうちに奥歯を噛み締めていた青年は、再び言葉を放つ。

「……おまえ、一体なんなんだ。なんで俺の姿や、父さんたちの姿を？」

押し殺した声で言い放たれた言葉は、鋭く飛んでいく。

言葉を受け取ったのか、炎の狐はひとつ天へと吼えて左右の人を消す。

姿が崩れ、もとの火柱が消えるさい、青年から思わずうめき声が漏れる。

そのうめき声を聞こえたのか、狐はおかしそうに口端を広げて微笑む。

青年は、いらだっていた。

「いい加減にしろ。わけのわからないことをしゃがって」

荒い口調で言葉が出る。

青年は足下に落ちていた黒い石を拾い、身構える。

石を拾う様子を狐は、笑うのを止めてじっと青年を見た。

どこか雰囲気が変わったことを感じて、青年は動けなくなる。

(なんだ、こんどはなにをするつもりなんだ?)

注意深く青年が視ている眼前、
今度は炎の狐自身の姿が、大きな火柱へと転じたのち、人の姿へと
転じた。

里の通りを歩く若草色髪の方と、橙髪の方。

「もーこのばか！ この歩いてるばか！」

「セリア。置いていったのはすまなかったが、人が多くいるなかで
馬鹿呼ばわりはよせ」

「うるさいばか。それよりもサーアルト、やっぱり連れていかれた
の？」

「間違いないな。黒髪のおにいちゃんともや里の人達は言っ
ていたから」

「じゃあ、いまごろは大精霊様の御前かーだいじょうぶかなー」
「……」

青年の安否を心配する少女の言葉に、男は黙って歩く。

「エオリアは、心配じゃないの？」

「……」

なんとも言えない表情を浮かべて男は歩く。

答えを返さない男の顔を少女は歩きながら見つめる。

「心配は、ない」

「……どういう意味で？」

「身体なら、きつと無事だろう」

「それ以外については心配になるようなことなんだ」

「……」

再び沈黙する男に、少女は前に向き、男と同じ歩調で歩く。通りを歩く二人の周囲は、騒がしい。

「……エオリア。三年前、同じように連れて行かれたけど、なにも話してくれないよね」

「……」

人族の声と、岩石人特有の甲高い声が混ざり合って里に響く。

「あのときは、とても心配してたんだよボク」

「……すまない」

「謝らなくていいよ。謝ってほしいわけでもないから。」

それにさ、数日後に戻って来たと思っただら今度は一人で宿の部屋に閉じこもっちゃうし」

ばつの悪そうな表情を浮かべる男の横、少女は淡々と言葉をつむいでいく。

「無理矢理部屋に入れば、暗い顔して『出て行ってくれ』だもん。」

「あーあ、すつごい傷ついたなあ傷ついちゃったなあ！」

「頼むから、謝るからでかい声で言わないでくれ……」

「じゃあ、あのとき何があったか話してよ」

両手を後ろ手に結んだ少女は男へ振り向き、後ろ足で進む。

眼は、少し潤んだまま、まっすぐ男の眼と向き合った。

最後に聞こえた少女の声、男には泣きそくに震えた感じで聞こえて

いた。

男は、息が詰まったような顔となり、ゆっくりと口を開く。

「すまない、セリア。まだ、まだ話せそうにない」

男の言葉に少女は、はうと息を吐いて無言で前へと振り返った。

「……セリア」

「いいよーだ。……ごめんね、もう、大丈夫かなって思ったから」

「おまえが謝ることじゃない」

祭りの陽気が立ち上りだした夜の里、
通りを歩く男女は静かに歩みを進めていた。

炎の狐自身が大きな火柱へと転じたのち、現れた人の姿に青年はまたも驚き顔となる。

青年の正面、まぶたを閉じ、右手に赤い剣を持ち立っている人物は若草色髪をしていた。

「こんどは、エオリア!? ……いや、エオリア、じゃない?」

青年は正面に佇む若草色髪の男をみつめる。

薄くまぶたを閉じた男は、後頭部から伸びる髪をくくっており、顔つきは柔らかさを感じさせる。

自身が知る若草色の男に比べて、眼前にいる男は青年からは若く見え
えた。

炎の狐が転じた若い男は、まぶたを開く。

まぶたを開いた若い男は、青年を見て、自身の身体を見やる。うん、とひとつ頷き、身体の調子確かめるように手の平を開き、腕を動かす。

若い男の様子を見つつも青年は身構えを解かない。

(? 俺の知らない奴の姿でなにするつもりなんだ?)

相手の狙いが読めず、どうするべきか青年は判断しかねていた。

若い男はひととおり身体の動きを確かめたあと、青年へと視線を向ける。

そして歯を見せて笑顔を作り、空いている左手を掲げて空中に火を灯す。

空中に灯った火はやがて形を細長くして、青年が普段持ち歩いている白き剣とよく似た剣となった。

火から転じた剣を手にとった若い男は、左手を振りかぶって剣をほうる。

「!」

自身の背後へと跳び下がる青年。

青年が元いた場所へ転がる剣。

ただ放り投げられた剣をどうしていいか分からず、剣と若い男を交互に見る青年。

苦笑顔となった若い男は右手に持った赤い剣を構えて口を開いた。

『剣をとれ 闘え 意思を見せる』

言葉が青年の意識に響いた。

「！まさか、大精霊なのか！？」

相手は答えず、構え持った赤い剣を動かして、地面に転がった剣を取るよう促す。

訝しげな顔となりながらも、青年は地面に転がる剣を手取る。

火から変じた剣は熱くなく、青年の手を焼くようなことはしない。

そのことに奇妙な心持ちになりながらも青年は剣を持って構えを取り、若い男と向き合った。

天から突き刺す日射しと地面を吹き抜ける風の暑さに包まれながらも、

センブリの里は祭りの活気と賑わいに溢れ、普段は火山近くの鉱脈を掘っている炭坑夫や、

里近くにある村々からの人々が集い、多くの人々が里を行き交う。

青年たちが荷物を置いている岩宿の一室、

丸い石作りの机の上では四人の人物たちが向き合い、手に三枚ずつ絵の札を持っていた。

札に描かれている絵は、光を反射する湖、燃え盛る炎、

葉が生い茂った樹、地面へ吹き付ける風、の四種類。

その絵が描かれたすぐしたには、小さな宝石がいくつか並んで描かれており、

札によってはひとつであったり何個も並んでいた。

机に向き合っていた人物のひとり、左右の肩に炎の模様が彫られている岩石人が、声を出す。

「そろそろ、勝負してもよいかのう？」
「ま、まった！ まつてくれ親父！」

炎の彫りを持つ岩石人の対面に座っていた、後頭部に翼の模様を彫つてある岩石人が言う。

「もう一枚！ もう一枚だけ札を引かせてくれ！」

「どうせ引いたところで変わらんじゃろうが」

「いいじゃねえかよ！」

そう言つて翼模様を持つ岩石人は、場の中央に置かれている札の束から一番上を手取る。

手に取つた札を元々と持っていた札と並べて見た瞬間、

「だあゝ！ 越えちまったよー！」

翼模様の岩石人は手札を放り投げて、石机に伏せた。
隣に座っていた若草色髪の男は苦笑顔となつて言う。

「欲張るからだ、コモド」

「ちつくしよー！ エオリアの兄貴には勝ちたかつたのに！」

「んふふふーボクには勝てたかもしれないのにざーんねーん」

若草色髪の男の対面に座っていた橙髪の少女は、満面の笑みでコモドを見やる。

「そ、そんなあ……セリアの姉さんそんなに良くなかつたのかよ！」
「ほっほっほ。だからおまえは阿呆と言われるんじゃ」

炎模様を持つ岩石人は甲高い声とともに煙管をくわえ、

息を大きく吸ったあと口からはなして煙を天井へと吐く。
白い煙が天井へと浮き上がっていく。

「ほい。儂の手札は合計で二十じゃ」

「むう、自分は十八だ」

「はい、ボクは二十一だよー」

「姉さん逆じゃん！ 一番じゃん！」

えへへーと誤摩化して少女は笑う。

「ほざいてないで、ほれ、出さんか金を」

「くそーっ！ 里長が息子から金巻き上げて恥ずかしくないのかよ
！」

「いまは祭りじゃ。悔しかったら儂に勝ってからじゃ」

「ごめんねーコモドくん」

「セリア、言ってることと表情が合っていないぞ」

「もうおれ、お金すっからかんだよっ！」

炎模様を持つ岩石人は皆が置いた手札を集め、
札を全て絵の見えない表側を上にして重ね、札を入れ替えては順番
を混ぜていく。

煙管を口でくわえたまま、炎模様の岩石人は言葉を放つ。

「阿呆息子や。儂は貸してもかまわんのじゃぞ？」

「糞親父め〜！ 母ちゃんもなんか言ってくれよ！」

そう言って翼模様の岩石人は背後へ振り返る。
振り返った先には、石で出来た椅子に座って編み物をしている岩石
人。

手の甲に花をかたどった彫りが刻まれている。

「コモド、勝たなきゃ小遣いなしだよ」

「母ちゃんそりゃないよ〜!」

二人のやりとりに男と少女は顔がほころぶ。

ほころんだ顔に対して微笑んだ炎模様の岩石人は、煙管を手に取り口を開く。

「ところで、奏者のアルヒト様かえ、まだ戻ってこんみたいだのう」
「ええ。自分のときは三日程で解放されたのですが……」

机の上に置かれていた杯を手に取り、男は答える。

「コンフォード様は、言葉少なくてよくわからんからなあ。

そのくせ突然人を連れて行っては試すようなことをなさる」

「生きて帰って来れるんだからいいじゃん」

口答えするかのように言ったコモドの顔に向かって、炎模様の岩石人は煙を吹きかけた。

「だからお前は阿呆呼ばわりされるんじや。

五体満足だからといってな、人は傷を負っていないとはかぎらん
のじや」

「なんだそれ、意味わかんねえ」

「おまえにはまだ早い話じや。そのうち嫌でも分かってくる」

男は黙って杯の中身を口に含み、少女は炎模様の岩石人の代わりに札を混ぜる。

「ふーん。けどさ、大精霊様に連れていかれると何があんの?」

「……それは連れて行かれたものしかわからんことじゃ」

炎模様の岩石人は煙管を持った右手で、左肩の炎模様の彫りに触る。右肩に彫られている模様とは違い、左肩の模様は焼けただれた様相だった。

岩石人の肌を焼くほどの高熱にさらされたのだろうか、横目で少女は思う。

少女が視線を変えた先、岩壁に設けられた歪んだ窓から見える火山。その火山に黒髪の青年が連れて行かれて既に五日間が経っている。札を再度、自分を含めた四人に配りつつ、少女は青年が無事に帰ってくることを祈った。

「はあはあ、はあはあ………っふうはあ」

息づかい荒く呼吸音が洞窟内に響く。

剣を地面に刺したて、両手は柄に置いて膝をついて青年は呼吸をしていた。

着ていた灰色の装束はところどころが切れており、部分によっては焦げ目があった。

汗が顔をつたって地面へと落ちる。

「はあはあ………ぬぐっ！」

無理矢理に身体を立たせようと、言葉尻に活を入れて剣を支えに青年は立ち上がる。

立ち上がり、地面から剣を引き抜いて正面に向かって構える。

そこには変わらず若草色髪の若い男が立っていた。

疲弊し、傷だらけとなっている青年とは対照的に、一切の変化が見受けられない。

「……はあはあ……ふうーっ……はーっ」

息を整えるように深く吸い込み、ゆっくりと息を吐き出す。

呼吸が戻ったところで、一度まぶたを閉じ、開いて若い男に切り掛かった。

両手で握った剣を上から下へと振りかぶる。

若い男は同じく両手で持った赤い剣を横にして、青年の剣を受け止める。

間髪入れず、青年は剣筋を自身の右へとずらし、左半身を前へと出して蹴りを放つ。

男は右膝を蹴り足の裏に当てて防ぐ。

防がれたことに止まらず、蹴り足に力を込め、そのまま相手の背後へ足を押す。

男は足裏を受け止める右膝を引いて、青年の体勢を崩しにかかる。

力の掛かり方が変わったことに気づいて青年は足裏を戻す。

戻した足で半歩下がり、剣を相手から離して右から左へと振る。

男は残っていた左足で地面を蹴って飛びすさり、姿を変じた。

「くそ、またリラになるのかっ！」

青年が言ったとおり、飛びすさった相手の姿は青年が最後に見た藍色髪の少女であった。

青年に向かって両手を向けた先には炎の球がいくつも浮かんでいた。

とっさに右へと跳ぶ青年。
飛び退いたあとの地面に向かって炎の球が衝撃をともなって着弾する。

衝撃を受けて転がる青年は、地面の石を拾い少女を向かって投げつけた。

狂いなく少女へと飛んでいく石は、しかし少女を通り抜ける。

「一発くらいくらえよ！」

思わず口から言葉が出た。

言葉の先からまたも火球が飛ぶ。

今度は左へと転がりながらも避け、すぐに体勢を立て直し切り掛かる。

切り掛かった瞬間には、相手は若い男の姿となっていた。

再び赤い剣で受け止められた上、右へと流される。

勢いそのままに流されたため、すぐには体勢が戻せず、青年は相手の斬りを受ける。

「ぐっ……うっ……！」

脇腹付近に痛みと熱を青年は得る。

その痛みを無視するかのようには奥歯を噛み締め、剣を手放す。

剣を振り切った姿勢の相手へと接近して、顔面に向かって拳を放つが、直前で相手の姿が包帯を巻いた藍色髪の少女へと転じた。

思わず拳が止まる。

「……！ くそったれ！」

青年は、至近距離から炎を浴びせかけられた。

「火山、ですか？」

「そうそう。火の精地にある火山がね、また煙をあげてるみたい」

樹木の苗や草花の鉢植えが並ぶ店内、
品の良さそうな老婆が藍色髪の少女へと話しかけていた。

「ディオソに住む知り合いがね、送ってきた手紙に書いてあったの」

そう言つて老婆は手に持っていた鞆から封筒を取り出し、

封筒のなかから手紙と絵を出して少女に見せる。

少女は包帯で覆われた眼で絵を見れば、

そこには黒く塗られた山の火口からのぼる黒い煙の絵があった。

「以前に煙を見かけたのは……三年前だったかしら」

老婆を記憶を探るように眉根に皺を寄せ、考え込む。

「それでしたら私も覚えていません。確か、エオリアさんが巻き込まれたものでしたから」

「あら、神殿騎士様が関係していたのね。ちっとも知らなかったわ」

「知らないのも無理ないですよ。知ってる人のほうが少ないですから」

ふふつと老婆に笑いかけて、少女は鉢植えを布に包んでいく。
その間に老婆は絵を眺めながらつぶやく。

「そうそう。手紙にもあったのだけれども、奏者様もつけているよねえ火の精地に」

「……じゃあ、火山の煙が上がったのはアルトさんが……？」

老婆の言葉に手が止まる少女。

かつて、セリアから聞いた、エオリアが火の大精霊に火山へと連れていかれたと。

そのときどのようなことがあったのか、

エオリアは話してくれなかったから分からないとセリアは言っていた。

しかし、火山から戻って来た若草色髪の男はひどく暗い顔となっており、

数日間は宿からでてこなかったと聞いた。

なにがあったかは分からないが、相当つらいことがあったのではと想像にかたくない。

火の精地にある火山から煙が上がる。

それは、火の大精霊が人々へ試練をもたらす合図だと言われている。事実、煙が上がるとき火の大精霊に選ばれた人は連れて行かれ、数日間は人里にもどってこない。

「……戻って来たときには、皆なにかしら傷を負うと、言われている」

「リラちゃんにか言った？」

「い、いいえ。なにも言っていないです！」

慌てて少女は布を巻いて鉢植えを包み、老婆へと鉢植えを渡す。

礼と代金を受け取り、店の表にある硝子戸を開いて老婆を見送る少

女。

表の硝子戸を閉じつつ、少女は硝子越しに見える空を見上げた。

「……アルトさん、お願い、無事に帰って来てください」

両手を胸前に組んでまぶたを閉じ、青年の無事を少女は、髪に付けた花飾りのお守りに願った。

第二十話 炎が映すもの

視界が真っ赤だ、青年が得たのはその思考のみ。

一瞬、空中へと浮かんだ感覚を得たのち、青年の意識に訪れたのは堅い地面へと叩き付けられる痛み。

同時に全身へ襲いかかる焼け付く痛みと熱さ。

「ーッ！」

口を大きく開き、声にならない叫びを発して青年は痛みを耐えようとするが気を失う。

気を失った青年を見て、包帯を巻いた少女の姿をした存在は両手を青年へと向ける。

青年の全身をおおっていた炎が消え失せる。

『……………ここまでか』

少女の姿をした存在はひとり意識に言葉を浮かべる。

(奏者の力を得ている者とはいえ 生身

天を光が五つを過ぎる間 耐え過ぎただけでも さすがだ)

姿が若い男へと転じる。

ため息をつくような動きを見せたあと、若い男は青年へと歩みよろうとした。

近づこうと一歩踏み出した折り、青年の右腕にある腕飾りから緑の輝きが漏れ出す。

『！……………ジヨコの仕業か 毎度毎度余計なことを』

緑の輝きはゆつくりと青年の全身を包んでいく。輝きが触れた場所から青年の焼けた肌は治り、得ていた傷も治っていった。

若い男は立ち止まり、じつと青年の様子を見る。

焼けこげた服装こそは戻らないが、輝きによって青年は全身を回復していき、

意識がもどってきたのかうめき声が口から漏れる。

緑の輝きは消えかけていた。

頭を左右に振りながら青年は上半身を起こし、

自身の身体を見て触っては不思議な顔を浮かべている。

ふと気づいたような仕草で、怪訝な視線を若い男へと向けた。

若い男は視線を否定するように顔を左右に振り、

右手の人差し指を青年の腕飾りへと向ける。

向けられた方向を見たセ青年は、うつすらと緑の輝きをはなつ腕飾りに気づく。

「！　そうか、地の大精霊の……」

『そつだ　ゆえにこれ以上は　やめだ』

意識に響いた言葉にはつとなつて顔を上げる青年。

「な、なら試練は？　失敗……なのか？」

再び顔を左右にふる若い男。

『さきほどまでは　余の遊びだ』

「はっ？」

『聞こえなかったか　余の遊びだと』

「……意味がよくわからない、のですが」

立ち上がり、困惑した表情を浮かべる青年に対して、もういちどため息をつくような仕草をして若い男は言葉を発する。

『闘いこそ 余の楽しみ なのだよ』

「……え、じゃあ、その試練は……?」

『そんなものは ない』

言葉を聞いた瞬間、青年は肩を落とす。

同時に握っていた剣を地面に落とし、乾いた金属音が洞窟内にひびく。

音として響かないものの、洞窟内は細かな振動を繰り返す。

『だが ここへ連れ込んだ者へ 余はあるものを見せる』

「? あるもの?」

青年は地面へと向けていた視線を、ゆっくりと起こす。

地面へと落ちた剣と、手に持っていた剣を消した若い男は、両腕を組んで頷く。

ふと青年は気づく、目の前に立っている若い男の輪郭がぼやけていることを。

そのことに気づき後ずさりする青年。

『なに もう傷つくようなことはせぬ 身体はな』

その言葉に青年が身構えた瞬間、

若い男であった存在は炎となって青年の周囲に拡散した。

炎が轟音をたてて洞窟内に広がり、青年の周囲を一面照らし出していく。

両腕で顔面をおおう青年は音が止むまで姿勢を崩さない。

閉じた瞼の下からでもはつきりと解る明るさ、

青年はいつたいなにが起こるのかと不安の混ざった意識でいた。

やがて音がおさまり、光もまぶしくない程度となったところで、

青年は両腕を下ろし、瞼を開いた。

「!？」

周囲が朱の光で満たされていた洞窟内ではなくなっていた。

金属の標識が立つ、アスファルトで固められた道路。

排気音をたてて走っていく何台もの車。

自転車に乗る人や、歩道を歩く人々の姿。

なにがどうなったのかが理解できず、青年は周囲を見回す。

見回すついでに自身を見れば、服装は召喚される前に着ていた服装。

「なんだこれ!? そんな戻ってこれたのか？」

いやそんなわけがない、と自分の言葉を胸のなかで否定する青年。

否定の気持ちを抱いたまま左を見て青年は固まる。

そこには、自分の家があった。

驚いた顔となった青年は、ゆっくりとした一歩を踏む。

踏む、踏む、踏んでいく脚が、はやくなっていく。

かつて何度も行き来して、何度も開いた扉が近づく。

胸の鼓動だけが異常なほどに早くなる。

青年の脳裏は否定を抱きつつ、期待が膨れ上がっていく。

玄関の扉を開き、靴も揃えず脱ぎ捨てる。

足音など気にもせず、居間へと通じる扉を開く。

泣きそうで、しかし怒ってもいるような表情を青年はしていた。

閉じられた扉のドアノブを掴み、立ち止まる青年。

掴んだ腕は、力がこもっている。

手の甲には血管が浮き上がる。

ドアの先からは鼻歌を歌う声が聞こえてくる。

TVのアナウンサーがニュースを読み上げる声もだ。

わずかながら煙草の匂いも漂ってきた。

どれもが懐かしい、どれもが愛おしい、どれもが苦しい。

青年はこれが幻覚だと理解していた、しかし幻覚であっても否定できない自分もいた。

表情をぐちゃぐちゃにしながら、青年は俯いて扉を開く。

扉はゆっくりと居間の内側へと開いた。

そこには居間と一体化した台所で調理する母親と、

テーブルの椅子に座ってTVと新聞を見ながら煙草を吸う父親、

の姿が一瞬だけ青年の視界に映って、消えた。

TVだけが存在を主張するように音声を垂れ流している。

誰もいない居間に立ち、青年は、壁を殴りつける。

殴りつけたと同時に周囲が歪み、変化していく。

にじんだ視界で周囲をにらみつける青年。

歪んでいた風景が動きを止めたとき、青年の眼は大きく開かれた。そこはパストラの街、大通りであった。

目を腕で拭えば、肌に触れる感触に着慣れた服装の生地があった。

まさか、と思い見覚えのある大通りを見ていけば、一軒の花屋。

店先では包帯を巻いた少女が鉢植えを運んでいた。

思わず走り出す。

そして、意識せずに少女の名前を叫んでいた。

叫びが聞こえたのか、少女が何かに気づいたように後ろへ振り返り、笑顔を見せる。

青年も笑顔となって応じた瞬間、青年の足が止まる。

笑顔を向けてくる少女は包帯をしていなかった。

少女の眼があるべき場所はくぼんだ暗い穴が空いていた。

目の前の事態が理解できず、青年は表情を固めたまま。

少女は笑顔のまま炎に転じて消え去る。

数瞬して、青年は激怒の声をあげて、近くの建物へと蹴りを入れた。周囲が転じる。

足下が再びアスファルトの感触を得る。

怒りがおさまらない顔のまま、周囲を見る青年。

場所は側溝が走る道路、を越えた先には校舎と白線の引かれた校庭。警戒を高める青年は、校庭と道路を分ける門を抜けて校庭へと足を踏み入れる。

土が敷かれた地面には白線で二辺が半円となった長方形が描かれており、

白線に従って何人もの半袖短パンの人物が走っている。

人物を見て青年は、ぽつりぽつりと誰かの名前をつぶやいていく。だが、つぶやいていくたびに、走っている人物が減っていき、青年が名前をつぶやきおえれば、校庭に人はいなくなっていた。

誰もいない校庭を歩き、青年は陸上部と書かれた札の貼られた部屋の扉を開ける。

胸にあふれている寂しさを抑え付けているためか、顔は歪になっていた。

開いたなかからは、光が迸る。

まぶしさを瞼を閉じてやりすごしてみれば、視界に映るのは大地の間。

召喚されたときと同じ場所、同じ景色を得ていることに気づく青年。後ろを勢いよく振り向けば、黒い扉。

胸と脳裏にをかきまわす感情を落ち着かせるため、青年は黒い扉に手をあてて眼を閉じる。

「……これは全部、幻覚。それはわかった。じゃあなぜこれを見せるんだ？」

言われた言葉を思い出す。

――余はあるものを見せる。

と。

「なにか、わからないけど、なにか意味があるのか」

誰に問うでもなく、問いを投げかける。

誰もいない自宅。
暗い穴が空いた少女の眼。
人が消えていく校庭。

そこまでを思い返して瞼を開いた。

瞬間、青年は驚いた顔となって一歩引く。

神殿は廃墟のように崩れ去り、天から見える空は灰色となって淀んでいる。

青年の周囲には飛び交うように骸姿の幽霊が右往左往していた。

「なんなんだ、なんなんだよこれは！」

黒い扉を、青年は開いた。

青年は、堅い地面に片膝をついている自分に気づく。

俯いていた視線に見えるのは焼けこげた旅装束。

油断なく顔をあげれば、炎の狐が目の前にいた。

「……いまのが、あるもの？」

青年の疑問を含んだ問いかけに、狐はゆっくりと頷く。

立ち上がり、焼けこげた服装の上着を脱ぎ捨ててさらに言葉を青年は投げる。

「あの風景になんの意味があるんだ？」

狐は答えず、じっと青年の顔を見ている。

何も言わない狐を眉をつめて睨む青年。

炎の狐の輪郭がゆらりと歪む。

『考え 動き 求めよ』

「えっ……」

狐は天を向いて甲高い鳴き声を長くあげる。

青年と狐の空中に、火が集っていき、ひとつの炎と成す。

警戒する青年に向かって、

『左腕を 掲げよ』

言葉が届けられた。

疑問顔のまま、青年は精霊の腕輪がはまった左腕を静かに燃える炎へ向けた。

空中に浮いた炎がゆっくりと左腕に近づき、腕輪を包む。

「暖かい……どうみても炎なのに火傷もしてない」

炎に包まれた左腕を不思議な顔で見つめる。

腕輪にはめこまれた赤い石は強い輝きをはなつて、炎を吸い込んでいった。

輝きがおさまるころには炎も消え、あとには静かな輝きを返す腕輪があった。

不思議そうに右手で左腕を触る青年。

『賛美歌は 伝えた あとは 祭りを楽しむがよい』

へっ？ と声を返した青年の視界を炎が包んだ。

火山近くにある鉱脈付近には、
鉱石を掘り出す人々や鉱石によって商いをする人々によって、
ひとつの街が形成されていた。

センブリの里より、馬で一時間もしない距離にある街には、
最初に鉱脈を発見した者の名をとって、プレッシと呼ばれていた。
プレッシでは近くにある火山の影響か、温泉が吹き出すことが多く、
幾種類もの温泉が街にはあった。

幾つもあるうちの温泉宿を経営するひとりの壮年男性は見た。

「……あんれえ、火山から鳥が飛んでくるけど、あんれえ……」

壮年男性の視界には、大人五人が両手を広げてつながった以上に大
きな炎の鳥が見えていた。

眼をまんまるに大きく開いているうちに、炎の鳥はどんどん壮年男
性のいる宿へと迫ってくる。

宿付近にいた人々も気づきだしたのか騒ぎ出す声が聞こえる。

「おいおいおいおい、あああれ、あれもしかして大精霊じゃ
ないの!？」

「そそそうかもしんないけどどどどどど、どつしたらどつしたら!」

「わあー綺麗だねー」

宿の上空へと近づいてくる炎の鳥にどうすることもできないまま、
壮年男性は突っ立っていた。

壮年男性の脳裏にはこれまでの出来事が走馬灯のごとく過ぎていき、
顔色は青くなっていた。

そして宿間近となったときに壮年男性が瞼を閉じれば、響き渡る盛

大な水没音。

恐る恐る臉を開いた壮年男性は、音の聞こえた方角に不安げな顔で向かう。

「おいおいおいおい誰かが落ちたぞお!？」

「かなりの勢いで落とされたけど大丈夫なのか？」

「ねえねえ、落ちたところって……」

壮年男性は思う、どうやら宿裏にある温泉に誰かが鳥から落とされた。

数日前に奏者が大精霊に連れて行かれたという噂を、そう言えばと男性は思い出す。

「やったっ！　うちの温泉に奏者様が来たって言えば儲かるぞ！」

そこまでのことを考え、壮年男性は裏の温泉に向かう。

思わず走り出して二つある温泉入口の右へと進み、なかへと入る。

「奏者様、ようこそうちの温泉へっ！」

が、壮年男性へと返ってくるのは無言の視線。

あれっと思ひ、温泉を見渡すと湯に浸かっているのは宿に泊まっている男性のみ。

「……………」

渋い顔になりながら、壮年男性は、男性湯と女性湯を隔てる木製の壁を見る。

「きゃーきゃー奏者さまあよお奏者さまあー!」

「いやぁーん若くつてつるつるしてるぅ！」
「真っ赤になつて逃げないでえ〜」

視線を向けた先からは青年の恥ずかしいそつに叫ぶ声が混じつていた。

翌日の昼過ぎ。

奏者がプレッシの温泉に落ちた、との話を聞きつけて、若草色髪の子と橙髪の子は古びた温泉宿に駆けつけた。しかし、辿りついた宿にて二人は青年に会えないでいた。

「アルト！ エオリアだ、扉を開けてくれないか？」

「アルトぁーセリアだよぉー開けてくれないとあることないこと言つちやうよぉー」

「それは流石にやめる」

木製の扉を叩きながら呼びかける男は、隣で一緒になつて呼びかける少女に言う。

近くに立つ壮年男性は二人を見ながら申し訳なさそつに口を開く。

「申し訳ないですだ騎士様、巫女様。昨夜からこつといった感じでして」

「気にしないでくれご主人、迷惑をかけているのはこちらなのだから」

うんうん、と少女が頷く。

しかし、と言いかけて男は言葉を続ける。

「ご主人たちが見た大きな炎の鳥、おそらく火の大精霊コンフォー
ド様だろうな」

「やっぱりそうですかねえ……三年前のときはうちいなかったもん
ですから」

三年前、と聞いて顔が苦くなる男。

あっと思って少女は早い口調となって言う。

「ねね、アルトちゃんとご飯とかたべてました？」

「へっ？ ええそりゃもう、けどもなんだか異様にお腹空かせてま
したねえ」

「……それは当然だろう、五日間も食べていなかったからな」

「えええっ！？ 五日間も食べてないって動けないでしょう！」

驚く壮年男性の横、若草色髪の男は言う。

「なぜだかは知らないが、火の大精霊に連れられた先では身体の感
覚がおかしくなるんだ」

木製の扉に置いた手を離して男は言い続ける。

「連れていかれた洞窟内では天を照らす光も、夜を照らす光も見え
ず、
どれだけの時間が経ったのかすらわからない」

男は扉から離れた手を握って拳を作る。

「それと、もしかしたら身体を活性化させる火の精霊術によって、
食べていなくても動きつづけられるよう大精霊に術をかけられて

いたのかもしれん」

拳を握りしめる男の様子に、黙って聞く事しか壮年男性はできなかつた。

少女も心配そうに扉と男を交互に見ている。

「……なにがあつたかはわからん、だがこのままでは駄目だ……」
主人

「はっはい!？」

「あとで直す」

短く言い切つた言葉とともに、放たれた拳は、見事木製の扉を粉碎した。

粉碎された木製の扉を見て、壮年男性は大口を開いて驚き固まっていた。

砕かれた扉の破片を踏みながら部屋へと入っていく男を追って、少女は慌てた様子で壮年男性に謝りつつ部屋へと入る。

男と少女が部屋へ入れば、木造の部屋に備え付けられた窓は厚い布で閉じられ、

室内の天井中央にある硝子灯は冷たいままだった。

暗い室内のなか、木の机にある椅子に座つた人影は動かないまま。

男は苦い顔となつたまま、人影に向かって声を放つ。

「……アルト、なにがあつたかは聞かん。だが、ひとりで閉じこもつていてはだめだ」

「……エオリア……説得力ないよーぜんぜんないよー」

「いまは静かにしていてくれ」

後ろに立つ少女に言うてから、男はさらに椅子に近づぐ。

「おそらく、きついこと、嫌なことがあったと思われる。

だが、それで立ち止まっただけでは駄目なんだ」

自身に言い聞かすようにして言葉を紡ぐ男。

「おまえが奏者、だからというわけではない、アルト」

男は椅子の横に立つ。

少女はあーあと呆れている。

「聞いているのかっ!? アルト!」

「聞いてないとおもうよーエオリア。アルト、寝てるから」

若草色の男は、机の上で寝息をたてている青年を見て姿勢が止まる。隣に立つ少女はにやにやとしている。

一拍の間。

強ばっていた肩から力を抜き、静かな口調で男が言葉を出す。

「あー……セリア、起きるまで待つがいいか？」

「それよりも扉、なおしてくるほうがさきだよー」

左腕を伸ばして指さされた方向を男が見れば、部屋の入口に壮年男性が悲しそうな表情で立っていた。

ばつが悪そうに頭をかいた男は部屋の外へと壮年男性とともに出て

行った。

「もうエオリアだったらほんとばかなんだからー」

呆れた口調で言いつつも少女は笑顔。

笑顔のまま硝子灯に明かりを灯し、窓を覆う布を横へとよけて寝台へと歩みよる。

青年の姿は宿で用意されたものらしい、動きやすい袖がなく裾の短い服装。

机でうつぶせに寝ている青年の手先、開かれた筆記帳と羽ペンがあった。

「？ アルト、なに書いていたのかな？」

小さな好奇心とともに少女は、筆記帳をのぞく。

そこには見た事の無い造形をした部屋。

四角い建物が立ち、二辺が半円の長方形が描かれた風景らしき図。

そして両目が黒い少女の絵と、周辺を骸姿が飛び交う黒い扉。

それらを見て怪訝な顔となる少女。

一体これらはなんなのか、そう疑問が沸いたが書いた本人はまだ眠っている。

「起きたら聞いてみようかな」

日も暮れ始め、火山の向こうに太陽が沈みかける辺りになって、ようやく青年は眼を覚ました。

眼を覚まして急激に空腹感を覚えた青年は、食事をしようと部屋からでようとして気づく。

「あれ……扉、こんなだったっけ？」

部屋の出入口には、周辺の木壁と合わない新しい雰囲気のある扉があった。

疑問は晴れないまま部屋に鍵をかけ、酒場兼温泉への受付となっている一階へと降りていく。

階段を降りる途中で気づく、なにやら騒がしい様子だと。

「……なんだか知ってる声が聞こえるけど」

怪訝な顔で降りれば、そこには室内中央に丸い机を置いて向かい合う若草色髪の男と、袖がない服装の筋骨隆々な禿頭の男性が片腕の掌を合わせあっていた。

二人を囲むようにして人々が椅子に座ったり、立ってなどしており、野次や罵声が飛んでいる。

「おらおらあ負けんなよ！ お前に賭けてんだからよあ！」

「きゃあああ騎士さまあああああ頑張ってええええ！」

「どっちも頑張れー！ ついでに注文してお金落としていってねー！」

しかして声を出す人々は楽しげであり、そこに悪意などは感じられない。

青年は知った顔が中央にすることが理解できていない。

橙髪の少女が、掌を重ね合った男二人の前に立って声を高らかにあげる。

「はあーい！ では神殿騎士エオリアがさらに勝つか負けるか！
五度目の挑戦、始め！」

始め、の声とともに男と禿頭の男性が顔を強ばり、腕に血管を浮か
び上がらせて力を込め合う。

「ふんぬううううううう」

「ぬううおおおおおお」

二人の口から、低く静かに猛り声が出される。

青年が見ている限り、禿頭の男性は若草色髪の男よりも背丈があり、
腕も太い。

とてもではないが、エオリアが勝てるようには見えなかった。

青年の思いを映すかのように、禿頭の男性は重ねた腕を細かく震わ
せながら自身の内側へ、

わずかずつではあるが腕を倒していく。

周囲が騒ぎ出す。

禿頭の男性の腕が丁度垂直の半分ほどまでに傾いたとき、勝利を予
感したのか男性は口端をあげる。

若草色髪の男はそれでも諦めずに力を込め続けて、腕を返そうと抵
抗する。

その状態で一分が経過した頃。

ふっと男が力を腕から抜く。

突然の脱力に禿頭の男性は力の抵抗を失って、姿勢が崩れる。

だが腕は一気に男性の内側へと倒され、

あわや机に男の手の甲が当たる直前に、反対側へと一気にひっくり

返されて机に手が触れる。

一瞬の間が空いて、周囲の人々から歓声が巻き起こる。

「すげえええええ、よく勝てたな騎士様！」

「あんの馬鹿！ あいつ最後油断しすぎだろうが！」

「きゃーさすが騎士様！ みんな勝ち祝いでどんどん頼んじやってー！」

ほつけた様子で周囲の人を見ている青年の視界のなか、互いに健闘をたたえあいながら握手をする男と男性。二人の近くに立って少女が再び声を高らかにあげた。

「これにて神殿騎士エオリアの挑戦、締めさせて頂きます！ みなさま！ みなさまご高覧ありがとうございましたあ！」

少女の言葉とともに大きな拍手が室内をうめつくした。

青年は酒場のカウンターとなっている一席に座り、野菜を口に運びながら言う。

「部屋の扉、なんで変わってるんだろうと思ったたらエオリアが壊したのか」

「そーそーとめるひまもなく、こう、がつーんとやっちゃったんだー」
「面目ない」

青年の右隣へ並び座る少女と男。

野菜を飲み込みながら、杯を手にとり中身を飲む青年。

少女は紙皿におかれた小さな揚げ物を口にし、

男は泡立つ液体が入った杯を手にとり飲んでいく。

「んで、その修理代を稼ぐために、あんなことやってたんだ」

「……旅の資金を、自分のためには使えないからな」

「まーエオリアも悪気があってやったわけじゃないけどねー」

「ははっ。でもさ、ごめんよ心配かけて」

男と少女はそれぞれ気にしなくていい、の意で顔を振る。

「大精霊に連れていかれたことはアルトのせいではない。

むしろああなって当然だったかもしれない」

「？ ああなって当然って？」

「火の大精霊コンフォード様は、悩みや迷いを持つ者を火山へと連れていくことがあるのだ」

その言葉を聞いて、青年は食事をする手を止める。

「……悩みや迷いを持つ者」

「ああ」

短く答えて、男は杯に口を付ける。

少女は黙って揚げ物を次々と口に放り込んでいく。

「そっか。じゃあ俺が連れて行かれるわけだ」

青年は自分を薄く笑みを浮かべて、視線を俯かせる。

少女はその様子を見て口を開く。

「んーでもいにしにやいでひひとおもふよー」

「セリア、食ってから喋れ」

「うっん。うっさーい、だってアルトは奏者だからどのみち大精霊様と会ってたわけだし。」

あ、おねえーえさーん！ 砂蛸の唐揚げもう一皿ちようだーい
「お前それさつきも食べたばっかだろっつがっ」

いつものやりとりを見て、青年は気分が楽になる。

野菜とともに置かれている葡萄を手にとり、一粒口のなかへと放り込む。

甘いだろうと思っていると、強い酸味を感じて思わず瞼が閉じる。だが口内に広がるのは爽やかな酸味と僅かに感じられる甘み。

「はっはっは。葡萄の味、その顔だと意外だったみたいじゃの」

背後から甲高い声を掛けられ、口内に酸味を残したまま振り向けば岩石人が二人。

男と少女も背後を振り返り、声を出す。

「里長、わざわざ来られたのですか」

「あ、コモドくんもいっしょなんだー」

煙管を口元にくわえたまま穏和な笑みを浮かべた岩石人は、頭ひとつ小さい岩石人とともに答えた。

「なあに、奏者様にはこっちから挨拶すべきじゃろうと思ってな。ほれコモド挨拶せんかい」

「う、うっつうっせええな！ 言われ、言われんくても挨拶するわあ！

こ、こんちは初めまして奏者様！ おれカランドが父、コモドと

も、申しまする!」

「馬鹿息子よーそこでなぜ語尾にるがつくんじゃー?」

「黙っててくれよそこは!」

「ほんにすっかりできん息子じゃて。奏者様、僕はカランド・アーマー。」

馬鹿息子コモドの父親であり、センブリの里にて長を務めておりますじゃ」

「あ、は、初めまして、奏者のアルヒト・ヤマハと良います」

いきなりの挨拶に戸惑いながら青年は椅子をおりて立ち、名を述べて頭を下げる。

「良ければ隣、座ってもいいですかの?」

「あ、はい。どうぞ」

青年の返答へ頷いて親子の岩石人は、青年の左へとそれぞれ座る。

カウンター内を切り盛りしている中年女性に向かって、

炎の模様を肩に持つ岩石人は葡萄酒を注文する。

「おっと、ついいつものくせで頼んでしまったわい。奏者様は酒が

呑めますかい?」

「あー……少しぐらいは」

苦笑とともに青年は言葉を返す。

「それはいかんのう。男でしたらこう、がつつり呑めない」と

「親父ー奏者様相手に説教はやめてくれよ」

「餓鬼はだまつとれ。まだろくに酒も呑めんくせに」

「家にある酒は儂のもんって言つて一滴も呑ませないくせに!」

「あは、あははは」

どうしたもんかと苦笑いを浮かべるだけの青年。
そうしているうちに岩石人の親子は口喧嘩を始めてしまい、
青年のことなど気にしない様子になってしまふ。

どうしたらいいんだろうと思いつつ、間近で岩石人を見ることが初めてであることに気づく。

物珍しげな視線となっていたのが分かったのか、
右となり座る少女がカウンター内の厨房を覗き込みながらつぶやく。

「アルトー岩石人ってのはねーもともと地面なんか転がっている
土の塊がはじまりだったの」

ふんふんと頷く青年。

翼の模様を後頭部に彫った岩石人は、カウンターを強く叩き付ける。

「その土の塊が火の大精霊から祝福を受け、動ける身体を得たこと
から彼らが誕生したの」

言葉が続けながら少女は、隣の男に運ばれて来た薄切りされた果物を盗み取る。

炎模様を持つ岩石人は張り手を、翼模様の岩石人にかます。

「ボクらと同じ様に男女の区別とか親子って考え方はあるけど、夫
婦で子が得られるわけじゃないの」

えっ？ と驚き顔で振り向いた後ろ、

翼模様の岩石人は、炎模様の岩石人に外に出ると言う。

「不思議なのだけど、彼らは有る程度生きると、自身の身体から欠片が落ちて、

その欠片が新しい岩石人として育つんだって」

そこまでの説明を聞いて、そういえばそうだったな、と神殿の図書館で驚いたことを青年は思い出す。

炎模様の岩石人は掌を重ねて間接を鳴らしながら、椅子を立ち上がる。

「不思議だよなーでもそんなこと気にせずボクたちは彼らと一緒に生きているの」

そうなんだ、と青年は言葉を返し、互いに罵倒し合いながら外へと出て行く岩石人の親子を見る。

薄切りされた果物を取り返した男は続けて言葉を放つ。

「あとは気性が荒く、喧嘩っ早い性格の岩石人が多いということだな」

「うん……それは今日の前を見てわかったよ」

広く設けられた酒場の出入口近く、向き合った岩石人の親子は周囲に人族と岩石人が混じった野次馬を集めて、殴り合いを始めていた。

鉱石がぶつかり合うかのように甲高い音を出し合う二人。

合間合間には甲高い声での罵声が飛び交い、周囲はさらに熱気をあげていく。

青年と一緒に視線を向ける少女と男。

「もうひとつ言うと岩石人は生まれてから、ひとつの模様を肌にする習慣があつてな」

「ここの辺りに住んでいるひとたちも、それを真似して入れ墨を彫るひとがいっぱいなんだー」

だからなんだ、と思い殴り合う親子周辺に集う人々を注意深く青年が見ると、

半袖や袖無し of 服装となつてゐる人族や岩石人の身体各所に多種多様な模様が彫られていた。

ある者は顔に雲、有る者は腕に角、有る者は首元に草と。

「入れ墨……かあ」

そうつぶやいた先、

炎模様の岩石人が足下から天に向かつて伸ばした拳を、翼模様の岩石人の顎へと見事に決めていた。

「いやいや、すまんの奏者様。ほれお前も謝らんかい」
「……ごめんなさい」

顎をいたそうにさすりながら「モドは青年へと詫びる。

「いえ、そんな気にしないでください。……それより大丈夫？」

「平気だよっ！ いつもやってることだし！」

「そ、そっか。……いつもやってんだ」

僅かばかり腰を引きつつも青年は言う。

「それよりも奏者様、儂らの住む火の土地へようこそ。

本当ならもっと早く歓迎の挨拶を言っていたところだったのじゃ

が

「いや、俺が悪いんです。大精霊に連れて行かれてしまった俺が」
「……失礼ながら奏者様、連れて行かれる心当たりがあったんですかい？」

カランドの言葉を聞いて、青年の右隣に座っていた男と少女は立ち上がる。

突然立ち上がった二人に驚く青年。

「え、二人とも、どうしたの？」

「アルト、すまないが少し外に出てくる」

「コモドくん、ボクらといっしょにちよつと外であそばない？」

「ほれ、お二人が誘ってくれてるからさっさと行け」

「なんだよ急に、まっいいや！」

一瞬怪訝な顔をした翼模様の岩石人は、少女と男に着いて外へと出て行った。

「わざとらしくすまん、たぶん聞かれたくない話だと思つての」

「あ、そうかそういうことだったのか。俺全然気づかなかつたです」

「あとでお二人にお礼でも言つときなされ」

カランドは言葉とともに杯にそそがれた葡萄酒を一気に飲み干す。

「ぷはあ！ 相変わらず美味しいのここの葡萄酒は！ っとそれよりも奏者様」

「はい」

「なにか大精霊様のところになにかあつたのですかの」

そう聞かれ、青年は火の大精霊に連れていかれたことを思い

出す。

剣での鬪いを挑まれ、しかし炎で焼かれ、終いには風景や人物を見せられたことを。

黙っている青年の横、炎模様の岩石人は再度葡萄酒をつがれた杯を傾けつつ口を開く。

「奏者様……恥ずかしながら僕も昔、大精霊様に連れていかれたことがありましてな」

えつと言つて青年が岩石人の顔を見る。

青年の顔から見えるように右肩の炎模様を見せた。

「炎模様が……焼けただれている？」

「そうですね、かつて連れて行かれた際に火を浴びせられましたの」

「！俺と同じだ！」

「ああ、やはり奏者様も遊ばれましたかい」

「ええ………てつきり試練とかだと思つていたんですけどね」

「はっはっは、連れて行かれていきなりかかつてこいですからの」

言葉とともに右肩を元へもどし、岩石人は杯を傾ける。

「でしたら、なにかを見せられた、わけですな」

「……はい」

既に食べ終わったのか皿は下げられており、

青年の手元には新しい飲み物が入った杯があった。

両手で杯を持ちながら、青年は視界を杯の水面に向ける。

「カランドさんは、なにを見せられたんですか？」

「なんと言ったらいいんじゃないかな、あれは」

悩むような口調で言葉を濁す岩石人。

「大精霊様からはー」

「考え、動き、求めよ。それだけ言ってました」

「やっぱし同じかのう……」

小さくため息をつくように岩石人は息を吐き出す。

「儂が連れて行かれたのはかれこれ、十を数える年も前ですよ。

連れて行かれた当時はなにを意味してるかさっぱりでしての

「いまなら、分かったりしたんですか？」

「いんや、まるですじや」

片手をひらひらを泳がせて青年に答える。

「といっても全くというほどでなくて。

少しは、多少、ほんのちょびーっとぐらいですかの。

もしかこういうことなんか、って思うほどですじや」

「そう、ですか……」

「ただ、そのときのことがあったら儂は里長になろうと思っての」

「どうしてですか？」

聞き返した青年の先、岩石人は杯を置いて言う。

「逃げていたらあかん、など思いましたの」

「……」

「当時は、まあコモドと変わらんような糞餓鬼でしてな」

少し照れくさそうに岩石人は言葉を続けた。

「なんでもかんでもやったりしてるわりに、あとになってあれで良かったんかとか、

まあ馬鹿だったけど馬鹿なりに悩んでましての」

青年は黙って言葉に頷く。

いつのまにか酒場には人が少なくなっていた。

「拳げ句、悩んだり考えたりするのが嫌になって、

やりたいことしかやりとうない！ って周囲に言ったりしててのう」

段々と岩石人の声色が低くなっていく。

「ありや、単に人から頼られて、期待を裏切らないか怖かったただけなんだと。

今の嫁に散々怒鳴られても、頑として聞かんと頑固でしたわ」

杯を持ち上げ、葡萄酒を口のなかへと流し込み、言葉を放つ。

「そんなとき、大精霊様に連れて行かれ、見せられたのが泣いている嫁と……」

続きを聞こうと真剣な顔をしている青年。

「当時いるわけのないコモドの姿でしてな」

「えっ……どういうことですか？」

「いやいや、儂に聞かれても分からんて。

ただな、その絵を見せられて、なぜか逃げたらあかんと思って」

「変な、話ですね……」
「まったくですじゃ……」

二人は同時に杯を傾け、喉を潤す。

「……不思議なことに、コモドの奴が生まれてからそういうことがあるんじゃないかと、

そう思っているいろいろ嫁と子に気を遣ってましての。
けど結局そんなことはないまま今になって」

残りを飲み干すように一気に杯を傾ける岩石人。

「もしかしたら、あれは僕に人を泣かせないよう、

逃げずに向き合えてことだったんじゃないかと思ってまして
の」

「そう、なんですか」

「奏者様は……どうなんですかい？」

「えっ？」

「大精霊様になにかを見せられて、なにを思いましたかのう」
「……」

青年は口を閉じ、杯の水面に映る自分の顔を見つめた。

場所は変わってセンブリの里。

祭りによって炭坑夫や観光客で賑わう里のなか、

中央付近に土を盛られて作り上げられた舞台では、

体格のよい岩石人同士が向き合って互いを舞台から押し出そうと力

比べをしていた。

力比べを見て盛り上がっている人々のなかには、翼模様の岩石人に連れられている青年と、二人を追いかけて歩く男と少女の姿があった。

元気のいい岩石人にあっちこっちへと連れて行かれている青年は、苦笑しつつも楽しそうであり、後ろをついていく二人も思わず笑顔になるほど。

「あーよかったよかった。コモドくんのおかげでアルト笑ってくれてー」

「そうだな」

男は言葉は短いながらも安堵を含んだ言い方。

少女もそんな言葉ににんまり笑みを浮かべて言う。

「それにさーアルトが無事に賛美歌もらえてたおかげで、大精霊様のところへ行かなくてよかった！」

「おまえ、単に火山登りたくないだけだろうそれは」

「えーだって半日以上もかけて登らなきゃいけないんだよー」

まえの修行なんかだってさーせっかく行ったのに大精霊様いなかっただし！」

「……あれは自分が連れて行かれたからだろうな……」

人ごみのなかを避けて歩きながら若草色紙の男は当時のことを思い出す。

「普段はおられると聞いていただけに、神官殿も申し訳なさそうだったな」

「それでもいないなんてひどいよー」

そう怒り口調で言いながら、少女は手にもった透明の飴をまとった果物にかぶりつく。

かぶりつく様子を見ながら呆れた顔になる男。

「セリア、冗談でも大精霊様を悪く言うのは止せ。近くにいるかもしれないのだぞ」

「へいきへいきーどうせ火山のうえでねてるにきまつてるよー」

後ろへ片手を振る少女へ、小さくため息をつく男は盛り土の舞台後方を見やる。

そこには、岩石を重ねて作られた岩宿の上に立てられている櫓。櫓の上には朱色の小猿が一匹。

小猿は若草色髪の男をちらりと見て身体を揺らめかせ、舞台上闘い合う岩石人へと視線を戻す。

男は前を歩く少女に気づかれないよう、小猿へ向かって小さく礼をして歩き出す。

「つぎつぎ！ つぎのお店いこうぜ奏者様！ おれ美味いもんいっぱい知ってるんだ！」

「美味いもんならきつと俺よりセリアの方が嬉しいと思うけど……」

ぼやく青年の言葉は翼模様の岩石人の耳には届かない。左腕を引っ張られながらも青年は岩石人についていく。歩きながら青年は思う。

自分が連れて行かれてから五日も時間が経っていたことを。

（そついや、あそこにいるときはまるで時間のことなんて気にして

なかったな)

そのせいか空腹感や便意を催すことがまったくなかった。

(エオリアが言うには精霊術で身体が活性化されていたからだ、なんて言うけど)

五日間も飲まず食わずで動き続けていられたのが青年は不思議でしようがなかった。

しかし、と青年は思う。

連れて行かれて、最後に大精霊から見せられた風景。

(カランドさんと話してからずっと考えているけれど……)

まるで意味が見えてこないでいた。

それどころか、思い出すだけで泣きそうになっている自分がいた。ただ、意味は見えてこなかったが分かったことがあった。

(この世界へ喚ばれる前、俺は……なにをしていたんだ?)

コモドから毒々しい赤紫色をした野菜を挟んだパンを渡される。

怪訝な顔で食べれば、口内に広がるのは何とも言えない味。

好意で渡された手前、まずいとも言えず微妙な顔で翼模様に岩石人に礼を言う青年。

そのまま引っ張られてつぎの店へと案内される。

(陸上部で部活をしていたのは覚えている。自宅の様子だって覚えている。

なのに何故だろう、この世界へ喚ばれる直前のこと……思い出せない)

歩きながらも青年は思う、記憶が抜け落ちている、と。でも、と意識に意思を持つ。気になったことはそれだけじゃない、と意思は言葉になる。

(暗くくぼんだ眼となっていたリラの姿……まさか、リラは眼がないのか?)

違う、あれは幻覚だ！ 強い否定の意思とともに頭を振る。

「どうしたのさ奏者様？」

「ううん、なんでもない。ちょっと眼にごみが入っただけ」

「そっか！ んじゃつぎいこうぜつぎ！」

ふたたび歩き出しながら青年は思う。

(今は考えても仕方がないや、それに……いつかは聞くだろうし)

この世界へ喚ばれ、そして初めての祭りにて、包帯の少女へ向けて言った言葉。

青年は片時も忘れずにいた。

だが、どうすればいいのか、分からずにいた。

どうすれば少女と同じ世界が見れるのか、答えは得られないまま青年は焦ってもいた。

(火への旅も神殿へと帰れば終わる。風と水の旅が終われば……)

焦りと不安を抱いたうずきが胸に宿る。

目の前を歩く岩石人と人々がから眼を離し、空を見上げて青年は思う。

(俺は、どうしたらいいのだろう)

幾つもの意味を重ねて、青年は答えのない問いを空へと投げかけた。

第二十一話 傷負いし者達

火の方角より流れて来た厚い雲の群れは、大地へとそそがれる日差しを遮り、

通り過ぎる影とともに暖かな雨を地面へともたらしていく。

乾いた地面へとすぐに吸い込まれる雨の粒が降り注ぐ空間を、ひとつの影が火の方角から地の方角へと向かって飛んでいく。

独りの龍翼人。

翼をはためかせ、わざと雨に打たれるようにして飛ぶ彼は、

雨で身体の汚れを落とすかのように身体を左右に旋回させながら、地の方角へと飛んでいく。

雨の雫を顔から長く伸びる群青色した一對のあご髭に垂らしつつ、気持ち良さそうに眼を細めている。

気分が良くなったのか、龍翼人は強く翼をはためかせると速度を跳ね上げて雨の空間から抜け出す。

日差しがさす空間へと出た龍翼人の身体は、光沢をその身にまとい、気持ち良さそうに鼻歌をうたいながら高度を上げて空を飛んでいく。

高度を上げるとともに暖かくなっていく日差しによって、

龍翼人の肌が付いていた水滴は熱と速度によって消え去り、あとには汚れのない鱗肌となった龍翼人。

そのまま高度と速度を維持したまま飛行を続けていた龍翼人は、

目当てとする街の姿を確認して高度と速度を落としていった。

街の出入口に焚かれた篝火前に降り立った龍翼人は、腰裏に身につけた革の鞆から、

四つの封筒を取り出して宛名を口に出して確認、街へと入っていった。

大通りの傍らにある花屋の前にて、鉢植えの様子を見ていた軽く並がかった金髪の女性は、遠く火の方角から迫りつつある厚雲と、鼻に漂ってくる雨のにおいから、

今日は店仕舞いとするかね、とつぶやく。

時刻は昼を大きく過ぎて夕刻を告げる鐘が鳴る頃。

雨の気配を察したのか、通りを歩く人々がじよじよに少なくなっていく。

ふう、と息をついた金髪の女性は、ひとりで店前におかれた鉢植えを店内へと運び入れる。

何度目かの運び入れを終えて店内から外へと振り返った女性は、そこで鉢植えを持つ焦げ茶色の坊主頭を見つける。

鉢植えを地面へと下ろす姿勢から立ち上がった女性は呆れた顔。女性の視線を受けた坊主頭は、

「よう」

「よう、じゃないよフラン。何の用だい、それからその鉢植えはこつち、奥まで持っていつておくれ」

「つれねえ言い方じゃねえかよエラ。っとうせだからもう一個運んでやらあ」

「やめな。アンタの乱暴な持ち方は見てて怖くなるから」

「わーあつたよ」

しぶしぶ右腕に抱くように鉢植えをかかえたまま、

左手で他の鉢植えを持つようにして諦めた坊主頭は、
店内奥へと歩きながら二階へとつながる階段へ視線を向ける。
金髪の女性もつられて階段へと視線を向けて、小さなため息。

「……まだ、リラちゃん顔出さねえんだな」

「……アンタには別に見せなくてもいいんだけどね」

「おつめえ！ 人が心配してんのにそう言つかあ！」

「あーうっさいうっさい。ここで大声出すなって何回言わせるんだ
い
い」

しかめっ面をして黙り込んだ坊主頭は、その顔のまま鉢植えをおろ
し、

「……だけだよお、リラちゃんを店先で見なくなっただって数日前か
らー」

「酒場で噂になってるって言うのかい？」

「ん、ああそうだ。知ってたのか」

鉢植えを持ったことで手についた泥を、衣服を叩いて手から落とす
坊主頭。

落とした腰を持ち上げてもういちど金髪の女性とともに店先へと出
て、

それぞれ鉢植えを持って店内へと運び入れていく。

「いや、知ってたわけじゃないさ」

広げた手の平よりも少し大きめの幅を持つ鉢植えを、持ち上げて女
性は言葉をつなぐ。

「あの子もここ最近、新しくやってきた客にもちよっとは恐がり

つつも応対してるみたいでさ」

坊主頭は自身の身長と同じぐらいの茎を生やす鉢植えを、腰を入れて抱え込む。

「けっこう、いろんな人があの子はどうしたの、最近見ないね、つてよく言われるんだよ」

「……いいことじゃねえか。あんなに恐がりだったリラちゃんがよ
お」

「……いいこと、ねえ」

腰を入れて鉢植えを抱え上げた坊主頭は、足取り重く歩きだす。

「いまでは、いろいろな、奴らから、心配される、ぐらいは、周りと関わって、るわけだ」

奥まで一歩一歩重く歩いた坊主頭は、額に汗を垂らしながら鉢植えを地面へとおろす。

「……フラン、その鉢植えは運ばなくてもいいやつなんだよ」

「それは運ぶ前に言えよ！」

「アンタが勝手に運んだんだろうがっ！」

「ぐっ……わ、わるかったよ」

しよぼくれた顔となる坊主頭にやれやれとつぶやいた金髪の女性は、小雨が降り出した外を見て、二階を見てもういちどため息をつく。

「……あの子が、外と関わろうと一生懸命なのは分かるさ。

でもねえフラン、それはあの子なりに無理をやってることなんだよ」

「無理でも無茶でもいいじゃねえか。リラちゃんは変えたいと思つてんだろ、自分を」

「そうかもしれないね、でもさアンタ。変えようとして自分を変えたことなんてあつたかい？」

「い、いや、あ、あるぞお！？ 油もの食い過ぎて腹が出るから食べるの少なくなしたり」

「阿呆か」

言葉とともに呆れた顔となった女性は、雨の降り出した外を見ながら、近くの丸い椅子に座る。

坊主頭も外へと視線を向けて壁に立ったままもたれかけた。

「食つものや仕事を変えたりすることとは違うんだよ」

机に右の肘をたてて、手の平に頬と顎をのせながら女性は話す。

「ずっと、ずっと気も小さく、人も怖がっていた子が」

雨音が天井を打つ。

「知らない人間とたくさん関わって、気も小さいのを抑え込んで外に出たりする」

坊主頭は黙って唇を強く結んでいる。

「ひとつだけを変えようとしてるんじゃない、あの子は全部、自分の全部を変えようとしてる」

雨雲によって日差しが薄くなっていき、天井にあるランタンの明かりが店内を照らす。

「……そんなことをやってたら、どうなると思うっ？」

「……たおれちまう、よなあ」

女性はまぶたを薄く閉じて、言葉への反応とした。

「……倒れるだけならいいさ。心が倒れてしまうことの方が問題さ」

その言葉に坊主頭は訝しげな顔をして女性へと振り向く。

「……アル坊からもらった花の種、枯らしちまったのさ」

女性が言葉を言い終えるとともに、開いた扉を叩く龍翼人の姿があった。

天井からは雨が木材を打つ音が不規則に響く。

明かりもない室内は暗く、黒い雨雲が見える窓硝子は雨の雫で景色を歪ませる。

窓硝子とは反対の壁にある机の上、そこには封筒が置かれたまま。

開いてもいない封筒の横には小さな鉢植えがあったが、

鉢植えに入れられた土の中央には双葉も開かぬまま枯れてしまった夜露草。

赤茶色くなった芽を横に倒して干涸びていた。

机の右側に設えられた寝台では苦しそうな吐息が漏れる。

包帯を目元に巻いた少女が頬に朱を浮かべ、荒い息をしながら横たわっていた。

額には水を絞って丸く巻かれた布が置かれており、少女が熱に苦しんでいることが分かる。

包帯の少女は熱にうなされながらも思考だけをおこなう。

(……なんで、なんで……どうして)

頭のなかに出てくる言葉とともに胸のうちに広がるのは焦りと不安と恐れ。

濁った色をした感情はゆっくりとゆっくりと濃く胸の奥へと流れ込む。

溢れようとする感情が、少女が嫌う景色を見せる。

(……嫌！ いやぁ！ やめて！ おねがい、やめて！)

身体に掛けられた毛布を掴む手に力がこもる。

朦朧とした意識によってまともな思考ができない少女に、感情に逆らう術はなく、

ただただ、自身がかつて経験した過去が意識にとめどなく繰り返される。

涙が、流れた。

室内には苦しそうな吐息だけでなく、嗚咽も混じりだす。

雨音は吐息と嗚咽をかき消すかのごとく、その雨音を強めていく。

夜は雨とともに更けていき、同時にひとりの少女を苦しめていった。

土の壁に囲まれた街から駆け出す馬車が一台。

二頭の馬に引かれながら地の方角へと馬車は駆けていく。

台座には頭に大きな帽子を被った橙髪の少女が手綱を握る。
楽しそうな声を上げて手綱を持ち、歌声を流れ過ぎる風景へと溶かしていった。

「ちよつと意外だ」

「ん？ なにがだ？」

荷台から、壁にもたれて台座で歌う少女を見ながら黒髪の青年はつぶやき、

鎧と剣の手入れをしていた若草色髪の男は、そのつぶやきに言葉を返す。

「んーセリアってのんびりしてるから、なんか、うん早さを求めているのが意外」

手入れをしながら男は、青年と同じ方向に視線を向ける。

そこでは台座にて、早い拍子で歌う少女の姿。

そういえば妙に馬の脚が早いな、そう男は感じた。

「……………たまに鬱憤を晴らすようなことをすることはあるが、どうだろうな」

「……………ディオソでまた、コルさんにお尻さわられたから、内心怒りがたまつてそうだなあ」

「む。たしかに、そうだな。自分が先に腕を取って締め上げることが多かったからな」

「あはは、は。あれはエオリア、やりすぎだと思つよ」

手を止めて真剣に悩んだ顔となる男に、青年は苦笑顔を投げる。

そのまま視線を流れすぎていく背後へと向けた。

視線の先に浮かぶのは、ディオソで出会った三人やセンブリの里へ

一緒だった砂の隊商、
里で話を聞いた岩石人の親子に、火の大精霊。

(いまだに分からないなあ……大精霊は俺になにを……だめだ、言葉にならない)

思い出されるのは火の大精霊に見せられた風景の数々。

見せられてから暇さえあれば考えてはいたが、一向に青年には理解が得られなかった。

姿のない家族、誰もいない校庭、眼が黒くくぼんだ藍色髪の少女。最後のことを思い出したとき、胸が淡く疼いた。

(なんとというか、嫌な風景だった、どれもこれも)

淡く疼く横、沸いてくるのは怒りにも似た感情。

続いて意識に浮かび上がってくるのは、若草色髪の男に似た姿で挑んで来た大精霊。

(あれは一体だれだったのだろう。エオリアにすごく似てたけど)

ちらりと横目で再び手入れを始めた男を見る。

目つきや、体格、身体の動かし方などが違うが、顔の形は一緒だった。

青年は思う、なによりも髪の色が同じだった、と。

(あれは……もしかして過去のエオリア、なんだろうか)

本人には問いかけず、自身の胸のなかに向かって青年は問いかける。青年の視線に気づかず若草色髪の男は黙々と手入れを続けていた。

「エオリアッ！」

馬が走っている方向から、焦りを含んだ声色で男の名が大きく飛んで来た。

手入れて下へと向いていた視線を少女が座る台座へと向けつつ、若草色髪の方は傍らに置いておいた赤い大剣を左手に掴み台座へと駆け寄る。

青年は突然の声と男の動きに戸惑い、もたついた動作で立ち上がり男と同じ様に台座へと近寄った。

「な、なに！？ セリア、どうしたの！？」

台座の後ろに立った青年は戸惑い声のまま、緊張した表情をして手綱を握る少女に問う。

その問いに答えたのは青年の隣に立つ男が指し示した指。

馬が駆けている右側、いくらか距離の離れたところに数頭の馬と、馬よりも大きな一匹の人が背に乗った蜥蜴がいた。

「あ、あの蜥蜴はっ！？」

馬車内とは違い不安定に揺れる台座裏に立ちながら青年は、馬の駆ける音と馬車が出す音に消されないよう大声を出して二人に聞く。

青年の視界には数頭の馬が蜥蜴に追われている絵が映っていた。蜥蜴に乗った男は厚手の布らしきもので口元以外を覆っており、容姿は伺い知れない。

「この辺りで出没するという盗賊が用いる土蜥蜴だ！」

「とべないけれど肉食で脚がはやいからけっこう危険！」

男の言葉に続いて少女の言葉が続く。

「けれど卵から育てることで脚として使われてもいるの！」

「砂漠なら馬よりも早いけど、気性が荒いため使われにくい！」

二人からの言葉に緊張感を高める青年。

「……じゃあ、襲ってくるかもしれないのか!？」

「かもしれないではなく、襲ってくる! 背に乗ってる奴はこっちを見ている!」

男の言葉を聞いて青年が蜥蜴の方向へ振り向けば、背に乗った人物が口端を汚く歪めた。

青年は思わず後ずさり、悪寒と気味の悪さを覚える。

「エ、エオリア……ど、どうするんだ!？」

「……安心しろ! 自分が相手をする!」

えっ? と青年が思った瞬間。

馬を追いかけるのをやめて馬車の背後へと着いた蜥蜴へ向かって、男は台座裏から馬車内を走り、馬車の後部縁へ足裏を着けて跳んだ。

「エ、エオーー」

「アルトツ! お願い代わりに手綱を握って!」

叫ぼうとして、近くからの少女の声に阻まれる。

見れば少女は手綱を台座に引っ掛けて身を台座裏へとひるがえす。

そのまま少女も馬車内に立てかけてあった弓を手にとり、男と同じ

ように跳ぶ。

少女と台座を交互に慌てて見やった青年は、急いで台座へと飛び乗って手綱を握り、背後へと叫ぶ。

「う、馬を止めたらすぐ行くからっ！」

馬車から跳んだ男は、脚に体重をかけないよう膝をゆっくりと曲げて着地する。

背後に男と同じように着地して立ち上がる橙髪の少女。

少女は矢筒から矢を弓につがえ、男は鞘を横へと放り投げて赤い大剣を正面に構えた。

男と少女の目の前では速度を落として止まる土蜥蜴。

土蜥蜴に乗った人物は手綱を引っ張った姿勢のまま、無言で笑みを浮かべる

「……何の用だ」

若草色髪の男は低い声で言葉を投げた。

男から十歩程度先にいる土蜥蜴は大口を開いて赤く染まった牙を見せつける。

「用？ おめえはあほかあ？」

土蜥蜴の背に乗った人物は前に乗り出して、馬鹿にするようにして言った。

その言い方に反応せず男は無言。

「俺様はよお、噂の奏者さまってやつをみにきただけだあ」

布をまとった人物は懐をまさぐると、縦に短く幅のある瓶を取り出し、蓋をとって口をつける。

「んっんっぷはあ。けどよお、ただの餓鬼だなあありゃあ」

酒臭い空気とともに下品な笑いが言葉に続いた。

男の背後で弓を構える少女は、弓をきしらせて身体に力を込める。

「……観に來ただけなら、もういいだろう」

「ああ？ おめえなにほざいてんだ？ ああ？」

土蜥蜴は我慢できないのか口を開いたまま頭を激しくふる。

布をまとった人物は土蜥蜴の頭をなでて、口を開く。

「奏者さまってのはいゝゝゝっぱいおくりもん、もらってんだろ？」

「ならよお、ちつとはよお。わけてくれたっていんじゃないかねえの？」

若草色髪の方が構える剣から熱気が立ち上る。

「……神殿騎士として貴様をアルトのもとへは行かさん」

「おなじく神殿の巫女として悪行は許しません」

低く威圧するように言葉を発した男は反対に、

背後で弓を構える少女は凜とした声で丁寧な物言い。

二人の言葉に、布をまとった人物はふたたび下品な笑い声をあげる。

笑い声をあげながら、布をまとう人物は付近に火の玉を生み出し、

土蜥蜴が威嚇するように咆哮した。

土蜥蜴の咆哮とともに手の平ほどの火の玉数発が、騎士に向かって飛ぶ。

騎士は縦に構えた赤い大剣を横にして巫女の名を叫ぶ。

応えるように矢が放たれ、水を絡ませて飛ぶ矢が火の玉をかき消す。

土蜥蜴の背に乗る人物は腰横から曲剣をとりだして矢をはじく。

そのまま片手で手綱をあやつって土蜥蜴を騎士に向かって突進させた。

十歩程度の距離が数秒で埋まる。

赤い大剣を横に構える騎士は、腰と顔を僅かに下げ、股を広げてその場に留まった。

目前から迫る自身の顔よりも大きな土蜥蜴の口から一切視線をずらさない。

その視線をさえぎるようにして、横にした赤い大剣で土蜥蜴の牙を受け止め、

落とした腰と広げた脚に力を込めて突進を受ける。

突進の線上から巫女は左へと矢をつがえながら動く。

騎士は腰を落として牙を受け止めた姿勢のまま、数十歩の距離を押しされる。

布をまとった男は蜥蜴の背に立ち、騎士へと先ほどよりも大きな火の玉をぶつようとする。

ぶつけようと手をあげたとき、突然頭をあげて咆哮した土蜥蜴に男は姿勢を崩す。

悪態をつきながら地面へと着地した男が見たのは、土蜥蜴の右後ろ足へと深く突き刺さった二発の矢。

風切り音とともに男へ矢が飛ぶ。

素早く跳びよけた男は、曲剣を構えて巫女へと駆け出す。焦った顔となる巫女へ、口端を歪める男。

男が駆け出した背後で、騎士は足にささった矢の痛みで暴れる土蜥蜴から一步引き、

赤い大剣に炎をまとわりつかせる。

騎士の視界に巫女へと向かう男の姿、しかし騎士は目の前に集中。

騎士の背後から巫女へと向かって風が走って行った。

ちらりと騎士が眼をやったとき、見えたのは黒い風。

視線を土蜥蜴へと戻した騎士は暴れる相手を見据える。

下品な笑い声とともに迫る男に向かって巫女が矢を放つが、矢はよけられ弾かれる。

水の球を生み出して打ち出すも、同じように火の玉を打ち出されて相殺。

あと一步の距離にまで近づかれ、曲剣が巫女へと振り下ろされた。

だが、曲剣の動きは途中で止められる。

黒髪の奏者が白き剣を構えて曲剣を受け止めていた。

舌打ちが男の口から漏れる。

男は自身の背後へと二度飛び退き、両手でもっていた曲剣から左手を離し、

顔ほどの大きさをした火の玉数個生み出す。

口端を歪めて黒髪の奏者へと火の玉を数個、同時に放った。

男と奏者の距離は四歩、男は思った、避けられないだろう、と。

事実、奏者は避けられなかった。

避ければ後ろにいる巫女に火の玉は当たる、そう思考が走っていた。

結果、奏者が取った行動に男は呆気に取られる。

奏者の間近に迫っていた火の玉全てが叩き弾かれた。

数えるほどのない僅かな間に。

放たれていた火の玉は地面へ、左右の空間へ、上空へと飛んでいった。

白き剣の腹で火の玉を叩き弾いた奏者は、剣を男へと構える。

地面へと弾かれた火の玉がはじけて火の粉と熱気をまき散らす。

黒髪の奏者は熱風を浴びつつも構えをとかない。

背後へ下がって熱風をやりすぎした男は、奏者の様子に呻く。

瞬間、矢が、男が右手に持っていた曲剣を撃つ。

鈍い音とともに曲剣があらぬ方向へと吹っ飛ばされた。

奏者の後ろで弓を構えた巫女が、丁寧な物言いで降伏するよう呼びかける。

男は呼びかけへ罵声を返し、土蜥蜴がいた方向へ振り向く。

振り向いたと同時に男の視界には、全身を炎に包まれる土蜥蜴の姿があった。

肉が焼けるにおいをかぎながら見れば、土蜥蜴の前には赤い大剣から炎を噴かせた騎士の姿。

炎をまとったまま土蜥蜴は地面へと力なく倒れ込む。

炎を剣先から噴かせたまま、騎士は赤い大剣を引っさげて男へと歩み出した。

あどずさりつつ、呻き声が男の口元から漏れ続ける。

懐に手を入れた男は先ほど飲んでいた酒の瓶を取り出し、騎士へと投げつけ、奏者へと振り向く。

奏者へと振り向いた男の耳には、瓶が地面へ落ちて、駆け出す騎士の足音。

焦りと怯えを持った表情となった男は、腰裏に身につけてあった短剣を逆手に持ち、

奏者へと跳びかかる。

土螭の倒れる様子を見て油断していた奏者は、

男の必死な眼に動けなくなっていた。

奏者の顔横を風切り音がひとつ。

男が逆手に持った短剣は、再び巫女の矢によって手元から弾かれた。

それでも男は動きを止めず、空となった右手を奏者へと伸ばす。

奏者は動けない。

奏者の視界が、赤い炎と黒い影、だけとなった。

一瞬ののち、視界がもとに戻る。

動きが止まった男は、右手を伸ばした姿勢のまま前へと倒れた。

血のおいをかきながら、奏者は倒れた男を見る。

そこには右肩から左の腰へと向かって深く切り裂いて焼かれた背中。地面へと倒れた男から視線を上げれば、赤い大剣を振り下ろした姿勢の騎士。

信じられないものを見たかのように驚いた顔となる奏者。

騎士は一度赤い大剣を振って血を地面へと飛ばし、無言のまま歩いて、倒れている男へと近づく。

奏者は驚いた顔のまま動けない。

騎士は歩みを止めると、赤い大剣を両手で逆手に持ち、構える。奏者は、驚きから表情をもどし、騎士へ呼びかけるが騎士は応えず。もう一度呼びかけようとして奏者は腕を掴まれる。

掴まれた方へ振り向けば、巫女が顔を左右に振り、もう助からないと言葉をこぼす。

その言葉を聞いて奏者はふたたび騎士へと振り向く。

騎士は、ひとこと詫びるようにつぶやき、赤い大剣をおろした。

翌日、馬車の手綱を握るのは堅い表情をした若草色髪の男。

男の隣では風景を見ながら小さな声で子供をあやすような声色で歌う橙髪の少女。

昨日とは違ってゆっくりとした速度で走る馬車。

乾いて荒れていた地面からじょじょに緑の多い風景へと変化していくなか、

緩やかな揺れに包まれる馬車の後部では、毛布を頭からかぶって座り込んでいる青年。

じつと膝を立てて座り、両腕で膝を抱え、頭をうつ伏せている。

火の旅は、青年に多くの出会いをもたらし、多くの出来事を経験させ、多くの傷をも、与えた。

第二十二話 土と砂利の道

神殿の入口に立つのは白い装束姿で白い帽子を被った、ひとりの老人。

火の方角に向けられた視界に映るのは、天から日差しをおくる太陽が山間へと深く沈んでゆくところ。

老人の横を何人も人が通り過ぎては老人へと小さく頭を垂れて会釈をおくり、

老人も会釈を返して微笑んでは火の方角へと穏和とは違う雰囲気の視線を向ける。

視線に含まれる感情は、憂い。

腰裏に両手を回して握った手は、少しだけ力を込められていた。

老人の意識には憂いとともに数日前に届いた手紙の記憶。

巫女の宛名で届いた手紙には、日付では一昨日中に到着すること、無事に火の大精霊から賛美歌の楽譜をアルトが入手した旨が記されていた。

しかし、と老人は自身が意識に浮かべる記憶に言葉を浮かべる。

（一昨日アルト君達は帰ってこず、火の方角から神殿に来る参拝者に尋ねても）

誰も奏者一行を見かけなかった、と内心で言葉を続けて僅かに視線が俯く。

俯いた視線を止めもしないまま地面へと俯かせ、老人は瞼を閉じて息を吐く。

憂いとともに胸元には不安までが生じる。

臉をゆるく開いて視線を天へと向ければ、山間に姿を消しつつある太陽のかわりに、夕闇と闇が入り交じった空にはいくつもの輝く星と上弦の三日月が光を放っていた。

老人は神殿入口に立ったまま、夜に染まっていく空を見上げて時間を過ごす。

数時間が経った頃、老人は神殿入口横にある階段に座り込んでいた。隣には年配の女性がひとり立ち、老人と同じ方向へ視線を向けていた。

空は暗闇に覆われ、大地には星と三日月の光だけが静かにさしている。

付近には人気がなく、神殿内には各所に灯りが点き、夜回りをする神官の足音が響く。

老人は膝に肘を立て、組んだ手の甲に顎を乗せて火の方角を向いていた。

静かな夜。

神殿の奥から誰かの笑い声や話し声がうつすらと老人の耳に入る。

老人はゆっくりと右後ろを向き、そこに佇む年配の女性に言葉を掛ける。

「ヒルダさん、もうお休みして頂いてけっこうですよ」

言葉に対して年配の女性は顔を左右に静かにふる。

その様子に老人は目元を緩めて微笑み、でしたらもう少し付き合ってくださいますか、と言う。

年配の女性はひとつ頷く。

「ありがとうございます」

お礼を述べた老人は再び火の方角へと視線を向ける。弱々しい風が老人の頬をなでつつ通り過ぎていく。

僅かに見ふるいをして老人が息を吐けば薄く白いもやが生まれた。

「……もう、そんな季節なのですね」

つぶやいたところで両肩に降り掛かる白く柔らかい布。

老人が、これはと言って振り向けば年配の女性が同じ布を肩から羽織って立っていた。

その女性の向こうでは頭を下げて神殿へと戻っていく神官の姿。神官の姿を見て老人は苦笑を浮かべる。

「いけませんね。心配をしている僕が皆さんに心配されては」

年配の女性は手を動かして、そんなことはない、と意思を示す。老人は頭を振って答える。

「いえいえ、これ以上はヒルダさんのお身体にも毒です。なのでもう神殿にー」

言いかけて老人は耳に蹄の音と木材がこすれる音を聞く。

はっとした顔となって音の方向へと眼を向ければ、そこには二頭の馬につながれた一台の馬車。

ひどくゆるやかな速度で馬車は馬に引かれて神殿へと向かって来ていた。

老人は眼を細めて暗闇を進む馬車を見つめる。

雰囲気がおかしい、老人は馬車を見て感じた。
階段から立ち上がり、羽織った布の左右を胸前で掴み、駆け出す。
遅れて年配の女性も老人のあとを追う。

数歩を走ったところで老人は、右肩より上に掌ほどの火の玉を浮かべて随伴させる。

さらに数十歩走って馬車にたどり着いたところで老人は台座を見る。台座には驚いた様子の橙髪の少女、そしてきつく瞼を閉じている若草色髪の男。

二人を見て安堵の表情となる老人と、年配の女性。

「おかえりなさいセリア、エオリア。……アルト君は？」

「……ただいま、お父さん。アルトは、うん、いま休んでるの」

歯切れが悪い少女の言葉に何かを感じる老人。

少女の隣にいる男はきつく閉じていた瞼と口を開く。

「大神官殿、遅い帰還となって申し訳在りません。……自分の未熟が原因です」

「エオリア！」

少女が焦った声色で男の名を呼ぶ。

男は少女には応えず、黙って老人の眼を自身の眼で見据える。

老人は視線をそらさず、同じように黙って男の眼を見据えた。

数瞬後、言葉を放つ。

「貴方達が無事であるならば僕は何も言いません。いまのところはゆっくり休みなさい」

目元と口元を緩めて穏和な表情となった老人は、優しい口調で二人に声を掛けた。

台座から降りて地面に立った二人は静かに深く頭を下げる。

老人の右肩上に浮かぶ火の玉に照らされる少女と男は疲れた顔色。

怪訝の色が老人の眼に浮かんだところで、頭を上げた男は言う。

「大神官殿。……アルトを、奏者殿をお願いできますか？ 自分は、これより大地の間に行きます」

「エオリア……そうか、わかりました。任せておきなさい」

「ありがとうございます」

笑みのない堅い表情のまま男は言葉を述べて、馬車を引く馬を神殿へと誘導していく。

蹄の音と車輪が転がる音を立てて進み、老人は自身の前を過ぎて行く馬車を見やる。

眼に映ったのは馬車の最後尾部分にて、幌に隠れるように灰色の布を被って両膝を抱えて座り込む、力のない黒髪の青年の姿だった。

神殿の入口付近に馬車を止めたところで、男は老人に頭を下げてひとり足早に神殿へと入って行った。

老人は年配の女性へ食事の用意を頼み、女性は馬車と男を気にする少女を連れて、神殿へと向かう。

少女と女性の後ろ姿を見送ったところで老人は、

右肩上に浮いている火の玉を視線だけで馬車後部へと移動させる。火の玉を追いかけるように自身も馬車後部へと歩いて向かう。

周囲が暗いなか、馬車後部付近だけが昼間のように明るい。

夜気の冷たさと火の玉の熱を同時に感じながら老人は馬車の後ろに立ち、

そこから幌内部を見て座り込む青年を見る。

(……エオリアの様子を考えるならば、人の死に出会った、ところでしょうか)

それも、と続けて老人は思う。

(エオリアが大地の間に行くとなれば、やむを得ない殺人があつたのでしよう)

いつかは起こること、老人は意識の底にあつた考えを掘り起こす。

奏者が各地を旅してまわれば、奏者を祝い歓迎する者たちがいる一方で、

奏者を妬み害しようとする者たちもいるのだと。

老人は思い出す、過去の奏者には小さい少女もいたと記録されており、

何者かに連れ去られたときがあつたと記録には記されていたことを。結果、無事に当時の奏者は保護され旅を成し遂げて還って行ったと書かれていた。

その代だけではない、大なり小なりかつての奏者たちは危険と遭遇していた。

おかしいと思えるぐらいに、と老人は疑問とともに思いを得る。

目線を何も言わず座り込んだままの青年に戻す。

(土の旅では気にも留めませんでした、火の旅では凶獣に襲われた回数が多すぎます)

青年が送る手紙とは別に届く、騎士と巫女からの手紙。

内容は旅の進行とどのようなことがあったかを記す記録的な意味合いの強いものだった。

(土の旅では数回程度だった獣との遭遇が、火の旅では二十近い。これは一体……)

疑念を強める思考を止めもしないまま老人は馬車の後部へと歩みよる。

(過去の記録……を調べ直した方がいいのかもしれないね)

そこまで考えて、思考を目前の人物に対して集中する。

(今代の奏者、アルト君がこれ以上苦しむことがないようにするために)

思いとともに馬車後部のふちに手をのせて、老人は口を開いた。青年に向かって、

「アルト君、おかえりなさい」

反応は、ない。

青年はうずくまっただま動かない。

老人は諭すように柔らかい口調で言葉を続ける。

「無事帰ってきてくれてほっとしています。いま、ヒルダさんが食事の用意をしていますので、

馬車から降りて神殿に行きませんか」

反応はない、ように見えた。

老人は見た、僅かに青年が力を込めて膝を抱えるのを。

青年の動きを見て老人はしばし思案を浮かべたのち、馬車の後ろで光っていた火の玉を消す。

消したあと、馬車後部のふちに掴まって老人は内部に乗り込み、青年がうづくまる反対側へと座る。

火の玉を消したことでより一層強く感じる夜気の冷たさに、老人は身震いする。

「おお寒い寒い。……アルト君が火の旅へと向かい出したぐらいで、こちらは夏模様から秋模様へと変わりはじめていましたね。

貴方達が帰ってくるころには寒さが訪れるだろうと、

ヒルダさんが温かい料理をたくさん作るんだと言っていましたよ」

薄暗い幌のなか、老人は顔を見せない青年に微笑みをおくる。

神殿近くにそびえる大樹から、鳥の鳴き声が低く長く響き渡る。

「こどもたちもアルト君が帰ってきたらいっぱいお話してもらおうんだって、

だれもが楽しみに貴方の帰りを待っていました。

神殿に勤める神官たちや手伝ってくれている人たちもです」

それに、と老人は言葉をつなげた。

「ここ最近では、土の方角よりアルト君が出会った人達から、たくさん手紙が届いてます」

青年は先ほどよりも強く膝をかかえる。

「……アルト君、きつといまの貴方を見たら誰もが、貴方に尋ねるでしょう」

老人は声色を落とし、言い聞かせるような口調となる。

「アルト君、貴方はそのときちゃんと応えてあげられますか。

貴方が一番大事としている人から言葉を掛けられたとき」

最後の言葉を言い終えたあと、しばらくして青年はゆっくりと動きを見せた。

老人が見つめるなか、青年は膝にうめていた顔を、布をかぶせたまま上げる。

その顔には、涙の跡があり、口は戸惑いに歪み、眼は震えていた。

「俺、俺、もう、なにが、どうしたら、いいのか」

恐れるように震える声は力ない。

「エ、エオリアが、ひ、人を殺して、でも、でも！」

戸惑いだけが強く色を見せる。

「あれ、あれは、俺が……俺が、俺のせいで……」

荒んだ口調は、流れ出す涙と青年が自身を責める感情で静かになる。膝から離れた両手で頭を押さえ、青年は呻くように涙を流し続ける。静かに青年を見ていた老人は、立ち上がり青年の横へと座った。

神殿からは少女の声と思われる歌が小さく流れている。

歌声を聞きながら老人は、青年の背中に手の平を当てる。手の平にぬくもりを感じて、青年は嗚咽をより強くしてうつむく。手の平を当てながら老人は思う。

（少しばかり背も伸び、筋肉もついて肉体は強くなったのでしょ
うが、

気持ちだけは、心だけはそう簡単に強くなるものではありません。どれだけ人を越えた強さがあっても、アルト君はまだまだおさな
い）

いや、と老人は内心で否定の意を得る。

（おさないのではない。彼がいた世界では、死、そのものが感じに
くいでしょう。）

でなければ、ここまで取り乱すわけでもないでしょうし）
数度、背中をさすっているうちに青年の嗚咽は小さくなり、
身体の震えもだんだんとなくなっていった。

「……そ、そうだ！」

涙を拭いて青年は声を上げる。

老人は眉をひそめ、青年の言葉を待つ。

「エ、エオリアは、エオリアは、どうなるんですか!？」

「どうなる、とは？」

青年の言葉が示す先が見えず、老人は不可解そうに尋ね返す。

「え、そ、その、人を殺したんだから……エオリアは……」

言葉が最後まで言い終わらないうちに、頭を振って老人は口を開く。

「アルト君、エオリアはどうにもなりません。

いままでと変わらず貴方と一緒に旅をして貴方を護衛してもらいます」

えっ、という言葉とともに青年は驚きの顔。

青年の背中から手の平をはずし、老人は自身の目の前で両手を組む。

「……アルト君、動かない馬車から降りて少し歩きますか」

こどもあやすように優しく甘い声色の歌声が宵闇の空気に流れていた。

馬車から降りた老人は、危ないですからね、と口にして小さな火の玉を頭上に浮かべる。

目元を拭いながら青年は馬車を降りようとしてつまづきかけ、こわごとと地面に降り立つ。

ふらふらとした様子の青年を見て老人は、

「……もしかしてアルト君、なにも食べていないのですか？」

「……はい、なにも、食べる気に……なれなくて」

灯りが照らす顔は無精髭が薄いがちらほら生え、眼の下に隈が出ていた。

首もとまで伸び、砂埃などで汚れたこわついた髪の毛と相まって青年の顔は、

老人にとって酷く年老いた印象を与えた。

「いけませんね、アルト君ぐらいの頃にはよく食べてよく眠ることが必要です」

「……はい」

覇気のない声色で老人に声が返ってくる。

内心で息を吐いて老人は青年を伴って歩き出す。

頭上の灯りが照らすのは神殿横の道、何十年も人が歩いた地面は踏み固められ、

自然と草は生えなくなり土だけが露出した地面があった。

火の方角にある土とは違い、適度に湿った地面は確かな感触を足裏に返す。

老人は両手を後ろ手に結んで黙々と歩き、青年は力を入らない身体を動かしてついていく。

（……ひさしぶりに歩いてるな、ここ。もう半年ぐらい前だっけ訓練してたの）

闇夜を背景に内部からの淡く温かい光に照らされる神殿を左に、まばらに生えている樹々と芝生を右に見ながら青年は記憶に浸る。旅に出る前に行われた一ヶ月ほどの訓練、そこで学んだ世界の知識、現実。

付近に音はわずかに聞こえてくる歌声をのぞいては土を踏む足音のみ。

（ああ……そういえば、この世界には、国や法律なんてなかったんだっけ）

いまさらのように思い出すのは、道中で国や法律の存在が必要だと感じなかったから、
そう青年は自分の意識に答えを返したとき、足下を小さな獣が駆け抜けていく。

「わっ!?!」

「アルト君、どうしました?」

「え、ああ、いいえ、なんでもないです」

その言葉に老人は頷いて、止めた脚を再び動かさず。

青年も止まった脚を動かして地面を踏んでいく。

段々と身体に力が回り出したのか、青年の歩き方は確かになり、足音もはつきりとしていく。

(見たことのない動物が近くにはいて、訓練のあいまに色々みてたよな)

地面からは土のにおい、右からは草木のにおい、左からは石と人のにおい。

懐かしさと知っているにおいを鼻にしたことで、青年の気持ちはじよじよに落ち着いていく。

(……セリア、心配かけてるよね。食べ物近くに置いてくれたり、何も聞かずにいってくれたり)

そっとしておいてくれたことが有り難かったと青年は思う。

(気持ちがあぐちゃぐちゃになってたし、エオリアに何て言えばいいのかわからなかった……)

思い出す、若草色髪の男が、布をまとった男に、とどめを刺すのを。全身に力がこもり、夜気の冷たさを無視して汗が流れる。

さらに思い出す。

布をまとった男が倒れる前に見せた、形相を。

(……怖かった。あんなに睨んだ眼、あんなにも歪んだ口が)

顔も布覆われていたため見えたのは眼と口だけだった。

たったふたつの部分しか見ていないのに、青年はその部分に秘められた感情に当てられ、

布をまとった男が短剣を手に襲いかかる瞬間、恐怖で動けなくなっていた。

(そのせいで……エオリアは)

人を殺した。

青年を助けるために、若草色髪の男はあらん限りの力と術を用いて、布をまとった男の背中に一撃を放ち、動きを止めた。

青年は右の手の平を顔にあてて頭を振る。

「ちがうつ！ ちがうんだ！」

「……なにが違うのですか。アルト君」

穏やかな声に気づいて視線を前へと向ければ、柔らかな表情で青年に微笑む老人の姿。

一歩前に出て青年は言う。

「エオリアはっ！ アイツは、俺を守るために、守るために仕方なく！」

人を殺した、そう言い続けようとして声が出なくなり、涙が、顔から垂れ落ちる。

強ばっていた全身から、力が抜けた。

老人は二度うなずきを返したのち、口を開く。

「アルト君、こちらへ来てください」

涙を拭いながら青年は、老人の横へと歩き、並ぶ。

神殿横の道を歩いて着いた場所は、神殿の裏にある花畑。

赤、青、黄、緑の花々が一面に咲いており、花畑の中央には一本の大樹。

「ここは……神殿裏の花畑ですけど」

「ええ、そうです」

老人の肯定に青年は涙を拭った顔に疑問を浮かべる。視線をまっすぐに花畑に向けながら老人は言う。

「いまでこそここは四花の花々が咲き乱れる花畑です。

ですが、ここはもともとは墓地でした」

青年の眼が大きく開いたのち、視線が花畑に向かう。

「いえ、違いますね。いまでもここには人が葬られるので、墓地であることは変わりません」

土が露出した道から草花が生える地面へと脚を踏み入れる老人。

頭上の灯りに照らされて、花々が色を見せる。

「なんで……こんな花畑に……？」

初めて知った事実には青年は驚きのまま尋ねる。

老人は応えず、しばし花畑にたたずんだのち、振り返った。

「アルト君、人は、命は役目を終えたとき、どこへ還るのでしょうか」

「えっ……」

「そもそも、命の始まりは、どこだったのでしょうか」

「……それは」

土の試練にて答えた言葉が思い出される。

円。

「……始まりなんか、ないのだと思います。

大地だって人だって鳥も虫もその他もみんな、もともとは一緒だったのに」

青年の意識には元の世界の高校で習った生物や科学が思い出されていく。

宇宙の全ては原子から構成されており、人間も例外でないのだと。

「うん、良い答えです、アルト君。土の試練を越えただけはありません」

「ブツファさん……教えてください。なぜ、墓地を花畑にしたんですか？」

「もう、答えはアルト君が言っただけでしたよ」

えっ？ と声を出して呆気にとられる青年。

口を閉じて、しばらく黙ったのち青年は戸惑いながら声を出す。

「もしかして大地とひとつになるため、なんですか？」

老人は笑みを深くして大きくうなずく。

「命が役割を終えた肉体は、ただ朽ちて骨だけになるのではありません。せん。」

小さな虫たちの餌となり、植物の苗床となり、動物たちの空腹を満たします。

もともとが一緒だからこそ、僕たちは互いに補いあっています、死んだのちも」

後ろ手に結んでいた両手を老人は左右に広げる。

「ここは、もともと墓地でした、身寄りの無い人々や行き倒れた人のための。」

ですが、お墓を作り、死した肉体を納めるだけの場所ではないのか、そう考えたのです。

命はつながる、死は命へとつながる、ならば死を死だけにとどめるべきではない、とも」

青年はなにも言えず、立ち尽くしたまま花畑に眼をやっていた。

「アルト君、エオリアは……エオリアは死した肉体をどうしていましたか？」

問われ、青年は思い出す、若草色髪の男と橙髪の少女は二人掛かりで死体を埋葬していたことを。

「セリアと一緒に……大地へ還していました」

言葉を続けながら思い出す、埋め終わったあと、男がなにかの種を撒いていたのを。

その言葉に老人は満足そうに頷いて、両手をふたたびに後ろ手に結ぶ。

「ならばエオリアは大丈夫です」

「だ、だけど」

「アルト君、この世界には歴代の奏者がいた世界の国や法律が存在しません。」

いえ、正直国や法律がどのようなものか僕にはよくわかりませんが、

人々が守るべき最低限の規則といったものはあります」

言葉に青年は強ばる。

老人は花畑から抜け出すように道に向かって歩き出す。

「僕たちは歌や詩、他人との触れ合いのなかで、なにが良くてなにが悪いのかわかります。」

善し悪しの基準を心のなかに築いていくのです。

その基準を規則として考えたならば、エオリアに罪はありません」

老人は花畑から抜けて、青年のちかくにたつ。

頭上の灯りが照らす老人の顔は穏やかだが静かな眼。

力の戻った眼で青年は老人を見て尋ねる。

「どういう、ことなんですか」

「アルト君、あなたが奏者であり、エオリアは奏者を守る騎士だから」

からです」

「そんな！ そんな理由で許されていいんですかっ!?!」

「では、それ以上の理由があれば、よいのですか?」

激情は、返答に抑えられる。

口をつぐんだ青年を見て、老人は乾いた笑い声を出す。

「はは、少々意地悪でしたな。

……アルト君、この世界において盗賊に身を落とした人間は、獣同然に扱われているのです」

「えっ……!?!」

「貴方には受け入れ難いことかもしれませんが、僕たち人族も動物であることには変わり在りません。

街に住めばお互いが見ていますが、ひとたび街を離れば人の眼がなくなったことで、

なにをしかすかわかったものではありません」

老人は淡々と言葉を紡いでいく。

「良識のある人ならば、人目がなくても自身を律することが出来るでしょう。

しかし、盗賊に身を落とす人がいる以上、自身を律することが出来ない人もまたいます」

青年は何も言えず、ただ聞くことしかできない。

「自身を律することができなくなったとき、人は欲だけに動かされてしまいます。

それは、獣となにひとつ変わりが無いのです」

老人は静かな眼に厳しさを混ぜた視線で青年を見る。

「人が、人を殺したならば、エオリアは罪をつぐわなければいけないでしょう。」

ですが、人が、獣を殺したならば、罪に問うことはだれもしません」

静かな口調は、有無を言わさない雰囲気をともなって言葉を放つ。

「アルト君、この世界の現実を、受け入れなさい」

第二十三話 生死見据えて

主のいない部屋。

扉を開き、歩いてくるのは濡れた髪で視線を下に落とした青年。

力ない足取りで歩き、そのまま寝台へと腰掛け、両手で顔を覆う。

頭のなかには大神官に言われた言葉がこだまするように繰り返される。

顔を覆う姿は部屋の灯りに照らされ、深い深い陰影をその身に宿す。じっと動かなくなったその姿は、堅い彫刻のよう。

どうしていいかわからず動くに動けない、彫刻からはそんな雰囲気
が浮かぶ。

薄く開けてあつた窓からは、夜の闇を縄張りとする生物からの鳴き
声。

低いもの、高いもの、長いもの、短いもの、様々な声が薄く開いた
窓から入る。

彫刻は相変わらず顔を覆ったまま。

じりじりと灯りの火が揺れる。

火が揺れる。

揺れる。

揺れる。

揺れる。

手が、動く。

顔を覆う両手に、力が一瞬こもり、顔を掴んだのちに離れていく。あらわとなった彫刻の顔には、涙の筋。だが涙は流れてはいない。

覆う前は力なく下がっていたまぶたはしっかりと開かれ、瞳には力を感じさせた。

口が動く、ちくしょう、と。

次には声も付いていた。

声は連続し、右手は握り拳を作り、大きく振り上げたあと、寝台へと向かう。

拳の衝撃に、強く軋んだ音が生まれる。

悔しさ、苛立ち、不安、言葉では言い表せないほどの感情を込め、青年は拳を握っては寝台へと何度も振り下ろす。

寝台を殴れば殴るほど、青年の表情は苦しいものになっていく。

十を越えた辺りで、振り下ろされようとした拳に勢いはなくなり、ゆっくりと寝台へと拳先は落とされた。

「くそ、くそ。ちくしょう……なにを、なにやってたんだ俺」

苦しそうな表情でつぶやかれる声には震え。

「俺は、俺は、この世界を、いつたい何だと思ってたんだ」

問いかけにも似たつぶやき、しかし答えは出ていた。

「どっかのゲームや漫画、そんなふうに思ってたに決まってる!」

断言。

「馬鹿だ……俺は、馬鹿だ」

弱く掠れた声。

「リラが、あんなに人を怖がるのに、どうして俺は考えなかったんだ」

この世界は、なんら自分がいた世界と変わらないことを。

笑顔を思い出す度に胸を疼かせる少女は、かつて虐められていたと聞かされた。

だが、青年はなにも思っていなかった。

ただ、そうなのか、と。

「……!」

寝台が強く軋む。

振り下ろされた拳は、深く寝台に掛けられた布に沈む。

自身がかつて抱いていた考え方に、苛立ちと後悔が生まれる。

荒い呼吸音が部屋に響く。

この世界でも、人は死ぬ。

それは分かっていたことだ、だが自分は一番勘違いしていたことがあった、と青年は思う。

「この世界は、優しいだけなんかじゃない……優しい人だけじゃない」

記憶には手足を失いそれでも笑顔で生きる人。

人を殺めることを躊躇するどころか笑顔で殺しにかかる人。

どちらも等しく存在しているのだと青年は理解する。

青年は思う。

きっと召喚されたばかりの自分だったらもっと取り乱していただろう、と。

頭ではつきりと理解していなくても、この世界での旅はぼんやりと自分に教えてくれていた。

生死と向き合うことが必要とされるのだと。

落ち着きを取り戻す呼吸音に合わせて青年の顔からは怒りや苦しみが抜けていく。

それでも顔色は晴れず、青年は俯いた視線を漂わせるばかり。

漂う視線はやがて机の上に灯っている蠟燭台付近にひきよせられていく。

そこにあるのは薄い封筒が幾つか置かれたなかで目立つ、ひとつ厚く大きな封筒。

疑問を得た青年は寝台から立ち上がり、机へと歩みよる。

手に取った封筒からは何枚も入れられた紙の重さがあった。

「……？ いったい誰からの？」

裏返しに置かれていた厚みある封筒、手首を捻って表を見れば、書かれていたのはリラヴェル・カマツクの名。

「！」

左胸が強く鼓動する。

「リラから！？ でも、なんで……？」

青年は思い出す、地の旅へと出向く前にした少女とのやりとりを。一方的な自身からの約束、しかし少女からの返信は期待していなかったことを。

だが、目の前にある封筒には包帯の少女の名がある。

椅子に座り、引き出しを引いてなかにある小さな刃物を取り出す。封がなされている部分に刃をひっかけ、一気に切り開く。

わずかに震える手元。

一度、握りこぶしを作り、数度ひらいてとじて、青年は封筒の中身を取り出す。

十数枚の紙束が入っていた。

陽に焼けたのか色褪せた紙だったものから、だんだんとそうでないものへと重ねてあり、

一番上に置いてあった紙面が最近書かれたばかりのものだと青年は気づく。

「出された日付は……火の旅でセンブリの里を出たぐらいか」

俺が帰ってくるまでずっと置いてあったんだ、青年は疼きを得る。

三つ折りにされていた紙を開き、なかに書かれた文章に眼を通せば、

――アルトさんへ、リラヴェル・カマックです。無事、お手紙届いていますでしょうか。

――無事、届いていたら幸いです。

――いきなり、こんなに厚い封筒送って、ごめんなさい。でも、読んで欲しいと思っただし、

――せっかくアルトさんが手紙をくれるのに、返せないのは悲しかったからです。

小さく、しかし丁寧に書かれた文字が青年の眼に入ってきた。

――私、私ずっと思っていたことがあるんです。

――お母さんもセリアさんも、大神官様もエオリアさんも、そしてアルトさんからも、

――与えられているだけでいいのだろうか、って。

――みんな、みんな何かを持っていて、何かに向かって生きていて、――でも私は私には自分が何を持っているのかわかりません。

――何をしたらいいのかもわからなくて、ただお花を育てていました。

紙を握る青年の手、力がこもる。

――お花を育てることしか、できないんだと。

肩にも力が入る。

――でも、やっぱりお母さんにはかなわなくて、私、駄目だなといつも思っているんです。

――駄目な自分、そう思っているのにみんな、私に優しくしてくれる。

――こんな眼を持つてる自分を、みんなが優しくしてくれるんです。

左胸が疼く。

――きつと私が駄目だから、そう思っていたんです。

――アルトさんは、違いました。

――褒めてくれました。

――私が、私が育てたお花を、綺麗だと言ってくれました。

大きく疼いた。

――そして、アルトさんは種をくれました。

――私なら育てられる、そう言って種をくれました。

――私はいま、夜露草を咲かせるために頑張ってます。

――うまくいくかも分かりませんが、駄目、かもしれせん。

――でも、諦めたくない、そう思いました。

――だから、アルトさん、無事に帰ってきてください。

――また、私のお花を見てください。

――私、綺麗なお花を咲かせてみせますから。

青年はしばらくの間、紙を握って動かない。

――それと、いままでアルトさんが送ってくれた手紙を読んで思ったこと、

――そのときそのとき書き綴ったものを同封しました。

――私、アルトさんからの手紙、とても嬉しかったです。

――だから私からの手紙も喜んで受け取ってくれたなら私は幸いです。

リラヴェル・カマック、文章の最後は柔らかな文字で書かれた名前

で締められていた。
最後まで眼を通し終えたところで青年は瞼をかるく閉じる。
そして眼を開く。

「……ありがとうリヲ。ちゃんと読むよ、君からの手紙」

朝を告げる動物の鳴き声が近くの草原からひびく。

太陽が山間から顔を出し、暗かった空を金色に塗り替える。

金色となっていく空を見上げながら橙髪の少女が石造りの階段で歌う。

一日の始まりを祝う言葉を乗せて歌声は空のかなたへ。

翼を広げて土の方角へと飛んで行く群れ。

周囲を見渡し、俊敏な動きで草原を駆けていく小さな影たち。

さらに小さき虫は花の花弁へ留まり、蜜を探る。

少女はそれらの動きを眼で追いかけてつつ歌う。

山間から大地へと日差しが照る。

まぶしそうに少女は眼をほそめ、身体に日差しを浴びる。

冷えた身体を溶かすように日差しの熱は全身を包んでいき、

気持ちまでが暖かくなっていくように少女は感じていた。

歌声も無意識に高まり、音程を上げて声を放っていく。

悲しい歌、楽しい歌、寂しい歌、強がる歌、笑顔の歌、つきつきと歌う。

座った石段から脚を投げ出し、ぶらぶらと左右に揺らしながら少女は歌う。

日差しであったまっっていく身体を揺らす脚に合わせて左右に動かす。

両手を腿にはさんで、そこを支点としながら揺れ歌う。

歌う、少女は、歌う。

その顔からは涙が流れていようと、歌う。

二人を想って、歌う。

太陽が南天付近まであがってきたところで、黒髪の青年は扉から通路へと出た。

眼の下にはうつすらと隈があるが、眼には力がある。

左手で扉を閉め、歩き出す右手には鞘に納められた白き剣。

通路ですれ違う人々にはつきりとした声で挨拶を返し、子供達には笑顔で応対し、また歩く。

石の床を踏む脚に力があり、響かせる足音は鋭い。

誰かを探すかのように左右へと視線を飛ばしながら青年は歩く。やがて目当ての人物を見つけ、青年は小走りとなる。

「ブツファさん！」

目当ての人物がいたのは神殿の出入口付近。

白き帽子を被った禿頭の老人は、呼ばれた声に振り向き、黒髪の青年を見て驚きの顔となったあと、穏和な表情となる。

「おはようございます、アルト君」

「おはようございます、ブツファさん」

足を止めた老人に合わせて青年も足を止めて挨拶を返す。

「どうしたのですか？ ……まだゆっくりと休んで頂いて結構ですよ」

昨夜のことを思い、老人は青年を気遣うように言葉をつむぐ。青年は小さく頭を振り、言う。

「いえ……昨日はいろいろとすいません」

言葉とともに青年は頭を下げる。

頭を下げた青年を老人はじっと見守る。

青年が頭を上げ、隈のある眼で老人を見た。神殿出入口から二人を見る視線がひとつ。

「まだ、ちゃんと俺はこの世界のこと、向き合えてなかったです」

老人は口を開かずに青年の言葉を聞く。

「今も向き合えてるとは言えないんですが、それでも考えました」
剣の鞘を握った右手に力がこもる。

「逃げずに向き合っていきたい、って」

逃げずに、その部分を強調して言う青年、脳裏には元の世界でただ遊んでばかりいて、
将来のことを考えもしなかった自分が思い浮かんでいた。

「ただ、それは世界のことだけじゃなく、人にもそうでありたいんです」

一晩かけて読んだ包帯の少女からの手紙、自分が送った手紙へ欠かすことなく書かれた返礼の手紙。
ただ気になる程度でしかなくなった包帯の少女、しかし彼女は自分をそう見てはいなかった。

どれだけ自分を信頼し、どれほど自分を支えとしてくれていたか、痛いほど青年は感じとっていた。

「……リラから送られていた手紙を読んで、

俺どれだけ自分のことしか考えてなかったか、気づかされました」

声のトーンが下がる。

「手紙のなかのリラは笑っていましたが、悲しんでいました。俺のため」

老人は眼を細め、目尻を下げて青年を見ている。

「そして、こんな駄目な俺のことを、リラは待っていてくれるんです！」

僅かに顔をあげて青年は強い口調で言う。

思わず強くなった口調を青年は慌てて誤摩化す。
遠くから走る足音が響く。

「そ、それでお願ひがあるんですブツファさん。俺、リラに会いに行きたいんです。」

だからパストラへ行ってもいいでしょうか」

言い終えた青年の顔を見ていた老人は、ふうむとひとつ言っ

「……申し訳ありませんアルト君、僕としては是非行かせてあげたいのですが」

すまなさそうに言う老人に青年は、えっ、と言葉を漏らす。

「いまは……エオリアが動けません」

「エオリアが……？」

疑問の色を持った青年の眼は、老人に向けられたまま。

老人はどう言ったらいいのか迷い、しかし何も言えずにいる。

青年の背後で床を強く蹴る音。

「アルトオー！ おっはよー！」

橙髪の少女が、青年の背中に勢いよく飛びついた。
おお、と声をあげた老人は身を回して倒れこんだ青年を避けた。
悲鳴をあげるまもなく床へと倒れた青年は、勢いよく腕をあげて身体を起こし、少女へと振り向く。

「つてえええええ！ なにするんだよセリア！」

床に座った姿勢の少女は、力無く笑った顔。

「んーだつてーしんぱいしたんだもーん」

「えっ……あー……ごめん」

「そこはありがとうつていつてくれるとボクうれしいなあ」

「そ、そうなの？」

「うん」

「そっか……ありがとう」

「うんうん」

言葉とともに頷いた少女は、立ち上がり倒れた青年に手を差し出し
言う。

「ねえアルト、ちょっと着いてきてほしいの」

「へ？ どこへ？」

「みはらしのいいところだよー」

少女の手を取って立ち上がる青年。

「けど俺、まだブツファさんと話が……」

「いいからいいからーねえお父さん？」

「……アルト君、またあとで話しましょう」

「よーしよーし、ほらお父さんもいって言ったしいー！」

「ええっ！？ ちょっとブツファサーン！」

腕を少女に掴まれ青年は神殿の外へと連れて行かれる。それを笑って見送った老人ではあったが、憂いを含んだ眼をゆっくりと大地の間へと向けた。

大地の間と通路を隔てる大扉は堅く閉じられていた。

左手首を掴んで走る橙髪の少女に引つ張られて青年は外へ。出た瞬間、刺すような日差しに瞼をつむる。

「っっ……っ」

思わず右手に持った白き剣を掲げて日差しを遮る。

(……そういえば、日差し浴びるの、ひさしぶりな気がする)

光になれてっつすら開いた瞼からは肌を暖める日差し。白き剣を持って掲げた手のふちは光を透かして赤い血の巡りを見せる。

その間にも左腕は引つ張られて地面を走っていく。

「あーみつけたあ！ ヒルダさあーんやつほーい！」

少女が声を出した先、そこでは年配の女性とともに何人かが濡れた衣服を干していた。

年配の女性は少女へと手を振り、掛け声に応える。

ほかの人達も「やあセリアちゃん」「大丈夫かい？ 顔色悪そうだが」

「あ、ねーちゃんおはよー」

口々に少女へと声を掛け、橙髪の少女もそれに応えていく。

「アルト、ちょっとここで待ってて」

「え、あ、おーい」

青年の手首から手をはなした少女は、年配の女性のもとへと駆け寄る。

そこで二言三言、少女は年配の女性へと言葉を放ち、女性は頷いて手を動かす。

少女と女性が一緒に青年の方へと近づく。

「セリア……見晴らしのいいところって？」

「んーふふんーまだだよーそれじゃあヒルダさんお願い！」

力のない笑顔で話す少女は、年配の女性へと言葉を投げ、言葉に頷いた年配の女性は両手を静かにひろげて瞼を閉じた。

小さな風が通りすぎていく。

風が青年と少女の周りと回る。

大きな風が円柱状に地面から天へと吹き上がる。

これは、と思ったとき、浮遊感を青年は得た。

足裏が地面から離れ、ゆっくりと二人の身体が浮かぶ。

年配の女性は左右に広げた手と腕を、頭の上で閉じるようにゆっくりと持ち上げていく。

持ち上げられていくことに、風に包まれ浮かぶ青年と少女は地面から遠ざかる。

青年の視線は、地面から普段は見上げる位置にある神殿の彫り模様へと移り、

頭を回して遠く広がる景色を視界に入れた。

「……うわぁ、空飛ぶの二度目だけど、やっぱり気持ちいいなあ」

「でしょでしょーヒルダさんの飛ばし方気持ちいいんだよー」

「そういや、ヒルダさん風の術使いだったんだ。初めて知った」

視線を地面へと戻せば、年配の女性がこちらへと手を振っていた。

青年と少女も手を振り替えし、そのまま風の流れに乗って神殿の屋根へと乗り移る。

石造りの屋根へと乗り移ったあと風は薄く二人を包む。

「あれ、まだ風が残ってる」

「ヒルダさんはねー術の操りかたすごいんだよー」

本人が意識してない状態でも思ったままの状態をたもつよう術を操ってるんだー」

「へー美味しいご飯作ってくれるだけじゃないんだ」

「でしょでしょーボクもそのうち使えるようにしてみせるんだー」

両手を広げ、周りながら橙髪の少女は白い屋根を歩いていく。

黒髪の青年はゆっくりとその場で視界を一周。

大樹が見える土、大河が流れいく水、砂漠と火山の火、竜巻と雪がちらつく風、

それぞれの方角を視界に入れつつ眼を細める。

再度、土の方角へと視界を合わせ、すこしばかり旅の記憶に浸り、続けざまに反対の火の方角へと振り向き、またじつと視界を向けた

まま佇む。

「……いい眺め、だね」

「でしょー」

言葉がぽつりと流れ、相槌が返って来た。

まだ半年、いやもう半年経った、と意識に思う。

穏やかな旅路であった土に比べ、火の旅は巨大な生物との闘い、わけのわからない大精霊からの試練、人間との命のやりとり、苦しく厳しい出来事ばかりであったことを青年は省みる。

だが、と思考に槍を入れる。

苦しくあったのは自分だけではない、と。

手紙で知った包帯の少女のことを思い、青年は前を歩く橙髪の少女を見る。

（俺と一緒に旅してくれる二人も、きっと苦しかったはず）

どうして今のいままでその考えがでえなかったのか。

青年は胸のうちに苦い感情を得る。

（なによりエオリアは、直接人を殺めた。けど、そのあとのあいつは……）

苦しく、つらそうな顔をしていたことを、青年は思い出す。

さらに思い出されるのは昨夜の老人の言葉、盗賊は獣扱いされ、獣を殺すことに罪に思うことなどあるのか、と。

だが、記憶のなかで若草色の男は少なくとも苦しんでいたと青年は思う。

（昨日は分からなかったけど、今ならわかる。ブツファさんもきくと……）

胸の内がさらに苦しくなる。

自分が、自分のことしか見えていなかったと。

空いた左手は胸を強く掴む。

足取りが重くなったとき、声。

いつのまにか俯いた視線を上げれば、橙髪の少女が手招きをしていた。

見れば橙髪の少女は座り込み、白い石作りの屋根に開けられた穴の近くにいた。

長方形に空いた穴はいくつもあった。

「セリア、この穴は？」

「この穴はねー大地の間へと日差しを入れるためのものだよー」

「そうなんだー……ってエオリア!？」

少女の言葉に相槌を返しつつ穴を覗きこんだ青年は、

大地の間中央にある黒い扉の前にて剣を振り回している若草色髪の男を発見する。

男は五歩ほど離れたところで等身大の炎と向き合っており、剣を振り踊るように地面を蹴って身体を動かしていた。

「エオリア……… いったい1人でなにを………?」

「ねーアルト」

隣に座っている少女が空を見上げながら声を掛ける。
いつもの口調、だが声に柔らかさはない。
違和感とともに青年は少女のほうへと振り向く。

「この世界は、こわい？」
「……………」

翼ある獣が太陽を横切っていく。

「うん……………怖い」
「そっか……………じゃあさ」

屋根の上に寝転がって少女は口を開く。

「ボクたちも、こわい？」
「……………セリア、それは……………」

少女が何を指しているの言葉が言うのか、黒髪の青年は考える。

「ねえ、アルト。ボクはボクが怖いときがあるの」
「えっ？」

「本当のことを言うと、命を奪うようなことはいままでも何度もあったの」

腹に溜めていた息をゆっくりと吐き出しながら言葉が紡がれる。

「数年前、この神殿へ強盗が入ったときがあって、
そのときね……………神殿を、みんなを守るって気持ちもあつたけど」

ひびく。

「ただ、怖くて怖くて、相手を止める言葉を掛けることもしないで、ボクは弓から矢を放ってたの」

なにに、と青年は問わない。

「気づいたら寝台で寝ててさーお父さんは気にしないでいいって言ってたけど、

たぶん……ボク以上にお父さんはつらかったんだと思う」

沈んでいく声に青年は言葉を返すこともできない。

「ボクは忘れちゃったから憶えていないけど、お父さんは……見ちゃったと思うの」

少女は両手を天へと伸ばす。

「ボクが命を奪ったところを」

空は晴れている。

「それから考えることがあるの。こんなボクでさえ、人の命が奪える。

人は、簡単に、その命を失い、そして奪う、って」

ひとつひとつ区切り、思いを込めて少女は言葉を放つ。

「ねえ、アルト。あなたは人の命を奪ったわけじゃないのに、どうして苦しそうにしているの」

背を起こした少女は、まっすぐな瞳で青年の顔を見た。

過去を語った少女の瞳は橙色に澄み、迷いのなさが見てとれる。

青年は、眼をそらすことなく黙ったまま少女の眼を見返す。

数瞬後に青年は口を開く。

「……人が死んだのを間近に見たからってのと、人に殺されそうになつた。

そのふたつがさ、大きかったけど何よりもエオリアが殺すのを止められなかったのが、

俺にとっては一番つらかつたんだ」

小さな声は、しかし澁みなく、はっきりとした音で言葉となる。

「昨日、ブツファさんに色々言われた。最後なんか叱られたようなもんだつた」

思い出す昨夜の老人が見せた態度。

「誰かに叱られたのが久しぶりで、そのうえどれだけ自分が馬鹿だつたかも分かつた。

それで一晩、リラからの手紙を読みながら考えてたんだ。

どうしたら俺は、エオリアに人殺しをさせないですんだのかつて」

天空を一筋の白い雲が走っていく。

「でも、さ。いまのセリアの話聞いてて思った。そうじゃないって。

「エオリアは怖がった俺を、こんな俺を守るためにやむえず殺したんだと」

天を、青年は仰ぎ見る。

「そうだよな、好きで人を殺すわけなんかないよな。」

「エオリアは俺以上にっつらいはず……だからあんな苦しい顔、してたんだな。」

「それにセリアもさ。俺とエオリアのことですらかったよね？」

苦笑を浮かべて青年を少女を見た。

少女は笑顔。

「心配かけて本当にごめん、それにありがとうセリア」

「どういたしましてーそれでさ、エオリアにはどうするの」「うん、エオリアにもちゃんと言わなきゃいけないよね」

「いまだ薄く風をまとう身体を起こして青年は屋根に立つ。」

「少女も立ち上がり、青年と一緒に屋根の穴近くに立つ。」

「青年は、少女は、屋根の穴から飛び降りた。」

「若草色髪の男は、ただ無心で赤い大剣を振り回していた。」

「数歩離れた場所で燃える炎を相手に見立てて、剣を振り舞を踊る。」

「男はずっとこの行為をしてきた。」

「眼を包帯で覆う少女を虐めから守れなかったとき。」

「幼なじみの橙髪の少女がやむを得ず人を殺めたとき。」

そして、自身が神殿騎士の務めとして、人を守るために人を殺めたとき。

もう何度この剣舞を繰り返してきたかは分からない。

ただただ、自分の胸から後悔や迷い、そういつた感情が失せるまで、男はひたすらに剣舞を炎とともに踊って来た。

そうすることしか、自分を許せなくて。

不意に大地の間に響く着地音。

若草色髪の子は音に驚き、動きを止める。

なんだ、と心に抱いて音の方へと振り向き見れば、そこには力無い笑みとともに片手を振る橙髪の子と、白き剣を右手に携えて男に歩みよる黒髪の子がいた。

「ア、アルト、それにセリア!? ……そうか、上からか」

二人を見て、天井を見上げる男。

青年は濃い疲れを見せる男の顔を見て言う。

「エオリア……まさか、一晩中ここで?」

「……アルトには関係ないことだ」

突き放す口調。

「かんけーなくないよー」

「セリア……おまえ」

声を出した少女を見て、男はなにかに気づく。
青年は男から五歩ほど離れた位置で足を止める。

「セリアに言われちゃったけど、関係はあるよ」

「どこにだ、命を奪ったのは自分。アルトには一切の責任はない」

かたくなに拒む口調に、青年は思わず苦笑が浮かぶ。

「エオリア、ありがとう」

「……なぜ、礼を言う」

「俺を守ってくれたからだよ」

「自分は人殺しだぞ」

「でも、エオリアが俺を守ってくれたのは本当だよ。

守ってくれていなかったら……俺は、死んでいたかもしれない」

男から離れた位置に漂っていた炎が消える。

「エオリアは、命を奪ったけど、助けてもくれたんだ。

だから、俺はおまえに言う。助けてくれてありがとう。

命を、守ってくれてありがとうって」

男は、自分の身体から力が抜けるのを感じた。

「それにさ……ひとりで苦しむこと、ないだろ」

青年は白き剣を鞘から抜き、構える。

「アルト……おまえ」

「見よう見まねになると思うけどさ、半年もエオリアと旅してきた

んだ」

「ボクだっていつしよだよー」

「うん、そうだね。セリアも俺もエオリアと一緒に旅して来た。だから、これからも一緒に、背負っていこう」

男はなんと云ったらしいのか分からず、呆れた顔となっている。

「な、なんだよ、そんな顔しなくてもいいだろ！」

「いや、ならば付き合ってくれよ、友よ」

「……！ おう！」

青年の応えた声を合図として剣舞が始まる。

大地の間、中央にある黒き扉の左に黒髪の青年、右に若草色髪の男。橙髪の少女はひとり歩き、青年と男の真ん中、大地の間の大扉付近に立つ。

奏者は右手に白き剣を、騎士は右手に赤い大剣を掲げて打ち鳴らす。強く打ち鳴らされた金属音を始まりの音として、巫女は歌い出す。

奏者と騎士、互いに剣を当てあつては、互いの剣をかわす。

しかして、動きは決して一瞬も止まらず、身体を回し、足裏を跳ねさせ、腕を薙ぐ。

歌声は二人の動きに流れを与え、二人の剣戟音は歌声に拍子を与える。

左から足下を薙ぎ払う騎士の一撃は、空へと跳び上がってかわされ、

――どれほどの悲しみ、その身にまもっていても、逃げないで、捨てないで、失わないで。

足下を剣が通りぬけようとした瞬間、奏者は両足の踵を剣の腹に落とす。

――青い悲しみも、赤い弱さも、黒い不安も、全て自分のいろ。

赤い大剣は踵を受け止め、しかし地にはつかない。

――どれだけ、どれほど眼をそむけようと、手を拭おうと、そこにある。

ふっと沈んで、騎士は剣を勢い良く持ち上げ、奏者を飛ばす。

――だから、だから、あなたの色で、あなたのぬくもりで、景色を描いて。

空中で身を捻らせ、騎士は腰を支点として天を向いた両足を地面へと回転して着地。

――強靱なあなたは大きく広げられた翼。脆い貴方は寒さに震える子鹿。

奏者が着地すると同時に両者は地を蹴る。

――だれもが、だれもが弱くあったこと、わすれないで。

一度、二度、三度、四度、五度、剣が交差。

――だれもが、だれもが温もりもとめたこと、わすれないで。

同時に剣を床へと突き刺し、剣を支点として互いに飛び蹴りを放ち合う。

――弱かったからこそ、強くなったこと、わすれないで。

白き剣の左側から奏者は蹴りと、赤い大剣の右側から騎士は蹴りを。

――強さとは、弱さをみとめて、手に入れること、あなたは知っている。

互いの右足の足裏が破裂音をたててかち合う。

――だから、だからその強さで、誰かの弱さも抱いてあげて。

足を戻し、二人は床から剣を引き抜き、互いに構える。

――あなたの色で、誰かを明るいい色に咲かせてあげて。

若草色髪の子と剣を重ね、橙髪の子の歌声を聞きながら、黒髪の子は考える。

人は、人の命は、人の思いは、きつと支えあっているのだろう、と。

もうひとつは、誰かが命を奪うとき、誰かが命を守っている、と。

それでも自分はまだまだ未熟で駄目だ、と青年は思う。

未熟であることが、目の前で自分を友と呼んだ男に命を奪わせ、

共に旅をしてきた少女に大きな心配をさせてしまったのだと。

奏者である前に、自分はただの未熟な人間でしかない。

けれど、そんな自分を支えとってくれる包帯の少女がいる。

強くなりたい、そしてこの世界とちゃんと向き合いたい。

側にいる人を悲しませないためにも、苦しませないためにも。

こんな自分を支えとってくれる包帯の少女を、支えるために。

青年は、ひとつの強き意思を胸に刻んだ。

第二十四話 磨がれる意識

金属と金属がかすり合い、ときにかち合い、ときに空を斬り合う。

歌声は、金属音と石の床を蹴る足音に合わせて、白い石造りの室内を満たす。

赤と白の線が何度も交差。

相対した黒と若草色の点は円を描くように近づき、遠ざかり、交わる。

声と点と線が作り出す舞を見守るは、室内側に開かれた大扉付近に立つ老人。

白い帽子に白い衣を来た老人は、両手を後ろに結び、ただ視線を舞へと合わせていた。

老人が見つめる先では、熱気を迸る赤、弱々しい奔流の白が映る。

橙髪の少女は両手を左右に広げ、ゆっくりと、ゆっくりと身体を回しながら歌う。

点が床を強く蹴る音と線が甲高く鳴らす金属音とはまるで異なる遅く柔らかい歌声。

しかし老人にはどちらも噛み合っているかのように感じられた。

(まるで正反対、それなのに不思議なものです)

僅かに口端を動かしつつ老人は視線を外さない。

眼を閉じて身体を回す少女は耳からの音だけで歌に拍子を刻む。

青年と男は少女を見ることなく、ただ身体だけを動かして剣舞を重ねる。

やがて橙髪の少女は歌声を弱めていった。

それに呼応するかのように青年と男は見計らったように動きを加速。ひとつ、ふたつ、みつつ、よっつ、いつつ、打ち合った。

少女の声は、ひとつ、またひとつと小さく弱くなっていく。

赤と白の剣は正面から噛み合ったのち離れ、持ち手同士が身体を回転させてさらに噛み合う。

うえに、したに、みぎに、ひだりに、まっすぐに剣と剣が噛み合う。

最後のまっすぐな噛み合いとともに少女の歌声は止まる。

剣の持ち手も動きを止め、黒と若草色の両者は、噛み合った剣を解き、

互いに一步離れて互いが剣を片手で持ち、剣先を当て合い、それを剣舞の締めとした。

巻き起こる拍手。

音の出元は大扉のそばに佇んでいた老人、ではなく背後にいたこともたち。

「すんげーすごかったー！ にいちゃんたちの動きすげえええ！」

「おねーちゃん、なんでなんで見ないで歌って合わせられるの!？」

「とっても優しい歌だったけど、あたしなんでだろちよつと悲しい」

まばらな拍手には様々な感想が付いた。

薄く開いた大扉のそばにいた老人も結んでいた両手を解いて拍手。

目尻をわずかに垂らして笑みとする視線の先には、

剣を鞘に納めた青年と男、ゆっくりと回転しつつ二人に近づく少女。

黒髪の青年は若草色髪の男へと向かって言葉を放つ。

男は黙って聞き、そして頷く。

青年はその頷きへ疲れの浮いた顔を笑みにして返す。

同じように疲れた顔をした男も苦笑を浮かべ、肩を揉むように片手を肩に置く。

その男の方へと回りながら近づいた少女は、そのまま男の方へと倒れ込んだ。

ハッとなった男は赤き大剣を床に落として少女を抱きとめる。

橙髪の少女は紅潮した顔、男は片手を少女のおでこに当てた。

「セリア！？ 熱があるじゃないか！」

「えへえへへ、さすがのボクも熱にはかてないやー」

「なにを馬鹿なこと言っている！」

「そっだよセリア、なんで熱があるのを言ってくれなかったんだよ！」

「だってだってーふたりとも……すっごい心配だったんだー」

苦しそうに笑い、少女は言う。

青年と男は苦い顔となって互いに黙る。

「……すまん、セリア」

「そこは、うん、お礼が、ほしいなー」

「……あとで何回でも言ってる、だからいまは謝らせろ」

「……うん、わかった」

様子がおかしいことを察したのか、大扉そばにいた老人が駆け寄り、青年が老人を見れば、こどもたちも心配そうに大扉辺りからこちらを見ていた。

「どうしたのです？」

「ブツファさん、セリアが熱を……」

「ふむ、セリアどうなのです？」

「たぶんねー……昨日ずっと起きてたし外で歌ってたからだと思う。あとおなかすいたあ」

「まったく、心配してるあなたが二人に心配されてどうするのですか」

老人は昨日自分が言った言葉を思い出して苦笑する。

「ごめんねーおとうさん……あとでちゃんとお説教受けるから……」

「わかっています、いまはゆっくり休みなさい」

「うん……」

少女は眼を閉じ、静かな寝息をたてはじめた。

男は両腕で少女を抱き上げて立ち上がるとともに、青年と老人も立ち上がる。

「ブツファさん……セリアは」

「おそらく旅の疲れと、二人を心配して無理をしたことからの熱でしょう。」

「……アルト君とエオリアの様子ならもう心配がないでしょうし、ゆっくりと休めば大丈夫ですよ」

「……色々にご迷惑おかけして申し訳ありません」

「エオリア、あなたも、いえアルト君もゆっくり休みなさい。」

二人ともそんなに疲れた顔をしては、ほら」

老人はいつのまにか近くへと来ていたこともたちの頭をなでる。小さく寝息をたてる少女を心配そうに見つめ、青年と男を気遣うように声を掛けることもたち。

「セリアだけではありません、この子達も心配してくれていたのですからね」

青年はしゃがみこんでこともたちへと口を開く。

「ありがとう、もう俺平気だから心配しなくても大丈夫だよ」

「ほんとに?」

「ほんとほんと」

「じゃあじゃあまた旅のお話聞かせてよ!」

「あ、ずるい! ぼくアルにいちゃんと遊びたいのに!」

「こらあ! おにいちゃんたちは疲れてるの!」

途端に騒ぎはじめたこともたちに疲れた顔ながらも青年は嬉しそうに笑った。

開いた大扉から一人の白き服装の女性が駆けてくる。

「あ、神官さんだ!」

「おれあの神官ねーちゃんきらい」

「さいきん振られてたって言ってたもんな!」

足音に振り向いたこともたちの口からは小声の警戒。

「あんたたち！ 全部聞こえてるからね！

それよりも勉強の時間になっても来ないかと思っただらここにいて
！」

「わあーっ！ にげるー！」

ひとりのこどもがあげた声に、一斉にこどもたちは神官の女性の脇
を通って、

開かれた大扉へと走って行った。

あっという間にいなくなったこどもたちを見て呆気にとられる青年。
神官の女性は腰に手を当て怒り顔で大扉の方を見る。

「まったくもー！ 逃げ足だけいつも速いんだから！」

「はっはっは……いつもおつかれさまです」

「いえいえ、大神官様。それよりもお手紙が届いてました」

そう言って神官の女性は一通の封筒を老人へ差し出す。

お礼を言って封筒を受け取った老人へ「それでは失礼します」と女
性は去って行く。

老人のそばでは立ち上がった青年が、男の腕のなかで眠る少女を心
配そうに見ていた。

男の方は心配しつつも柔らかな眼で少女を見ている。

ふむ、と声を出して老人は封筒の宛名を見た。

「おや、エラールさんからですか。そういうえば……」

そこまでを口にして老人は、神殿に献花用の花が届けられていない
ことに気づく。

エラールの名に反応したのか青年が顔を老人に向けた。

「なにか、あつたのでしょうか」

普段届くことのない花屋からの手紙。
そしていまだに届けられていない花。

老人は曇る心とともに封筒の封を破き、なかの手紙を取り出す。

取り出された手紙には横に書かれた文字。

宛先として老人の名、そして献花用の花を届けるのが遅れることを詫びる文章、

そのあとに書かれている文章に眼をやった老人は思わずつぶやく。

「リラ君が倒れた……？」

「……っ!？」

老人の背後から聞こえる青年の驚き声。

後ろに振り向けば、老人の方へと一歩踏み出した姿勢の青年。

「大神官殿、その手紙には一体なんと？」

少女を抱きかかえた男は訝しげな視線とともに言葉を投げる。

老人は、応えない。

「大神官殿……？」

視線を左から右へと動かしていた老人は、やがて手紙の右下にて視線を止めると一息。

背後へと振り向いた老人の顔は無表情。

「ブツファさん……リラに、なにがあつたんですか」

酷く焦った声が青年の口から漏れた。

(…………たたでさえ命のやりとりで苦しんでいるのに、ここへ来てこれ…………)

老人はどう話したものの、顔には出さず内心で数秒思考する。焦れるような視線が男と青年から届くなか、老人は口を開く。

「…………疲れからか、リラ君が倒れたそうです。そして、病にもかかっってしまった、と」

「なっ！」

「…………」

男が声をあげる横、青年は口を半開きにして愕然とした顔。半開きだった口が締まると同時に青年は大扉へと走りだすが、老人は青年の腕をとって止める。

「は、離してください！ いかないと、俺、いかなきゃ！」
「…………」

掴まれた腕を離そうとする青年の力は強い。

「落ち着きなさい、アルト君！」

「…………っ！ 落ち着けませんっ！」

怒鳴る老人の腕を振り払った青年は、激高の声を放つ。

「リラが、俺を、俺を支えにしてくれる、あの子が、俺を…………！」

放たれた声は、やがて小さく涙声となり、しぼんでいった。

老人は見る、目の前の青年を。
身体を震わせ、両手は握り拳、目尻からは幾つもの涙。

「怒鳴ってしまったって、悪かったですねアルト君」

「いえ、いいえ、でも俺、俺、リラに会わないと、会いたいです。会って、会って言いたいです。ありがとうって、それだけを」

震える青年は、右手で涙を拭う。

「だから、だから行かせてください！ リラのところへ！」

力のこもった視線が、老人の眼を捉えた。

横、男の腕のなかで瞼を閉じていた少女から声。

「おとーさん……いかせて、ほしいな。リラ、きっと、すごくさびしいと、おもうから」

「セリア……大神官殿、自分からも、お願いします。アルトを、行かせてやってください」

少女と男からの願い、それを聞いて大神官は思う。

（アルト君は……奏者。その彼を護り導く騎士と巫女は、疲労と熱で動けない……

だからと言って、アルト君ひとりを行かせるわけにも、いきませんね）

いつのまにか下を向きかけていた顔を持ち上げて大神官は言った。

「すぐに出られる準備をしなさいアルト君、僕が同行しましょう」

神殿外、多くの人々が二頭の馬近くに集まっている。
白い服装をした神官やこどもたちなどの声。
彼らの上空を灰色の雲が通りすぎていく。

「アルにーちゃん、ぜったいまたお話しかせてよ！」
「大神官様、念のために言っときますがお酒は駄目ですから」
「いまからだとすぐ日が暮れるから、明日の朝にでも……」

馬に跨がる旅衣装の青年、隣の馬に跨がるのは長衣と一体化した頭巾を被る老人。

二人はそれぞれ掛けられる声に応えつつ、手綱を動かし馬を歩かせ始める。

動き始めたところで青年は、神殿へと振り向く。
神殿の出入口では若草色髪の男が立っていた。

男と青年、互いに頷きを返し、青年は前へと視線を戻した。

神殿から地の方角へと伸びる、煉瓦で作られた街道。

街道を掛けていく馬の脚が立てる音は早く、乗り手は馬にしがみつくようにしている。

二頭の馬に乗ったそれぞれの乗り手は無言。

神殿を出る時点で山へと沈みかかっていた太陽は、いまや夕闇を空へ映す。

上空を流れていた灰色の雲は、馬へと小雨を降らしてもいた。

一定の音を立てて街道を駆けていく馬に揺られながら、青年は包帯を巻いた少女のことを考えていた。この世界へと来て出会ったときのこと、歓迎祭での出来事、地の旅へと旅立つ際でのやりとり、日々送る手紙のこと。

どれもが大切に大事なことで、青年はそう思う。

そして包帯の少女から届けられた手紙。右手で背後に身につけた鞆に触れる。

鞆にしまった少女からの手紙を思い、青年は身体に力を込めて手綱を握る。

小雨は、大粒の雨へと変わろうとしていた。

「……………！……………！」

雨が長衣の頭巾を叩く音とともに叫び声が耳に入った。

青年は手綱を引いて馬を止め、振り向く。

やや離れた場所からカンテラを付けた馬が追いついてくる。

（あ……………しまった、ブツファさんのこと忘れてた）

青年の馬に追いついたところで老人は馬上から言う。

「アルト君！ もう今日は休みましょう！ 雨も酷くなりそうですし！」

「はい、わかりました！ でもどこで休んだら!？」

雨音に消えてしまわないよう老人は大声で言い、青年もそれに習う。

「僕に心当たりがありますから付いて来てください！」

そう言うと老人は街道を外れて右へと馬を歩かせる。

青年も黙って老人の行く方へと馬を歩かせた。

街道から外れ、数分して見えて来たのは雨と暗闇に覆われた家屋の群れ。

(こんなところに家が……でも、灯りがない?)

雨が降り続ける視界には暗闇に輪郭だけが浮いた家屋の姿が遠くにある。

疑問を抱いたまま青年は前に行く老人の馬を追いかけていきー

「止まって！」

怒声が前方から青年へと飛ぶ。

声に身体が一瞬だけ震えて反応し、馬とともに青年は動きが止まる。馬の足元で泥が跳ねた。

「ブ、ブツファさん……?」

見れば、前方を進んでいた老人は馬の背から降り、馬に身につけさせていたランタンを持って一歩、雨の闇へと踏み込んだ。

雨や土とは違う臭いが、漂う。

「うつ……血の、におい？」

顔をしかめ、雨に濡れた腕で鼻を塞ぐようにして前を見れば、暗闇のなかをこちらへと近づいてくる存在がある。

ランタンの灯りが反射したのか、近づく存在の眼に光が反射。左上へとつり上がった細い動向の瞳がひとつ見えた。

「！ ブツファさん！」

「じつとしてなさい！」

「なに言ってるんですか！」

青年は地上へと降り立ち、濡れた長衣の下から白き剣を抜いて老人の横に並ぶ。

両手で構えた剣はランタンの光を大きく周囲にはね返していく。光は闇へと広がり、近づく存在を映し出す。

「……こんなときに獣と出くわすとは……」

「ブツファさん……どうするんですか？」

「逃げるには遅いですから迎え撃つしかありません」

二人に近づいてくる獣は青年の肩ほどまである体躯を備え、

冷たい空気に白くなる息を吐き出す口元には、腕ほどに太い牙。

低い唸り声、とともに黄色の瞳が青年を強く睨みつける。

（こんなときに、相手してる場合じゃないのに！）

少女のことを思い、焦りと不安が胸に生じ、白き剣を握る手は力を得る。

獣がひとつ、顎を天に向け、吼えた。

咆哮に反応して老人はランタンを頭上へと掲げれば、

「っ！」

灯りに照らされた獣は手負いの様相だった。

黄色の瞳を持った眼はひとつしかなく、右側は棒のようなものを突っ込まれて血を流しており、

右の頬付近を幾つものひっかき傷らしきものが血を流させてもいた。しかし、獣自身が流す血とは別に、口元の牙には、地面へと垂れ落ちる赤い血。

「どうやら、ほかの獣とやりあつたみたいですね」

カンテラを左手に持ち、老人は懐から黒い一本の杖を取り出す。

「アルト君、僕が相手をするので下がってなさい」

「俺だつてやれます！」

「……アルト君、貴方は奏者なのです。貴方は護られなければいけないのです」

厳しい口調で放たれた言葉に青年は面食らう。

「な、なにを言ってるんですか！」

「アルト君」

獣が跳びかかる。

青年へと跳びかかった獣の前へと老人は立つ。

獣は数歩の距離を一瞬の跳躍で埋め、顎を大きく開いて獲物を噛み

砕こうとする。

寸前、老人の右手が左から右へと低い風切り音とともに、長衣をひるがえして振り抜かれた。

なにかが砕けるようなにぶい音。

呆気にとられた顔で青年は老人を見る。

「アルト君、君は奏者なのです。

百年に一度、この大地へと喚ばれる大事な客人でもあるのです」

左から杖で殴られた獣は勢いを失って二人の右側へと転がる。

よるめきつつも甲高い声で鳴きわめきながら立ち上がった獣の顔は、青年から見て左半分が言葉にできないほど血にまみれ、崩れていた。先ほどよりも荒く短い呼吸を繰り返しながら血を垂らす獣の姿に、青年は絶句。

老人が、獣に一步近づく。

「そして僕たち神殿に仕える者達は、客人をもてなし、護り、無事に還すことを役目として負っているのです」

老人が右手に携えた黒い杖から炎が吹き出す。

杖が天を向いた側から吹き出す炎は、降り落ちる雨粒を蒸発させていく。

大柄な獣は怯えるようにあとずさるが、老人は追うかの如くさらに一步を踏み出す。

「その役目を、神殿は三千年間、護り通してきたのです」

三步目を踏み出すと同時に老人は、杖を振りかぶり、跳ぶ。獣が意表を突かれ、老人よりも大きな身をすくませた。上段から炎を伴った杖が、地面へと跳躍の勢いを持ったまま、振り下ろされた。

血と、肉が焦げる臭いが、強く青年の鼻を打つ。

地面へとしゃんがみこむような姿勢から立ち上がった老人は、杖を軽く振って付いてしまった血を地面へと飛ばす。

それでも落ちなかった分は、懐から取り出した布で拭い取り、懐へと布とともに杖をしまう。

ぬかるんだ地面に立ったまま青年へと振り返る老人。

「さあ、行きましょう」

老人は普段の口調で、青年へと言葉を投げかけた。

雨が降り続けるなか、青年と老人は馬を引いて、暗闇に輪郭だけを浮かべる家屋の側を歩いていく。

青年は左右を見渡しつつ暗闇に眼をこらせば、見えてくるのは所々が朽ちて壊れた家屋ばかり。

雨でぬかるんだ地面は雨を弾き、泥を跳ねさせ、歩く者を汚す。

青年の前を歩く老人は、何も言わず、歩みを進める。

少しだけ声を掛けるのをためらった青年は、しかし言葉を口にした。

「ブツファさん、ここって一体……」

一拍の間。

「……ここは、昔あった村なのです」

「どうして、いまは人が住んでいないんですか？」

「ある日、凶獣の群れが、村を襲ったからです」

「凶獣の群れが……？ 一体どうして……？」

前を歩く老人は、黙って左右に顔を振る。

雨粒が地面を叩く。

時に連続して、時に間を空いて音は地面を叩き、ひとつの曲のように音は連なっていく。

沈黙は、雨の音とぬかるんだ地面を進む足音を聞く。

「僕が……まだ大神官になったばかりの頃、でした」

混じる、ひとつの声。

雨音に消されそうで、それでも聞こえてくる声。

「神殿に近かったこの村には、多くの人々が住んでいました」

地面に倒れ込んだ、家屋だったものと思われる木材をまたぐ。

「最初に異変を知らせたのは、風、でした」

意味をはかりかねたのか青年は疑問を浮かべ、

「風が……風がどうやって？」

言葉を述べる。

「神殿にいた風を扱う術者、皆が聞いたのです。風の叫びを。叫びを聞いた術者は、真っ青な顔になったり、倒れ込むものがありました」

雨音と足音。

「風の叫びを辿るようにして、ここへ来たときには……酷い有様でした」

言葉は、唇を噛み締めるように言い切られた。

「それでも生き残った村人もいたのですが、皆がここを離れていきました」

なにかが小刻みに揺れている音。

「そして、風の叫びを聞いた術者のなかには、術を使えなくなったり、

声を出せなくなったりする者などがいました」

その言葉に青年は、はっとするが何も言わず歩く。

「このお話は、ここで終わりです」

老人は、言葉とともに足を止めて右へと振り向き、視線の方向にあるさほど壊れていない家屋へと近づき、馬を止めてランタンとともに室内をのぞく。

のぞいた顔をもどしてひとつ頷き、老人は青年へと振り向いた。

「主はいませんが、今夜はここをお借りしましょう」

青年は心無しか冷たくなった雨を長衣越しに感じながら、重く頷いた。

天井を叩く雨音を聞いて、二人は濡れた長衣を脱ぎ干し、馬に吊るしてあった袋から取り出した布で、雨に濡れた馬の身体を拭う。

色褪せた調度品が散らかり、ほこりが積もる床には室内を照らすラントン。

「この子たちも入れる場所があったのが幸いですね」

馬の身体をふき終えた老人がつぶやく。

そうですね、と青年が返し、同じくふき終える。

一息ついた様子で老人と青年が床に腰をおろそうとして響く異音。

びくりと反応した二人は、異音が聞こえた先、光が届いていない室内の奥を見た。

青年は、腰の券に手を置きながら暗闇に眼をこらし、見つける。

「動物？ …… 兎？」

暗闇に慣れた視界には、後ろをかばうように身体を広げ、しかし身震いしながら威嚇の声を出す生き物が一体。老人は黒い杖をしまいながら息を吐き出す。

「いえ…… どうやら棘兎のようです。

折れてはいますが額に棘の根元が見えます」

老人に言われて見た先には棘を根元近くで失い、威嚇の声を出す兎。

「もしかして、さっきの獣がやりあったのは」

「この棘兎、かもしれませぬ。しかし、この棘兎怪我はしてないようですが」

「そういえばあの獣、口元から血を……」

思い出して吐き気を催すが、堪える。

歯を食いしばって棘兎を見ていると青年は気づく、背後に倒れたなにかを。

眉をひそめ、一步踏み出す。

膝ほどもない棘兎はさらに身体を大きく見せようと毛を逆立てて威嚇。

「……ブッフアさん、ここ、出ませんか？」

「アルト君？ どうしたのですか？」

無言で、威嚇する棘兎のうしろを指差す青年。

床のランタンを手に取り、老人がかざせばそこには、

腹部を大きくしたもう一匹の棘兎が後ろ足を食いちぎられた形で倒れていた。

息絶えているのか、倒れた棘兎は身じろぎすらしない。

（つがい、でしょうか。 なんともやりきれない気持ちになりますね）

薄く脛を下げて老人は棘兎たちを見る。

青年は棘兎たちを見たまま、腰を下ろし眼を威嚇し続ける棘兎を合わせた。

「ごめんよ、俺たちここ出るから安心してほしい」

落ち着いた声色で語りかける青年、しかし棘兎は威嚇のまま。それでも青年は頷いて立ち上がり、再び長衣をまとう。

老人も同じようにして長衣をまとって馬を引く。

「すみませんブツファさん、せつかく見つけてもらった場所なのに」「いえいえ、構いませんよ。僕としても同じ気持ちでしたからね」

二人は棘兎たちを背後に、家屋を出た。

数十分後、再びあまり朽ちても壊れてもない家屋を見つけ、二人と二頭は雨風をやりすごす。

壊れていない暖炉には術で生み出された炎があり、室内を灯りと暖かみで満たす。

手近な家具に腰掛け、炎で暖めたスープをすする青年と老人。馬は持ち運んで来た飼葉を食べている。

スープを飲み終えたところで、青年は口を開いた。

「ブツファさん……どうして、あの棘兎は襲われたんでしょうか」

老人は無言。

「どうして、生き物はほかの生き物を襲うんでしょうか」

スープを飲む音。

「どうして、殺して、殺し合ってまで生きるんでしょうか」

雨と風が家屋に音と響かせる。

「俺には、俺にはわかっていても理解できませんっ！」

老人は、何も言わずに湯気のたつスープを飲む。

「元の世界じゃ、だれも襲う必要なんてなかった。だれも殺し合う必要なんてなかったのに」

器を持つ手に力が入る。

「みんな笑ってた、誰も欠けることなんてなく、争いも死も、新聞やTVだけの話だった」

干された長衣から水が滴り落ちた。

「なのに、どうして、どうしてこの世界は、こんなにも、こんなにも……」

言葉にならず、言葉は小さく、言葉はきえていく。

手に持ったスープが入っていた器に、涙がひとつ、ふたつとこぼれ落ちる。

「アルト君……考え過ぎは、毒になるだけですよ……」

静かにつぶやいて老人は、再びスープを飲み始めた。

雨と風は止まず、ただただ家屋に音を響かせる。

青年は疲れや寒さとは別の震えを止められず、
ひとり荒れる感情を抱えたまま涙することしかできなかつた。

第二十五話 小雨が止む頃

小雨がぱらついているなか、めんどろそうな顔をしつつも街の門付近で見張りをしている男たち。

彼らが目を配っている視界におさまっている方向では、夕闇がおりつつあった。

ひとりが大きく口を開いてあくびをし、そばにいた男が声を掛ければ、

あくびをした男は照れくさそうに口を閉じた。

そして、声を掛けた方が一瞬動きをとめ、次に街道へと振り向く。

つられてあくびをした方も眼を向ければ、小雨のなか街へ向かって駆けてくる馬が二頭。

眉をひそめ二人の男は馬へと注意を向けつつ、馬の進路上へ立つように脚を動かす。

あくびをした男は大声で静止の呼びかけをおこなう。

瞬間、勢いをゆるめたのは二頭のうち、後ろを走っていたほうだけ。先を駆ける馬は速度を落とさない。

おいおい、とめんどろそうな顔をしていた男は焦りの声。

慌てて片側が槍、もう片方は斧を構える。

先ほどよりも強く地面の煉瓦を叩く蹄鉄音。

速度を示す音は断続的に響き、武器を構える男たちへ無言の圧迫感を与える。

あと三十歩もない、あつという間に埋まる距離、そこまで馬が迫る。どうするべきか、汗を浮かべて悩んだ男たちは一斉に武器を前方へと振り下ろし、突き出す。

風。

一拍の間が空き、ひと際大きな音が鳴ったのち、再び連続した蹄鉄音が響く。

街中へと駆けて行った蹄の音は、いまや遠くへと消えていった。

門の近くで驚いた表情で振り向いた姿勢でいる男たち。

その近くへとゆっくりな音をたてて歩く一頭の馬。

馬上にいた長衣の頭巾から聞こえるのは老人の声。

「申し訳ありません、警備のお二人方。いまのが野盗ではないのを僕が保証します」

斧を持った男が顔だけを身体の向きと合わせれば、そこには苦笑顔をした老人がひとり。

「あんたは……ああつ！？　だ、大神官様！　なんで、どうして！？」

老人は馬から地面へと降り立ち、人差し指をそつと閉じた唇の前へと置く。

静かに、という意味をこめた動きに警備の男は思わず口を両手で塞ぐ。

が、斧が煉瓦道へと落ちて金属音が響きわたった。

「……………」

「……………あ、あはは、す、すみません」

斧を拾いつつ後頭部に手を当てて謝る男は、いまだ振り向き姿勢でいる槍の男に言う。

「おい、おまえいつまで見てんだ。大神官様がいるんだぞ」

「……」

「？ おいつ！ どうしたんだ!？」

びくっとして槍を持っていた男は首を素早く回して斧を持った男を見る。

「えっ、ああ、すまんなんか言ったか？」

「もついいよ、んで大神官様、どうしたですかい」

槍の男は斧の男と街中を交互に見ている。

「いえ、ちよつとばかり急ぎの用事がありましたね。

それで僕と……奏者様で来たのですが」

槍の男が奏者、と聞いて顔を老人へと向けた。

「あ、やっぱり、さきのは奏者様だったのかあ」

「さきのはっっておまえ、見えたんか顔が」

「見えた見えた。けどさ前に見たのとは全然違って驚いたんよ」

二人のやりとりを聞いて老人はひとり目線をよそへ投げて顎を引く。

「あ、つとすんません大神官様、それで奏者様とふたり、どしたんですかい」

「ええ、知り合いのご家族が病にかかったと聞いてお見舞いに来たのです。」

ですが、なにぶん急なことだったので僕と奏者様だけでして」

ふんふん、と斧の男は頷く。

「そりゃあ病気になった人が心配ですわな、さっきのはしょうがねえ見なかったことにしますわ」

「申し訳ない。お詫びといつてはなんですが、のちほどこれを差し入れに来ますね」

これ、と言いつつ老人は片手を、杯を握ったように構えて口元へと運ぶ動作。

その動きを見て槍の男は苦笑い。

「ありがてえんですけど、トロツポさんにはねえようにお願ひしますよ。」

そんじゃま、こっちの詰め所で入出書類に書いてってくださいな」

槍の男に促されて老人は馬を連れて門近くに立てられた小屋へと歩んで行った。

暗がりへと落ちようとする空の下、街を歩く人は少ない。

代わりに建物へと宿る灯りは多く、閉じられた窓の隙間からは漏れた室内の光。

一日が終わろうとしている空気を切り裂く蹄鉄音に、通りを歩く人々は目線だけを飛ばす。

周囲に構うことくなく、馬へしがみつくようにかがんだ姿勢でいる青年。

長衣の頭巾によって覆われた顔からは表情は見えない。

ただ、手綱を握る手だけが彼の思いを語る。

堅く、固く握り込まれた手綱、そして手の甲には血管が浮かび上がっていた。

手だけなく、長衣に隠れていない腕にも力がこもっているのが分かる。

手綱が馬へと伝えるのは、ひとつ。

速く、速く、速く、前へ。

馬は、酷使されようとも、ただ背に乗る者の意に応える、愚直なま

で。

だが、どれほどの想いを乗り手が込めようと、

どれほどに馬が手綱の指示に応えようと、限界は来る。

雨にぬかるんだ地面が疲弊した馬の脚を掴む。

青年の視界が、倒れ込んだ。

煉瓦道ではない地面には水たまりが幾つもできており、

場所によっては泥沼のようになっていている部分もあった。

そして、青年と馬が倒れ込んだ先は人馬を包むような泥だまり。

水面を叩く、派手な音と土色の飛沫。

目線だけを人馬へ送っていた人々は音に驚き、身体ごと視線を向けた。

好奇と不安の視線が泥だまりにそそがれるなか、

泥によごれた長衣をまとった青年はぎこちなく立ち上がり、馬を起こそうとする。

馬を起こそうとして足底を滑らせる青年に、近くを通った男が声を

掛けるが、

青年はなにも答えず馬を起こそうとする。

しかし、馬は起き上がろうとしない。

長時間の走行で疲弊した馬には立ち上がる力がなかった。

見かねたのか声を掛けた男だけでなく、ほかにも何人かが馬の周囲にやってくる。

青年が必死に馬を起こそうとしているのを見て、

ひとりの男性が無言で青年の隣へと位置どり、肩を馬に当てて足底を泥だまりに沈ませた。

その男性の様子を見て、他にも何人かが馬の周囲に陣取り、肩を当て、手を当て馬を押す。

小雨がぱらついているにも関わらず、青年と街の人々は数十分間、馬を押す。

やがて馬自身にも力が戻り始め、自力で立ち上がろうとする力と、横から青年たちが押す力によって真つ正面へと向き上がり、馬は立ち上がった。

詰所で書類を書き終えた老人は、背後に馬を連れて街の大通りを歩いていた。

小雨がぱらついているのを見て、室内では下ろしていた頭巾を頭に再びかぶる。

「さて、アルト君はもう、リラ君のところでしょうか」

ぽつりとつぶやいた先、歓声が聞こえた。

「？」

なにかあったのかと歩きつつ歓声があった方へと歩いていけば、そこには人ばかり。

だれもかれもが泥に汚れた格好をしており、しかし笑顔であった。笑顔の彼らへと頭を何度も下げているのは、長衣を泥でよごした青年であった。

すぐそばには身体の半分以上が泥まみれとなった馬。老人の視線がそのまま下へ向けば、そこには大きな泥だまり。

苦笑するように笑ったあと、老人は足早に人ばかりへと近づいていく。

その間に青年は周囲の人々へ礼を述べて、馬に乗りゆっくりと駆け出した。

笑顔の人々はそれぞれに声を掛けて青年を見送る。

「もうこけたりすんなよー奏者様あー」

「急ぎだからって急ぎすぎるのは毒だかなー」

「あとでうちの風呂屋においでーなー」

青年は後ろ手に手を振って声に答えたあと、前を向いて駆けていく。

「あゝあ、よごれちまつたなあ」

「でも、いいじゃねえか、奏者様を助けられたんだしよ」

「だなっ！ よっし、どうせだこのまんま呑みに行こうぜ！」

「そりゃいいな！ あの坊主頭が怒鳴るだろうがな」

「そんなときゃこう言っちゃいいのさ！ 『名誉の汚れだ！』 ってな」

泥に汚れた格好の男たちは快活な笑い声を通りに響かせる。

その笑い声にうんうんと頷きながら老人は男たちへと近づき、口を開く。

「良かったら、僕におごらせてもらえませんか？」

倒れた場所から幾分か離れたあたりで、青年の背後からは歓声が聞こえた。

振り返ってみれば泥に汚れた男たちと一緒に、老人と馬が歩いていくのが見える。

眉をひそめたまま青年は前へと向きなおり手綱を握った。

手綱を握る力は、弱い。

歩を進める馬の歩みにも力はなく、にぶく地面に蹄をめりこませる。青年も馬にもすでに体力はない。

それでも青年は手綱を握る手に力を込め、前へと進むように馬に伝える。

馬も手綱に応えようとするものの、力無く鳴き声を漏らし、弱々しく歩んでいく。

時間だけが、過ぎていった。

気づいたように馬の背へと落ちていた視線を上げれば、見慣れた建物の並び。

既に日は没し、道ばたに焚かれた篝火に建物は照らされ、下から上へと伸びる灯り。

うつすらと泥に汚れた人馬は闇に浮き上がり、その歩みを止めた。

馬が手綱に促されて止まったのは、既に店先からは草木や花をしまつたあとの花屋。

力無い動作で馬から地面へと降り立ち、青年はゆっくりとした手つきで花屋の軒下にある、

柱に馬の手綱を括り結んで馬の頭をなでる。

馬へちいさく幾つか言葉をつぶやき、青年は花屋の閉じられた硝子戸へと向かう。

閉じられた硝子戸。

透けた硝子は内側から厚手の布が上から下へ垂らされることで外からの視線を遮っていた。

それは閉店を意味する。

だが、僅かに布の間から漏れる灯り、それはなかに人がいる証拠。

手の甲を正面に、右手を顔の前に持っていったところで青年は、ためらうように動きを止める。

止まっていたのは数秒、次の瞬間には手の甲が硝子戸を数度、叩く。反応は、なかった。

それでも青年は再び、硝子戸を数度叩いた。

自分の名前も添えて。

もう一度、叩く。

階段を降りるように板を踏む音が聞こえた。

降りきったところで止まった足音には、戸惑いに近い雰囲気があった。

青年は足音が聞こえた方へ、名を告げた。

硝子戸を締めていた鍵が、開く音。

そのまま硝子戸はゆっくりと左へと開かれていき、内側に垂れてい

た布を上へと押しやって、
軽く波がかった金髪の女性が顔を出した。

「で、なーんでまた大神官様がいんだ？」

黒塗りのカウンター内で坊主頭は目の前で杯を傾けている老人に問
いかける。

背後ではところどころを泥に汚した男たちが意気揚々に酒を酌み交
わし、話に興じてもいた。

老人は一息に杯の中身を飲み干し、はあっと息を吐いてカウンター
の上へと杯を置く。

「ガイオのお酒を呑み来ました。だけでは不満ですか」

坊主頭はしゃがみ込んで中身の詰まった硝子瓶を取り出し、
栓を抜いて空となった杯へと注ぎ込んでいく。

「そんなことねえさ。でもよ、ただ珍しいつつつか、なんかあった
んかなと」

「あつた、と言えばありましたねえ」

そこで言葉を切り、空でなくなった杯を老人は手に取り匂いをかぐ。

「相変わらず香りだけで酔えそうですねえ」

「今出したのは二十年ものの奴さ。ま、結局美味しいことに変わりね
えがな」

「ははは……」

「で、さ。あつちで呑んでくれてる奴らが言っていたりもしたが、

あの坊主も来てるってのはほんとなのかい？」
「ええ」

短く答え、老人は手に持った杯を傾ける。

常温の液体は口当たりよく流れ込み、ほどよい酸味と果実の味が喉を過ぎる。

口に含んだ全てを飲み込むのではなく、いくらかを残して舌で長く味わう。

瞼を閉じて老人はひとり、味の余韻に浸る。

「うん、美味しいです」

「ありがとうございます、それで……まあそうだな、坊主はリラちゃんのところか」

「知っていましたか？」

「そりゃあ、な」

聞こえた注文の声に返答をしつつ別の酒瓶をとりだし言葉をつなげる。

「いちおうエラールのやつも店は閉めないでいるが、それでもやつぱ思っようにはならねえよな」

声を小さくする。

「リラちゃん……もうよお、九日ぐらい寝込んだままなんだ」

「……」

「で、よ。街の医者なんかを呼んで診てもらったりもしたらしいが……」

坊主頭は言いにくそうに言葉を濁す。

「熱を下げたりする薬も、身体のだるさをなくす薬も効かねえ……
もしかしたら不治の病にかかっちゃまったかもしれねんだとよ」

青年は、金髪の女性から苦しそうな声で言われた事實に、
眼を見開き口元を震わせたまま棒立ちとなっていた。

一階の室内を照らす灯りは、時折近くを飛び回る虫によって陰りを
生む。

閉じられた硝子戸近くに立つ青年と、階段近くの椅子に座る金髪の
女性。

小降りの雨は、僅かな間をあけつつ木材に当たっては室内に音をこ
だまさせる。

青年にはそんな音すら聞こえる余裕もなくなっていた。

開いていた両手、青年は震えたまま握り込み、階段を登ろうとする。
が、強い声で呼び止められた。

睨むように女性を見た青年は、椅子から立ち上がり青年へと近づぐ。

女性は口を開くとともに指をさす、青年の泥によごれた長衣と顔。

呆れた顔になって女性は布を取り出して青年に突き出す。

女性に言われて顔に触れ自らの身体を見る青年。

汚れた長衣を女性に渡し、布で顔を拭った青年は改めて階段を上が
って行った。

一息つき、呆れた声を出した女性は、しかしどこか安心した様子。

渡された長衣から泥をはたき落とし、室内で鉢植から立派に育つ樹
木に引っ掛ける。

二階から戸が開いて、そして閉じる音が聞こえたあと、金髪の女性はひとりごとのように何かをつぶやき、布を編みかごと放り込んだ。

踵を返して女性は硝子戸を開いて、閉じ、外から鍵を掛けた。

鍵を懐にいられた女性は軒下の柱につながれた馬を見て、労うように言葉を掛け頭を撫でる。

小雨が降っているのを見て、女性は馬を雨の当たらない軒下へと入れ、

そのまま酒場のある方角へと小雨を気にすることもなく歩き出した。

音が立たないよう静かに扉を開いた青年は、閉じるときも音がたないよう静かに閉めた。

後ろ手に扉を閉めた手を身体の横へと戻し、青年は黙ったまま室内を見渡す。

室内は木机の上におかれたランタンの淡く揺らめく灯りに照らされていた。

灯りが生み出す影は濃く長く姿を伸ばし、

丁度灯りが当たらない位置に包帯を目元に巻いた少女は寝台に横たわっていた。

寝台からは眠っていることを示す規則正しい、しかし弱々しい呼吸音が聞こえる。

木材を打つ小雨の音、そんなことは気にも止めず青年は少女が横たわる寝台へと近づく。

寝台のそばには丸く切られた木材が台座となった椅子、

そこへ青年はゆっくりと腰を下ろして座り、背を曲げて膝に肘を乗せ両手を組み、少女を見る。

椅子の近くには水の入った壺があり、包帯の少女の額には湿らせた

厚手の布があった。

青年は伸ばした手で少女の額にあった布を手に取り、壺内の水にひたらせたあと、

取り出して水気を僅かに残すようにして絞り、ふたたび少女の額へとせる。

手を戻し、青年は横たわる少女を見つめる。

包帯を巻いた少女の顔は生気のない色をしていながら頬は淡く赤い。少女を見つめながら青年は、ひとつ、またひとつ言葉を口からこぼしていく。

言葉は理不尽にたいする怒りがこめられていた。

なぜ、どうして、そういった類いの言葉がこぼれ続ける。

俯いて視線を床へ落とし、それでも言葉は止まらずにいた。

床に、雫が落ちる。

きつく組まれていた両手をほどき、青年は目元を拭う。

拭っても湿りが取れない目尻のままであったが、その腕は途中で拭うのをやめ、

青年が腰裏に身につけていた皮の鞆へと向かった。

厚く膨らんだ鞆を開き、中へと差し込まれた手の平にはいくつもの封筒。

それは神殿へと届いた、青年へと宛てられた少女の手紙。

いくつかの手紙を両手に持ち、青年は俯き加減になりながら、言葉を、横たわる少女へと手紙を送ってくれたことの喜び、読んだ手紙について青年自身がどんなことを思ったかを、ぽつりぽつりとつぶやいていく。

青年の独白にも近いつづやきが続く。

ただただ思いを込めて言葉をつぶやく青年。

手紙を握っていた両手に触れる、かるい感触。

涙の筋を残した顔の青年は、はっとなつて目線を両手に向ける。

横たわっていた少女の手がのせられていた。

少女の名を呼べば、横たわりながら青年の方へと包帯の巻かれた顔を向けた少女。

息苦しそうに少女は青年の名を呼び返した。

薄暗い灯りだけとなった店内。

従業員をのぞけば、客はカウンターに座る老人と金髪の女性だけ。

だが、カウンター内に立つのはひとりの坊主頭。

ほかの従業員の姿はなく、店内には三人のみ。

「なんでアル坊がひとりで来たのかと不思議に思ってたら、大神官様が一緒だったのかい」

灯りに鈍く反射する赤金の杯を傾けながら女性は言う。

「ええ。たまには僕も旅に同行しようかと思ひましてね」

応えた老人はすでに顔を赤らめ、ふらふらと左右に揺れている。

老人の正面、黒塗りの台の向こう坊主頭は自分で杯に酒を注いでいた。

「とは言ってもよお、わざわざ大神官様が来なくてもあいつらがいるじゃねえか」

「……旅の疲れが二人にでましてね」

「ふーん、行って帰ってくるだけの旅で、疲れ、ねえ……」

酒をそそいだ杯を坊主頭は持ち上げ、中身を嚙下。

女性はそれを見ながらも、ゆっくりと杯を傾け、飲んでいく。

「そのわりには詩人が歌いにくるような出来事があったじゃないか
さ」

「砂蛸をぶつたおしたって話だったな、ありや本当なのかよ」

「はっはっは。わざわざ嘘をつく必要がありますか？」

そりやそうだ、と言って坊主頭は意地悪く笑う。

「でもさ、大神官様。アル坊がうちに来たとき……酷い顔になって驚いたよ」

「……色々とありましたからね……」

椅子から倒れないよう、天井を向いて老人はぼそりと言う。

「まあ、あの付近にはたちの悪い連中もいるって話だあ。

もしかして脅されたりしてびびっちまったのかもなあ！」

「……」

「え、な、なんでそこで黙るんだよ大神官様あ！」

「いえいえ、なんでも、なんでもないです」

ふらふらしながら笑みを返す老人に、坊主頭は黙り込む。

横目で見ながら杯を傾ける女性は、思う。

(あれだけ必死な顔で、泥まみれなのも構わずうちに来る、それこそなんにもなかったのがおかしいさ)

空になった杯を台の上に置く。

「フラン、新しいの」

「あいよお。それよかエラ、リラちゃんはとうなんだ？」

「どうって、相変わらずさ」

「そか……」

栓を抜かれた新しい酒瓶から酒がそそがれる。

「お医者様には不治の病、なんて言われちまったけどさ。

そんなもんあたしは無いつて信じてんだ」

「でもよお……薬、ろくに効かねえんだろ？」

「違うよ、効かないんじゃない。効きにくいんだよ、あの子は」

新しく酒がそそがれた杯を握り、女性は言う。

「小さいころから熱を出しては、あたしが解熱薬を作ったりしたけどさ」

杯を握っていない腕で肘をつく。

「地の精霊がなにかわからないけど、薬を意味なくしちまうんだ」

「は？ なんだそりゃ」

「あたしにもよくわからない」

横から寝息。

ちらりと女性が眼をやれば、椅子から落ちないよう器用に重心を保

って眠る老人。

「最初は、さ。地の術者はこうなのか、って思ったさ。

けどどうも違うようで、どうやらあの子の体質らしいのさ」「

「体質って言ってもよお、リラちゃん、そんな変わったところあったか？」

「あるさ……あの子の眼、それがあるじゃないか」

「！ 見えないけど見える眼、か……」

「あんまり言いたくないけどさ、あの子精霊が見えるって言うのさ」

「おいおい初耳だぞそれ！」

「いま言っただから当たり前じゃないか」

「ぬぐっ……で、それが体質とどう関係するってんだ？」

傾けていた杯を女性は、台の上へと静かに置く。

「さあね」

「さあね……って言われてもよお」

「さっきも言っただろ？ わからないって」

「う〜ん……」

それっきり黙って杯を傾ける坊主頭。

同様に杯を傾け、女性は喉に酒を流しこむ。

「……もしかしたら、あの子の両親も、同じ体質だったのかもね」

「かもなあ……」

降り続く小雨は、変わらず雨音を室内へと響かせ続けていた。

小雨が静かな室内に響くなか、息苦しそうに言葉をつむぐ横たわる少女。

寝台横の椅子に座り、少女の手を両手でにぎり答えるように言葉を返していく。

ときおり、少女は苦しそうでありながらも精一杯笑おうとする。

青年は顔を左右に振って、ぎこちない笑みを浮かべた。

ありがとう、と青年の口が動く。

少女もまた、同じ動きで唇を動かす。

青年が旅の話をしていけば、少女は苦しそうにしつつも相槌を返していく。

こわかった、と青年が身体を震わせる。

組まれた両手をなでるように少女の手が動く。

少女が育てていた種の話すれば、青年は頷いて聞く。

ごめんなさい、と少女は震えながら声を出す。

静かに顔を振って、ランタンの置かれた机に振り向く。

そこには芽がでかけたところで萎れてしまった夜露草の鉢植。

鉢植を見て、青年は言う。

君が一生懸命、育ててくれようとしていたことは手紙が伝えてくれている。

そして、そのために君は、倒れてしまったのだと。

少女は、目元に巻かれた包帯の隙間から涙をこぼし、言う。

こんな私のことを思ってくれる貴方にただ応えなかった。

それなのに、私は、貴方からもらった種を枯らしてしまった。

泣き声が、室内に広がっていく。

泣かないで、と青年は言う。

そう言いながら、青年も涙を床にこぼす。

ごめんなさい。

少女は泣きながら謝る。

雨音だけが室内を満たす。

いつしか、少女は眠りに落ちる。

青年は寝台の傍らで少女を見守り、少女の手を優しく両手で包む。

しばらくの時間が過ぎる。

青年は疲れからか知らず知らずのうちに、寝台へともたれかかるようにして眠っていた。

小雨は止み、雲間からは闇夜に浮かんだ満月があらわれる。

淡い、淡い満月の光は、寝息を立てる二人がいる室内へ、窓から差し込む。

光に反応するかのように、青年の右腕に身につけてある四花のお守りが輝きだす。

輝きは翠色となり、青年の身体を包み込みだす。

翠の輝きは青年の身体だけにとどまらず、つながった手から少女の身体にも流れていく。

青年と少女、二人の全身を翠の輝きが包んでいくなか、青年の左手首からは別の輝きが生まれる。

白い輝き。

白い輝きは翠の流れに沿うようにして少女の身体へと流れ、翠の輝きと同じように少女を包む。

白と翠は明滅を繰り返し、次第に少女の顔に生気がやどりだし、頬も赤みを薄くしていった。

青年と少女、両方の身体が癒されていくにしたがい、

翠の輝きは二人の身体に沈み込むようにしてその光を失っていく。

白い輝きだけが少女を包む。

輝きはやがてひとつの場所へと集まっていった。

それは少女が寝込んでいる間も外すことのなかった四つの花を象つた髪飾り。

円を描くようにして白き輝きは集っていき、髪飾りへと吸い込まれる。

二人を包んでいた輝きが消え失せたころ、少女は不意に眠りから覚める。

呼吸に苦しさを憶えないことに違和感を覚え、上半身を起こす。

起き上がった拍子に目元の包帯が少女の顔からほどけ落ちる。

青年は、少女の気配に瞼を開く。

はっきりしない意識のまま青年は少女の名を呼び、顔を持ち上げる。

目の前には、黄金の円を浮かべた、黒い眼があった。

第二十六話 花が開くとき

いままで聞こえていた虫の音、鳥の鳴き声、近隣の物音、それらが消えた。

耳に届くのは無音の響き。

青年は気がつけば、暗闇に立っていた。

上は白、下は黒の装いで。

「？ ……！？」

ハツとなった顔つきで周囲をせわしなく見る。

何も見えず、何も感じられず、何もわからない。

顔をうごかすのをやめ、自身の両手を見て服装がいつものでないことに気づく。

「この服は、召喚されたときの……」

どうして着てるんだ、胸のなかでつぶやく。

服を触り感触を確かめっていると、黒のポケットから硬い手触り。なにかと思い取り出せば四花の腕飾り。

「どうしてこれだけが……？」

不可解な気持ちが始きつつも右腕へと腕飾りをはめる。

もういちど周囲を見渡し、足下を確かめるように青年は歩き出す。

ゆっくりと歩きながら青年は少しずつ記憶を思い出していく。

苦しそうな表情で横たわり、自分へと謝る少女の姿。

慰めることもどうすることもできず、謝らないでと言っただけだった

自分。

ただ、手をつなぐことしかできなかった、その悔しさを。

「ありがとう、って言えなかった」

暗い思いが胸に広がる。

思いを映すように足取りは重くなり、暗闇に沈むような歩調。悔しさ、苛立ち、不安、ごちゃ混ぜとなる感情。

瞬間、聞こえる音がひとつ。

「？」

俯いていた視線を上げ、わずかに音のした方へ顔を向ける。相変わらず暗闇しかない視界、だったはずが違った。幼い藍色髪のことろが両膝を抱え、顔を膝に隠してすすり泣いていた。

見えたのは灰色の視界。

耳慣れぬ音が間近から響き、少女は驚いてあとずさる。

あとずさった少女の前、自身よりも背のある四角い物がふたつの円を回しながら進んでいった。

足下からは土や石とは違う堅さのあるなにか。

焦りと怯えを含んだ表情で藍色髪の少女は周囲を見る。

空は薄い灰色、空を区切るように走る黒い線、黒い線とつながる高い柱。

広い道を走り過ぎていく金属板のなにか。

狭くくぎられた道を歩く顔色さえも灰色で配色された人々。

突然の状況に少女は頭を抱え、座り込みそうになるが、左手に触れた髪飾りの感触によって意識を保つ。二度、三度呼吸を繰り返して胸の鼓動を落ち着かせて少女は考える。どうしてこんな場所にいるのだろうか、と。

思い起こされるのは意識が転じる前。

不意に息苦しさでたるさから解放され、不思議に思っただけで起き上がり、右手を握る感触をあたたく思い、青年を見つめていた、はずだった。

そこまで思い至って少女は気づく。いま、包帯をしていないことに。

「!!!!」

声にならない叫びが出そうになり、口を両手で覆う。

しかし、狭い道を歩く人々は少女にはまるで気づかず傍を通り過ぎていく。

昂った気持ちと鼓動を再度落ち着けていくうちに、少女はおかしさを覚える。

何人も何人もすぐ傍を人が通り過ぎていく。

「私のこと、見えていない？」

そのとき、少女の正面から歩いてくる姿があった。

上は白、下は黒の佇まい、右手には手提げ鞆、顔は見知ったもの。

「！ア、アルトさん!？」

少女の声、だが青年はなにも変わらぬ様子のまま歩く。
聞こえていない？ そう思った少女へ近づいてくる青年。
どうするべきか迷っているうちに青年は眼前へ。

ぶつかる！ と思い両手で顔を覆う、がなにも起こらない。
数瞬して手の覆いの隙間から正面を伺うが誰もいない。
手をおろし振り返ってみれば、そこには後ろ姿を見せて歩く青年。

「どっなってるの……？」

状況が飲み込めない少女は、戸惑いながら青年の後ろ姿を追いだす。

暗闇にうすばんやりと浮かぶ幼いこどもの隣に青年は腰をおろして
いた。

すすり泣く声は止まず、暗闇にへと消えていくばかり。

上を向いたりとあらぬ方向へ顔を動かして青年は諦めた表情をして
ため息をひとつ。

声をかけようともしても答えず、手で触れようとして触れ得ず、
こどもの泣き声をどうすることもできないまま青年は困っていた。

「これ……なんなんだろうなあ」

見つめるのは暗闇、だと思っていた場所。

幼いこどもを認識した瞬間から、暗闇はうっすらと光を帯び、
場所の様相をうっすらと青年の視界に現していた。

下は角、上半分は半円状をした閉じられた窓とおもわしきところか
ら漏れる光。

光が暗闇に浮かび上がらせるのは幾つもの棚と植木鉢。
青年は泣いている藍色髪のこどもを見る。

「この子は、小さい頃のリラなのかな」

だとしたら、と心で続けて周囲を見る。

「ここは花屋の倉庫、なのか？」

声に出して言うものの、答えはない。

ふうー、小さなため息。

青年は自分の手を見る、そこにははっきりとした輪郭の手。
しかし、その手はこどもには触れることはできない。

「火の大精霊が見せた幻覚みただけど、どうしていま見せられて
るんだろう」

目線がとなりですすり泣くこどもへ向く。
相変わらずこどもは泣いたままだが、あることに気づく。

「包帯を……していない」

先を歩く青年の足は早かった。

途中で藍色髪の少女は何度も何度も小走りになりながら、青年に追
いつく。

高い壁を曲がり、橋を渡り、四角い物が動きを止めるまで立ち止ま
ったりしつつ、

少女は見慣れない景色へと視線をとばしていった。

何人も人がすれちがう、だが誰ひとりとして眼を合わせない。声すら掛け合うこともなく、ただ歩き遠ざかっていく姿が少女には不気味に映った。

時折、青年が懐からちいさな箱を取り出し、それに向かって話し出したかと思えば、箱にむかって指を動かしていった。

（いったい、なにをしてるのだろうか）

全てが違い、全てが奇妙に見え、全てが分からない。分からない、その思考が浮かんだときに気づく。ここは、もしかしたら奏者、青年が元いた世界なのではないかと。

よく見れば、青年とよく似た服装をしている男女が同じ道を歩いている。

段々、同じ服装の男女が増えていき、いつしか建物が見えて来た。白く高い高い建物、それは窓が何枚もあり、そこへ青年と似た服装の男女が進んでいく。

（なんだろう……なんの建物なんだろう）

不安と好奇心が僅かに沸く胸の内、眼前を歩く青年は隣を歩く男に声を掛けられる。

元気のある声に対して青年も勢い良く声を返す。ふざけあい、馬鹿にしあい、楽しそうにじゃれあいながら話す様子が映しだされる。

（アルトさん……あんなに楽しそうにしてる）

胸が苦しくなった。

(きつと、きつと……帰りたい、ですよね)

少女は、視線を落としていった。

すすり泣く藍色髪の子どもを凝視する青年。

こどもが膝と腕で隠している顔には包帯を巻いている様子はない。
青年の、喉が鳴る。

「リラの……リラが隠している眼が……」

不安と好奇心が強く心にもたげてくる。

しかし、こどもは泣くことを止めようとしない。

木が、こすれる、音が響く。

「!」

振り向いた先、光を背後にひとりの人物が立っていた。

開かれた扉からは外からの柔らかい光が倉庫へ広がる。

思わず手で顔を覆う青年は、しばらくして誰が立っているかに気づく。

「……エラールさん？」

そうつぶやいてみたものの、目の前の女性は短髪であった。
金色の短髪、顔つきは険しさを持っている。

女性はこどもの姿を倉庫奥に認めると、ゆっくりと歩み寄り、こども目の前で座り込む。

『リラ……どうした、こんなところでなに泣いてるんだい』

こどもは答えず、すすり泣く。

『また、いじめられたのかい』

泣き声が強くなる。

『泣いてちゃ何もわかんないよ』

女性はこどもの頭を撫でる。

『……おかあさん、どうして、どうしてわたし、みんなとちがうの？』

泣き声混じりの声が問う。

『どうしてなの。どうしてわたしだけこうなの。いやだ、わたしこんな眼、いやだ』

強い否定と、大きな震え。

『いつも、いつもなの。おまえの眼はきもちわるいっていわれるの。ねえおかあさん、どうしてわたしはこうなの！』

叫びに近い声を、女性は何も言わず頭を撫でて聞く。こどもの泣き声は止まらず、ただ響いていくばかり。

上は白、下は黒の服装をした男女は、白く高い高い建物へ入ったあと、

階段を登ってばらばらに道なりに分かれ、大きな部屋へと入った。青年の後を追っていた少女もひとつの大きな部屋へと入る。

そこには椅子と机が等間隔で並べてあり、青年は一番最後尾の左端、窓際の机へ向かい、椅子に座った。

少女は青年の後ろへ立ち、そのまま近くの窓をのぞく。

(うわあ……高い)

目の前には少女が経験したことのない高い視界。

遠くまで景色が映り、そこには四角く色とりどりの建物が見えた。

(アルトさんが住んでた世界ってこんな景色なんだ)

我知らず少女は胸前で手を結んでいた。

『きりーつ、礼。着席』

びくりと反応して眼を声のした方へ向ければ、黒い板の前に立つ中年がひとり。

『あーおはよう。今日は進路希望用紙の締め切りだからな—

まだ出してない人は放課後までに提出するように』

はーい、と気の抜けた返事が大きな部屋のあちこちからあがる。

なんのことだろうかと少女が思っている目の前、青年は机のなかか

ら一枚の用紙を取り出す。
名前だけが書かれた白い用紙を。

『連絡事項はそれだけ、じゃあ朝のショートホームルームは終わり』
『きりーつ、礼。着席』

中年は大きな部屋から出て行った。

椅子へと着席した青年、視線は机においた用紙、その顔は表情が曖昧だった。

後ろから覗き見るような姿勢で少女は思う。

どうしてなにも書いていないのだろうか、と。

『山羽！ おまえどうすんだよ将来さ！』

青年の右となり座っていた男が呼びかけた。

『んー……なんも考えてない』

『はあ？ なにそれおまえ、なんかやりたいことねえの？』

用紙を見ながら青年は小さく唸り、

『べつに……これといったものないなー』

『つまんねえやつだなー弁護士とか宇宙飛行士とか目指せよ』

『なんでそんなの目指さなきゃいけないんだよ。』

『そついうおまえはどうなんだって』

苦笑顔と問いかけた先、男は腕を天へと振りかぶって言う。

『おれか？ おれは最強のサラリーマンになる！』

『はあ？ ……ああ分かった。おまえ、最近あの漫画読んでたな』

単純な奴、と青年は呆れた様子。

『いいじゃねえか、かつこいいんだからよ！』

山羽はなんかないのかよ、こつ、かつこいいのとか憧れとか』

『かつこいいのとかなーあんまりないなーそういうの』

困ったような顔をして青年は笑う。

『だつてさーかつこいいとか思ってもさ、そうなれるとは限らないじゃん。』

将来だつてそう、いくら今こつなりたいつて思っても絶対そうなるなんて誰が言ったよ』

だからさ、と青年は言葉を区切る。

『それなら俺はべつになんにもなれなくていいやつて思うんだ』

悲痛な声で女性へと問うこどもの姿、青年は知らず知らずのうちに奥歯を噛んでいた。

拳をにぎり、胸の内には燻る思いを得て。

藍色髪のコどもは眼を両手抑えながら頭を左右に振る。

『きもちわるいなんていわれるこんな眼いららない！いらないいらないいらない！』

こどもの頭に手の平を置いたまま、金色の短髪女性は苦しそうな顔となる。

その顔を見て青年は思う、どうすればこの子を救えるのか、どうすればいいのか、と。
いまも同じ不安を抱えているかもしれない藍色髪の少女を、青年は思う。

『やだよ……もうやだよ……おかあさん、もう、やだよお……』

段々と小さく、消えていくこどもの泣き声。

女性はこどもを抱きしめ、つぶやくように言う。

『それなら、それならさ、リラ。その眼、なくしちゃおうか』

え、という声が青年とこども両方から生じる。

『リラがそんなにつらい思いしてるのに、気づいてやれなくて、いめんよ』

抱きしめる両手、僅かに力が、こもる。

『だから、嫌なことからは逃げていいし、見なくていい』

女性は両手をこどもから外し、近くの棚へと手を伸ばす。
手が持つてくるのは一巻きの包帯。

『リラ、手をおろしな』

いまだ泣き止まないこどもは、怯えた様子で手を眼から外す。
その様子を見て青年は迷ったのち視線を背後へと向けた。
包帯が立てる音とともに女性の声が響く。

『リラの眼をあたしはどろすることもしてやれない。

だからさ、この包帯で隠してやる』

『おかあさん……っ？』

『そんでさ、もう外に出て遊ばなくてもいい。嫌なこと言っちゃうらとは関わらなくていい』

『……うん、わかった……』

でもな、と女性が続けた。

『もしも、もしもいつかあんたが見せてもいい、見られてもいい、

そう思ったら』

『そうおもったら……っ？』

『……リラの、好きにするといいな』

こどもの眼には包帯が巻かれ、包帯はわずかに涙で湿っていた。

青年が視線をもどしたところで、女性はこどもを抱き上げて立つ。

『さて、と。それじゃあ下へ降りてご飯にしようじゃないか』

『うん……おかあさん、ごめんなさい』

『謝る必要なんかないよ。それに悲しいことはもうこれで終わりだ』

『や』

少女は視界が、髪飾りからの光に包まれた。

青年は視界が、腕飾りからの闇に包まれた。

耳には鳥がさえずる音が聞こえる。
肌には冷たい空気と日差しの暖かさを感じる。
手の平からはぬくもりが伝わってくる。

青年は自分の身体に感覚が戻ってくることを感じた。
少女もまた同じように感覚が戻るのを感じた。
互いに握った手が力を得て、動く。

そして、青年と少女は互いを見る。
青年は気づいていた、少女が包帯をしていないことを。
少女は気づいていた、青年が過去を知ったことを。

「アルトさん……おはようございます」
「おはよう、リラ」
「あの、アルトさん」
「うん、なにリラ」

黒髪の青年は視線を少女の顔から外さない。
藍色髪の少女は頷き、言う。

「私の眼、どう見えていますか」
一拍の間。

「綺麗な、花のように綺麗な眼だよ」
青年は答えた。

少女は金色と四色に象られた瞳の眼尻に涙をため、その言葉に頷い

た。

第二十七話 相對する意思

穏やかな朝日が小窓から室内をゆっくりと照らしていく。

時折、小さな鳥の姿をした影が光を遮り、あとには鳴き声をのこす。光が差す室内では、青年が弦の張られた楽器を手にとり、指で弾く。指の弾きに応じて青年の口が動き、小さくもはっきりとした声で歌が歌われる。

歌は火の旅における精地、センブリの里で歌われている民謡。

こどもにも歌いやすいよう簡単な単語と、簡単な音程で組まれた歌。しかして歌詞は土地の歴史に根付いたものであり、歌っているだけで土地を知るものである。

――始まりは火、燃えるもの、熱きもの、空を焦がす赤、黒を照らす熱

立ち上がるのは、大地であったものたち、硬きものたち、重くあるものたち

火は伝えた、教えた、与えた、ことばを、おもいを、いきかたを――

指で弾く音とともに歌は続けられていく。

――石であり、岩であり、大地であり、ひととなったもの
火にかんしゃ、火をうやまい、火とともに

燃えよ、栄えよ、生めよ、コンフォードとともに――

青年は、無言の、たったひとりの観客のために歌を続ける。

――燃えよ、血よ燃えよ、命よ燃えよ

ひとりで燃えるな、ふたりで燃える、みんなで燃える
おおきく、おおきく燃える、おもいものせて燃えるー

寝台に佇む少女は、包帯をしていない両目で青年を見ている。

ーわすれるな、わすれるな、わすれるな

火はともにある、命とともにある、我らとともにある
明るきときも、暗きときも、曇るときも、雨降るときもー

歌声が室内を満たす。

ーひとりでない、いつもいつも、そばにある

大地も、ひとも、火も、おなじ

ひとつとなつて、おおきくおおきく、燃えているー

歌は、静かに小さくなっていく音とともに、終わった。

藍色髪の少女は、胸前に結んでいた両手を握ったまま頷く。

弦を弾く手をとめ、楽器から手を離す黒髪の青年は照れた様子。

「あーうん、けっこう覚えてるなあ、最後まで歌えちゃった。

でも駄目だな、いろいろと音はずしてたし」

「いいえ、いいえ、そんなことないです」

少女は軽く顔を振って否定の意思を見せる。

「いい歌でした、ずっと、ずっと歌われてきた歌だから」

眼を伏せて、少女は胸に両手を当てて深く頷く。

青年は照れが抜けないまま、楽器を傍らに置き、少女へと向き直る。

「ははは、ありがとう。いまの民謡を習ったあとは、

カンブリの里長や里の人達と色々酒盛りしていて、

途中で意識とばされたり、エオリアが岩石人相手に腕相撲しかけたり、

セリアはセリアで絵札でお金を稼いだりと……」

言葉を何度も何度もつなげては、青年は火の旅における思い出を少女に語る。

少女は微笑のまま相槌をうったり、ときには質問を投げるなどして話を聞く。

腹の音が、鳴った。

青年の身振りが止まり、口も開いたまま止まる。

少女も何事かわからず、互いに動きが止まったまま。

腹の音が、もう一度鳴る。

互いのお腹から。

一拍の間を置いて、互いに小さく笑い声が漏れる。

青年は窓から見える青空へ眼をやり、

「もう朝になってたんだな……」

「はい、ずいぶんと話し込んでいましたから」

少女は言葉とともに立ち上がる。
その様子に慌てて青年も立ちあがり、言う。

「え、リラまだ座ってていいよ、身体きついんじゃない」

「いいえ、大丈夫です。なんだか身体が楽なんです」

「そうなんだ……そういえば、俺も身体が楽になつて……?」

疑問の語尾を置いたまま青年は身体のあちこちを触れる。

口元に手を当てて少女はおかしそうに、その様子を眺め言う。

「あまり覚えてはいないんですけど、身体が光に包まれて」

口にしながら少女は思い出す、朦朧とする意識のなか、薄く開いた
瞼から見えた光を。

「翠の光が眼に見えた、そう思ったとき身体が楽になったんです」

「翠の光……? もしかして」

言葉を言い終わらぬうちに青年は左の手首にある、腕輪を見つめる。
窓からの日差しを取り込んで腕輪はもの言わぬ反射光を青年に返す。
思い出されるのは火の精霊と対峙したときのこと、あのときも傷が
治っていた。

だが、自分だけでなく目の前の少女まで治したのはどういうことな
のか。

無言に思考を重ねて青年は腕輪を見つめる。

「どうしたんですか、アルトさん?」

「えっ? ああ、ごめん」

「いいえ、謝らないでください。けれど、なにかあったんですか?」

「いや、その……」

火の精霊と対峙したときの記憶。
そこに含まれるのは目元が虚ろに黒ずんでいた藍色髪の少女の姿。
しかし実際の少女の眼は虚ろではなく、金色の十字が走った四色の
瞳。

(あのと看見せられた光景は、一体なんだったんだ……?)

疑問と心配が混ざった表情でこちらを見る少女。

「ううん、なんでもないよ。それより朝ご飯食べようか」

一階に降りた二人の視界に入ったのは、大の字になって寝転がって
いる老人。

顔を淡く赤色に染めて、笑顔で眠っている様子だった。

「あちゃー」の声とともに顔に手を当てる青年、驚き顔で慌てる少
女。

「ごめん、リラ。俺ブツファさんを移動させるから、ご飯の用意お
願いしていい？」

「は、はい。でも、大神官様……どうしてここへ？」

その言葉に、家屋の奥から響く声。

「アル坊の付き添いでやってきたのさ」

「お母さん！……でも、それならセリアさんやエオリアさんは？」

台所近くの椅子に座り、杯を掲げる格好で金髪の女性がいた。

「あの二人のことならアル坊のほう知ってるだろうさ」

「アルトさん……？」

「……うん、セリアが熱で倒れちゃって、さ。エオリアはその看病」

「だ、だったらアルトさん、どうして、どうしてパストラに……」

「ブツファさんに聞いたんだ……リラが倒れたって」

「！」

青年の言葉を聞いた瞬間、少女は胸前で両手を握り、言う。

「ごめん、なさい……ごめんなさ、い……私の、ために」

「リラ……あやまらなくて、いいんだって。俺が無理言っただけだから」

「でも、だって、アルトさん！ 服だってそんなに汚れて！ とても苦しそうな顔をしていて！」

少女は思い出していく、昨夜現れた青年の姿を。

「……違つんだ、リラ。これは、リラのせいなんかじゃない。俺が、俺がさ」

青年は、歯切れ悪くも、眼前で涙をこぼす少女へ言葉を続けていく。

「俺が……ちゃんと向き合えてなかった、からなんだ」

老人を背負い二階へと階段を登っていく青年。

そこから少し離れた台所、藍色髪の少女と金髪の女性が並び立って料理をしている。

適当な形に野菜を切っていく女性、少女は火加減を見ながらかまどへ薪を追加していく。

女性はひとしきり野菜を切り終えたあと、顔を隣で動く少女へ向ける。

「リラ、まだ身体苦しいだろうから座ってていいんだよ」

「うっん、もう身体は平気なの」

その言葉に女性は眉をひそめ、言う。

「どういうことだい？」

「翠の光がね、治してくれたみたいなの」

「翠の光？ なんだいそれは」

「私もよくわからないけど、アルトさんは何か知ってたみたい」

「ふーん、アル坊がねえ……それよりもリラ、いいのかい包帯してなくて」

「……うん、もう、大丈夫」

途切れ途切れだが隣からは、強く言葉が返って来た。

「そうか……ならいいさ」

「うん、お母さん、ごめんね」

「なにをあやまるんだい？」

「いままで、お母さんに眼を見せれなくて」

「いいんだよ……あんたがそれで嫌な思いをしてたんだからさ」
「……」

「ふふん、まったくあんたはさつきから泣いてばかりだね」

女性は包丁を置いた左手を、隣に立つ背が低い頭へとのせる。

ゆっくりと、暖かみを分け与えるように優しく、手の平は動く。

抵抗することなく少女は手の平の動きを受け入れる。

「元気になってくれるだけでも嬉しいのに、今日は精霊様に感謝しなくちゃいけないね」

目尻にしわを寄せた笑みを浮かべて女性は笑った。

「ぐうつ……この人はなんでいつも酒くさいんだ……」

二階奥にある倉庫代わりの部屋。

部屋の扉を足で開いて、なかへと入った青年は、

いまだ薄ら笑いのまま寝ている老人を床へとゆっくりおろす。

「はあ……」

おろした老人の隣へと腰を下ろす。

薄ら笑いで眠る老人の顔、その顔を見ながら青年は記憶を掘り起す。

雨のなか一晚を過ごした廃村、出会った棘兎の夫婦、どうすることもできなかつた自分。

ずっとずっと遠くにしかなつた死と生。

「エオリアもセリアも……ずっと向き合って生きて来た、んだよな」

口のなかだけでつぶやく。

いや、と言葉が続く。

「俺が気づいてなかっただけで、きつとりラも……」

目線がふつと浮く、先に見えるのは芽が出たばかりの鉢植。

少女は言った、枯らしてしまつてごめんなさい、と。

その言葉には自分への謝罪だけでなく、枯らしてしまつた種への詫
びも含まれていた。

たつたひとつの種をそこまで思うことなど自分に出来るだろうか、
そう青年は自問する。

「リラは……リラには、種であっても、命として、ちゃんと見てる
んだな」

少女が見せた姿勢に、自分がどれだけ周囲の命を命として見ていな
かつたかを知る。

右拳が握り込まれる。

立ち上がり、青年は黙って部屋を出た。

黒髪の青年が一階へと階段をおりていけば、台所では食事の用意が
ととのいつつあった。

台所へと青年が近づいてくるのを見て金髪の女性は言う。

「アル坊、飲み物はなにを飲むんだい？ お酒ならたくさんあるよ」

「お母さん！ なに言ってるの！？」

「ははは……水でお願いします」

苦笑いしながらそう答え、青年は食事を置かれた長机の椅子へと座
る。

女性と藍色髪の少女ともに椅子へと座つた。

「それじゃあ、精霊の恵みに感謝して頂こうか」
「はい……いただきます」

青年は手の平を合わせ、瞼をとじて軽く頭を倒す。
その様子を女性と少女は不思議そうに見つめる。

「アルトさん……その動きはなんですか？」

ゆっくりとした動作で、手の平をはなし、頭をあげて、青年は眼を開く。

「元の世界でご飯を食べるときにいつもやってたんだ」

湯気のたつスープが入った杯をかかえるように両手で触れる。

「俺の母さんが言うには、食べる命に感謝を捧げる行為なんだって。こっちの世界に来てからは、さっきのエラールさんの言葉があったから、

やらないままでいたんだけど」

「それがどうしてまた急に？」

女性が尋ねる。

「なんていうか、ちょっと思いなおしたっていうか」

「何を……ですか？」

「その、命に」

気恥ずかしそうに頭をかきながら青年は、四色の瞳を向ける少女を見る。

「もっと、もっと真面目に命と向かい合わなきゃいけない、そう思ったんだ」

二階奥、倉庫代わりの部屋で眠っていたはずの老人はうつすらと眼を開く。

「手紙では……重病とあったりラ君が、元気になっていましたね」

窓にかけられた厚手の布から漏れる光を浴びながら老人は言葉を続ける。

「そして、アルト君も同じくあれだけ疲れていた顔が元気になっていました」

土の精霊術であってもあそこまで劇的な回復はできない。

しかも藍色髪の少女が患っていた病気は、いまのところ治る術はないと聞いた。

それがどちらも治っていた。

背中から感じるひんやりとした冷たさが火照った身体には快く感じつつ、

老人は疑問を浮かべ続ける。

「考えられるとすれば、奏者を守る精霊の加護」

脳裏に描き出されていくのは、奏者の伝承。

危機に陥った奏者は誰もが、無事な姿であった、と。

だが、連れ添った従者は誰もが、そのとき生きていなかった、ともある。

「一見すれば運が良かった、と思えるのですが」

若草色髪の子と橙髪の子が手紙に綴っていた内容は、その言葉を老人に否定させた。

腕輪から白き光を発して、およそ人とは思えぬ動きを見せ、そのとき周囲にいた人々は身体から力が抜けるのを感じた、そうあった。

「もしや、腕輪は他者の命を吸い取り、奏者へその命を与えている？」

だが、と胸のなかで老人は続けた。

「それならば、何故アルト君だけでなく、リラ君も元気になっていくのでしょうか」

腕輪が他人の命を吸い取るのならば、少女は元気になるところか、もっと危険な状態へとなっていなければいけない。分からないことが多すぎる、そう老人は思う。

「これは、神殿奥にある封書の中身を、確認しなければいけませんね」

風の図書館が燃えてから、大神官も記し始めた日々の記録。

歴代の大神官が記した書物は、神殿奥へと安置されており、大神官以外は見ることを許されていない。

再び眠気もちはじめた臉を静かにおろしながら、老人は疑問を胸にしまいこんだ。

第二十八話 吐き出す想い

山間から天へと登り始める太陽。

しかし、その位置は低く、雲海を下から照らす。

流れる雲の群れはどれもが厚く、空は白一色のまま流れていく。

細見であった鳥は、その衣を寒さに耐えるものへと替え、ふっくらした姿で高空をゆく。

数羽の鳥が朝の知らせる声を響き渡らせる下、白き神殿、その入口に人。

若草色髪をした男。背に赤い大剣をにない、両腕を組んで遠方をじっと見つめている。

ときおり通りすぎる人々と挨拶を交わしつつも目線は揺らがない。

そこが自分の居場所、そう立てられた石像のごとく、男は立つ。

しばらくして男の後ろ、神殿奥から石の床を歩く、軽い足音が来る。

足音は男の右隣で止まり、両手で抱えていた布包みを解いて中身を外に出す。

「はい、あさごはーん」

橙髪の少女は布包みから取り出した丸いパンを男へと差し出す。

男は黙って右手で受け取り、パンの半分まで大口を開いてかぶりつく。

その様子を見て少女は微笑、見る間に男はパンを口内へとおさめ飲み込む。

「おなかすいてるのに無理しちゃってー」

「……………」

「だいじょーぶだつてーきつとりラもアルトも元気にしてるよー」
「……………」

もの言わぬ男、少女は小さく息を吐いて座り込むが、思わぬ石床の冷たさに腰が即座にあがる。

「ひゃああ。つ、つめたーい！」

男が口を半開きにして呆れた眼をしていた。

「な、なんでそこでそんな顔するかなあ！」

「……………空気がこれだけ冷たいのに、床も冷たいとなぜわからない」

「やっと喋ったとおもったら、いつもどおりでボクはらたってきた」

「腹を立てるのはかまわんが、身体はもういいのか」

呆れた口調から敵しさを含んだ声色。

その声を聞いて少女は間を置いてちいさく答えた。

「……………うん、もうへーきだよ。ごめんね、ボクのせいで」

「言うな、こうなったのは元々自分の不甲斐なさにある」

「そんなことない、って言っても聞かないのがエオリアだもんね」

「……………」

まだパンがいくつか入っている布包みを床に置き、少女は再度床へと腰を下ろす。

視線を男が向けていた方向へと合わせながら。

「ねえ、エオリア」

「なんだ、セリア」

「ボクが巫女、貴方が騎士。そうになったのが決まったとき、嬉しか

ったよね」

「ああ」

柔らかな返事、少女は思わず笑みを得て言葉を続ける。

「アルトが呼ばれる一年前だから、もう二年ぐらいも前だねー」

「まだそれだけしか経っていないのか」

「あ、やっぱりエオリアもずいぶん前に感じてるんだ？」

「セリアもか？」

互いに眼があい、少女は頷く。

「なんだかね、アルトが召喚されるまではそれこそ、

んー毎日毎日、うん、ずっと走ってる感じだった」

少女は立ち上がり、晴れ間がのぞきだした空を見上げる。

「けれど、ね。アルトと出会ってからのはなにかが違うの」

両手を伸ばし、天を掴むように手の平を広げた。

「駆け足だったのが、歩くような感じになって、前しか見えてなかったのが、

知らない間に右も左も見えるようになった。

耳に入ってくる声も近くから、ずっともっと遠くから聞こえるようになった」

男は黙って聞く。

「考えることが多くなったんだ、ボク」

「らしくないな」

そうだね、と少女は声に答える。

「美味しいもの食べて、神殿で働いて、皆と一緒にこのまま……過
ごすだけだと思ってた」

言葉はゆっくりと、ゆっくりと吐き出すように。

「でも、アルトが現れて、リラが変わろうとしてて、エオリアが悩
んでいて、ボク」

天に広げた手が握り込まれる。

「このままでいいのかな、なんてずっと考えてる」
「そうか」

短く、しかし力強い声。

その声を少女は頼もしく思いながら両腕をおろす。

「アルトはリラを、リラはアルトを、おたがいに、おたがいを支え
あってる」

眼に浮かぶのは、藍色髪の少女に会いに行きたいと大量の手紙を持
って叫ぶ黒髪の青年。

青年のあんな声を聞いたのは初めてだった。

まっすぐで、ただただまっすぐで、けれどもろい声。

触れたら、壊れてしまいそうな、硝子細工にも似た姿。

「ねえエオリア」

少女は男へ眼を向ける。

「貴方は、約束を叶えてくれた、奏者の騎士となる約束を」

「約束、だったからな」

「もしかしたら約束叶えられないのかな、て思ったこと一度じゃないよ？」

「ひどい奴だな、本人が努力しているのにそう思うとは」

苦笑を浮かべた男は組んでいた腕を解く。

「何度も、何度も心が折れそうになった。だが、そのたび拳を握った」

「どっして」

疑問符はない、それは返答を分かっているながら聞く確認。

「諦める理由が、なかったからな」

「……やっぱりエオリアはボクが知ってるエオリアのままだね」

「まるで成長していないような言い方だな」

「ええ〜そんなことないよーだっつてずっと見てきたから」

ふざけた口調は、真剣に。

「貴方の頑張り、それを見ていたから、ボクも巫女になれた」

少女は優しく男を抱きしめる。

「ボクね、旅をしていて決めたの」

男は言葉を待つ。

「これからの旅も、旅が終わったそのあとも、ボクは貴方の助けになりたいって」

「セリア……」

少女は眼を閉じて、男の鼓動を聞く。

ずっと、ずっとそばにいた、その鼓動を聞くだけで安心できる。

男は少女を抱きしめかえし、ありがとう、そう口にする。

うん、と眼を閉じたまま答えた少女は男から離れ、

床に置かれていた布包みを拾い上げる。

「よっし！　じゃあボク、なかに戻るから！」

「ああ、仕事さぼるなよ」

「さーばーりーまーせーんーよーっ」

布包みを抱きしめ、少女は笑顔。

すっかり険のとれた顔となった男は思う。

目の前にいる少女の笑みでどれだけ自分は助けられたのだろう、と。

そして、少女は言ったこれからも自分の助けになりたい、と。

両方を強く胸に秘め、男は右手を力強く握り込んだ。

耳に聞こえる音。

若草色髪の子は意識を音にとられ、続いて視線を音の方角へと向けた。

橙髪の子も気づいたのか男と同じ方向へ視線が飛ぶ。

多くの馬が地面を駆ける音。

音ともに現れたのは、若草色髪の子と同じ形をした鎧を着込んだ集

団。

「騎士団が風の討伐から帰還したのか」

神殿騎士の鎧を着込んだ集団は馬に乗ったまま、神殿前へとやってくる。

その間に橙髪の少女は神殿内へと駆け足で入っていき、若草色髪の男は神殿入口から地面へと降りていく。

集団の先頭にいるのは、錆色のもみあげとあご髭がつながり獅子のような風貌をした騎士。

彫りの深い顔からは表情を知るの難しく、無表情に見えなくもない。

若草色髪の男は内心にため息を吐く。

(まさか、このようなときに帰還するとは……)

そのまま歩を進めて、馬を止めながら背後の集団にとまるよう指示する、

獅子顔の騎士前へと男は近づき大声を出した。

「ロツソ団長！ 風の討伐からの帰還、ご無事なようで何よりです！」

「……ロツソではない、イロニコ団長と呼べと言ってるだろ」

男の声に獅子顔の人物は苦い声で答える。

「まあいい、ドロローソ・イロニコ率いる神殿騎士団、風の討伐よ

りただいま帰還した。

帰還したことを大神官様にお伝えして……？　おい、なぜ貴様が
いるのだ？」

「……」

馬から降りた獅子顔の騎士は、若草色髪の男の前へと近寄る。

「エオリア・パール。答えよ、なぜ奏者の騎士である貴様がここに
いるのか！」

「……」

「答えよ、と言っているだろうが！」

騎士は右手をふりかぶり、答えない男へ振り下ろそうとする。
それでも男は答えず、睨むように騎士を見ているのみ。

「相も変わらず腹の立つ眼をしよって……!!」

やむえず、右手をふりおろそうとして、その手が止められた。

「あーあーやめとけやめとけ、帰ったばっかでなにやってん」

「その手をはなせラルゴ」

「命令でもお願いでも・い・や」

舌打ちして獅子顔の騎士は、ラルゴと呼ばれた、
先端が黒くなっている赤い髭をたずさえた龍翼人の手をふりほどく。

「あんな、みんな疲れてさっさと休みたいのに、

団長がここでうだうだしてたらぶっ倒れるがな」

髭をさわりながら悪びれなく龍翼人は背後を指さす。

馬から降りて命令を待っている騎士たちは、誰もが疲れた顔をしている。

「鍛え方が足りただけだろうが」

「あんと一緒にしたらあかん、というか平気なのはあんだだけや」

「ふんっ……まあいい。皆に告げる、これより休息を与える！」

だが、水の討伐出発まで鍛錬を怠るな！以上、解散！」

騎士は大声を出したあと、男に一瞥くれてから神殿へと向かう。

背後にた騎士たちは、大声に返答する声は多いものの、幾らかの声にやる気は感じられず、

ぼやき声とともに彼らは馬を引いて神殿横の馬房へ向かう。

「あー……つかれたーつかさつさと解散してくれよ」

「ラルゴ副団長が声かけなかったら立ちっぱなしだったな」

「うげ、団長自分の馬置いたままじゃん……あ、ベサンテ副団長」

ベサンテ副団長と呼ばれた額に二重の四角記号が彫られた岩石人は、獅子顔の騎士が置き去りにした馬の頭を撫でてやり、代わりに馬房へ連れていく。

その顔は騎士達以上に疲れを濃厚に現していた。

一連のやりとりを黙って見ていた若草色髪の男は、赤い髭を触っている龍翼人に向き直る。

「親父殿。お帰りなさいませ」

「ようよう、帰ったぞ我が息子よ。ったくなにやってるんだ？」

言葉とは裏腹に龍翼人の口調は柔らかい。

「奏者様とともにいるはずのお前さんが神殿にいる、それなら奏者様も神殿じゃないのかえ？」

「アルトは……奏者様はいま神殿にはいないのです」

「あ……なんぞあれか、めんどろな事になってそうじゃのー」

それでか、ロツソになんも言わんと突っ立ってたのは」

「はい、原因は自分の未熟にあります」

「そういつってことは、殺しからみか。ふっきれんのお前さんも、だからこそ見込みがあるがな」

赤髭の龍翼人はカツカツカと笑い、馬を連れて歩き出す。

「あとでジュストとともに話を聞きに行く、だから飯と酒の用意たのむなあ」

神殿内の食堂では帰還した騎士たちと、それを迎える人々で賑わっていた。

互いの無事を喜びあうもの、討伐の旅での思い出を語るものとそれを聞くもの、

久方ぶりの酒をのみ疲れを労うもの、人族だけでなく龍翼人や岩石人なども混ざっている。

人々が騒ぐ一角、横長い石に腰掛け、石の長机に置かれた料理をつまみながら酒を飲むのは、

若草色髪の男に赤髭の龍翼人、そして大きな杯を傾けて顔を赤らめる額に二重四角彫りがある岩石人。

岩石人は杯を強く長机に置いて、酒臭い吐息とともに言う。

「あーもう、皆の慰労をするのになにが自分だけ『騒がしいのは嫌

「未熟でええじゃないか、と言つても今のお前さんでは納得できないわな」

からかうような口調とともに笑う。

「未熟でもお前さんはちゃんと奏者様を守った」

「……守り、きれてはいません」

「ばかたれ、お前さんの役目は守ること、それ以外は考えんでいい」
きつい口調で言ったあと、龍翼人は笑みを浮かべる。

「とワシらの団長なら言うじやろつな」

「間違いなく言われます」

互いに笑う。

「なに、いまさら奏者の騎士を変えたりすることもあるまい。

旅が終わるまでは奏者様のそばにいてやればいい」

ただな、と言葉を付け加える。

「お前さんが守るのは、奏者様だけじゃない。わかっとなるな？」

「はい、分かっています」

眼を細め、男の眼を覗き込むように龍翼人は見る。

「……しばらく会わんうちに、なにか得たみたいじゃの。

ええのうええのう、これでワシも心おきなく引退できるて」

「いやそれは駄目でしょう親父殿」

「いやいや、お前さんが『賛美歌の道』終えたらもうワシ引退する

から、そしたらエオリア、

お前さんが副団長になればいいんよ」

「自分が副団長にはまだ早いですから、それに親父殿を必要とする方はいっぱいいますから」

「はあ……さつさと楽したいんじやがのーそっいや嬢ちゃんはどうした？」

赤髭は長い首を左右に降って食堂内を見渡す。

「セリアなら……仕事をさぼってなければ、調理をヒルダさんたちとしているかと」

「カツカツカ！ あの嬢ちゃんも変わらんのだう！」

「ははは……」

「ときに我が息子よ」

龍翼人は声を小さく、言葉を放つ。

「風の討伐には思った以上に時間が食われた」

「？ なにかあったのですか？」

「あつたもあつた、凶獣の数がな、増えて来てるのよ」

酒の飲み、言葉が続けられる。

「気づいているのはワシとジュストだけ、いや団員の何人ももうっすら気づいとるかもしれん」

「団長に報告は？」

赤髭は片手で杯をもち、空いた手を左右に降って否定を示す。

「あの石頭に言ったところで聞きやせん。」

それにな下手に言うと言言しかねんし、いまは不安を増やしたくないからの」

「……実は、自分も旅をしていて同じことを思いました」

「やはりか」

「はい、奏者が無事旅ができるようにと事前に騎士団が、

先に旅路の凶獣を退治しているはずなのに、襲われる回数が増えています。

しかも、火の旅で立ち寄ったディオソ」

男は両手に杯を握りしめる。

「いままでに現れたことがない、凶暴化した砂蛸が、アルトを、狙っていました」

言葉をひとつひとつ確認するように区切って、男は言う。

ふむ、と頷き龍翼人は口元に杯を当てる。

「同じだのう……先代のときも凶獣が増えておった」

「！ 親父殿、やはりそれは！」

「シィ、声がでかい」

指を立てて、赤髭の龍翼人は男に促す。

隣では両手両足を広げて床でいびきを立てる岩石人。

「こいつのいびきでどうせ聞こえんか、お前さんはどう思う？」

「ちゃんとした証拠があるわけありません、ですが何かがおかしく思っています」

「おそらくお前さんの勘は間違っておらん。きっと大神官様も感づいておられるだろう」

「……」

男は、胸のなかに得体の知れない不安が沸くのを止められない。わき上がる不安を止められないまま、口を開いた。

「親父殿…… ippitai『賛美歌の旅』とはなんなのですか」

「たべたいたべたいたべたい、でもがまんがまんがまんがまん」

右へ左へ手を動かしながら橙髪の少女は言葉を垂れ流す。

手元ではいくつもの野菜や果物が包丁できざまれ、そばに置かれた食器へと置かれていく。

少女と同じように肉をさばいたり、味付けのたれを作ったり、酒瓶を用意する人々が、

食堂の厨房内を行ったり来たりして熱気をかもしだしている。

「肉の皿追加しておくれー！ 焦げ肉でもいいから！」

「酒、酒足りてないっ！ もうお酢でもだしたろうか！」

「ちょ、ちよっとそのたれ、果物用じゃないって！」

動き回る人々の声は忙しそうだが、楽しくもある。

だれがも騎士団の帰還を喜んでいる。

それは神殿で働くものたちにとって、騎士団は家族であるから、そう少女は思う。

災害や凶獣によって家や親を失うこともたちは絶えることがない。

身寄りが無いこともたちを引き取り、自立できるまで育てることも神殿が持つ役割。

自分も彼も例外ではなかった、少女は手を動かしながら思い出す。

（物心気づいたときには、ボクは神殿にいた）

周りには橙髪の少女と同じようなごどもたちがたくさんいた。

今の自分がごどもたちに行っているように、大樹の根元で勉強をし、神殿の手伝いをする日々。

唯一、当時から禿げていたブツファ・オペラを父と呼び過ごしていた。

しかし、幼いながらも自分は気づいてしまった。

老人は自分の父親ではないことに。

ブツファを父と呼び慕うのは自分以外にもたくさんいたから。

（でも、オペラの名をくれていたのはボクだけだった）

そのことが意味するのを知らず、七歳にも満たない自分は泣いていた。

（そのとき、だったんだっけ）

ちらりと厨房から食堂をのぞく、口に果物をひときれ入れながら。

視線の先では赤髭の龍翼人と若草色髪の男が談笑しながら呑んでいるところだった。

となり大きくいびきをたててる岩石人を寝かしながら。

口元に笑みを浮かべて少女はもとの位置へと戻る。

（ラルゴおじさんに連れられてエオリアが神殿に来たんだよね）

ひとり他のごどもから離れ、大樹のそばでいじけていたときだ。

いきなり空から現れた大きな影におどろき、空を見上げたとき龍翼人に抱かれた少年と眼があった。

（いま思えば、すっごいやんちゃな顔してたっけー）

ふふつと笑いながらも手元を止めずに少女は思い出ししていく。

地面へとおりた少年は、泣きそうな顔をしていた。

それが気になって話しかけたら、言われた。

「とっさんかつさん、たおれてうごかなくなつた」

それでも少年は泣かなかつた。泣くことなく堪えていた。

隣にたつ龍翼人は「えらいえらい、おとこのこやな」と少年の頭をなでていた。

のちに赤い髭をもつた龍翼人はフレッシー・ビレ・ラルゴという名前であることを知る。

（里帰りから戻ってくる途中で拾った、それ以外教えてくれないんだよねラルゴおじさん）

その日から彼は自分ともあつた。

やんちゃな顔、その第一印象にたがわず彼はやんちゃであつた。

毎日のように義父となつた龍翼人とともに馬鹿騒ぎをおこし、

そのたびに他の人々に叱られてもへこたれない姿は、見ていて楽しかつた。

（そういえば、気づいたらお父さんと話すようになってたなー）

喉が乾いたので手近な杯を取り、呑む。酒だつた。

（見てるだけじゃなくて一緒にあってやんちゃしてたからかな）

神殿の入口横にひそみ、出て来た人の上から水をかける。そんな幼稚なことをやっていたら大神官の父に叱られた。

「僕の娘であるなら、人に迷惑をかけてはいけません」

言われたとき、どんな気持ちだったかは覚えていない。ただ、言葉を言うときの父は、とても優しくかった。

（ああ、そうだ。それからだ、口調を真似しはじめたの）

次の日からは自分のことをボクと言うようになった。

それでも相変わらずやんちゃして過ごすなか、自分と彼はひとつの約束をした。

（寝る前に聞かされた奏者の伝承、その奏者がボクたちの代で現れる）

それを知ったとき、叶えたいことができた。

奏者とともに大地を旅してみたいと、彼も同じだった。

だから互いに約束したのだ、奏者の巫女、奏者の騎士、それらに必ず成ると。

（やんちゃばかりしてた悪がきが急に真面目になった、っていわれたなあ）

自分は弓と歌と水術、彼は剣と横笛と火術、それぞれの勉強と訓練をこなす日々。

ときには神殿騎士団とともに精地へと討伐巡行もした。

たくさんの方があつた、たくさんが出来事を経た。嬉しいこと以上につらいことの方が多かったと思う。

それでも前を向いていられたのは、彼の存在が大きかった。

（あの馬鹿、ひとりで抱えるくせして我慢強いんだもん）

奏者召喚の儀式、その一年前、巫女と騎士選定の試練にて、自分と彼は残った。

自分が巫女に成れた以上に、彼が騎士と成ったことが嬉しかった。これで奏者と旅をするのが叶う、と。

（でも、あの子のボクはそこまでしか考えていなくて）

旅が終わったとき、どうするかまでは考えてはいなかった。

今は違う、そう思いながら少女は小さく頭を振る。

だれかのためである自分であろう、そう考えるようになった。

（ずっとずっとリラのこと、二人で心配してたもんね。

でもそれもアルトのおかげで、大丈夫だと思えるようになった）

考えた、誰のため、何のために自分は力を使いたいのか。

答えは自然と現れていた。

（エオリアの助けになりたい、エオリアのそばにいたい）

そう胸のうちで言葉にするだけで、暖かい気持ちか沸いていた。

赤髭をさわりながら龍翼人は眉根を詰める。

「……なんともいえんなあ、大地の伝承であり、百年毎の慣例でもあるとしか」

「ですが、なんのために賛美歌を捧げる必要があるのですか。」

もうひとつは賛美歌を集めるのに、どうして奏者でなければいけないのか。

わからないことが多過ぎます」

「そう急くな急くな、お前さんが言いたいことはわかる、わかるが、な」

ワシにだってわからないことの方が多い、そう内心に思い杯を傾けた。

対面に座っている男は項垂れるようにして杯の水面を見つめる。

「親父殿……自分は今代の奏者を護る騎士として、旅に同行しました。

ずっと間近で奏者の姿を見てもいました。そして思ったことがあります」

若草色髪の方は、言うか言うまいか悩んだ末に、顔を起こして重く口を開いた。

「奏者は、人間ではないのでは、と思うのです」

第二十八話 吐き出す想い（後書き）

今後は二週間ごとに更新していく予定です。

第二十九話 新たな風吹く

騎士団が神殿へと帰還してから三日後の朝。

早起きした橙髪の少女は、日課としている声出しをしながら、神殿の周囲を散歩。

冷え込み始めた空気に肌を震わせながら、声出しを終え、近くの石に座って歌う。

高く、細く、そして遠くへと届けるように歌う声。

小鳥がさえずるように歌は始まり、座った石からぶら下げた脚でリズムをとる。

鳥が鳴くように、時には短く、時には長く歌い、少女は声を出す。

歌っているうちに弱かった日差しは、徐々に高さをあげていき、暖かさを増す。

両腕を高く伸ばして少女は歌い続ける途中、なにかに気づく。はっとした顔で少女は神殿正面へ顔を向ける。

向けた先から聞こえるのは数頭の馬が出す土を蹴る蹄の音。

少女の表情が一気に明るくなり、座っていた石を蹴って少女は走り出した。

砂利をかきあげ、足下をさえぎろうとした小動物を跳び越え、歌うのも止めて少女は息を切らしながら走る。

そして、神殿正面にたどり着き、馬の上で手を振る老人と青年を見て、

「おかえりなさい！」

そう叫んだ。

黒髪の青年と老人は馬から降り、橙髪の少女へ声を掛ける。

「ただいまセリア」

「いま帰りましたよ」

「もーおかえりおかえりー二人とも」

息を整えながら少女は声に応え、そのまま二人の背後を見て言う。

「後ろの荷馬車にいるのはエラおばさんと……え、もしかして？
リラ？」

青年たちの馬の後ろには草花を積んだ荷馬車。

荷馬車の台座には金髪の女性と、眼を開いた藍色髪の少女がおり、頭に灰色の布をかぶった、藍色髪の少女は恥ずかしそうに頷く。

「は、はい。お久しぶりです、セリアさん」

「うん……リラ、よかった。包帯、はずせるようになったんだ」

「！はい……」

柔らかい笑顔で橙髪の少女は、藍色髪の少女を見る。

「挨拶はあとにしてセリア、あんたも花おろすの手伝ってくれないかい？」

「えー早起きしてあさごはんもまだなのにー」

「身体動かしたあとの飯は美味いって言うじゃないか」

「たしかにそうだけどさー」

愚痴る少女の前と後ろで小さな笑いが起こる。

「あ、リラとアルトなにわらってるのー」

「ふふ、ごめんなさいセリアさん」

「なんだか久しぶりにセリアの愚痴聞いたな、と思って」

「二人ともひっどーい!」

言葉とともに笑いが起こり、ひとしきり笑ったところで老人が口を開く。

「さて、それでは僕は神殿に帰って来たことを報告に行きます。

アルト君はそのままエラルさんのお手伝いをセリアとともにしてあげて下さい」

「わかりましたブツファさん」

そのやりとりに橙髪の少女は、あっとなり言葉を挟む。

「そうだお父さん、いま騎士団のひとたちも帰ってきてるの」

「そうでしたか、どうりで蹄の跡がたくさん残っているとは思ってましたが」

ふうむ、と悩んだ顔を見せた老人は、

「これは色々と説明をする相手が増えましたね……」

少しばかり遠くを見るような眼で言葉をつぶやいた。

荷馬車から草花を降ろしながら橙髪の少女は、藍色髪の少女に尋ねた。

「そういえばリラ、エラおばさんの手紙では病気だったって聞いたけど」

「はい、ちょっと無理をしてしまったせいで倒れてしまいました」

「えー、む、無理したってなにをしたの？」

「それは……」

言葉を濁すように、植木鉢を手に持った藍色髪の少女は、反対の位置から草花を降ろしている青年を見る。荷物を降ろしていた青年は少女の目線に気づき声を出した。

「ん？ どうしたのリラ？」

「あ、い、いいえ」

「そっか、あーなにか重いのがあったら代わりに持つからさ、なんでも言って」

「はい、いまは大丈夫です」

お互いに頷きを返して青年との会話は終わる。

ふう、と少女が息をついた横で橙髪の少女は笑みで言う。

「うんうん、そうだよねー」

「なにが、ですか？」

「だってリラがさ、無理することってひとつしかないなあとおもって」

「……」

「アルトからもらった種、咲かせようと頑張ったんだよ」

「はい」

地面に置こうとした手を止め、藍色髪の少女は、声を落とす。

「でも、咲かせませんでした」

俯いた視線となった藍色髪の少女を見て、

そつと、橙髪の少女は隣で植木鉢を抱えていた少女の頭に手を置く。

「いいいいい」

「セリアさん……」

「いーのいーの、だってだってさ、リラは枯らそうとしたわけじゃないでしょ」

「はい。だけどー」

「だから、だよ。一生懸命、育てようとした、だけでもいいじゃない。い。」

アルトは咲かなかったからといって怒る人じゃないでしょ？」

「……はい」

布をかぶった少女が頷くのを笑みで見届けた橙髪の少女は、ひとときわ大きい草花の包みを両手でかかえ持ち、足を神殿へと向けた。

「よおっし！ いろいろとお話するのはご飯たべながらにでもしよう！

エラおばさん、これだけ運んだらリラとご飯行ってもいい？」

「ああ、構わないよ。残りはアル坊がいるからねえ」

「げっ、おいセリア、俺だって朝飯まだなんだぞ」

「あーあーなにもきこえないーごはんがーボクをよんでるー」

「ふふっ、ほんと、セリアさん相変わらずですね」

くるくると回転しながら橙髪の少女は両手で抱えた袋を持って、藍色髪の少女とともに神殿へと歩いていった。

青年は金髪の女性とともに積まれた布袋を荷台から地面へと置き、いくつか置いたところで一息。

「エラールさん、地面に置いた袋はどこまで持っていけばいいですか？」

「そうだねえ、あとで神殿の人達にも手伝ってもらうから、今はそこに置いていいよ」

わかりました、と答えて青年は再び別の布袋をおろしだす。

隣で同じように袋をおろしながら金髪の女性は口を開く。

「あんたもご飯食べたかったら行ってもいいんだよ？」

「ははっ、セリアほど餓えてるわけじゃないから」

苦笑しつつ青年は言葉を続ける。

「それに運ぶのを手伝った荷物だし、ちゃんと最後まで手伝いたいですし」

「ほーっ、いつちよまえに責任という奴を覚えてるじゃないか」

「……そういうの、自覚するようになったのは最近ですけどね」

「いいさいいさ、自覚できるようになれば、自覚してない頃よりましだろっせ」

でもさ、と続く。

「自覚したからといって、そこで止まったら意味ないからねえ」

「はい」

「返事だけは誰でも良くできる。あとは行動に見せることさ」

「わかってます。俺は、俺の役目をしっかり果たします」

「ふふん、言うようになってきたじゃないか。これはいい加減坊や呼ばわりも終わりがねえ」

「それは最初から止めてくださいって頼んでるじゃないですか」

「じゃあ止めないでおこうかね」

勘弁してくださいよ、と青年が苦笑する。

「それよりも、リラのことなんです」

「……あなたは余計な心配しなくていいさ」

「心配、させてください。俺のせいでもあるんですから」

青年は荷物をおろす手をとめ、隣に立つ女性を見る。

「リラが急に元気になってから、ブツファさんから色々話を聞きました」

「あの人も余計なことを言うもんだねえ」

「いえ、俺から聞いたんです」

冷たい空気がときおり吹くことにも微動だにせず、青年は表情を固くする。

「リラの病気はいまのところ治す方法がない、それなのにどうして治ったのか」

青年は左手首にはめられている腕輪を触り、言葉を続けた。

「一緒にいた俺には分かるんです、きっとこの精霊の腕輪が関係し

てるんだと」

大精霊からの歌を収める器、そう聞いていた腕輪には自身には知らないなにかがあると。

「俺が駆けつけたあの夜、はっきり覚えてるわけじゃないけれど、光がリラを包んでいくのが見えたんです」

言葉とともに視線が右腕の腕飾りへ向く。

「ひとつは翠の光、それは地の大精霊が俺にくれた癒しの光、だそうです」

「ならその光でリラは治った、ということじゃないかい？」

青年はかぶりを振る。

「地の精霊術には病魔を治す力はない、そうブツファさんからは聞きました。」

治せるのはせいぜい身体の傷だけだと」

それに、

「俺があのと看見た光はもうひとつ、白い光が、この腕輪から出てリラを包んだんです」

「……その白い光は、なんなのさ」

「わかりません。ブツファさんも知らなかったみたいです」

「じゃあ、なんだい。得体の知れない光でリラはいま元気になってるって言いたいのかい」

その言葉に青年はただ黙ることしかできない。

女性は荷物をおろす手をとめ、小さくため息を吐く。

「なあ、アル坊。あんたさ、人間がなんで生きてるか、わかるかい」
突然の問いに青年は、戸惑いの表情。

「え、いや、そんなのわかりませんけど」
「そうさ、あたしもわからないさ。じゃあさ、どうして腹がへるんだろうね」

「それは食べたものを消化してるから……」
「だねえ、ならなんであたしらは食べないといけないんだい？」
「それは……生きるためです」
「だったらさ、どうしてそんな廻り回った形になってるんだろうねえ」

言い詰まる青年を見て、女性はふっと笑う。

「アル坊、そんなもんなんだよ、あたしらが分かることは。生きてる自分のことだつて満足にわからないもんなのさ。だからなんだ、よくわからないことがあつたとしてもさ、いいんだよ」

女性は言う。

「あの子が元気でいてくれるなら、なんでもいいのさ」
「……」

不意に思い出される母親の顔に、青年は懐かしさと寂しさを得る。自分の母親もこんな顔でいたのだろうか、との想いを付けて。目の前にいる金髪の女性は、普段見せる気丈な顔ではない、優しさ

だけの笑みを見せていた。

石造りの床を歩くのは、橙と藍色の少女。

並んで歩く音が立ち止まったのは、神殿内に設けられた食堂、その出入口。

橙髪の少女は、むっと眉根を詰め、足早になかへと入っていき、布をかぶった少女はその様子に戸惑いながら着いていく。

再度、足を止めた橙髪の少女は、大口を開いて叫ぶ。

「おきつろおー!!!」

「ぬっがああああああああああああああああ！」

「どつらっさああああああああああああい！」

瞬間、椅子代わりの長石に倒れ込んでいた、

若草色の男と赤髭の龍翼人は勢いよく上半身を起こす。

と、同時に男と龍翼人はおたがいに頭を抱えて頂垂れる。

「あ、あががが、あたま、あたがあああああああ」

「んんんんんん、あかん、あかんなあ、これはあかんんん」

「もーっ、ひとが朝からうごいてるってのにいつまでねてるのー」

呆れた表情を浮かべ、橙髪の少女は近くの長石に布袋をおろす。

「あんなあお嬢ちゃん、ワシは起こすときはこう、

あまーくあまーく起こされるのが希望なんだがなあ」

「親父殿、それをセリアに求めるのはあまりにも酷です」

「ああー……そうか、そうやったなあ」

「そこ遠い眼してなにわかりあってるのかなー!？」

「まあまあセリアの嬢ちゃん、落ち着きなあって……うん?」

龍翼人は怒り顔となっている少女の後ろにいる人物に気づく。

「そっちの……お嬢ちゃんは?」

「! リラ! リラなのか!？」

思わず立ち上がりかけた姿勢となった男を制するように、灰色の布をかぶった少女は一步前である。

「おひさしぶりです、エオリアさん、フレッシー様」

「リラ……おまえ包帯を……」

「おお、おお! そうか、たしかエラんとこの嬢ちゃんじゃないか! 綺麗になったのーそれにだ」

一度言葉を切り、赤髭の龍翼人は眼を笑みにすぼめる。

「うん、そうだな。まっすぐな眼になったなあ」

「! ……はいっ! ありがとうございます」

「うんうん、いい子だのーだれかさんと違ってなー」

「うーるーさーい。それよりラルゴおじさんとエオリア、朝ご飯いるー?」

男が答えようとする前に龍翼人は立ち上がる。

「いーんや、ワシはもっかい部屋で寝直すとするよ」

「親父殿……せめて飲んだ杯と瓶の片付けぐらいしてください」

「我が息子よ、親の尻拭いは子の仕事という言うだろう」

「言いません」

きっぱりと言い放つ男に、わざとらしく悲しむそぶりを見せる龍翼人。

「かあゝひどい息子もいたもんだ」

「親父殿ほどひどい父親もいないと思いますが」

「そんなことあないだろうよ、嬢ちゃんたちもそう思う……ってあらっ」

見れば傍にいた二人の少女はいない。

どこに行ったかのかと近くをぐるりと見た先、厨房へと歩いていく二人が映る。

「無視して行くとはこれまた手ひどいわ」

「う、ごめんなさいフレッシー様」

「いいっていいってリラ。相手にすると喜ぶだけだから」

「さすがセリア、親父殿をよく分かっている」

「うっさいぞ我が息子。もーいいワシは寝る」

食堂から立ち去ろうとする龍翼人に橙髪の少女は声を飛ばす。

「そうそう、ラルゴおじさーん」

「ん、なんじゃい」

「おとうさんとアルト帰って来たからー」

「おお、ようやくか、ならついでに顔見ながら寝るかねえ」

片手を後ろへとひらひらさせながら赤髭の龍翼人は通路へと消えていった。

姿が消えたのを見届けて男は長石へと座りなおし、石の長机に置かれた杯と瓶を一カ所にまとめながら、視線だけは厨

房へ向ける。

（包帯を外していたが、アルトが理由なのだろうか）

わき上がる疑問を口にはせず、楽しそうに会話する二人を男は眺める。

（それでも灰色の布をかぶったまま、か……）

石の長机の一角に杯と瓶を集めたあと、男は立ち上がり言う。

「セリア！ 自分も朝食はいらない。それとアルトはどこに？」

「あーせっかく果物切ってたのにー！ んーとまだエラおばさんのお手伝いしてるなら、

きっと神殿正面にいますとおもうー」

「わかった」

短く返事だけを飛ばして、通路へと向かって男は歩きだした。

「困ります大神官殿！ 軽々しく神殿の外へと出られては！」

「分かっていますから、そんなに大声を出さなくても聞こえていますよロツソ団長」

「……イロコニとお呼びくださいと何度も申してるはずですが」

神殿の一部屋。

獅子のような風貌をしいかつい男性と、老人は机をはさんで向き合っていた。

苦い色をたたえた表情のまま、男性は言葉を続ける。

「それに神官長から聞きましたが、町娘ひとりのために奏者殿の外出を認めたと！」

「ええ、それがなにか？」

「それがなにか、ではありません！」

勢い付けた拳が、机を叩く。

「いくら大神官殿が一緒であつたからといって、

大事なお客人でもある奏者様を、賛美歌の旅以外で外出させてい
いわけありません！」

はあ、と老人はため息。

「ロツソ団長……なぜに君はそうも頑ななのですか」

「違います！ 賛美歌の旅は、この大地が長年伝える大事な儀式で
す！」

そして我々神殿に仕えるものたちは、奏者殿が無事旅を終えるよ
う務める役目があります！」

胸を張り男性は言葉を続ける。

「それを我々の先祖たちは三千年間、護り通してきたのです。

ならば我らが代でもその役目を果たすべく、奏者殿には余計な行
動を謹んで頂くべきです！」

「確かに僕たち神殿に仕える者たちは、奏者を危険から護り、奏者
を無事に旅させ、

そして賛美歌の歌を集め終わった奏者を元の世界へと送り返す役
目を得ています」

ですが、

「君は奏者をお客人と言いましたが、そのような見方でいいのかと僕は思います」

「……大神官殿はどうお考えなのですか」

「奏者、ひいてはアルト君をひとりの人間として友にあるべきではないかと」

「なにを、なにを仰っているのです!」

全身を細かく震わせ、獅子顔をこわばらせて男性は言う。

「奏者は、異世界の人間は、伝承にもあるように能力は人外と思われるものばかり!

もしも彼らが我々に剣を向けてくるようなことになったらどうなさるのです!？」

「それは、ありえませんが」

「なぜです!」

「君にはわからないようですが、僕から見ればアルト君はただの子供ですよ。」

召喚されたときには不安から涙し、旅では新しい出来事に眼を輝かし、

人の死には激しく心を動かされ、大事な人が倒れば何が何でも傍にいようとする「

一息。

「僕らとなにひとつ変わらない、同じ心を持っているのです」

静かとなる室内。

一瞬の沈黙の後、老人の前に座る、獅子顔の男性は絞りだすように

して言う。

「それでも、それでも我らがイロニコ家は奏者をお客人として扱い、何事もなく元の世界へと送り返すことを役目として仰せつかってきたのです……！」

今代になつてその役目を放棄することなど出来ようはずもありません！」

言い終えたあと男性は立ち上がる。

「……これ以上は大神官殿にも我らにとつても不毛だと思えます」「でしょうね……いいです、もう下がってもらつてかまいません」「失礼いたします」

そのまま男は部屋の扉へと向かい、出て行った。しばらくして、ひとり室内に残つた老人は重くため息を吐く。

「相変わらずの石頭、と言えはいいのでしょうか。どうしてあもイロニコ家の人間は役割に固執するのか僕には理解できませんね」

もういちどため息を吐いたところで、扉がうすく開く。見えるのは鱗に象られた腕、そして腕の先で揺れる一本の硝子瓶。赤い液体が詰められた硝子瓶は、揺れるたびに底に入った石の音を鳴らす。

小さく笑つて老人は扉へ声をかける。

「ラル、そんなとこにいないで入つて来てください」

「なんやーすぐにばれてしまったかー」

「隠す気もないくせに言いますね」

先ほどまでと違いにこやかな笑みとなる老人の前、扉を開いて赤髭の龍翼人が室内へと入ってくる。

「ご無事な様子でなにより、大神官様。つと挨拶はしておかんな」
「ただいまもどりました、フレッシー副団長」
「で、ブツファ。またロツソとやりあったみたいで？」

椅子に座り、龍翼人は反対の手に持っていた硝子の杯を机に置く。そのまま空いた手を瓶を持つ方に向け、爪ののびた人差し指を瓶の口に突き刺す。

刺した指をいきおいよく引つ張れば、軽快な音とともに栓が抜けた。

「やりあったと言うか、言い合っただというか、なんにしるなにも変わりはないですね」

「あいつのことは親の代から見て来たが、ありゃあ石頭どころじゃないで」

「なんなんでしょうか、と本人がいないのに言うのは良くないですが」

「まあまあ、美味しい酒もあることだし呑みながら話そうやー」

「ラル……すでに相当呑んでいた、のではないのですか？」

「これはこれ、それはそれって言うやろう」

気にした風もなく龍翼人は硝子の杯に赤い液体をそそいでいく。

「んでは、精霊の恵みに感謝して、かんぱーい」
「ええ、乾杯」

杯を掲げ、互いに口づけ呑む。

「かあああああ、うまいなーこれ！」

「砂葡萄酒のお酒に火の精地で採れた石、これがどうしてまた美味しい」

「いいねいいねえ、やっぱブツファと呑むといいねえ」

「はははっそうおだてても何も出ませんよ」

互いが上機嫌となりながら酒を楽しむなか、不意に龍翼人はつぶやく。

「ならワシからひとつ出そうか」

呑んでいた杯を机に置く。

「……報告書にはあげてないが、凶獣の数が増えてきた」

「それはエオリアからの手紙で僕も知りました」

「ああ、息子も言うてたわ。しかも、もういつ」

なにかを思い出すかのように、しばし考えた様子のあと龍翼人は告げた。

「ワシと一緒に旅した、先代のときとよく似た状況だわ」

神殿の外、太陽は空高くへとあがり、空気は冷たいものの、浴びる日差しは汗を生む。

荷馬車から荷物をおろしおえた青年は、わずかにあせばんだ顔をぬぐい息をつく。

周囲には青年だけでなく、何人か神官姿の男女が金髪の女性とともに布袋を運んでいた。

その様子を見届け、空となった荷台に腰掛けて、
青年は吹き付ける風に気持ち良さを感じながら仰向けに寝っころがる。

そこへ飛んでくるのはひとつの声。

「アルトオ！」

「……エオリアだな」

寝ていた身体を、両足を振り上げ、おろす反動で地面に立つ。

「ただいまエオリア！」

青年は無手で構える。

「おかえりだ、アルト！」

神殿出入口から走って来た若草色髪の男は、走って来た勢いのまま青年へと跳びかかる。

青年に向かって跳んでくるのは男の右足。

頭部左をねらってくるのを左腕でふせぎ、踏み込んで青年は右拳を放つ。

「当たるかつ！」

男は声とともに身体をそらし、拳を回避。

さけられた拳を解き、広げた手の平で青年は男の左袖を掴む。

「つかまえた！」

言った瞬間、身体を右に半回転、そのまま男の懐にもぐりこみ、青年は捕まえた相手を背負い、投げ飛ばす。が、飛ばされながら男は身体をひねり、両足から着地。

着地した男は笑いながら口を開く。

「まだふぬけているようなら一発入れてやろう、と考えていたのだから」

「安心してくれ、もう泣いてなんかいない」

「そうだな……リラが包帯をはずしていた。アルトがそうさせたのか？」

「いや、違うよ」

かぶりを振って、青年は荷台に座る。

ならうようにして男も近寄り隣へと座った。

「あんまりうまく説明できないのだけど」

「大丈夫だ、ちゃんと最後まで聞く」

「ありがとう。俺がリラのいる花屋に駆けつけて、夜傍にいたとき――」

「翠と白い光に包まれて、気づいたら苦しくなくなったの？」

「はい、そうなんです」

人がまばらに行き来する食堂にて話す少女たち。

藍色髪の少女は周囲に座る人々を気にしながら話を続ける。

「それだけじゃなく、私アルトさんの過去を見たんです」

「リラの過去を、見たのか？」

「そう、だと思っ。一応リラとも内容を話して本当かどうかは聞いた」

戸惑った表情で話を聞く男、その隣で青年は淡々とした声で言葉をつむぐ。

「そしたらリラの方も、俺の過去を見たいなんだ」

「……リラが一晩で回復したことといい、にわかには信じ難い話だな」

「俺だつて信じられないよ、どうしてリラと俺がお互いの過去を見たのかわからないし」

「ただ、と言葉が続く。

「たぶん、でしかないけど、この腕輪が関係しているかもしれない」

「精霊の腕輪が？」

「ああ」

そついつて青年は左手首にはまった腕輪を見る。

「リラの病気はおそらく腕輪から出た白い光で治つた。

その光で目が覚めたリラと眼があつた瞬間、俺とリラは過去を見た」

だから。

「エラールさんは、わからなくてもいい、そう言ったけど俺はこの腕輪には、

誰も知らないなにかがある、そう思うんだ」

「誰も知らない、なにか、か」

男は組んだ両手を前に言う。

「それをアルト、おまえはどうしたいんだ？」

「うん、わかるかどうか分からないけど、調べてみようと思うんだ」

「なぜだ？」

「リラのことが心配だから」

青年ははっきりと言い切る。

「治ったのは嬉しいけれど、得体の知れない力で治った、なんて不安でしかない」

右拳が握り込まれた。

「もしかしたら、次の瞬間には病がぶりかえしてまたリラが倒れる、なんてことがあったら俺は、怖くて怖くて仕方が無いんだ」

握った拳が震える。

「……………リラに、リラに死んでほしくないんだ！」

つらく苦しそうに息をし、それでもこちらを気遣う少女の姿が、青年の脳裏に呼び起こされる。

同時にあのと抱いた、胸をしめつけるに、かく苦しい想いが沸く。

隣の男はいちどは驚いた表情を解き、微笑んで言う。

「安心しろアルト、自分も力を貸そう」

「いいのか？ これは奏者とか関係ない、俺のわがままなんだ」

「いまさら奏者がなんだ、自分とおまえは友とも言えぬ間柄なのか？」

「……エオリア」

苦しさに詰まった胸に暖かみを青年は覚える。

「ありがとう、エオリア」

「そっかそっか、うん。よかったよかった。アルト褒めてくれたんだね」

「はい」

恥ずかしそうに俯く少女が座る長石の反対側に座る橙髪の少女は、石のテーブルに両肘をのせた手の平に顎をのせ、笑顔で対面の少女を見る。

「ずっと、ずっと私の眼は気持ち悪い、そう思って隠してました」
でも、と続く。

「アルトさんは初めて会ったとき、私の花を褒めてくれました」

そして、

「お互い、過去を見た、そう思ったとき決めたんです」

ひと呼吸、

「アルトさんになら見せてもいい、って」

灰色の布をかぶった少女は、胸前で両手を強く握った。

橙髪の少女はなにも言わず、満面の笑みで見つめている。
数瞬して橙髪の少女が口を開く。

「よかったねリラ、あなたを幸せにしてくれる人が見つかって」

「セリアさん……でもアルトさんは」

「いいのいいの、アルトが奏者とかきにしないでいいの」

そう言っただけの少女は片目をつぶってみせた。

「……はい。アルトさんが綺麗と言ってくれた想いに、私応えたいです。」

だから夜露草をちゃんと咲かせてアルトさんに見せてあげたい」

胸前に組まれた両手が強く握られる。

その様子を見て、対面の少女は頷く。

「よおっし！だったらリラ、神殿の図書館にいこうよ！」

「え？」

「パストラの本屋にはない本が図書館にあるだろうし、なにかきっかけが見つかるとかも！」

「で、でも、図書館の本たくさんありますよ？」

「あーうん、一日で全部見るのはむりかーうん……そうだ！」

橙髪の少女は机にのりあげ、言った。

「しばらくの間、神殿ではたらいてみないリラ？」

数日後、十分な休息を終えた神殿騎士団は、すでに水の討伐へと出発しており、遅れる形となつて黒髪の青年たちは風の旅へと出発する準備をしていた。

神殿正面、二頭の馬につながれた荷馬車には、いくつか荷物が運び込まれていく。

「これで、最後つと」

大きめの革袋を荷台へと置いて青年はつぶやく。
服装は新調された旅装束。
到来する寒い季節に向けて、厚手となっているのが分かる。

「こつちも準備おわつたよー」

「待たせたなアルト」

「ああ、二人ともおつかれ」

背後から描けられた声に振り向けば、若草色髪の男と橙髪の少女とともに新しくあつらえた旅装束に身を包んでいた。
二人の手元には手入れのされた楽器。
男は銀の横笛を、少女はリュートを持っていた。

「すごいな、まるで新品みたいだ」

「手入れを怠らなければいつまでも新品同然だ」

「ボクはいつつもていれしてるけどねー」

「そりゃセリアは歌ってばっかだからじゃないか」

そう言っつて青年は笑い、少女からリユートを受け取る。

「そっついえば、ブツファさんとリラは？」

「もうすぐ来るとおもっよー」

言葉とともに少女は神殿正面へと眼を向ける。

神殿の出入口には青年たちを見送ろうと大勢の人々が出てくるのが見えた。

青年は周囲へとあつまってくる人々から掛けられる見送りの言葉に応えているうちに、

神殿の出入口によく知る顔があらわれたことに気づく。

「あ、ブツファさんとリラ……」

そこまで言葉に出して気づく。

老人のあとを追って歩いてくる藍色髪の少女の服装がいつもと違うこと。

「おとうさーんおっそいよー」

「すみませんね皆さん、ちょっと手間取ってしまいました。」

さて、風の旅に奏者をお送りするまえに皆さんにひとつ紹介があります

そう言っつて白い装束の大神官は、同じく白い神官装束に身を固めた藍色髪の少女を、

周囲の人々から見える位置へと呼ぶ。

「いつも僕たちの神殿へと献花してくれるエラール・カマックが子、

リラヴェル・カマツク。

彼女を神殿図書の司書見習いとして、役目を与えることとしました」

「あれま、あの子いつも包帯して両目がくしてたんじゃなかったの」

「灰色の布かぶってたからしらなかったけど綺麗な髪だねえ」

「うわーあのねーちゃんの眼、すげーきらきらしてるー！」

俯き顔で大神官の隣へと向かう少女を見て、青年は少女が前へと進み出したことを知る。

（調べものをするからといって神殿に残ったのは、本当はこれが理由だったんだ。

どおりでパストラに帰るエラールさんに、「リラを頼むよ」なんて念押しされるわけだ）

内心で苦笑し、青年は神官装束の少女を見つめる。

大神官に促されて藍色髪の少女は、人々が見ているなかで声を出す。

「あ、あの、みな、みなさ、ん……！」

緊張と、大勢の視線にさらされているためか、少女の声は詰まりの連続。

ん、までを言い終えて口を閉ざしてしまう。

周囲の人々が、どうしたのかと小さくざわめきだしはじめる。

少女自身も言葉の続きを口にしようとするが、身体が緊張で動かない。

緊張と焦りが、少女の目の前を暗くしようとしたとき。

「リラっ！」

唐突に、大声で黒髪の青年は、少女の名前を叫んだ。

声に震えた瞬間、藍色髪の少女は名を叫んだ青年を見る。

少女が見ている先、青年は口だけをうごかして言葉を伝えた。

が、ん、ば、ね。

理解した瞬間、少女は前を向き、緊張を振り切って声を発した。

「リラヴェル・カマック、です！ 不慣れな、ことも多いと、思いますが、

みなさん、どうかよろしく、おねがいます！」

言い切った瞬間、老人と若草色髪の男と橙髪の少女、そして黒髪の青年から大きな拍手が起こる。

周囲の人々からも拍手が起こり、少女は歓迎の拍手に包まれた。青年は小さく拍手をしながら少女へと近寄り、声を掛ける。

「おめでとうリラ」

「あ、ありがとうございます、アルトさん」

藍色髪の少女は、緊張からの解放ゆえかすこし涙ぐんでいる。

「なんていうか、びっくりした」

「わ、私もです。こんな、こんな大勢の人のまえで紹介される、なんて」

「きつと俺を驚かしたいつもりだったんだろうなブツファさんは」

そう言つて横を見れば、老人は笑みでこちらを見ていた。

「ちよつとリラ君にはきつかったですかね」

「ちよつとどころじゃなかったと思いますよ……」

呆れた顔となつた青年に、若草色髪の子と橙髪の子が近づく。

「リラ、だいじょうぶ？」

「もう平気か？」

「は、はい。だいじょうぶ、へいき、です」

いまだえづく神官装束の子をなだめる二人の横、大神官は口を開いた。

「さて、今代の奏者よ、賛美歌の旅も残り半分となりました」

言葉とともに周囲が静まる。

「残す試練も風と水、ふたつとなりました。

すでに地と火、これらを突破できた貴方ならば必ずや試練を突破
できることでしょう」

「はいっ！」

大神官は、奏者の両隣に立つた騎士と巫女を見る。

「騎士エオリア・パール」

「はい」

「巫女セリア・ブツファ」

「はい」

「これまでの旅と変わらず、奏者の道しるべとなり、共にあるものとなりなさい」

「はいっ!!」

騎士と巫女、揃いの声が響く。

ふたりの声を聞き終えた老人は柔和な笑みを浮かべる。

「それではアルト君、楽しい旅路となることを願っています」

「はい、ブツファさん。楽しい旅となれるよう、俺自身ががんばってきます!」

青年の声に周囲から歓声があがる。

人々からの声を背に、橙髪の少女は荷台に、若草色髪の男は台座へと座り、

青年は台座へと足をかけた姿勢で、胸前で両手を組む藍色髪の少女へと振り向く。

「行ってくるよ、リラ!」

「行ってらっしゃい、アルトさん!」

風の旅が、始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0508m/>

大地の歌を奏でる者たち

2011年11月16日12時12分発行